# 序　　文

船橋遺跡は、大阪府柏原市および藤井寺市に所在し、奈良盆地から大阪平野に流れる現大和川と北流する石川との合流地点の下流に位置し、現大和川を挟んで両側に広がっています。

旧大和川は、石川の合流点から北ないしは北西方向に流れており、当遺跡は、本来、大和川の左岸に位置し、通称国府台地と呼ばれる洪積段丘の段丘崖から扇状地性低地に立地していました。江戸時代に行われた大和川の付け替えに伴って、遺跡の中心部が分断されてしまいましたが、そのために現大和川の流れによって河床や河岸が浸食され、雨後によく、土器や石器などの優品が採集されることが知られていました。その大和川も2004年に付け替え300周年を迎えることとなりました。

本書で報告いたします発掘調査は、大和川高規格堤防建設に先立って行われたものです。現大和川左岸側の調査は、すでに当センターで1996年度に実施され、『船橋遺跡』として報告書が刊行されておりますが、今回の調査はそれに続くものであります。

船橋遺跡は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であります。今回の発掘調査では、主に、弥生時代前期の水田面、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居や方形周溝墓、古代から中世前期にかけての掘立柱建物や井戸・土坑など、様々な遺構が検出され、また、それらに伴う土器や木器などが多数出土しました。

それらは、沖積低地に立地する遺跡の定めとして、河川のもたらした地形環境の移り変わりに伴って変化を余儀なくされた、各時代の人間活動の一端を窺うことができる資料として、重要なものです。

最後に、調査に際して、大阪府教育委員会ならびに国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所をはじめとする、関係者の方々のご指導、ご協力に感謝申し上げるとともに、今後とも当センターの埋蔵文化財調査事業に一層のご理解とご協力をお願いする次第であります。

2005年３月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　　水　野　正　好

# 例　　言

1．本書は、大阪府藤井寺市大井５丁目に所在する船橋遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は大和川改修（高規格堤防）事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局大和川工事事務所（現大和川河川事務所）の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財調査研究センター（現　財団法人大阪府文化財センター）が実施した。

3．現地調査に関わる受託契約と実施期間、および調査体制については以下のとおりである。

高堤１（00－１調査区）

受託契約名　大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡発掘調査

受託契約期間　平成12年３月23日～平成13年３月10日

工事請負期間　平成12年４月28日～平成13年２月28日

調査体制　　調査部長　井藤　徹　　調整課長　赤木克視　　調整係長　藤永正明

南部調査事務所長　瀬川　健

調査担当　調査第三係長　寺川史郎　技師　岡本茂史　専門調査員　福田和浩

高堤２－１（01－１調査区）

受託契約名　大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡発掘調査（その２）

受託契約期間　平成13年３月６日～平成14年３月29日

工事請負期間　平成13年４月19日～平成13年12月28日

調査体制　　調査部長　井藤　徹　　調整課長　赤木克視　　調整係長　森屋直樹

南部調査事務所長　瀬川　健

調査担当　調査第三係長　寺川史郎　技師　岡本茂史　専門調査員　中村ますみ

4．01－１調査区の調査では、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。測定結果については、本文中に記載している。

5．調査の実施にあたっては、（財）大阪府文化財センター職員をはじめ、以下の方々からご協力、ご教示を得た。記して感謝の意を表する。（敬称略・順不同）

阪田育功・松岡良憲（大阪府教育委員会）、山田隆一（大阪府立弥生文化博物館）、石田成年・北野　重（柏原市教育委員会）、天野末喜（藤井寺市教育委員会）、藤田徹也（富田林市教育委員会）

また、発掘調査ならびに整理作業では、以下の諸氏の協力を得た。（敬称略・五十音順）

秋山敦子・宇川里香・岡本悦子・片山憲子・川田嘉代子・菊井佳弥・久木眞美・久禮孝志・田中映子・中筋英子・中村慎子・福田淳子・松永しのぶ・山口純枝・行川勝

6．本書で用いた現地写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては、南部調査事務所主任技師　立花正治が担当した。

7．本書の執筆は、岡本と正岡大実（南部調査事務所　嘱託）・菊井佳弥（中部調査事務所　専門調査員）が担当し、文責を目次に示した。

8．本書の編集は、岡本が行った。

9．出土遺物ならびに実測図、写真などの各種資料は、財団法人大阪府文化財センターで保管している。

# 凡　　例

1．現地調査にあたっては、国土座標軸（使用測地系「日本測地系〔改正前〕」）第Ⅵ座標系を基準に、『（財）大阪文化財センター　遺跡調査基本マニュアル』（1988）に定めた地区割法に準拠し、その詳細を第１章第２節に記述した。

2．本書に掲載した遺構図に付された方位は、すべて国土座標に基づく座標北を示している。なお、座標北を基準とした場合、遺跡周辺の磁北はＮ６°27′Ｗに、真北はＮ０°13′Ｅに偏位する。また、遺構図に記載した座標値はｍで表示し、単位は省略して数値のみ示している。

3．標高については、すべて東京湾平均海水位（T.P.）＋値を使用しているが、本文の記述および遺構図には「T.P.＋」の記載を省略している。

4．本書で用いる遺構番号は、遺構の種類とは関係なく、調査時において検出順に付与した１からの連番号であり、遺構の種類の前に番号を付して「10井戸」などと表記した。また、掘立柱建物やピット列など、すでに番号が付与された複数の遺構から構成される遺構については、「掘立柱建物１」のように遺構番号と遺構の種類を逆転させて表し、調査時における各遺構の番号については、遺構図中に個別に表示している。

5．遺物番号は、挿図・写真とも一致する通し番号である。また、挿図に掲載した出土土器のうち、胎土中に角閃石を多く含む生駒山西麓産の弥生土器・古式土師器については、遺物番号に下線を付して示した。

6．本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、基本的に土器類を４分の１とし、大型の土器類やその他の遺物については、各遺物の寸法に応じて適宜縮尺を変更した。

7．本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）の『新版　標準土色帖』1999年版を基準としている。

# 目　　次

巻頭図版
序　　文
例言・凡例
目　　次

第Ⅰ章　調査の経過と方法……（岡本茂史）……1
　第1節　調査に至る経緯と経過……1
　第2節　発掘調査の方法……4

第Ⅱ章　位置と環境……6
　第1節　遺跡の位置と地理的環境……（岡本）……6
　第2節　歴史的環境……（菊井佳弥）……7
　第3節　既往の調査……（岡本）……11

第Ⅲ章　00－1調査区の調査成果……（岡本）……14
　第1節　基本層序と遺構面の認識……14
　第2節　検出された遺構と遺物……20
　　第1面　第2面　第2b面　第3面
　　第4面　第5面　第6面　第7面

第Ⅳ章　01－1調査区の調査成果……（岡本）……155
　第1節　基本層序と遺構面の認識……155
　第2節　検出された遺構と遺物……158
　　第1面　第2面　第2b面　第3面　第4面　第5面

第Ⅴ章　まとめ……166
　第1節　土地利用の変遷……（岡本）……166
　第2節　船橋遺跡出土中世土器の概観と景観変遷……（正岡大実）……174

引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

# 挿 図 目 次


図１　遺跡の位置
図２　調査区配置図
図３　地区割の方法
図４　00－１調査区地区割図
図５　船橋遺跡周辺の地形分類
図６　弥生時代後期～古墳時代前期の周辺の遺跡
図７　船橋遺跡発掘調査位置図
図８　00－１調査区　土層断面模式図
図９　第１面　全体図
図10　調査地周辺の地籍
図11　第２面　全体図
図12　１溝　出土遺物
図13　３・４井戸　平・断面図，出土遺物
図14　10井戸　平・立面図，出土遺物
図15　第２ｂ面　全体図
図16　ピット列１　平・断面図
図17　掘立柱建物１　平・断面図
図18　掘立柱建物２　平・断面図
図19　掘立柱建物２　出土遺物
図20　掘立柱建物３・４　ピット列２・３　平・断面図，出土遺物
図21　掘立柱建物５　平・断面図，出土遺物
図22　12井戸　平・断面図，出土遺物
図23　９土坑　平・断面図，出土遺物
図24　55土坑　平・断面図，出土遺物
図25　243土坑　平・立面図，出土遺物
図26　５落ち込み　平面図
図27　５落ち込み　出土遺物
図28　64落ち込み　平面図，出土遺物
図29　322落ち込み　平面図，出土遺物
図30　45土器溜り　平・立面図
図31　45土器溜り　出土遺物
図32　土坑・ピット・溝　出土遺物
図33　第３面　全体図
図34　343流路　出土遺物（１）
図35　343流路　出土遺物（２）
図36　324溝・339土坑　断面図，324・340溝　出土遺物
図37　畦畔２　出土遺物
図38　345土坑　出土遺物
図39　３層関連　出土遺物
図40　第４面　全体図
図41　掘立柱建物６・７　平・断面図
図42　掘立柱建物８　平・断面図，出土遺物
図43　319・443・444・448ピット　柱根
図44　掘立柱建物９・ピット列４　平・断面図，出土遺物
図45　378・419土坑　出土遺物
図46　379井戸　平・断・立面図，出土遺物
図47　346・347井戸　平・断・立面図，出土遺物
図48　348土坑・ピット　出土遺物
図49　４層　出土遺物
図50　第５面　全体図
図51　513竪穴住居　平・断面図，出土遺物
図52　514竪穴住居　平・断面図，出土遺物
図53　479・573竪穴住居　平・断面図，出土遺物
図54　521竪穴住居　平・断面図
図 55　521竪穴住居　出土遺物
図 56　522竪穴住居　平・断面図，出土遺物
図 57　564竪穴住居　平・断面図，出土遺物
図 58　572竪穴住居　平・断面図，出土遺物
図 59　471井戸　平・断面図，出土遺物
図 60　608井戸　平・断面図
図 61　608井戸　出土遺物
図 62　610井戸　平・断面図，出土遺物
図 63　440方形周溝墓　平・断面図
図 64　440方形周溝墓　遺物出土状態図
図 65　440方形周溝墓　出土遺物（１）
図 66　440方形周溝墓　出土遺物（２）
図 67　440方形周溝墓　出土遺物（３）
図 68　441方形周溝墓　平・断面図
図 69　441方形周溝墓　出土遺物
図 70　468方形周溝墓　平・断面図
図 71　468方形周溝墓　遺物出土状態図（１）
図 72　468方形周溝墓　遺物出土状態図（２）
図 73　468方形周溝墓　出土遺物（１）
図 74　468方形周溝墓　出土遺物（２）
図 75　468方形周溝墓　出土遺物（３）
図 76　468方形周溝墓　出土遺物（４）
図 77　468方形周溝墓　出土遺物（５）
図 78　468方形周溝墓　出土遺物（６）
図 79　468方形周溝墓　出土遺物（７）
図 80　477方形周溝墓　平・断面図
図 81　477方形周溝墓　主体部　平・断面図
図 82　477方形周溝墓　出土遺物
図 83　472方形周溝墓・469溝　平・断面図
図 84　472方形周溝墓　出土遺物
図 85　469溝　遺物出土状態図
図 86　469溝　出土遺物
図 87　466溝　平面図，出土遺物
図 88　467溝・468流路　断面図
図 89　467溝　出土遺物（１）
図 90　467溝　出土遺物（２）
図 91　467溝　出土遺物（３）
図 92　439・475溝　出土遺物
図 93　474土坑　平・断面図，出土遺物
図 94　484土坑　平・断面図，出土遺物
図 95　569土坑　平・断面図，出土遺物
図 96　土坑・ピット　出土遺物（１）
図 97　土坑・ピット　出土遺物（２）
図 98　438・558土器埋設遺構　平・断・立面図，出土遺物
図 99　481・475土器埋設遺構　平・断面図，出土遺物
図100　482土器溜り　出土遺物（１）
図101　482土器溜り　出土遺物（２）
図102　５・６ａ層　出土遺物
図103　６ｂ層　出土遺物
図104　第６面　全体図
図105　488土器　遺物出土状態図，出土土器
図106　486流路　出土遺物（１）
図107　486流路　出土遺物（２）
図108　586土器埋設遺構　平・断面図，出土遺物
図109　590土坑　平・断面図

図110　590土坑　出土遺物
図111　624土坑　平・断面図
図112　624土坑　出土遺物
図113　625土坑　平・断面図，出土遺物
図114　650土坑　平・断面図，出土遺物
図115　653土坑　平・断面図，出土遺物
図116　657土坑　平・断面図，出土遺物
図117　671土坑　平・断面図，出土遺物
図118　672土坑　平・断面図，出土遺物
図119　512・516・517・609溝　出土遺物
図120　第７面　全体図
図121　01－１調査区　土層断面模式図
図122　第１面・第２面　全体図
図123　０～２ａ層　出土遺物
図124　第２ｂ面・第３面・第５面　全体図
図125　５井戸　平・断面図
図126　２ｂ層（河川内砂礫層）　出土遺物（１）
図127　２ｂ層（河川内砂礫層）　出土遺物（２）
図128　２ｂ層（河川内砂礫層）　出土遺物（３）
図129　縄紋時代晩期・弥生時代前期～中期初頭　遺構分布図
図130　弥生時代中期　遺構分布図
図131　弥生時代後期～古墳時代前期　遺構分布図
図132　古代　遺構分布図
図133　古代末～中世前期　遺構分布図
図134　船橋遺跡出土瓦器椀法量分布図
図135　船橋遺跡出土（２・２ｂ・３面）土師器皿法量分布図
図136　船橋遺跡出土「て」字状口縁皿法量グラフ
図137　船橋遺跡古代末～中世前期遺構変遷図
図138　船橋遺跡出土中世土器編年図

## 巻頭図版目次

巻頭図版
調査地遠景（大和川・石川の合流地点をのぞむ）（西から）
調査地遠景（古市古墳群をのぞむ）（北から）

## 写真図版目次

図版１　00－１調査区
１　第１面全景（南東から）
２　第１面全景（南から）
図版２　00－１調査区
１　土坑群（東から）
２　土坑群（南東から）
図版３　00－１調査区
１　土坑群（北西から）
２　土坑群　近景（北西から）
図版４　00－１調査区
１　３井戸　断面（北から）
２　338井戸　断面（南東から）
３　10井戸　検出状況（西から）
図版５　00－１調査区
１　10井戸　井戸側（西から）
２　10井戸　井戸側内部（西から）
３　10井戸　井戸側細部（南西から）
図版６　00－１調査区
１　東半　第２ｂ面全景（南から）
２　建物２（西から）
図版７　00－１調査区
１　建物１（南から）
２　12井戸　断面（西から）
３　９土坑（北から）
図版８　00－１調査区
１　36・37土坑（南から）
２　55土坑（南から）
３　70土坑（南から）
図版９　00－１調査区
１　79土坑（南から）
２　243土坑（南から）
３　49溝（東から）
図版10　00－１調査区
１　５落ち込み（南から）
２　64落ち込み（東から）
３　45土器溜り（北から）
図版11　00－１調査区
１　西半　第３面全景（南東から）
２　西半　第３面全景（西から）
図版12　00－１調査区
１　東半　第３面全景（南から）
２　343流路　獣骨検出状況（南東から）
図版13　00－１調査区
１　343流路　断面（西から）
２　324・340溝（北西から）
３　343流路堤　盛土内土器出土状況（西から）
４　345土坑・畦畔２（北西から）
５　西半　第４面全景（南から）
図版14　00－１調査区
１　東半　第４面全景（南から）
２　溝状遺構（西から）
３　溝状遺構（西から）
４　溝状遺構（南から）
５　355溝（南西から）
図版15　00－１調査区
１　建物６・７（南から）
２　建物８・９（南から）
３　379井戸　断面（南から）
図版16　00－１調査区
１　379井戸　井戸側細部（南から）
２　379井戸　遺物出土状況（南東から）
３　379井戸　遺物出土状況（南から）

図版17　00－1調査区
1　346井戸　遺物出土状況（南から）
2　347井戸　断面（南から）
3　347井戸　井戸側細部（南から）
図版18　00－1調査区
1　東半　第5面全景（南から）
2　竪穴住居群　全景（東から）
図版19　00－1調査区
1　513竪穴住居（西から）
2　479・573竪穴住居（東から）
3　521竪穴住居（南西から）
図版20　00－1調査区
1　522竪穴住居（南西から）
2　564竪穴住居（南から）
3　572竪穴住居（西から）
図版21　00－1調査区
1　608井戸　断面（南西から）
2　608井戸　遺物出土状況（東から）
3　608井戸　遺物出土状況（東から）
図版22　00－1調査区
1　西半　第5面全景（南から）
2　中央部　第5面全景（南から）
図版23　00－1調査区
1　440・441方形周溝墓（北から）
2　440方形周溝墓（西から）
図版24　00－1調査区
1　440方形周溝墓　西側周溝（南から）
2　440方形周溝墓　西側周溝（北西から）
図版25　00－1調査区
1　440方形周溝墓　南側周溝（西から）
2　440方形周溝墓　遺物出土状況（南から）
図版26　00－1調査区
1　441方形周溝墓（北から）
2　441方形周溝墓　東側周溝（南から）
図版27　00－1調査区
1　468方形周溝墓（南東から）
2　468方形周溝墓　遺物出土状況（北西から）
3　468方形周溝墓　遺物出土状況（南から）
図版28　00－1調査区
1　477方形周溝墓（南から）
2　477方形周溝墓　遺物出土状況（南東から）
3　477方形周溝墓　主体部確認状況（南から）
4　477方形周溝墓　主体部検出状況（東から）
5　469溝（南東から）
図版29　00－1調査区
1　466溝（北西から）
2　474土坑（南西から）
3　474土坑　断面（南西から）
図版30　00－1調査区
1　484土坑（南東から）
2　438土器埋設遺構（南から）
3　558土器埋設遺構（南から）
図版31　00－1調査区
1　481土器埋設遺構（南東から）
2　475土器埋設遺構（西から）
3　482土器溜り（南西から）
図版32　00－1調査区
1　488土器（北西から）
2　586土器埋設遺構（南から）
3　590土坑（東から）
図版33　00－1調査区
1　624土坑（東から）
2　624土坑　遺物出土状況（南東から）
3　625土坑（南西から）
図版34　00－1調査区
1　653土坑（南から）
2　657土坑　確認状況（南から）
3　657土坑（東から）
図版35　00－1調査区
1　西半　第7面全景（南から）
2　東半　第7面全景（南から）
図版36　00－1調査区
1　611流路（南東から）
2　水田畦畔（東から）
図版37　遺物
1　第2・2b面出土遺物（9土坑，10井戸，12井戸，55土坑）
2　第2b面出土遺物（243土坑）
図版38　遺物
1　第2b面出土遺物（5落ち込み）
2　第2b面出土遺物（322落ち込み）
図版39　遺物
1　第2b面出土遺物（45土器溜り）
2　第2b面出土遺物
（36・37土坑，70土坑，81溝，73土坑，64落ち込み）
図版40　遺物
1　第3面出土遺物（343流路上層）
2　第3面出土遺物（343流路下層）
図版41　遺物
1　第3面出土遺物（345土坑出土　「ろくろ」）
2　第3面出土遺物（345土坑出土　下駄）
図版42　遺物
1　第3面出土遺物（324溝，345土坑，畦畔2）
2　第3面出土遺物（343流路堤盛土，3層）
図版43　遺物
1　第4面出土遺物（346井戸，379井戸，その他）
2　第5面出土遺物（440方形周溝墓）
図版44　遺物
1　第5面出土遺物（441方形周溝墓）
2　第5面出土遺物（468方形周溝墓）
図版45　遺物
1　第5面出土遺物（468方形周溝墓）
2　第5面出土遺物（468方形周溝墓）
図版46　遺物
1　第5面出土遺物（467溝）
2　第5面出土遺物（469溝）
図版47　遺物
1　第5面出土遺物（477方形周溝墓）
2　第5面出土遺物（482土器溜り）
図版48　遺物
1　第5面出土遺物（493土坑）
2　第5面出土遺物
（471井戸，484土坑，513竪穴住居，522竪穴住居，610井戸）

図版49　遺物
1　第５面出土遺物（608井戸）
2　第６面出土遺物（486流路）
図版50　遺物
1　第６面出土遺物（488土器）
2　第６面出土遺物（590土坑）
図版51　遺物
1　第６面出土遺物（624土坑）
2　第６面出土遺物（516溝，609溝）
図版52　遺物
1　第６面出土遺物（586土器埋設遺構，625土坑，650土坑）
2　第６面出土遺物（657土坑）
図版53　遺物
1　５～６ｂ層出土遺物
2　５～６ｂ層出土遺物
図版54　01－１調査区
1　東半　第１面全景（西から）
2　西半　第１面全景（北東から）
図版55　01－１調査区
1　土坑群（北西から）
2　土坑群（北から）
図版56　01－１調査区
1　第２面全景（北から）
2　西半　第２ｂ面全景（北から）
図版57　01－１調査区
1　３凹地（南から）
2　５井戸（東から）
図版58　01－１調査区
1　第３面（河床面）全景（南西から）
2　第３面（河床面）全景（西から）
図版59　01－１調査区
1　第４面全景（西から）
2　第５面全景（西から）
3　６溝（北西から）
図版60　01－１調査区
1　基本層序（１～２層）（西から）
2　基本層序（２ｂ層上部）（西から）
3　基本層序（５・５ｂ層）（西から）

# 第Ⅰ章　調査の経過と方法

## 第１節　調査に至る経緯と経過

船橋遺跡は、大和川と石川の合流地点の北西側、柏原・藤井寺両市にまたがって所在する旧石器時代から近世までの複合遺跡である（図１）。奈良盆地の水を集め、石川右岸の玉手山丘陵とその北側に連なる生駒山地との間で大阪側に注ぎ込んだ大和川は、江戸時代以前には石川との合流地点から北西へ向かい、河内平野の中を網状に流れていた。現在の大和川は、平野部で頻発していた洪水災害の解消と新たな耕地開発を目的として1704（宝永元）年に現位置に付け替えられた人工河川であり、付け替えの結

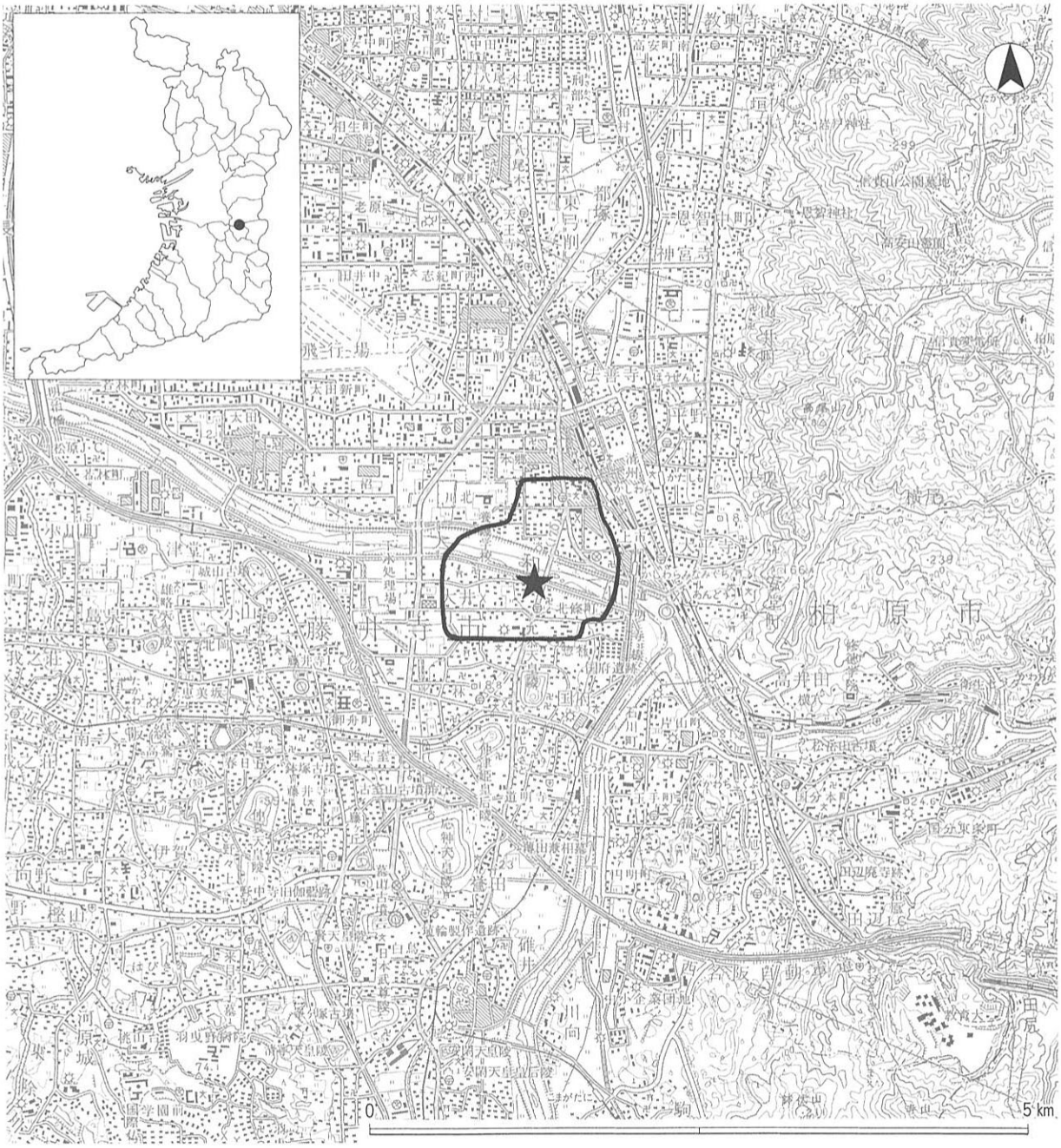



図１　遺跡の位置（国土地理院　１：50,000地形図を改変）

果、遺跡の中央を横断して西流することとなった。

今回の発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所が実施している大和川改修（高規格堤防）事業に伴う事前調査である。「スーパー堤防」とも呼称される高規格堤防とは、豪雨によって発生する洪水によって堤防が破堤し、市街地が壊滅的な被害に遭わないよう、堤防外の市街地側に盛土を行って堤防の幅を高さの30倍程度に拡張していくもので、同時に新たに生まれた堤防裏法部を公共空間として有効に活用し、安全で快適な新たなまちづくりを図っていくという目的も兼ねている。この事業は、河川堤防のすぐ近辺まで市街地が迫っている東京・大阪の二大都市において1987年度から進められており、大阪では淀川・大和川の二大河川が整備の対象とされている。大和川においては両岸の14地区で整備が計画され、このうち左岸側の大井地区（藤井寺市）と右岸側の大正・川北地区（柏原市・藤井寺市）が当遺跡の範囲に含まれることとなった。

事業に先立ち、大阪府教育委員会文化財保護課は1995年に大井地区を対象として６か所の試掘調査を実施した。これは先行して着手された府営美陵住宅建て替えに伴う事前調査でもあったが、調査の結果、中世の包含層及び遺構面が確認されたほか、掘削深度の関係から十分な把握ができなかった下層にも奈良時代以前の遺構面が存在する可能性が推測された。この結果を踏まえ、当センターの前身である（財）大阪府文化財調査研究センターでは、1995・1996年度に府営住宅と河川改修事業の工事用進入路部分を対象に発掘調査（96－１・２調査区）を実施した。その成果については、1998年に刊行された調査報告書［寺川ほか1998］に詳しく述べられている。

1999年度には、大和川改修事業区域内における発掘調査に関する協議が大阪府教育委員会と事業者との間で交わされ、現地調査については、府教育委員会の指導の下、当センターが国土交通省の委託を受けて担当することとなった。委託契約期間はいずれも年度をまたがって設定され、1999・2000年度は大井地区東半の調査と大正地区における２か所の確認調査（高堤１）、2000・2001年度は大井地区西半と大正地区の調査（高堤２）、2001・2002、2002・2003年度は大正・川北地区の調査（高堤３・４）をそれぞれ実施した。このうち、本報告書では左岸側の大井地区における調査成果を報告している。

1999・2000年度の調査（00－１調査区）は、2000年７月３日に機械掘削を開始し、これと併行して同月10日から人力掘削による遺構面の調査に着手した。96－１調査区の所見から平安時代後期の流路による遺構面の浸食が予想されたが、幸いにも流路が調査区南西部を走行していたことから各遺構面の遺存状況は比較的良好で、特に古墳時代初頭～前期を中心とする第５面では、竪穴住居群・井戸・方形周溝墓群から構成される当該期の集落の存在が明らかとなった。そのため、12月２日には方形周溝墓群を中心に現地公開を開催し、地元住民を中心とした220名余りの参加者に調査現場を見学していただいた。その後は下層の調査に移り、2001年２月10日に弥生時代前期～中期初頭の水田面を検出し、同月14日にすべての現地調査を終了した。最終遺構面における調査面積は2,981㎡である。

2000・2001年度の調査区（01－１調査区）は、00－１調査区とは市道を挟んだ西側の事業区域に設定された。既往の調査所見から大規模な流路の存在が予測されたため、予想される河川の向きに直交して長さ70m、幅８mの調査区を設定した。ただし、現地調査は地元との調整の遅れから着手が延び、土留め用鋼矢板の打設を開始したのは2001年８月24日であった。９月17日から機械掘削、続いて21日からは人力掘削作業に移行し、11月10日にすべての現地調査を終了した。調査面積は556㎡である。

なお、両調査区の整理作業と報告書の作成に関しては、2002年度以降も継続された大和川改修事業に伴う発掘調査と併行して実施し、2005年３月に本報告書の刊行をもってすべてを終了した。

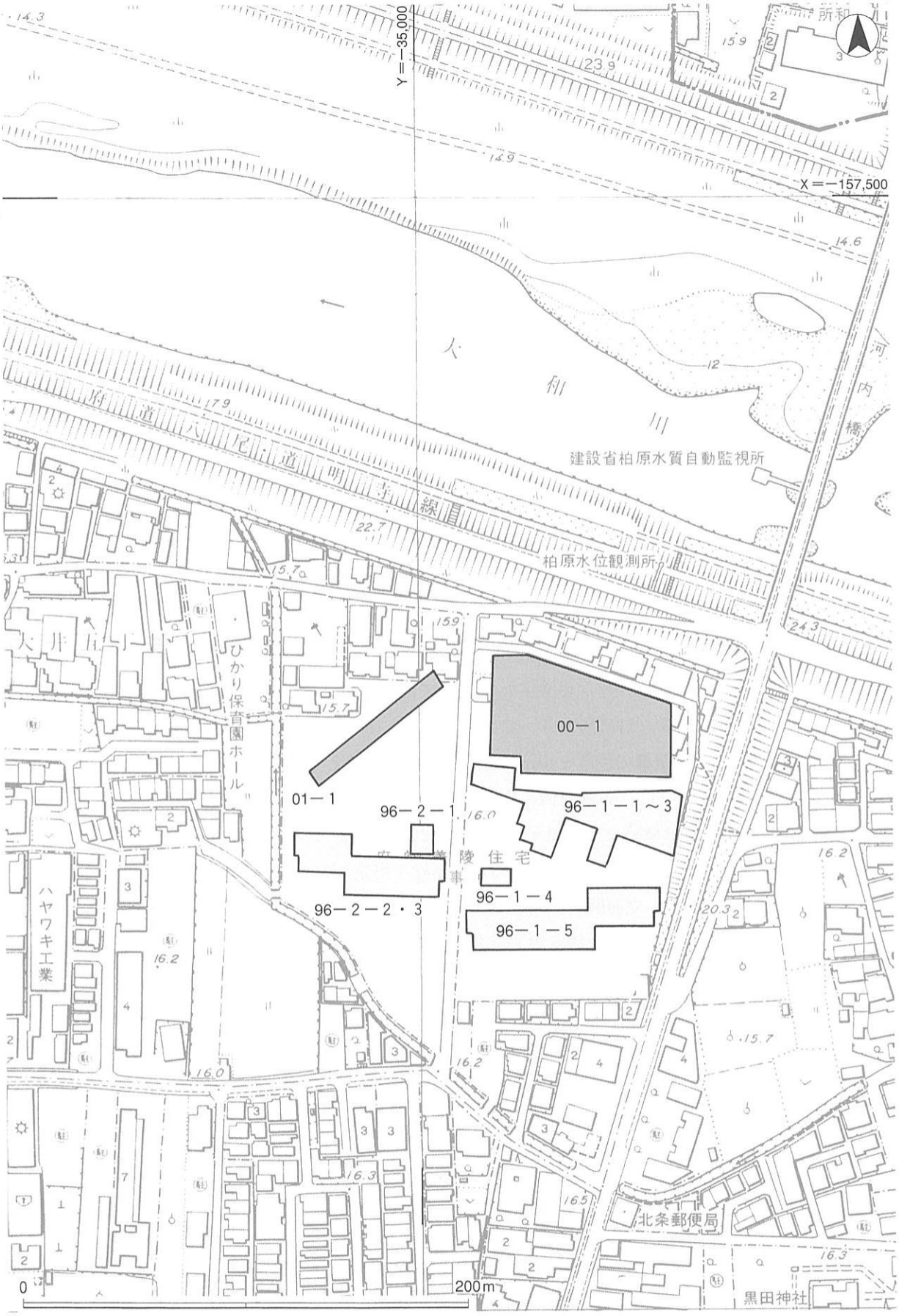



図２　調査区配置図（大阪府　1：2,500都市計画図を改変）

## 第２節　発掘調査の方法

00－１・01－１各調査区の位置は、図２に示したとおりである。調査区の呼称については、既往の調査区と同様に現地調査開始年度（西暦の下２桁）に調査着手順を支番号として組み合わせて使用した。調査前の地盤高は、両調査区とも標高16.3m前後であり、調査ではまず旧府営住宅建設時の盛土と現代作土、ならびに既往の調査で近代の氾濫堆積物とされた洪水砂層を重機によって除去し、以下は最終遺構面まで人力により掘削を進めた。

発掘調査の実施に当たっては、基本的に1988年刊行の『(財) 大阪文化財センター　遺跡調査基本マニュアル』に従った。

まず、調査区の地区割りについては、基準線として国土座標軸（使用測地系「日本測地系〔改正前〕」）第Ⅵ座標系を使用し、大から小への６段階区画のうち、今回の調査では第Ⅰ区画から第Ⅳ区画までを用いた（図３）。第Ⅰ区画は、大阪府が設定した１万分の１地形図を利用したもので、南北６km、東西８kmの地形図１枚分の大きさを１区画とし、各区画の表示は、南西端を基点とした南北軸Ａ～Ｏ、東西軸０～８のアルファベット大文字とアラビア数字の組み合わせで行う。第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を縦横４分割の計16分割したもので、南北1.5km、東西2.0kmの2,500分の１地形図１枚分の大きさを１区画とし、各区画は南西端を１、北東端を16とした数字で示す。第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画内を100m単位で分割したもので、南北は15、東西は20の区画となる。各区画の表示は、北東端を基点とした南北軸Ａ～Ｏ、東西軸１～20のアルファベット大文字とアラビア数字の組み合わせで行う。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画内を10m単位で分割したもので、南北・東西とも10区画となる。各区画の表示は、北東端を基点とした南北軸ａ～ｊ、東西軸１～10のアルファベット小文字とアラビア数字の組み合わせで行う。今回の各調査区の第Ⅰ・Ⅱ区画はいずれもＦ６－11に当たり、これに「Ｃ10－ｄ３」などと表される第Ⅲ・Ⅳ区画の表示（図４）を加えれば、検出遺構の位置を10m四方の区画内まで捉えることが可能である。

検出遺構の測量に関しては、各遺構面の平面図を基本的に縮尺100分の１の平板測量により作成し、検出遺構が多数、あるいは微細な地形復元が必要とされる遺構面については、ヘリコプター（00－１調査区）・レッカー（01－１調査区）撮影による航空測量を実施した。個別の遺構図は遺構に応じて縮尺を設定し、平面図及び断面・立面図を作成した。

調査区域の層序は、埋没・移動を繰り返す活発な河川活動によってもたらされた多様な地層の累重から成り立っていることが、既往の調査によって判明していた。そこで00－１調査区では、より多くの断面情報を援用して遺構面調査を行っていくために、Ｘ軸で－157,730・－157,750ライン、Ｙ軸で－34,900・－34,920・－34,940ラインで先行して筋堀を掘削して地層の観察を行い、合わせて縮尺20分の１の断面図を作成した。20m間隔で地層の堆積状況を確認できるこの方法は、各地層の水平方向への広がりや変化を把握し、遺構面の調査を円滑・迅速に進めていくうえでは効果的であったが、反面、筋堀がいくつかの重要な遺構と重複し情報の一部を失うといった事態を招いてしまったことから、設定方法や設定箇所の選定に課題を残した。一方、北東－南西方向に長く幅の狭い01－１調査区については、南側長辺の壁際で地層断面の観察と実測を行った。

遺物の取り上げについては、基本的に10m四方である第Ⅳ区画ごとに行ったほか、特に必要なものは個別に座標・標高を測量し、出土位置を国土座標上に示せるようにした。ただし、調査区が斜行する01－１調査区については、東短辺から10mごとに１～７区の地区割りを行い、この地区ごとに行った。

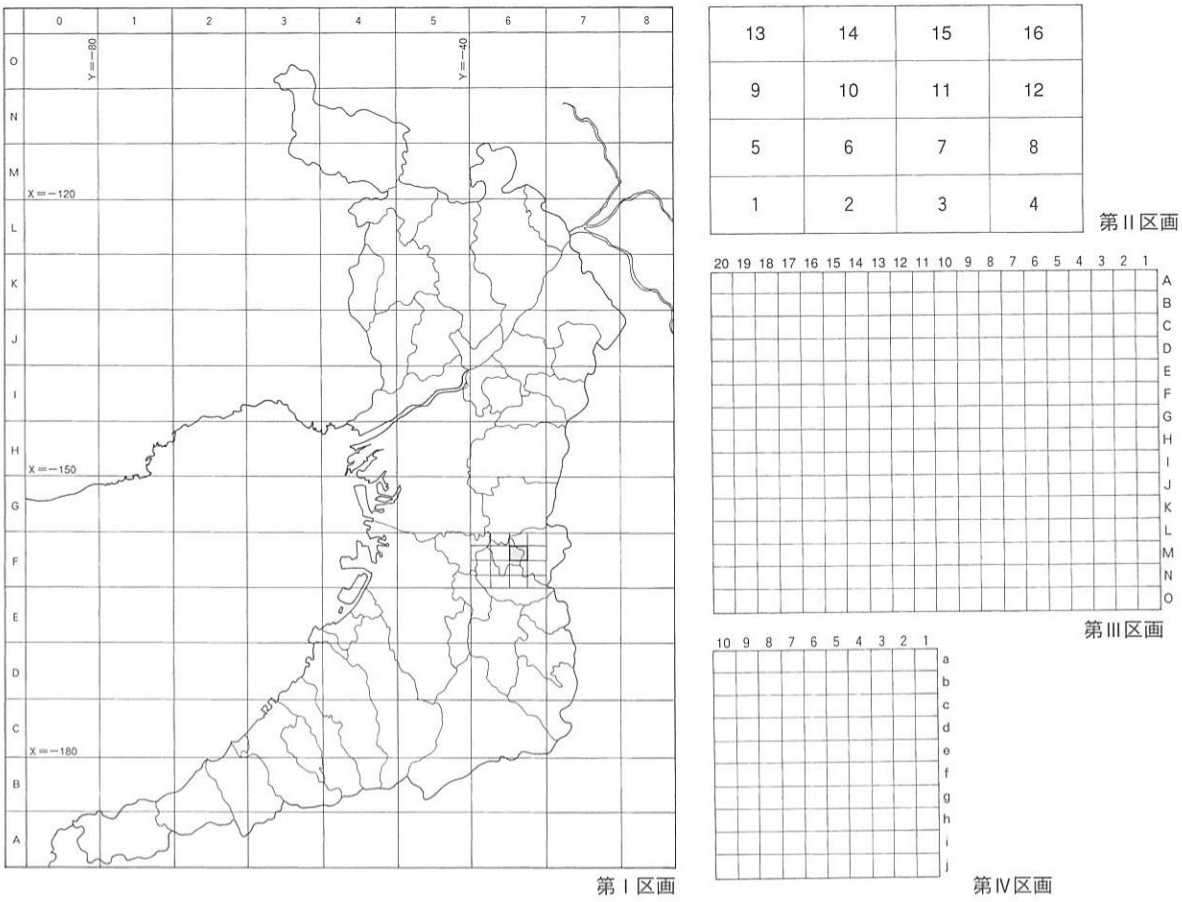



図３　地区割の方法

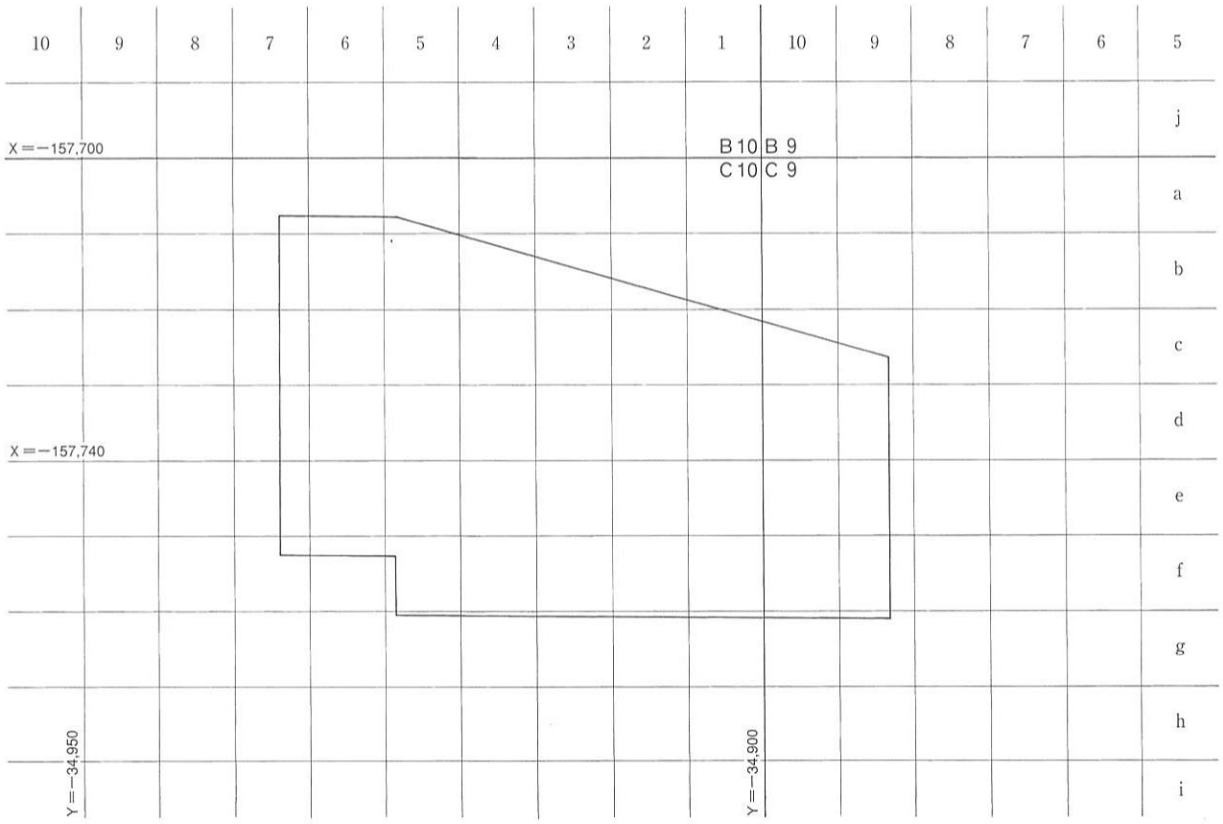



図４　00－１調査区地区割図

# 第Ⅱ章　位置と環境

## 第１節　遺跡の位置と地理的環境

船橋遺跡は、柏原市大正１～３丁目・古町１～３丁目、藤井寺市大井１～５丁目・北條町・船橋町及び川北２・３丁目に所在する遺跡で、その範囲は南北約1.2km、東西約1.3kmに及んでいる。前述のように現在の大和川と石川の合流地点から北西500mに位置し、大和川が付け替えられる以前は北西方向へ流れていた旧大和川（現長瀬川）に沿うようにその左岸一帯に広がっていた。この場所は、海退と旧大和川をはじめとする諸河川の堆積作用によって形成された河内平野の中にあってはまさに扇の要に当たり、古代以降整備された奈良街道・長尾街道（大津道）・東高野街道といった交通路が遺跡付近で交差していることから窺われるように、大和へ通じる交通の要衝として非常に重要な地点を占めていた。

石川の左岸には、羽曳野丘陵から派生したように見える洪積段丘が南北に延びている。「国府台地」とも呼ばれるこの段丘上には、国府・林・土師の里の各遺跡が所在するほか、市野山古墳や仲津山古墳など古市古墳群を構成する大小の古墳が多数築かれており、これまでの調査によって旧石器時代から近世に至る各時代を通じて活発な人間活動が行われていたことが判明している。

船橋遺跡は、この段丘の北側縁辺に接して広がる沖積低地、地形分類上では大和川・石川両河川の氾濫原及び自然堤防上に立地する（図５）。現地表の標高は14～17mを測り、全体的には南東から北西方向へ緩やかに傾斜している。東側には旧大和川によって形成された帯状の自然堤防が発達しており、現在における当遺跡は、３mほどの比高差を有するこの自然堤防と国府台地によって東・南の２方向を画された湿地の下に埋没している。

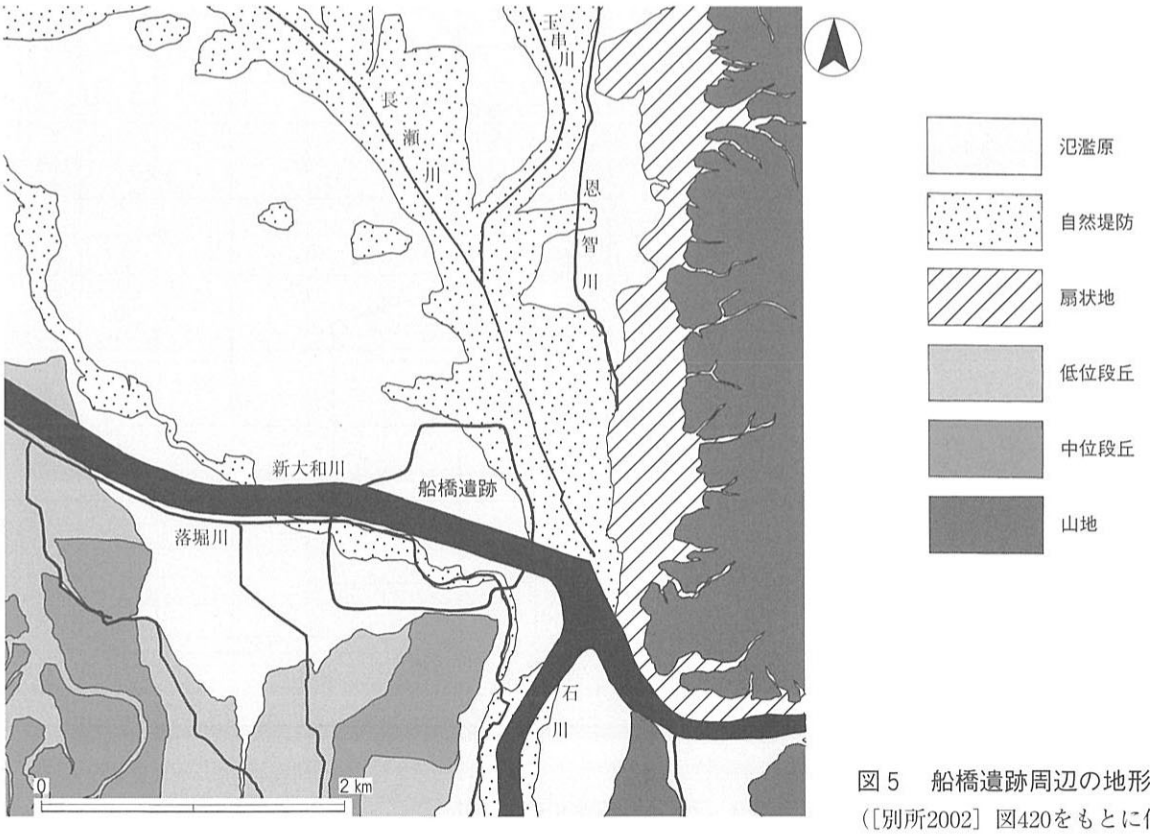



図５　船橋遺跡周辺の地形分類
（［別所2002］図420をもとに作成）

## 第２節　歴史的環境

船橋遺跡は、柏原・藤井寺の両市にまたがる旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。1704年に大和川が現在の位置に付け替えられて以後、河流による浸食で洗い出された大量の遺物は古くから人目に触れ、研究者をはじめ多くの人々の関心を集めてきた。当遺跡の研究史については、すでに松尾洋平氏［松尾1994］によって詳細にまとめられている。また、全史を通しての歴史的環境についても仲原知之氏［仲原1998］によって述べられているので、本節では、今回の00－１調査区の発掘調査において最も大きな成果を上げることができた古墳時代前期とその前後の時期に焦点を当て、遺跡周辺の歴史的環境を探ってみたい（図６）。

**【西大井遺跡】**　当遺跡とは100mほど隔てて西方に位置する旧石器時代から近世の複合遺跡で、国府台地と羽曳野丘陵先端の中位段丘に挟まれた谷底平野の谷口付近に立地している。広域下水処理場（大井下水処理場）建設に伴い、大阪府教育委員会や（財）大阪府埋蔵文化財協会によって1980年度以降継続して調査が実施されている。

大阪府教育委員会による1980年度の調査（図６－①）では、庄内式期の方形周溝墓・竪穴住居・井戸・溝が検出されている。報告書が刊行されていないので、詳細は不明である。

また、大阪府教育委員会と（財）大阪府埋蔵文化財協会によって行われた西側の調査（②～⑥）では、数条の溝と多数の土坑が検出されている。溝のひとつは、幅0.4～0.6m、深さ0.2～0.3mの規模を有し、全長は検出されているだけでも120m以上に及ぶ。途中地形に沿って東西に大きく曲がるものの、埋没谷と段丘を区画するように、地形の落ち際から10m内側の段丘上をおおむね南北に走行している（以下、東溝と呼称）。出土遺物は細片の土器やサヌカイト片のみで、明確な時期は不明である。また、この溝の20m西側には、幅1.2～1.5m、深さ0.4～0.6mの溝が検出されている（以下、西溝と呼称）。土坑は、1982年度に約100基、1990年度に約320基、1991年度に400基、1992年度に3062基、1993年度に210基がそれぞれ検出され、総数は4000基以上を数える［岩崎二1983，酒井1992・1993，今村1994，大野編1995］。これらの土坑は、東溝の東側ではほとんど存在せず、西溝の西側においても分布密度が低いのに対して、２条の溝に挟まれた区画では密集して分布している。また、規模的にも西溝西側が比較的大型なものが多いのに対し、溝間では小型のものが多いといった差異が認められる。土坑の多くは遺物を有していないが、舟形土製品や口縁あるいは体部を打ち欠いた甕などを伴っていた例もあり、遺物の年代から土坑群の掘削時期は弥生時代後期後半から庄内式期に押さえられる。この土坑の性格に関しては、土坑内外で採取した土壌の残存脂肪分析の結果、ヒト遺体を直接埋葬した場合と類似した脂肪が残存しているという所見が得られたことから、すべてとは言えないまでも土坑墓として評価されている。

1993年度の調査（⑥）では、この土坑墓群の上層の遺構面において数条の溝と小区画水田が検出され、田下駄などの農具が出土している。溝の所属時期は出土遺物から弥生時代後期から古墳時代前期に比定されており、溝と水田の存続時期が同時とは確証できないまでも、水田の時期も古墳時代には収まる。

**【川北遺跡】**　当遺跡の北西部に接して広がる弥生・古墳時代の遺跡で、大和川右岸の沖積低地に立地している。府立藤井寺養護学校の新設に伴い、大阪府教育委員会による発掘調査が２次にわたって実施されている。

1980年度の１次調査（⑦）では、方形周溝墓と周溝墓より南に15m離れた地点で壺棺墓が検出されて

いる[岩崎編1981]。周溝の規模は南北約6.5m、東西４m以上で、北東隅に陸橋を有する。主体部は２基検出され、うち１基は長軸1.88m、短軸0.63m、深さ0.14mを測る。もう１基はトレンチの側溝のために大部分が失われ、東端部分をわずかに残すのみである。周溝内からはＶ様式系の小型甕が出土している。この他、竪穴住居３棟、素掘りの井戸２基、土坑２基、溝が検出されている。庄内式期の井戸１基を除き、いずれも布留式期前半の遺構である。

**【本郷遺跡】**　当遺跡の北辺に接して旧大和川左岸の氾濫原及び自然堤防上に立地する縄紋時代から近世の複合遺跡で、遺跡の範囲は東西・南北とも約600mを測る。

柏原市教育委員会による1981年度調査（⑧）において、２基の井戸が検出されている［田中1982］。うち１基は、直径約140cmと推定される木を縦に分割し、内側を刳り貫いて作られた弧状の板材を3枚用いた井戸枠を持つ。掘方からは庄内式期後半から布留式期前半にかけての土器が出土し、井戸枠内の底からは半截された布留式甕が内面を上向きにし、数点重ねて置かれていた。もう１基の井戸も先の井戸と同様の井戸枠を持ち、半截された布留式甕の体部が数点重ねられた状態で出土した。２基の井戸は２mほどの間隔を置いて掘削されており、同時期に使用されていた可能性がある。

同教育委員会による1991年度調査（⑨）では、周溝を共有する庄内式期中頃から後半の方形周溝墓が２基検出されている［北野重1993］。北側の周溝墓の西半は調査区外であるが、一辺は約８mを測る。墳丘の盛土は後世の削平によって遺存していないが、墳丘中央より北側の位置で口縁部を打ち欠いた壺を棺身、壺の底部を蓋とした土器棺が１基検出された。一方、南側の周溝墓の規模は南北約６m、東西７m以上を測り、墳丘の中央付近で木棺痕跡が確認されている。この他、弥生時代後期後半の溝が数条検出されており、その溝の１つから小銅鐸が出土している。

**【国府遺跡】**　国府台地の北東部に立地する旧石器時代から中世の複合遺跡で、当遺跡の南東部に接している。明治年間にすでにその存在が知られ、大正年間に縄紋時代前・晩期の埋葬人骨群が多数確認されたことによって、全国的にその名が知られるようになった。また、旧石器時代後期の国府型ナイフ形石器の標式遺跡としても著名である。1970年以降、大阪府教育委員会や藤井寺市教育委員会によって継続して調査が実施されている。

弥生時代後期から古墳時代前期については、藤井寺市教育委員会による1983年度調査（⑩）［天野1998］において弥生時代末の溝が１条検出されているだけで、遺跡の性格を示すような遺構は検出されていないが、大阪府教育委員会による1979年度Ａ調査（⑪）では、平安時代末から鎌倉時代初頭の建物周辺の礫群中より巴形銅器が出土している［秋山ほか1986，佐久間ほか1980］。この巴形銅器は後藤直氏の分類のⅢ類に相当し［後藤1986］、半球形座左捩りの六脚である。座外縁は無段で橋状の鈕を持つ。類例としては滋賀県東浅井郡虎姫町五村遺跡で弥生時代後期後半の包含層から出土した資料が挙げられ、国府遺跡出土例も同時期に位置付けられる。

**【大県遺跡】**　生駒山地西麓の扇状地上に立地する縄紋時代から近世の複合遺跡で、当遺跡からは旧大和川の自然堤防を挟んで東北東800mのところに位置する。

柏原市教育委員会による1986年度1次調査（⑫）において、弥生時代後期後半の竪穴住居１棟が確認されている［北野重1987］。周壁は北側のみであったが、住居内には壁溝やピットが存在し、炭化材が検出されていることから、焼失住居と考えられる。床面からは壺・甕・高坏・鉢・手焙形土器などの土器が出土し、この他に人頭大の粘土塊が数個まとまって出土した。これらは、土器製作に使用された素材と考えられる。

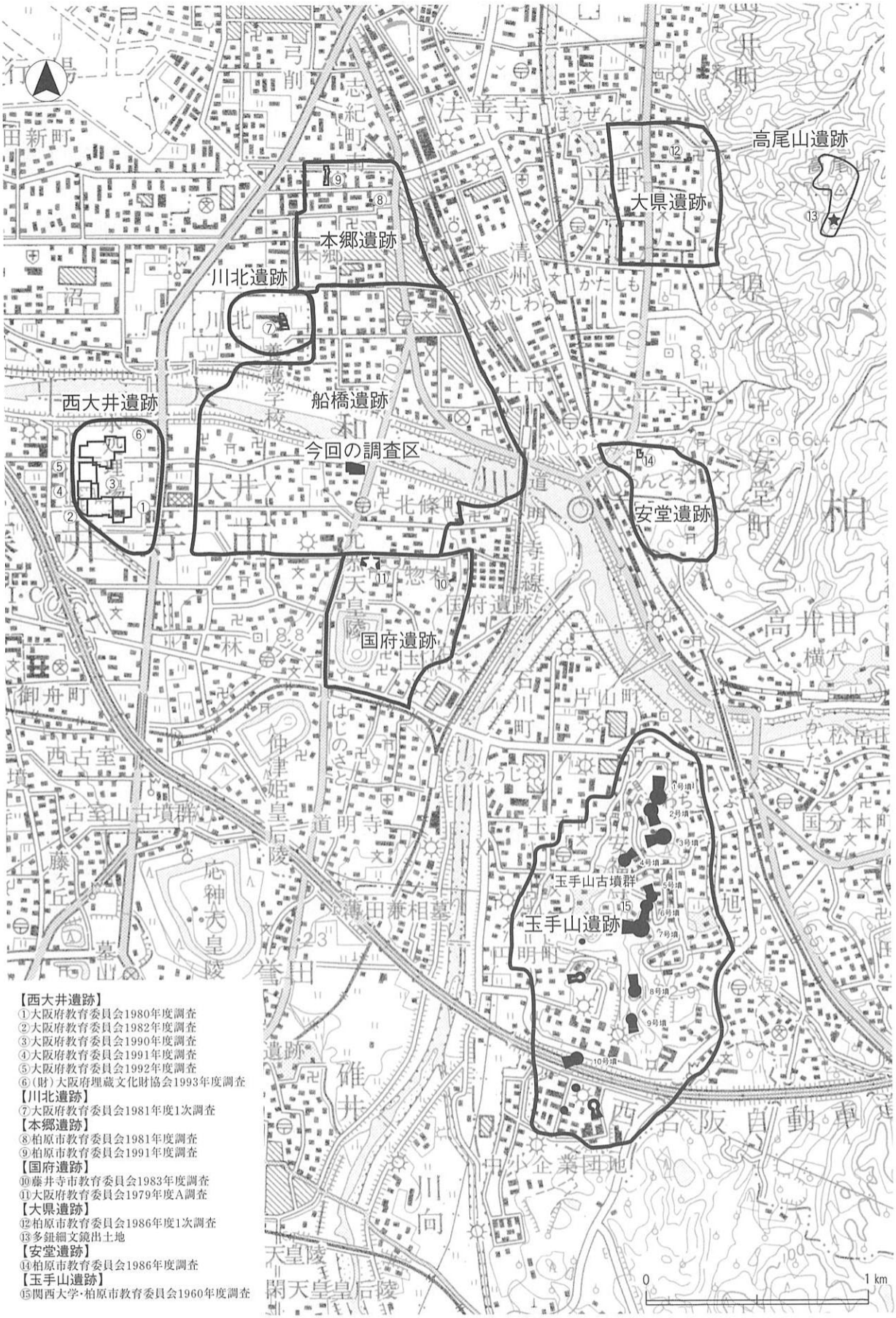



図６　弥生時代後期～古墳時代前期の周辺の遺跡（国土地理院　1：25,000地形図を改変）

大県遺跡の東方の高尾山では、1924（大正14）年に多鈕細文鏡が出土している（⑬）［山本1973］。字切山697番地の山林で葡萄畑を開墾作業中に鏡を発見した大坪浅治郎氏によれば、出土地は高尾山から南西に延びた小尾根を10mほど下がった西側斜面で、盛土や平坦面はなかったという。多鈕細文鏡は北部九州地方においては墓に副葬され、近畿地方では埋納されるのが通例であるが、本例についても単独埋納されていた。高尾山遺跡では弥生後期の土器や石器類の散布が確認され、数個の土製紡錘車も発見されていることから、集落址の可能性を示唆している。

【安堂遺跡】　大和川と石川の合流地点から北東300mに位置する古墳時代から近世の複合遺跡で、生駒山地西麓の扇状地から旧大和川右岸の自然堤防上に立地している。

柏原市教育委員会による1986年度調査（⑭）において、東から西へ流れる幅4.8m、深さ2.0mの流路が検出されている［桑野1987］。遺物は弥生時代中期から後期前半の土器が主体で、他に桃・瓜・ドングリの種実、櫂や農具類・容器などの木製品、石鏃・石槍・石包丁の石製品類や縄紋時代早期から晩期の土器小片が出土している。北側の肩部において径10cmほどの杭列が確認されており、人為的に管理されていた可能性がある。

【玉手山遺跡】　石川右岸の玉手山丘陵上に所在する旧石器時代から近世の複合遺跡である。

関西大学と柏原市教育委員会による共同調査において、玉手山６号墳前方部の盛土の直下から弥生時代後期の竪穴住居が確認されている（⑮）［村津1960，北野耕2002］。住居は直径約８mの円形で、２棟が重複して検出された。５個の小さな柱穴と中央に太い柱穴があると報告されているが、中央の柱穴は炉の可能性が想定され、平面図ではそこから壁溝へ延びる排水溝を確認することができる。住居の床面からは、銅鏃１本と弥生時代後期の土器が多数出土している。この他、玉手山遺跡では玉手山出土と伝えられている銅鐸が存在している［梅原1922］。この銅鐸は突線鈕３式近畿式で、６区袈裟襷の紋様を有する。安福寺山門内の北方出土とも伝え聞くが、出土状況など確かなことは不明である。

【玉手山古墳群】　南北2.5kmの玉手山丘陵の尾根筋を中心に築造された古墳群である。関西大学・大阪府教育委員会・柏原市教育委員会・大阪市立大学等の各組織によって発掘調査が行われているが、未報告の調査例もあり、不明な点も多い。古墳時代前期に属する前方後円墳が10数基確認されており、墳丘規模は100mを超える３基以外は50～80m級で、60～70m級のものが中心である。最近の埴輪研究［安村編2001］では、時期的に最も遡る９号墳の埴輪が奈良県西殿塚古墳例と同時期とされていることから、古墳群の成立は布留式期初頭に求められ、以後、３・１・７号墳の順で継続して築造されている。

船橋遺跡の周辺においては、弥生時代後期前半には、東方に連なる山地・丘陵上に高尾山遺跡や玉手山遺跡といった高地性集落が形成されているが、平野部では明確な集落は見つかっていない。後期後半では、旧大和川右岸の大県遺跡で竪穴住居が確認されているのに対し、左岸では溝が検出されている程度で実態はほとんど判明していない。しかしながら、本郷遺跡の小銅鐸や国府遺跡の巴形銅器、伝玉手山出土銅鐸などの青銅器の存在は、左岸においても当該期の集落が存在していることを示唆しているものと考えられる。庄内式期には、川北遺跡や西大井遺跡といった当遺跡の西側一帯や本郷遺跡北東部に墓域が成立し、間に挟まれた当遺跡と本郷遺跡西半部に居住域が存在している。布留式期になると、庄内式期に続いて住居が確認されている当遺跡に加え、川北遺跡でも新たに居住域が形成され、当遺跡の南端部では方形周溝墓群が造営される。また、石川右岸の玉手山丘陵上には、旧大和川流域の首長墳である前方後円墳が出現し、複数代にわたって古墳の築造が行われている。

## 第３節　既往の調査

現大和川の河床で船橋遺跡が発見されたのは、戦後まもなくの1948年のことである。発見者である山本博氏は、以後数度にわたって独自に調査を行い、その研究成果を学会や研究誌で相次いで発表した。これらの中で氏は、遺跡の性格に関して土師器窯跡説や廃寺説などを提示され、このうち窯跡説は後にマスコミを巻き込んでの論争に発展した。遺跡の名を一躍広めることとなった「船橋遺跡論争」と呼ばれるこの論争の詳細や経緯、あるいは論争収束後も展開された「船橋廃寺（井上寺・玉井寺）」・「餌香市」・「河内国鋳銭司」・「河内国府」といった当遺跡の性格を巡る諸見解については、西口陽一氏の論考［西口1982］や柏原市教育委員会の1993年度調査報告書［松尾1994］で詳しく述べられており、ここでは省略しておく。

1954年、上流部に堰堤が設置されると、河床に露呈していた包含層・遺構面は河流によって大きく浸食を被り、露出した各時代の資料が多くの人の目に触れることとなった。事態を重く見た大阪府教育委員会は大和川河床遺跡会を設立し、1956年から５年間にわたって発掘調査を実施した（図７－Ａ）。河内橋より東側の長さ460ｍに及ぶ河床をＡ～Ｘ地区に分けて行ったこの調査では、斑鳩宮検出の建物と平面形が類似する桁行９間・梁間３間の掘立柱建物（Ｔ地区）や長さ100ｍにわたって東西方向に延びる二重の柵列（Ｈ地区）、寺院に使用されていたと想定される一枚板の扉を井戸枠に転用した井戸（Ｓ地区）などが確認され、かつて礎石が散在し寺院跡と考えられたＭ・Ｎ地区では、礎石の痕跡は浸食によって失われていたものの、新たに塼を２列に並べて作られた溝状遺構や掘立柱建物、一辺13ｍの方形溝などが検出された［坪井1962］。遺物も卓越しており、Ｂ地区で確認された７世紀後半と８世紀前半の包含層からは900・1,360個体をそれぞれ数える須恵器・土師器、Ｎ地区の下層からは100点を超える中期弥生土器、Ｖ地区下層からは後に「船橋式土器」設定の基準となった縄紋時代晩期後葉の突帯紋土器などが出土している。この中で、５層にも及ぶ古墳時代包含層から出土したＯ地区の土器群は、当地域における古墳時代土器の基準資料として重要である［原口ほか1958・1962］。

河床内における遺跡の広がりについては、1975・1976年度の（財）大阪文化財センターによる試掘調査で明らかとなった（Ｂ）。大和川の環境整備と河川敷公園の造成に先立ち、遺跡の範囲と遺物包含層の遺存状況の把握を目的に右岸河川敷で行われたこの調査では、①現流路に近いところでは、中洲状となった一部の微高地を除く大部分が浸食で破壊されており、良好な包含層は右岸堤防沿いから堤防外北側へ広がっていること、②遺跡の西限が河内橋から下流約400ｍの地点まで広がること、③河内橋周辺では、弥生時代末から古墳時代初頭（庄内式期）の遺構が集中して存在していることが明らかにされた［中西・國乗1976，辻内ほか1976］。

①の所見で示された河床外への遺跡の広がりに関しては、1970年代後半以降に急増した各種公共工事や住宅建設に伴う発掘調査によって徐々に明らかとなった。ここでは、その成果のうち主なものを右岸側の柏原市域と左岸側の藤井寺市域に分けて述べていきたい。

まず1979年度には、柏原市古町２丁目に所在する柏原警察署の別館建設及び浄化槽設置に伴う調査が大阪府教育委員会によって実施された（Ｃ）。右岸堤防から北側60ｍの地点で行われたこの調査では、掘立柱建物を構成する奈良時代の柱穴３基が確認されるとともに、廃棄された大量の庄内式土器が検出され、加えて包含層からは、「北家」・「土」と墨書された７世紀末から８世紀初頭の須恵器や土馬頭部片・金環といった重要遺物が出土した［西口1980］。

1992・1993年度には、大阪府教育委員会による下水管渠築造工事に伴う立坑調査が、遺跡の東端に当たる旧国道25号線沿いの６地点で行われた（D）。調査の結果、柏原市上市１丁目地内の92年度第１調査区とそこから約20m北の93年度№５調査区において、庄内式期から布留式期前半の土器が大量に出土し、当該期の遺跡の広がりが、旧大和川のすぐ西側まで及んでいることが判明した［宮野・酒井編1993，阿部編1994］。

また、前述③の所見で触れられた河内橋周辺部の状況については、1993年度に河川浄化施設設置工事に伴って行われた柏原市教育委員会の調査や2001～2003年度に当センターが実施した大正・川北地区の調査で具体的になりつつある。

大和川河床における初の本格的な発掘調査となった柏原市教育委員会93－１次調査は、新旧の流路の浸食を免れた中洲状の部分を対象としたものである（E）。堤防に並行して東西に細長い調査区が２箇所設定され、上流側のⅠ区では弥生時代後期から奈良時代、Ⅱ区では古墳時代前期と中世の遺構が確認された。このうちⅠ区においては、古墳時代初頭の竪穴住居６棟と井戸４基が検出され、当該期の集落

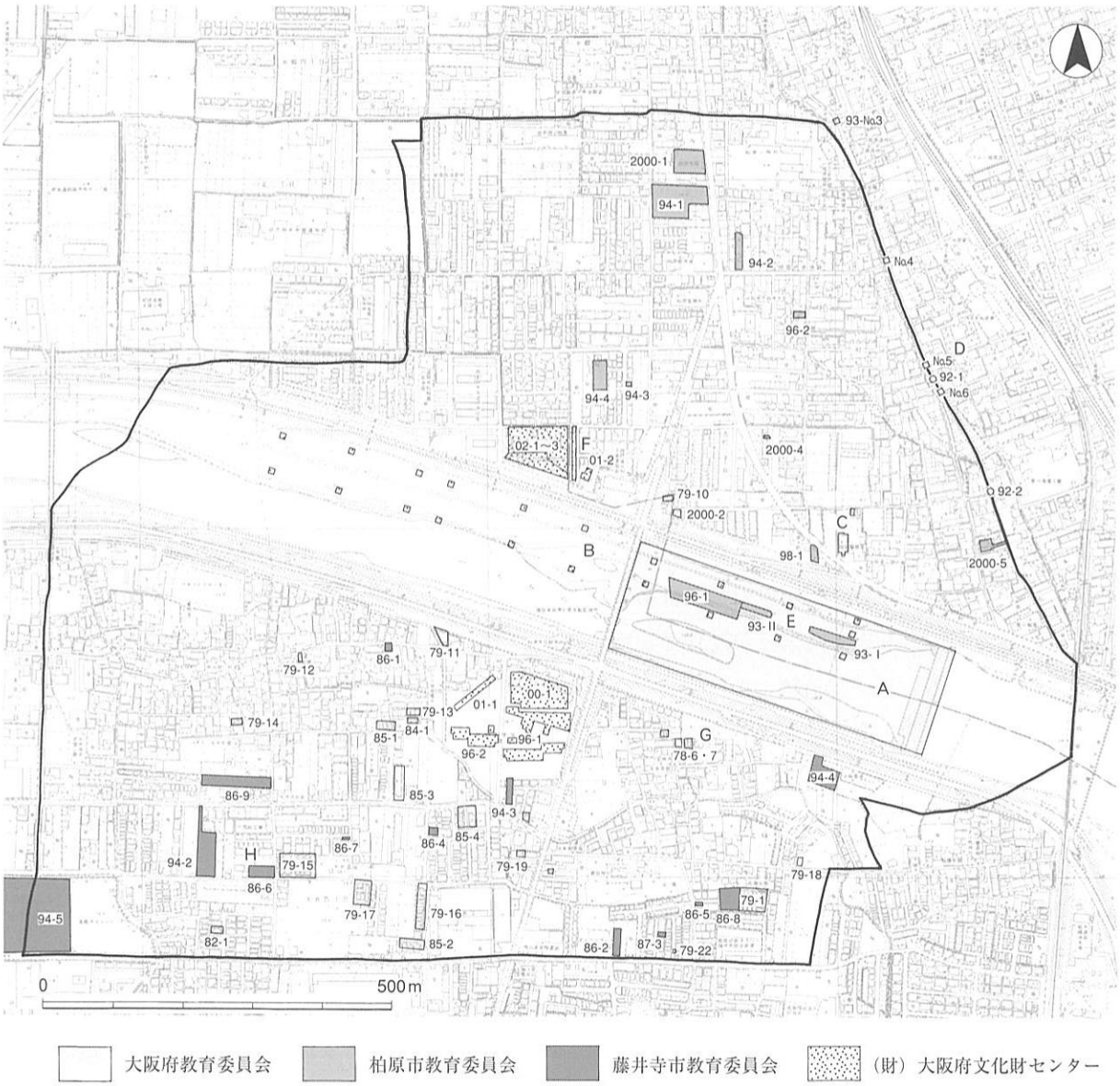



図７　船橋遺跡発掘調査位置図（大阪府　1：2,500都市計画図を縮小して改変）

の存在が確実となった。また、Ⅱ区では縄紋時代晩期の遺物包含層の堆積が確かめられ、調査中には頸部に線刻絵画が描かれた晩期後葉の突帯紋土器が採集されている［安村編1994］。

一方、当センターによる大正・川北地区の調査では、弥生時代後期の周溝状遺構や井戸、古墳時代前期の井戸、飛鳥時代前期を中心とする掘立柱建物や竪穴建物・土坑・溝などが検出され、その下では縄紋時代晩期後葉から弥生時代前期の遺物包含層の堆積も確認された（F）。主体となる飛鳥時代の遺構からは、多量の土器類とともにガラス小玉や金属製品の鋳型が出土しており、調査地が当該期の工房域に含まれていた可能性が考えられる。また、下層調査においては、これらの遺構面の下に縄紋時代晩期頃に供給されたと推定される層厚３ｍ以上に及ぶ砂層の存在が確認され、河川改修事業に先立って区域内で実施されたボーリング調査のデータを検討した結果、周辺の微地形は基本的にこの河川堆積物の堆積によって形成されていることが明らかとなった。

以上の右岸側の成果に対し、左岸側は調査原因による掘削深度の浅さに加え、分厚い洪水砂層や湧水に阻害されて不十分な調査が多く、実態は今一歩明確ではない。その中で、00－１調査区の東側150ｍ地点で大阪府教育委員会によって行われた1978年度調査では、78－６・７の両区で古代から近世の遺物包含層が認められ、このうち78－６区では、溝・土坑を伴う中世前期面と弥生時代後期末の竪穴住居・土器廃棄土坑が検出された弥生面の２遺構面が確認されている（G）［佐久間ほか1979］。いずれの面も今回の調査で明らかとなった遺構面と時期的に合致しており、各遺構面の広がりを把握するうえで重要な成果である。また、詳細は不明であるが、01－１調査区西端から南西350ｍの地点で実施された藤井寺市教育委員会86－６区調査においても、古代から近世の遺物包含層の存在が確かめられている（H）［天野ほか1987］。

こうした中、1995・1996年度には、府営美陵住宅建て替えと大和川改修事業進入路建設に伴う発掘調査が当センターによって行われた（Ⅰ）。96－１・２両調査区合わせて4,700㎡に及んだこの調査では、平安時代後期の自然流路によって多くの部分が失われていたものの、縄紋時代から近世に至る遺構面あるいは旧地表面が確認され、地形の形成過程と人間活動の関連性、あるいは景観の変遷を時期ごとに辿ることができる貴重な調査例となった。特に第５面とされた古墳時代初頭から前期の遺構面では、方形周溝墓の可能性が高い溝状遺構や井戸が検出され、右岸のみならず左岸側にも当該期の集落が存在していることが判明した。また、下層の調査では、縄紋時代晩期後葉の土器や弥生時代中期の遺構・遺物が確認され、調査地一帯が弥生時代開始以前の段階から人間活動の領域内に組み込まれていたことが明らかとなった［寺川ほか1998］。

遺跡の発見以来、名称だけが一人歩きしていた感のある船橋遺跡も、これまで述べてきた既往の調査成果により、次第にその実態が明らかにされてきている。特に弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構・遺物については、右・左岸を問わず遺跡内の各地点で確認されており、当該期の大規模な集落が存在していることが確実視される。また、右岸側では飛鳥から奈良時代、左岸側では古代末から中世前期の遺構面の広がりが確かめられ、時期ごとに遺跡の中心域が移動していることも推定される。さらに、河内橋の周辺では、縄紋時代晩期後葉の遺物包含層が広範囲に広がっていることが明らかとなり、近い将来当該期の遺構の検出が期待される。

# 第Ⅲ章　00－1調査区の調査成果

## 第１節　基本層序と遺構面の認識

前章でも述べたように、船橋遺跡は国府台地の北側縁辺に接して広がる沖積低地上に立地している。当遺跡に限らず沖積低地に展開する遺跡では、河川活動によって水成堆積物が頻繁に供給され、多様な地層が重層して堆積している。これらの地層はそれぞれ各時代の微地形を形成しており、低湿地遺跡調査の主要な目的の１つである地形環境の変遷と人間活動との関係を究明するうえで、各地層の層序を的確に把握することが重要である。また、当遺跡のように遺跡範囲が広域に及ぶ場合、同一時間面における全体景観を復元していくうえで、それぞれの地層の広がりや変化を空間的に追究し、各調査地点における微地形や堆積環境の差異を明らかにする必要があり、そのためには層序認識の共通化を図り、標準的な層序を確立していくことが望まれる。

以上の観点から今回の調査に当たっては、既往の調査区、特に縄紋時代から近・現代に至る基本的な層序が捉えられた96－1調査区の調査所見を参考に断面観察を実施し、可能な限り層位と遺構面の整合を図ることとした。

00－1調査区の基本層序については、Ｘ＝－157,750・Ｙ＝－34,920の２ラインの断面図を代表させて図８に示した。それぞれの地層の詳細な層相については断面図注記を参照していただくこととして、以下では図に表現できなかった点、特に遺構面の認識や各地層の年代に関わる点を中心に概略を記しておきたい。なお、一部の地層に用いたａ層・ｂ層という名称は、土壌とその母材の関係を把握し、これを１単位の地層と捉える高橋学氏の呼称法［高橋1992］を援用したものであるが、文中でも記したようにｂ層と呼称した地層にも土壌化が認められる場合があり、必ずしも厳密な区分とはなっていないことを断っておきたい。

０層　調査区全域で第１面を覆う洪水砂層であり、この上に堆積した現代作土・府営住宅建設時の盛土とともに重機により掘削・除去した。96－2調査区において18世紀代の肥前系磁器が出土していることから近世末あるいは近代の氾濫堆積物と推定されるが、同一と考えられる砂層は、調査区周辺のみならず現大和川左岸の遺跡範囲内のほぼ全域で確認されており、当遺跡の西側に位置する藤井寺市西大井遺跡において「第１遺構面直上砂層」と呼称された近代の洪水砂層［大野編1995］とも対応する可能性がある。本調査区内では層厚約0.5～0.7ｍを有し、極粗粒の中礫以細の礫を含む灰白～明黄褐色中砂～極粗砂を主体とするが、ラミナはほとんど認められず、層中には１・２層のブロックが多く含まれている。したがって、この砂層はプライマリーな堆積物ではなく、次節で述べる第１面検出の土坑群の埋土と捉えるべきであり、その証左に土坑の掘削を免れた場所では、ラミナを有するシルト質極細砂の薄層が最下部に存在している。

１層　０層である洪水砂層と２ａ層とした灰～オリーブ灰色極細砂～細砂層の間を１層として括り、０層を除去した面を第１面と認識した。１層は粗砂～細礫を含むシルト質極細砂あるいは極細砂で、層中には斑鉄・マンガン斑が顕著に見られる。色調や粒度・含有物から２～３層に細分され、96－1調査区ではこの層を２面（第１・２面）に分けて調査を行っている。上下の地層の年代から中世後期～近世

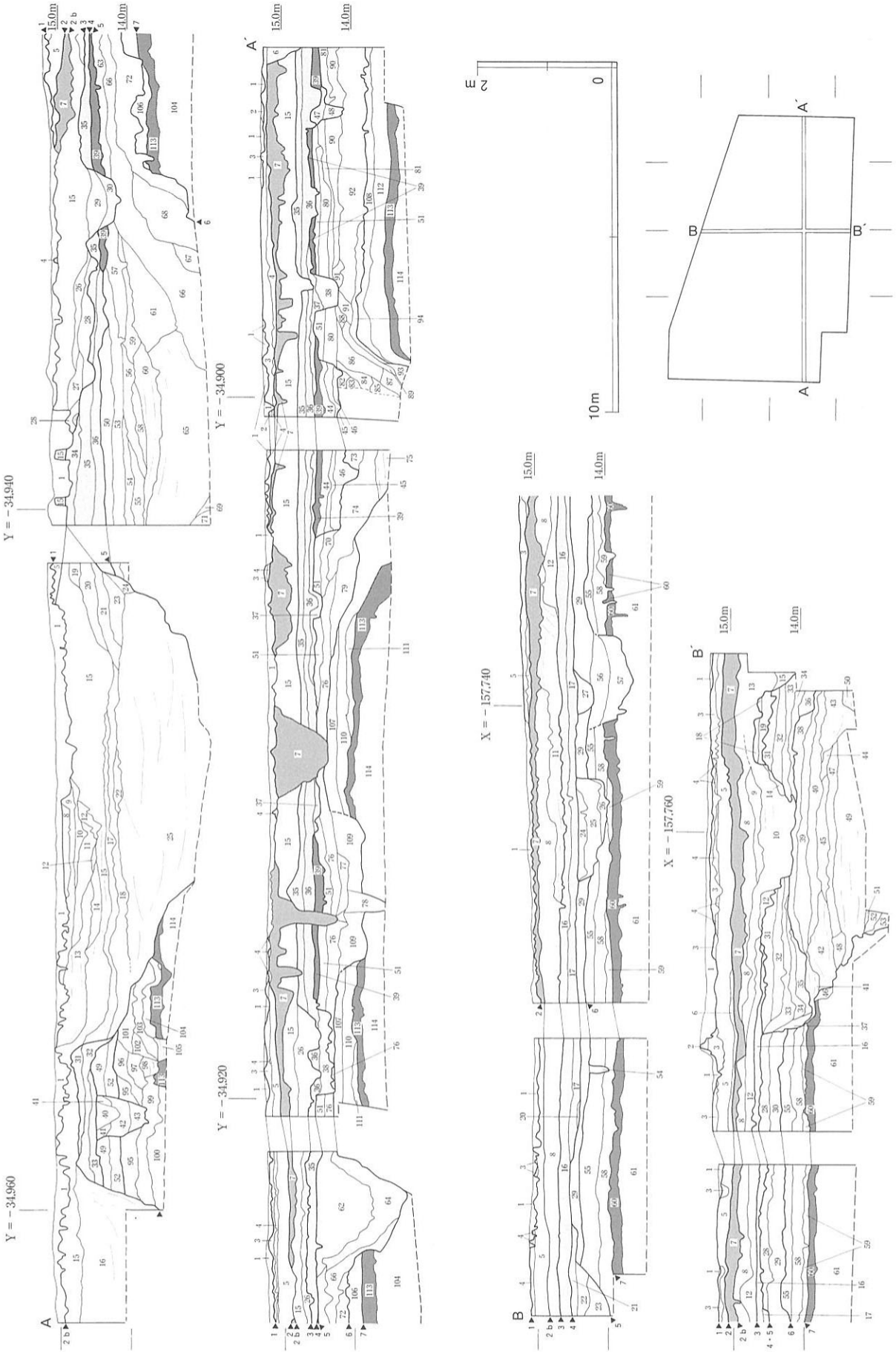



図８　00－１調査区　土層断面模式図

## Ｘ＝－157,750ライン　断面注記

| 番号 | 色 | 調 | 粒度 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 灰白～明黄褐 | 2.5Y7/1～2.5Y6/6 | 中砂～細礫 | 土坑内では３・４のブロック入る〔０層〕 |
| 2 | 灰白～浅黄 | 5Y8/1～5Y8/3 | シルト質極細砂 | 第１面直上に部分的に存在する溢流堆積物．ラミナあり〔０層〕 |
| 3 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 5Y5/3 | 極細砂 | 粗～極粗砂多く含む．炭化物粒含む．４のブロック入る．Fe斑紋顕著〔１層〕 |
| 4 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ～明黄褐 | 7.5Y6/2～2.5Y6/6 | 砂質シルト | 粗～極粗砂多く含む．明黄褐（2.5Y6/6）シルトの小ブロック入る．<br>Fe・Mn斑紋顕著〔１層〕 |
| 5 | 褐灰 | 10YR6/1 | 極細砂 | 明黄褐色シルトの小ブロック入る．Fe・Mn斑紋顕著〔１層〕 |
| 6 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 10Y5/2 | 砂質シルト | 青灰（10BG5/1）シルトのブロック入る〔第２面10井戸埋土最上部〕 |
| 7 | 灰～ｵﾘｰﾌﾞ灰 | N5/　～2.5GY5/1 | 極細～細砂 | 炭化物粒多く含む．Mn斑紋顕著〔２ａ層〕 |
| 8 | 黄橙 | 10YR7/8 | 中砂～細礫 | 強い酸化により赤味帯びる〔第３面343流路埋土〕 |
| 9 | 鈍い黄 | 2.5Y6/3 | 極細砂 | 中～粗砂多く含む〔第３面343流路埋土〕 |
| 10 | 青灰 | 5B5/1 | 極細砂 | 土壌化層．中～極粗砂多く含む〔第３面343流路埋土〕 |
| 11 | 青灰 | 5B5/1 | 砂質シルト | 10mm大のシルトブロック入る〔第３面343流路埋土〕 |
| 12 | 灰白 | 10YR8/2 | 粗砂～細礫 | 〔第３面343流路埋土〕 |
| 13 | 浅黄 | 5Y8/3～8/4 | 細砂 | ラミナあり〔第３面343流路埋土〕 |
| 14 | 青灰 | 10BG5/1 | 砂質シルト | 〔第３面343流路埋土〕 |
| 15 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 5Y6/2 | シルト質極細砂 | 粗砂～細礫少量含む．Mn斑紋顕著〔２ｂ層－第３面343流路埋土〕 |
| 16 | 灰白～青灰 | 5Y8/2～5B5/1 | 極細砂 | ラミナあり〔第３面344流路埋土〕 |
| 17 | 青灰 | 5B6/1 | 砂質シルト | 〔第３面343流路埋土〕 |
| 18 | 青灰 | 5B6/1 | 砂質シルト | 細礫多く含む〔第３面343流路埋土〕 |
| 19 | 灰 | N6/ | 極細砂 | 極粗砂～細礫多く含む〔第３面343流路埋土〕 |
| 20 | 青灰 | 5B6/1 | シルト質極細砂 | 極粗砂～細礫多く含む〔第３面343流路埋土〕 |
| 21 | 青灰 | 5B6/1 | 極細砂 | 極粗砂～細礫多く含む〔第３面343流路埋土〕 |
| 22 | 灰 | 7.5Y5/1 | 極細砂 | 土壌化層．極粗砂～細礫多く含む〔第３面343流路埋土〕 |
| 23 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 5Y6/2 | 極細砂 | 細礫少量含む〔第３面343流路埋土〕 |
| 24 | 灰 | 5Y5/1 | 砂質シルト | 極粗砂多く含む．炭化物粒含む〔第３面343流路埋土〕 |
| 25 | 灰白 | 2.5Y8/1～8/2 | 中砂～中礫 | 〔第３面343流路埋土〕 |
| 26 | 明ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY7/1 | 極細～細砂 | Fe斑紋顕著〔２ｂ層〕 |
| 27 | 灰白 | 7.5Y7/2 | 極細砂 | 極粗砂少量含む〔２ｂ層〕 |
| 28 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY6/1 | 極細～細砂 | 粗砂多く含む．Fe斑紋顕著〔２ｂ層〕 |
| 29 | 淡黄 | 5Y8/3 | 極細～細砂 | 〔第３面324溝埋土上部〕 |
| 30 | 青灰 | 5B6/1 | シルト | 中～極粗砂多く含む〔第３面324溝埋土下部〕 |
| 31 | 灰 | 10Y6/1 | シルト質極細砂 | Mn斑紋顕著〔３層〕 |
| 32 | 黄灰 | 2.5Y6/1 | 砂質シルト | 炭化物粒含む．Mn斑紋顕著〔３層〕 |
| 33 | 灰 | 5Y6/1 | シルト（粗粒） | 粗砂多く含む．極細砂ブロック若干入る．Mn斑紋顕著〔３層〕 |
| 34 | 黄灰 | 2.5Y5/1 | シルト | 粗～極粗砂多く含む．有機物含む．35のブロック入る<br>〔３層－第３面343流路堤防盛土〕 |
| 35 | 黄灰 | 2.5Y6/1 | シルト | 粗砂～細礫多く含む．炭化物・焼土粒若干含む．Fe・Mn斑紋顕著〔３層〕 |
| 36 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY6/1 | シルト質極細砂 | 粗砂～細礫多く含む．Fe斑紋顕著〔３層〕 |
| 37 | 灰 | 10Y5/1 | シルト | 粗砂～細礫多く含む．有機物含む．Fe・Mn斑紋顕著〔３層〕 |
| 38 | 灰 | 10Y5/1 | シルト（粗粒） | 粗～極粗砂多く含む．炭化物粒多く含む．下部を中心に51・77のブロック入る<br>〔第４面378土坑埋土〕 |
| 39 | 灰 | 10Y5/1 | シルト | 極粗砂～細礫多く含む．有機物含む〔４層〕 |
| 40 | 灰 | 10Y5/1 | シルト | 上部を中心に粗砂～細礫多く含む．炭化物粒含む〔第５面473溝埋土上部〕 |
| 41 | 緑灰 | 7.5GY5/1 | シルト（粗粒） | 粗砂多く含む．炭化物粒含む．Fe斑紋顕著〔第５面473溝埋土上部〕 |
| 42 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 2.5GY5/1 | 砂質シルト | 極粗砂多く含む．炭化物・焼土粒含む〔第５面473溝埋土中部〕 |
| 43 | 灰 | 5Y5/1 | シルト | 炭化物粒含む〔第５面473溝埋土下部〕 |
| 44 | 灰 | 7.5Y6/1 | シルト | 極粗砂～細礫少量含む．炭化物粒含む．Fe斑紋顕著で酸化により橙色味帯びる<br>〔第５面514竪穴住居埋土上部〕 |
| 45 | 灰 | 10Y6/1 | シルト | 最下部に炭化物の薄層が堆積し、全体的にも炭化物粒を多く含む<br>〔第５面514竪穴住居埋土下部〕 |
| 46 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 10Y6/2 | 極細～細砂 | 粗砂多く含む．有機物を含んだｵﾘｰﾌﾞ灰（5GY5/1）シルトブロック入る<br>〔第５面514竪穴住居貼床〕 |
| 47 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY6/1 | シルト | 炭化物粒若干含む〔第５面478溝埋土上部〕 |
| 48 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY6/1 | シルト | 炭化物粒含む〔第５面478溝埋土下部〕 |
| 49 | 灰 | 5Y5/1 | シルト | 中砂～細礫多く含む．Fe斑紋顕著で酸化により黄色味帯びる〔５層〕 |
| 50 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 7.5Y5/2 | 極細砂 | 粗砂～細礫多く含む．Fe斑紋あり〔５層〕 |
| 51 | 灰 | 7.5Y6/1 | シルト質極細砂 | Fe・Mn斑紋顕著で酸化により橙色味帯びる〔５層〕 |
| 52 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 10Y6/2 | シルト質極細砂 | 極粗砂多く含む．焼土粒若干含む．Fe斑紋顕著〔５層〕 |
| 53 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 7.5Y4/2 | シルト質極細砂 | 粗砂～細礫多く含む．Fe斑紋顕著〔第５面467溝埋土〕 |
| 54 | 黄灰 | 2.5Y5/1 | シルト質極細砂 | 極粗砂～細礫多く含む．有機物含む〔第５面467溝埋土〕 |
| 55 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 5Y5/2 | シルト | 有機物の薄層が数層挟在〔第５面467溝埋土〕 |
| 56 | 黄灰 | 2.5Y5/1 | 砂質シルト | 粗砂～細礫少量含む．カーボン粒含む〔第５面467溝埋土〕 |
| 57 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 7.5Y5/2 | シルト | 粗砂～細礫多く含む．炭化物粒・有機物含む〔第５面467溝埋土〕 |
| 58 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 5Y5/2 | シルト質極細砂 | 炭化物粒多く含む．Fe斑紋あり〔第５面467溝埋土〕 |
| 59 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY5/1 | 砂質シルト | 粗砂～細礫多く含む．炭化物粒若干含む．Fe斑紋あり〔第５面467溝埋土〕 |

| 番号 | 色 | 調 | 粒度 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|
| 60 | ｵﾘｰﾌﾞ灰～暗灰黄 | 5Y5/2～2.5Y5/2 | シルト質極細砂・極細砂の互層 | 間に極粗砂の薄層が挟在．炭化物粒・植物遺体多く含む〔第５面467溝埋土〕 |
| 61 | 青灰 | 5B5/1 | シルト質極細砂～極細砂 | 粗～極粗砂多く含む．炭化物粒含む．上方細粒化〔第５面467溝埋土〕 |
| 62 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 5Y6/2 | 極細砂 | 粗砂～細礫非常に多く含む．Fe斑紋顕著で酸化により橙色味帯びる〔第６面612土坑埋土上部〕 |
| 63 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 7.5Y6/2 | 砂質シルト | 中砂～細礫多く含む．Fe斑紋顕著〔第６面486流路埋土〕 |
| 64 | 灰白 | 10Y7/2 | シルト | Fe斑紋あり〔第６面612土坑埋土下部〕 |
| 65 | 灰 | 5Y5/1 | シルト質極細砂 | 流木や植物遺体多量に含む．間にラミナを有する砂礫層が挟在〔第５面467溝埋土〕 |
| 66 | 青灰 | 10BG5/1 | 極細～細砂 | 粗砂～細礫多く含む〔第６面486流路埋土〕 |
| 67 | 緑灰 | 10G5/1 | 砂質シルト | 中砂～細礫多く含む．間に砂礫層が挟在〔第６面486流路埋土〕 |
| 68 | 青灰 | 5B6/1 | シルト質極細砂 | 中～極粗砂少量含む．炭化物粒・有機物若干含む．浅黄（2.5Y7/4）極細砂のブロック入る〔第６面486流路埋土〕 |
| 69 | 灰オリーブ | 5Y6/2 | 極粗砂～細礫 | 〔第６面486流路埋土〕 |
| 70 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY6/1 | 極細砂 | 極粗砂～細礫非常に多く含む．Fe・Mn斑紋顕著〔５層〕 |
| 71 | 青灰 | 5BG6/1 | 細砂 | 粗砂～細礫非常に多く含む．青灰（5BG6/1）シルトのブロック入る〔第６面486流路埋土〕 |
| 72 | 青灰 | 5B6/1 | 極細砂 | 粗砂～細礫非常に多く含む〔第６面486流路埋土〕 |
| 73 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 10Y6/2 | 極細～細砂 | 細礫若干含む〔第６面611流路埋土〕 |
| 74 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY6/1 | 極細砂 | 粗砂～細礫多く含む．114のブロック入る．Fe斑紋あり〔第６面611流路埋土〕 |
| 75 | 明黄褐～灰白 | 2.5Y7/6～5Y8/1 | 中～粗砂 | ラミナあり〔第６面611流路埋土〕 |
| 76 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY6/1 | 砂質シルト | 極粗砂～細礫若干含む．Fe斑紋顕著〔５層〕 |
| 77 | 灰 | 10Y6/1 | シルト | 炭化物粒少量含む．108のブロック多く入る〔第６面609溝埋土上部〕 |
| 78 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY5/1 | シルト | 炭化物粒・有機物若干含む．115の小ブロック入る〔第６面609溝埋土下部〕 |
| 79 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY6/1 | シルト | 有機物少量含む．Fe・Mn斑紋あり〔第６面611流路埋土〕 |
| 80 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY6/1 | シルト（粗粒） | 中～粗砂多く含む．炭化物粒含む．Fe斑紋あり〔５層〕 |
| 81 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 10Y6/2 | 砂質シルト | 〔５層〕 |
| 82 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 10Y6/2 | シルト質極細砂 | 極粗砂～細礫若干含む〔第６面611流路埋土〕 |
| 83 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 10Y6/2 | 極細砂 | 極粗砂若干含む〔第６面611流路埋土〕 |
| 84 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 10Y6/2 | シルト質極細砂 | 灰色シルトのブロック入る〔第６面611流路埋土〕 |
| 85 | 灰白～ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5Y8/1～5GY7/1 | シルト質極細砂～極細砂 | 極粗砂若干含む．上方粗粒化〔第６面611流路埋土〕 |
| 86 | 灰白 | 10Y7/2 | 極細砂 | 粗砂～細礫多く含む〔第６面611流路埋土〕 |
| 87 | 明ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY7/1 | シルト質極細砂 | 〔第６面611流路埋土〕 |
| 88 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY5/1 | 砂質シルト | 粗砂～細礫多く含む〔第６面611流路埋土〕 |
| 89 | 緑灰 | 7.5GY6/1 | 砂質シルト | 粗砂～細礫多く含む〔第６面611流路埋土〕 |
| 90 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 10Y6/2 | シルト質極細砂 | 〔５層〕 |
| 91 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY6/1 | シルト質極細砂 | 粗砂～細礫多く含む〔５層〕 |
| 92 | 青灰～緑灰 | 5B6/1～7.5GY6/1 | シルト質極細砂 | 〔５層〕 |
| 93 | 明ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY7/1 | シルト | 極粗砂～細礫多く含む〔第６面611流路埋土〕 |
| 94 | 明緑灰 | 10GY7/1 | シルト質極細砂 | 〔第６面611流路埋土〕 |
| 95 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 7.5Y6/2 | シルト質極細砂 | 粗砂～細礫多く含む．シルト質やや強い．Fe斑紋あり〔６ａ層〕 |
| 96 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 7.5Y6/2 | 極細砂 | 粗砂～細礫多く含む．Fe斑紋あり〔６ａ層〕 |
| 97 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 7.5Y6/2 | 極細砂 | 粗砂～細礫非常に多く含む．Fe斑紋あり〔６ａ層〕 |
| 98 | 浅黄～灰ｵﾘｰﾌﾞ | 2.5Y7/4～7.5Y6/2 | 中～粗砂・極細～中砂の互層 | 上方粗粒化〔６ａ層〕 |
| 99 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY6/1 | 砂質シルト | 極粗砂～細礫若干含む．有機物少量含む〔６ａ層〕 |
| 100 | 緑灰 | 10GY6/1 | シルト質極細砂 | 〔６ｂ層〕 |
| 101 | 緑灰 | 7.5GY6/1 | 極細～細砂 | 極粗砂・炭化物粒若干含む〔６ａ層〕 |
| 102 | 緑灰～青灰 | 7.5GY6/1～5B6/1 | 極細砂 | 〔６ａ層〕 |
| 103 | 青灰 | 5B6/1 | シルト質極細砂 | 〔６ａ層〕 |
| 104 | 緑灰 | 7.5GY5/1 | 極細砂 | 極粗砂若干含む．下部に114のブロック入る〔６ｂ層〕 |
| 105 | 浅黄～青灰 | 7.5Y7/3～5BG6/1 | 極細～細砂・シルト質極細砂の互層 | 上方粗粒化〔第７面588溝埋土〕 |
| 106 | 青灰 | 5BG6/1 | シルト質極細砂 | 炭化物粒・有機物含む．最下部に114のブロック入る〔６ｂ層〕 |
| 107 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY6/1 | シルト（粗粒） | Fe斑紋あり〔６ａ層〕 |
| 108 | 灰 | N6/ | シルト | 〔６ａ層〕 |
| 109 | 緑灰 | 7.5GY6/1 | シルト | 極細砂多く含む〔第６面655溝埋土〕 |
| 110 | 灰白 | 7.5Y7/2 | 極細砂 | 10～20㎜大の灰（5Y6/1）シルトのブロック入る〔６ｂ層〕 |
| 111 | 灰 | 5Y6/1 | 粘土質シルト | 114の上に部分的に堆積．二次堆積物か〔６ｂ層〕 |
| 112 | 緑灰 | 5G6/1 | シルト | 〔６ｂ層〕 |
| 113 | 灰 | N5/ ～7.5Y5/1 | シルト | 有機物含む〔７ａ層〕 |
| 114 | 灰白～青灰 | 7.5Y7/2～5B6/1 | 砂質シルト～極細砂 | 上方細粒化〔７ｂ層〕 |

## Y＝－34,920ライン　断面注記

| 番号 | 色 | 調 | 粒度 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 灰白～明黄褐 | 2.5Y7/1～2.5Y6/6 | 中砂～細礫 | 土坑内では３・４のブロック入る〔０層〕 |
| 2 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 10Y5/2 | 極細砂 | 中砂～細礫非常に多く含む．部分的に灰白色極細砂の薄層が挟在〔1層－畦畔盛土〕 |
| 3 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 5Y5/3 | 極細砂 | 粗砂～細礫多く含む．炭化物粒含む．４のブロック入る．Fe斑紋顕著〔１層〕 |

| 番号 | 色 | 調 | 粒度 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|
| 4 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 7.5Y6/2 | 砂質シルト | 粗砂～細礫多く含む．明黄褐（2.5Y6/6）シルトの小ブロック入る．Fe・Mn斑紋あり〔１層〕 |
| 5 | 褐灰 | 10YR6/1 | 極細砂 | 明黄褐（2.5Y6/6）シルトの小ブロック入る．Fe・Mn斑紋顕著〔１層〕 |
| 6 | 灰白 | 5Y8/2 | 極細～細砂 | 〔１層〕 |
| 7 | 灰～ｵﾘｰﾌﾞ灰 | N5/　～2.5GY5/1 | 極細～細砂 | 炭化物粒多く含む．Mn斑紋顕著〔２ａ層〕 |
| 8 | 鈍い黄褐～灰ｵﾘｰﾌﾞ | 2.5Y6/3～5Y6/2 | シルト質極細砂～細砂 | 炭化物粒少量含む．灰白（2.5Y8/2）細砂が挟在．上方細粒化．Mn斑紋あり〔２ｂ層〕 |
| 9 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 10Y5/2 | 細砂 | 粗砂多く含む〔第３面324溝埋土上部〕 |
| 10 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY6/1 | 極細～細砂 | 上部中心に部分的にラミナあり．16のブロック入る〔第３面324溝埋土下部〕 |
| 11 | 灰白 | 5Y8/2 | 中砂 | 部分的にラミナ認められる〔２ｂ層〕 |
| 12 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 7.5Y6/2 | シルト質極細砂～中砂 | 16のブロック入る．Fe斑紋顕著〔２ｂ層〕 |
| 13 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY6/1 | 極細～細砂 | 最上部はやや暗色を呈する〔第３面343流路埋土〕 |
| 14 | 青灰 | 5BG5/1 | 砂質シルト | 〔第３面324溝埋土下部〕 |
| 15 | 灰白～黄橙 | 2.5Y8/1～10YR8/8 | 極細～細砂 | ラミナあり〔第３面343流路埋土〕 |
| 16 | 灰 | 10Y6/1 | シルト | 中～粗砂少量含む．Fe・Mn斑紋あり〔３層〕 |
| 17 | 灰 | 10Y6/1 | シルト（粗粒） | 中～粗砂多く含む．炭化物粒含む〔３層－３層下面溝埋土〕 |
| 18 | 灰 | 7.5Y5/1 | シルト質極細砂 | 〔３層〕 |
| 19 | 灰 | 10Y4/1 | シルト | 粗砂・炭化物粒多く含む〔３層〕 |
| 20 | 灰白 | 5Y8/2 | 極細砂 | ラミナあり〔３層下面溝埋土下部〕 |
| 21 | 灰 | 5Y5/1 | シルト | 極粗砂若干含む．酸化により橙色味を帯びる〔第５面440周溝墓北周溝埋土上部〕 |
| 22 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY5/1 | シルト（粗粒） | 炭化物粒・有機物含む．灰白（7.5Y7/2）シルトのブロック入る〔第５面440周溝墓北周溝埋土中部〕 |
| 23 | 灰 | 10Y5/1 | 粘土質シルト | 炭化物粒・有機物多く含む〔第５面440周溝墓北周溝埋土下部〕 |
| 24 | 黄灰 | 2.5Y5/1 | 砂質シルト | 粗砂少量含む．炭化物粒・有機物多く含む〔第５面440周溝墓南周溝埋土上部〕 |
| 25 | 灰～灰白 | 10Y5/1～7.5Y7/2 | 粘土質シルト・シルトの互層 | 粘土質シルトは炭化物粒多く含む〔第５面440周溝墓南周溝埋土中部〕 |
| 26 | 灰 | 10Y6/1 | 砂質シルト | 58の小ブロック多く入る〔第５面440周溝墓南周溝埋土下部〕 |
| 27 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY6/1 | シルト質極細砂 | 極粗砂～細礫少量含む．Fe斑紋顕著〔第５面468周溝墓北周溝埋土〕 |
| 28 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY6/1 | シルト質極細砂 | Fe斑紋顕著．酸化により黄色味帯びる〔５層〕 |
| 29 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY6/1 | 砂質シルト | Mn斑紋顕著．全体的に褐色味帯びるが、上面付近は酸化により黄色を呈する〔５層〕 |
| 30 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY6/1 | 砂質シルト | 29と同じ〔５層〕 |
| 31 | 青灰 | 5B6/1 | シルト | 粗砂を若干含む．有機物少量含む〔第５面467溝埋土最上部〕 |
| 32 | 褐灰 | 10YR6/1 | 砂質シルト | 極粗砂～細礫多く含む．腐植物・木屑を多量に含む．間に粗砂の薄層が挟在〔第５面467溝埋土上部〕 |
| 33 | 灰ｵﾘｰﾌﾞ | 5Y5/2 | シルト | 粗砂～細礫少量含む〔第５面467溝埋土中部〕 |
| 34 | 黄灰 | 2.5Y5/1 | 粘土質シルト | 炭化物粒・有機物含む〔第５面467溝埋土中部〕 |
| 35 | 緑灰 | 10GY6/1 | シルト質極細砂 | 〔第５面467溝埋土下部〕 |
| 36 | 黄灰 | 2.5Y6/1 | 粘土質シルト | 上部を中心に炭化物粒含む〔第５面467溝埋土〕 |
| 37 | 灰 | 10Y5/1 | シルト（粗粒） | 粗砂～細礫多く含む．有機物多く含む〔第５面467溝埋土下部〕 |
| 38 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 5GY5/1 | シルト質極細砂 | 炭化物粒多く含む〔第６面486流路埋土〕 |
| 39 | 灰 | 10Y5/1 | シルト質極細砂 | 粗～極粗砂多く含む．炭化物粒多く含む〔第６面486流路埋土〕 |
| 40 | 黄灰 | 2.5Y5/1 | シルト（粗粒） | 炭化物粒・有機物多く含む．部分的に有機物の薄層が挟在〔第６面486流路埋土〕 |
| 41 | 浅黄～灰白 | 2.5Y7/2～2.5Y8/1 | 極細砂～細礫 | ラミナあり．上方細粒化〔第６面486流路埋土〕 |
| 42 | 黄灰 | 2.5Y6/1 | シルト～細砂 | 極粗砂～細礫多く含む．有機物・木屑多く含む．部分的に極細～細砂層が挟在〔第６面486流路埋土〕 |
| 43 | 褐灰 | 10YR6/1 | シルト | 腐植物を多く含む．間に極細砂層が挟在〔第６面486流路埋土〕 |
| 44 | 青灰 | 5B6/1 | シルト | 粗砂・炭化物粒・有機物若干含む〔第６面486流路埋土〕 |
| 45 | 緑灰 | 10G6/1 | シルト質極細砂 | 粗砂～細礫多く含む．60のブロック入る〔第６面486流路埋土〕 |
| 46 | 緑灰 | 10G6/1 | シルト質極細砂 | 粗砂～細礫多く含む．60のブロック入る〔第６面486流路埋土〕 |
| 47 | 青灰 | 5B6/1 | シルト | 粗砂・有機物若干含む〔第６面486流路埋土〕 |
| 48 | 褐灰 | 10YR6/1 | 砂質シルト | 極粗砂～細礫多く含む．木屑を多量に含む．間に粗砂の薄層が挟在〔第６面486流路埋土〕 |
| 49 | ｵﾘｰﾌﾞ灰・浅黄 | 5GY5/1・7.5Y8/3 | シルト・極細～細砂の互層 | シルトは腐植物・種子類多く含む〔第６面486流路埋土〕 |
| 50 | 灰 | 5Y5/1 | 極細～細砂 | ラミナあり〔第６面486流路埋土〕 |
| 51 | 緑灰 | 10GY6/1 | シルト質極細砂 | 〔第６面486流路埋土〕 |
| 52 | 灰 | 5Y5/1 | シルト | 腐植物多く含む．ﾋﾞﾋﾞｱﾅｲﾄ見られる〔第６面486流路埋土〕 |
| 53 | 緑灰 | 10GY5/1 | シルト質極細砂 | 〔第６面486流路埋土〕 |
| 54 | 灰 | 10Y5/1 | 砂質シルト | 炭化物粒・有機物多く含む．55のブロック入る〔第６面ピット埋土〕 |
| 55 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 10Y6/2 | シルト質極細砂 | 上部はやや暗色を呈し、シルト質強い．10mm前後のシルトブロック入る．上方細粒化〔６ａ層〕 |
| 56 | 灰 | 5Y6/1 | シルト | Mn斑紋わずかに見られる〔第６面655溝埋土上部〕 |
| 57 | ｵﾘｰﾌﾞ灰 | 2.5GY6/1 | シルト | 60・61のブロック入る〔第６面655溝埋土下部〕 |
| 58 | 灰白 | 7.5Y7/2 | シルト | 下部では部分的に60のブロック入る〔６ｂ層〕 |
| 59 | 灰 | 10Y6/1 | シルト | 58のブロック入る．２次堆積か〔６ｂ層〕 |
| 60 | 灰 | 5Y5/1 | 粘土質シルト | 炭化物粒・有機物多く含む．61の小ブロック入る〔７ａ層〕 |
| 61 | 灰～明緑灰 | 7.5Y6/1～10GY7/1 | シルト〔上〕～粗砂 | ７ａ層を含め上方細粒化〔７ｂ層〕 |

の作土層と想定され、第２面では耕作痕跡と考えられる小溝群が１層下面遺構として検出されている。

２層　土壌化層である２ａ層とその母材である２ｂ層からなり、２ａ層上面を**第２面**、２ｂ層上面を**第２ｂ面**として認識した。出土遺物から中世前期に形成された地層と想定される。前述のとおり２ａ層は灰～オリーブ灰色極細砂～細砂より構成され、濃淡はあるものの全体的に色調は暗く、炭化物粒を多く含む。ただし、上面からの攪拌・削平によって地層の遺存状況は不良であり、Ｙ＝－34,905ライン付近より東側とＹ＝－34,920ラインの南端のみに堆積が認められるに過ぎない。

一方、２ｂ層は第３面段階の流路（343・344流路）の氾濫堆積物であり、第３面を覆って調査区全域に堆積している。流路下部では極粗粒の中礫以細の礫を含む中～極粗砂、流路上部と流路以外ではシルト質極細砂～中砂を主体とするが、流路以外のところでは部分的にしかラミナが観察されず、この層自体も土壌化している可能性が高い。なお、第２面は96－1調査区の第３面に対応するが、第２ｂ面とした砂層上面では遺構検出は行われていない。

３層　粗砂～細礫を多く含む灰～黄灰色シルト～シルト質極細砂で、２ｂ層を除去した本層上面を**第３面**として認識した。96－1調査区の第４面に対応する。色調や粒度・砂礫の含有量から数層に細分可能であるが、いずれも有機物や炭化物粒を多く含み、全体的に暗い色調を呈しており、土壌化していると考えられる。層中の出土遺物から10世紀代に形成された地層と想定されるが、検出した遺構からは11世紀後葉の遺物が出土しており、遺構面の廃絶時期は中世前期まで下ると考えられる。

４層　極粗砂～細礫を多く含む灰色シルトで、有機物を多く含んで黒っぽい色調を呈しており、土壌化していると考えられる。調査では本層の上面を**第４面**と捉えたが、調査区の西側３分の２では第３面段階の耕作の影響で失われており、地層の堆積は東端で確認できるのみである。なお、本面は96－1調査区の第４面ベースに対応する。

５・６層　第７面段階に存在した流路及び低地を埋積した氾濫堆積物であり、出土遺物から弥生時代中期前葉に形成された地層と推定される。途中弱いながらも暗色を呈するシルト～シルト質極細砂層が認められ、96－1調査区と同様にこれより上部の地層を５層、以下の地層を６層と認識し、それぞれの上面を**第５・６面**と捉えた。

５層は第６面段階に残存した流路（486・611流路）の氾濫堆積物で、活発な土砂供給により一部を除き調査区全体がほぼ平坦化する。層相は場所によって異なるものの、全体的にはシルト～極細砂を中心とする細粒の堆積物から構成され、最上部は酸化により橙色を帯びる。

６層は６ａ層と青灰～灰白色極細砂ならびに灰色粘土質シルトの６ｂ層に区分される。灰オリーブ～灰色のシルト～シルト質極細砂である６ａ層は、前述のように上下の地層と比して暗い色調を呈しており、この段階に土砂供給が一旦中断し、短期間ながら地表面となっていた可能性が高い。

７層　土壌化層である７ａ層とその母材である７ｂ層に区分され、96－1調査区と同様に７ａ層上面を**第７面**と認識した。７ｂ層から船橋式に比定される縄紋土器が出土していることから、縄紋時代晩期後葉～末に形成された地層と考えられるが、今回の調査では第７面で弥生時代前期～中期初頭と推定される水田が検出されたことから、この時期に至るまで地表面であったことが判明した。この水田の作土でもある７ａ層は有機物・炭化物粒を多く含む黒っぽい灰色粘土質シルトで、攪拌や擾乱により７ｂ層の小ブロックを含む。一方、７ｂ層は上部が灰～灰白色シルト～砂質シルト、下部が灰色中砂～粗砂で、全体として上方細粒化が窺われる。７ａ層の小ブロックを含むなど堆積に若干の乱れが看取され、植物等の擾乱を受けていると考えられる。

## 第２節　検出された遺構と遺物

### 第１面（図９，図版１～３）

機械掘削によって府営住宅建設時の盛土と現代作土、ならびに近世末～近代の洪水砂層を除去して検出される遺構面である。調査区のほぼ全域で土坑を検出したほか、土坑の掘削を免れたところで畦畔１条と小溝３条を確認した。検出した１層上面は、土坑の掘削によって大きく削平・攪乱を受けており、地層自体が存在しない場所もあるなど遺存状況は不良である。標高は調査区南端の中央付近で15.4m前後、北西隅で14.8～14.9mを測り、全体的には南東から北西方向へ傾斜している。

今回の調査で検出した土坑は、平面的な分布状況や長軸方向・規模などから、大きく６つの群に分けることが可能である。

まずＡ群は、調査区北端において検出した東西方向の土坑群である。２基以上の土坑が近接して掘られているため本来の形状は明確ではないが、検出面からは２段落ちしており、１段当たりの深さはいずれも10～15cmを測る。次に述べるＢ群との間には、並行して東西に延びる２条の小溝が存在しており、土坑はこのうちの北側の溝を切って掘削されている。

Ｂ・Ｃ群は、Ａ群南側に分布する幅１ｍ前後、検出面からの深さ５cm前後を測る南北方向の土坑群である。各土坑は一見すると細長い溝状を呈するが、坑底には若干帯状に高い箇所が所々認められ、元来は西側で検出したような長方形の土坑が連続して掘削されていたものと考えられる。その場合、土坑横断面の形状が北を向いて「レ」字を呈することから、西から東に向けて順次掘られていったものと推定される。この両群は、Ｘ＝－157,755ライン付近に存在する0.3～0.5mほどの帯状の空隙により区分されるが、調査区東端の空隙部分には、北側の肩部を土坑に切られているものの、溢流堆積物である灰白～浅黄色シルト質極細砂に被覆された帯状の高まりが遺存しており、土坑掘削以前にはここに畦畔が存在していたものと考えられる。

Ｄ群は、調査区南西部に並ぶ土坑群である。幅は0.8m前後、深度は検出面から10～25cmとＢ・Ｃ群と比べて幅狭で深く、これまでのいずれの群とも異なる東北東－西南西方向に長軸を置く。肩部は南側が垂直に落ちており、この群では南から北へ向かって土坑の掘削が行われていたと考えられる。

Ｅ群は、Ｄ群の南側に分布する南北方向の土坑群である。幅・深度ともＢ・Ｃ群と同様であるが、遺存状況が悪く、痕跡のみとなった土坑も存在する。

最後にＦ群は、Ｂ・Ｃ群とＤ群間の南東－北西方向の空隙に存在する土坑群である。土坑形状はＡ群と同じく２段に落ちるもの、長方形を呈する土坑状のもの、溝状のものと多様で、土坑長軸も空隙の方向に対して直交・平行の両者が認められる。なお、これらの土坑に切られているが、この空隙上には幅0.1m前後の小溝が存在している。

以上の土坑は、いずれも１・２層のブロックを含む砂層を埋土としており、肩部や坑底には四角く切り取ったような鋤の痕跡が多数遺存している。96－１・２調査区で耕作痕跡あるいは鋤溝と認識されたものも、その特徴や検出状況から同一の遺構と捉えられ、調査区周辺のかなり広い範囲にわたって土坑の分布を認めることができる。また、今回の調査区から800mほど西に位置する西大井遺跡の報告［大野編1995］においても、第１遺構面直上砂層の堆積後に掘削された土坑断面が写真図版に示されており、当遺跡で検出されている土坑も、他の遺構との重複関係や洪水砂層の堆積状況から砂層上面から掘削されていた可能性が高い。砂層の上面から掘削されたこうした土坑は、対岸の柏原市本郷遺跡や当遺跡

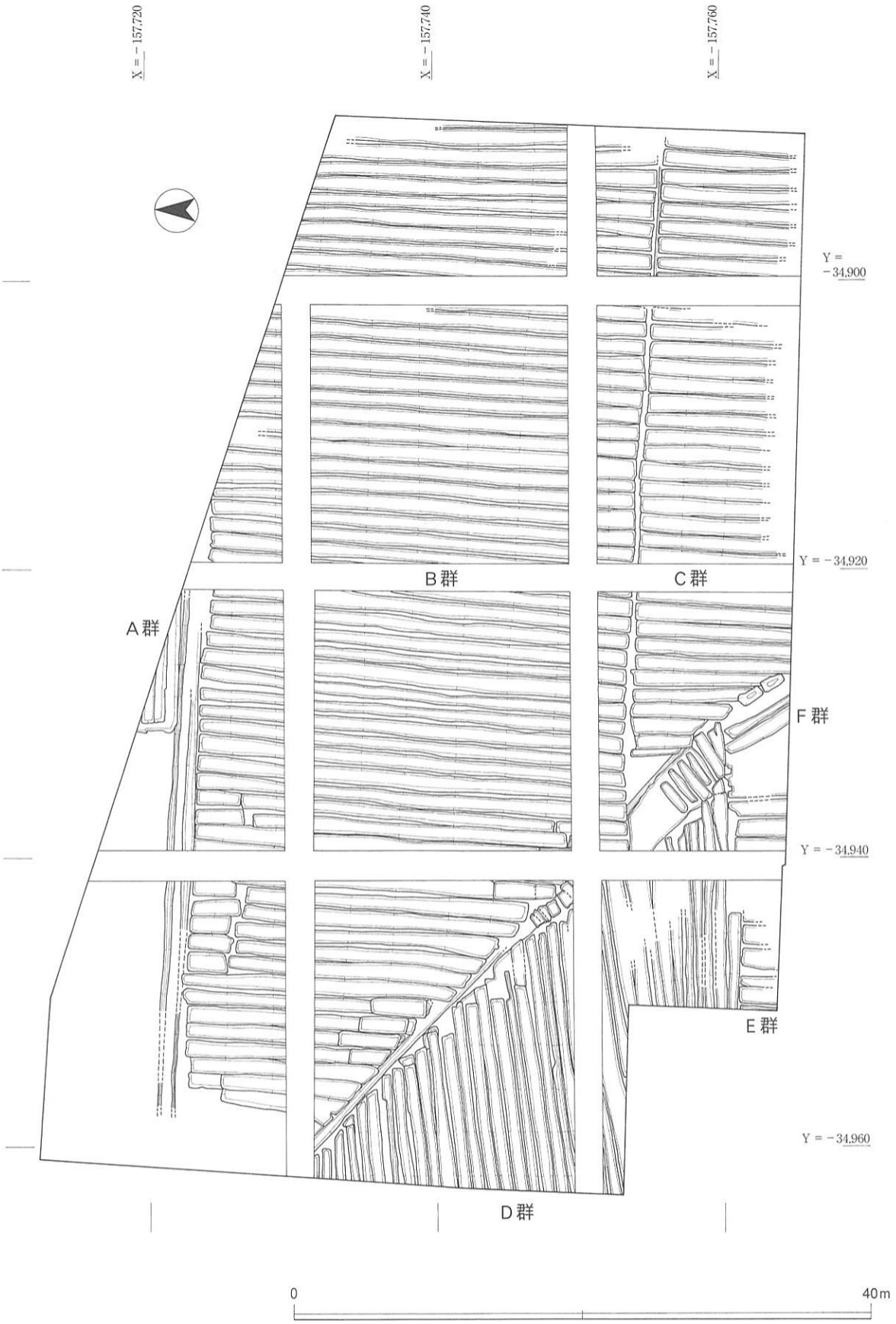

X＝－157,720
X＝－157,740
X＝－157,760
Y＝－34,900
Y＝－34,920
Y＝－34,940
Y＝－34,960
A群
B群
C群
D群
E群
F群
0
40m

図9　第1面　全体図

［石田1995］においても確認され、東大阪市池島・福万寺遺跡では、池島Ⅰ期地区と呼ばれる約90,000㎡に及ぶ調査範囲のほぼ全域にわたって検出されている。各例とも、砂層より下位に存在する土壌の採取を目的としたものであることは明らかであるが、採取土の用途に関しては、瓦や焼物といった何らかの生産物の原料［森本ほか1998］や洪水罹災後の復旧水田の作土［江浦・長原1995］といった説が示されており、見解の一致を見ていない。いずれにしても、今回は掘削を機械に頼ったため十分に果たし得なかったが、土坑自体の掘削状況や砂層（土坑埋土）上部に堆積する地層の詳細な観察が必要となろう。

それでは、前述した土坑の群別は何を反映しているのであろうか。そこで、明治10年代に記録された調査区周辺の地籍（図10）と図９を対照してみると、Ｂ・Ｃ群とＤ群間を斜めに延びる空隙と河内国志紀郡北条・大井両村の大字界、Ａ・Ｂ群間と北条村九戸田・鍵田の小字界、さらに96－1調査区１トレンチ東側で土坑の長軸方向が変化するラインと北条村鍵田・角田の小字界という具合にいくつかの符合点を確認することができ、各土坑群の纏まりが当時の土地区画を表していることを指摘できる。その場合、今回Ｂ・Ｃ群間で検出した畦畔や96－1調査区３トレンチで土坑長軸が変化するラインは、それぞれ小字内の筆界に当たる可能性が高い。以上のように、この土坑の掘削は各々所有する土地区画を強く意識しているものの、大字すなわち村を越えて実施された大規模な事業であり、水災害罹災後の復旧といった地域全体の利益に繋がることを目的としていたと考えられる。

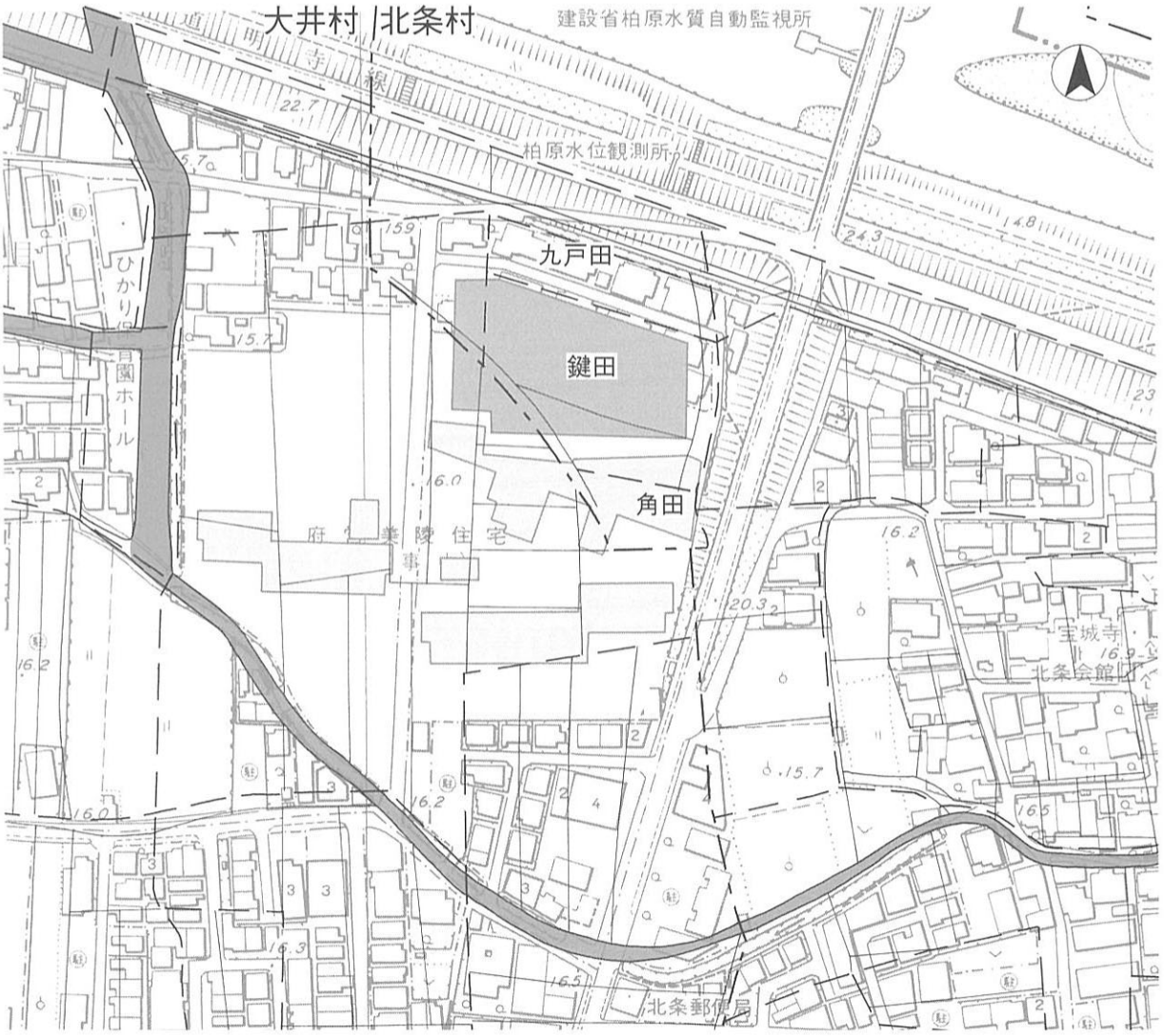



図10　調査地周辺の地籍（大阪府　1：2,500都市計画図を改変）

## 第２面（図11）

１層を除去して検出される遺構面である。前節でも述べたように、１層は２～３層に細分可能であったが、上面の土坑の影響によって調査区全域を面として追うことが困難なため、この面まで一気に掘削を実施した。ただし、検出した２ａ層も調査区東端と中央南端付近に堆積が認められるのみであり、大部分は２ｂ層である砂質シルト～細砂が露出している。遺構面は第１面と同様に南東から北西方向へ緩やかに傾斜しており、調査区南東部で15.2m前後、北西隅で14.7～14.8mを測る。この面では、多数の溝状遺構のほか、素掘り井戸と考えられる大形土坑や木組井戸を検出した。

〔溝状遺構〕（図12）

一部幅広のものが存在する（１・320溝）ものの、大半は幅0.1m前後、深さ５cm前後の小溝で、南北・東西両方向のほか、前述の大字（村）界付近では南東－北西方向に延びている。これらの溝はいずれも１層を埋土とする１層下面遺構であり、第１面段階の耕作に関わる遺構と考えられる。このうち１溝からは図12に示した遺物が出土しているが、瓦器椀・土師器皿から12世紀前半に帰属するものと考えられ、本来２ａ層に包含されていたものが耕作に伴う攪拌によって混入した可能性が高い。なお、７は無高台の白磁皿。８は硯背に縄蓆文を施した猿面硯と呼ばれる須恵質の傾斜硯で、硯背に脚を有し、無外縁の隅丸梯子形の平面形を呈することから、楢崎分類［楢崎1982］のＢ式に該当する。

〔３・４・338井戸〕（図13，図版４－１・２）

Ｃ10－ｇ５・ｅ５・ｇ３の各区で検出した素掘り井戸である。

３井戸は長径2.2m、短径1.6mを測る楕円形を呈し、検出面からは1.45mの深さまで掘削されていた。埋土は大きく３層に分かれ、このうち中層から上層下部にかけては、１層である灰オリーブ色極細砂のブロックを多く含んでいる。この遺構からは瓦質の擂鉢底部片（10）が出土している。

４井戸は長径3.0m、短径2.75mの不整楕円形の土坑で、掘削深度は検出面から1.35mを測り、坑底は第３面343流路を埋積する砂層に達している。埋土は１・２層のブロックを多く含むシルト～細砂を主体とし、上部には１層が落ち込んでいた。この遺構からは土師器皿（11）・羽釜（12）が出土している。

338井戸は径約1.3mを測るやや角張った不整円形の土坑で、掘り方は２段に落ち、検出面から約0.8mの深さまで掘削された坑底は343流路の砂層に達している。埋土はグライ化の進んだ暗緑灰色シルト～極細砂を主体とし、最上層には１・２層のブロックが多く含まれている。

第１・２面を通じて遺構面の遺存状況が不良であるため、これらの井戸の掘削時期については明確にし得ないが、埋土中には１層のブロックが多く含まれており、おそらくは第１面段階の耕作に関わる灌漑用の井戸であった可能性が高い。

〔10井戸〕（図14，図版４－３・図版５）

Ｃ９－ｆ９区で検出した方形の木組井戸である。調査区の東側法面に当たってしまったため西半分を検出し得たのみであるが、２ａ層上面から掘削された掘り方は円形で、検出長は径約2.8m、掘削深度は約2.0mを測る。井戸側の平面形は一辺0.85mの方形で、計13枚の縦板を目違い枘で組まれた横桟で保持し、横桟間を四隅に配した柱材で支える構造を採っている。ただし、この横桟と柱材は組まれておらず、柱材の上に横桟を置くだけとなっている。また、水溜めは設けられておらず、底面には井戸側の内外とも親指大～人頭大の礫が敷かれていた。なお、この井戸からは、瓦器・土師器皿を中心に11世紀後葉～12世紀前葉の遺物が出土しているが、このうち15～17は井戸側内、他は掘り方埋土から出土したものである。

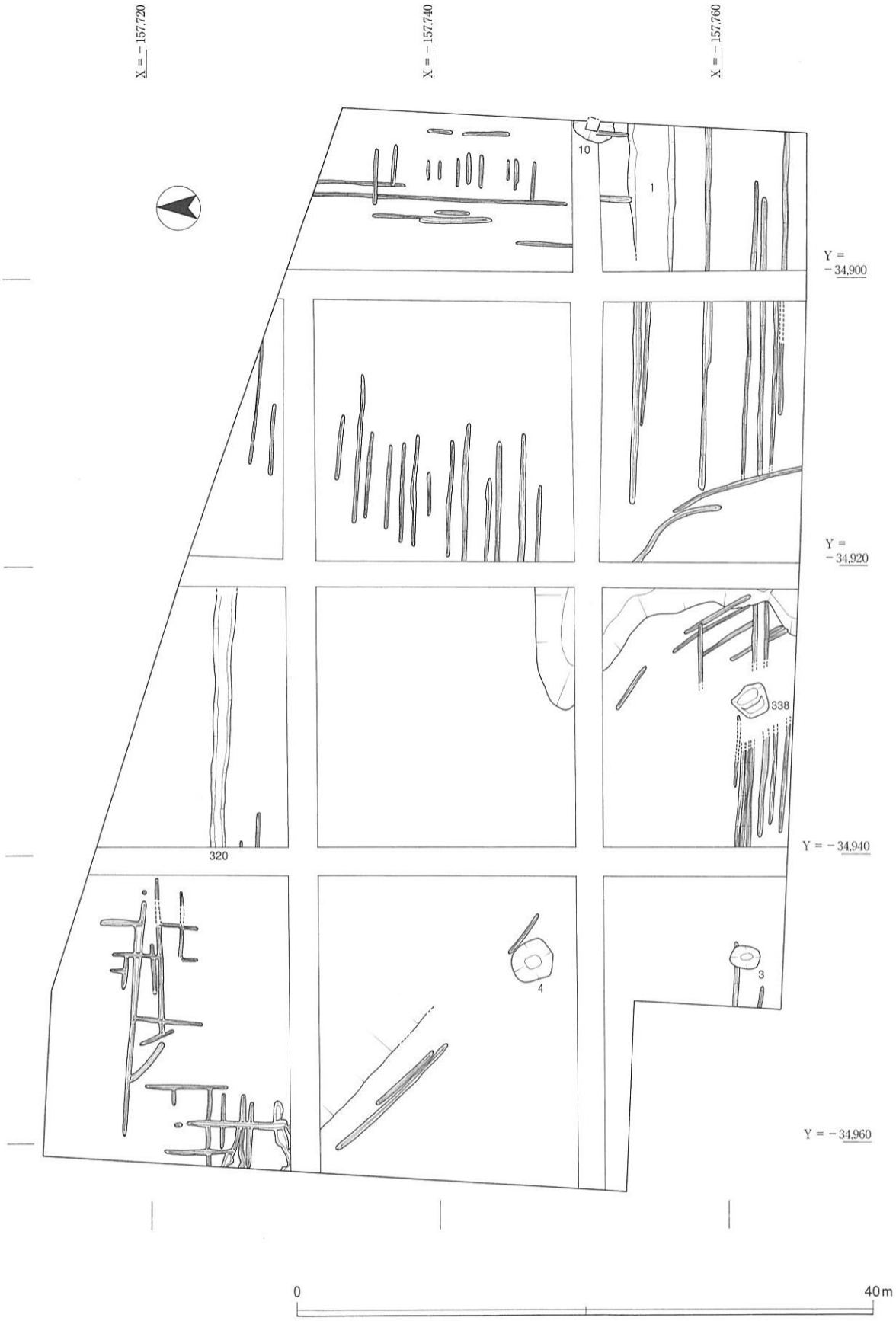

X = − 157,720
X = − 157,740
X = − 157,760
Y = − 34,900
Y = − 34,920
Y = − 34,940
Y = − 34,960
10
1
338
320
4
3
0
40m

図11　第２面　全体図

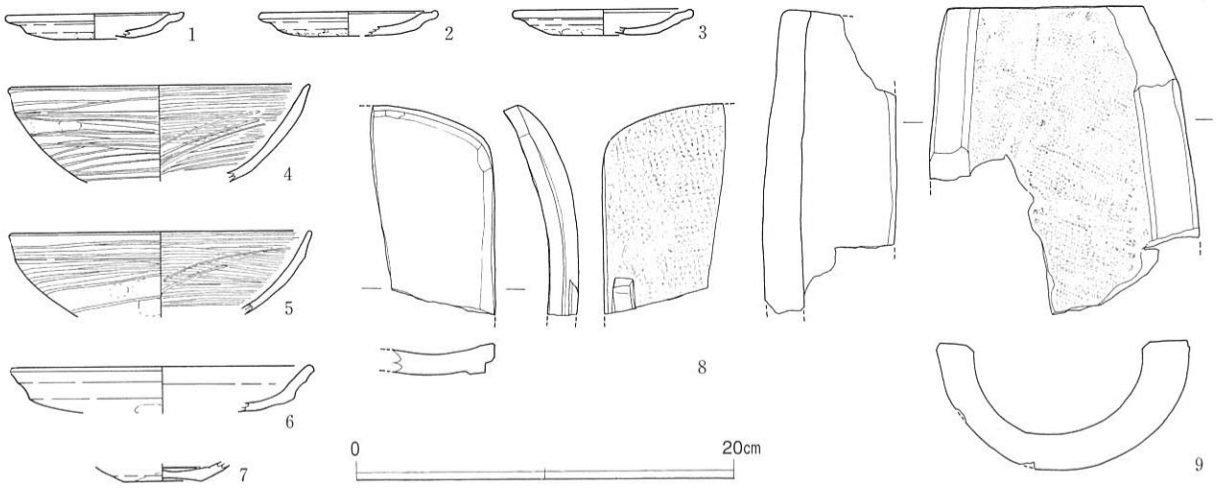



図12　1溝　出土遺物

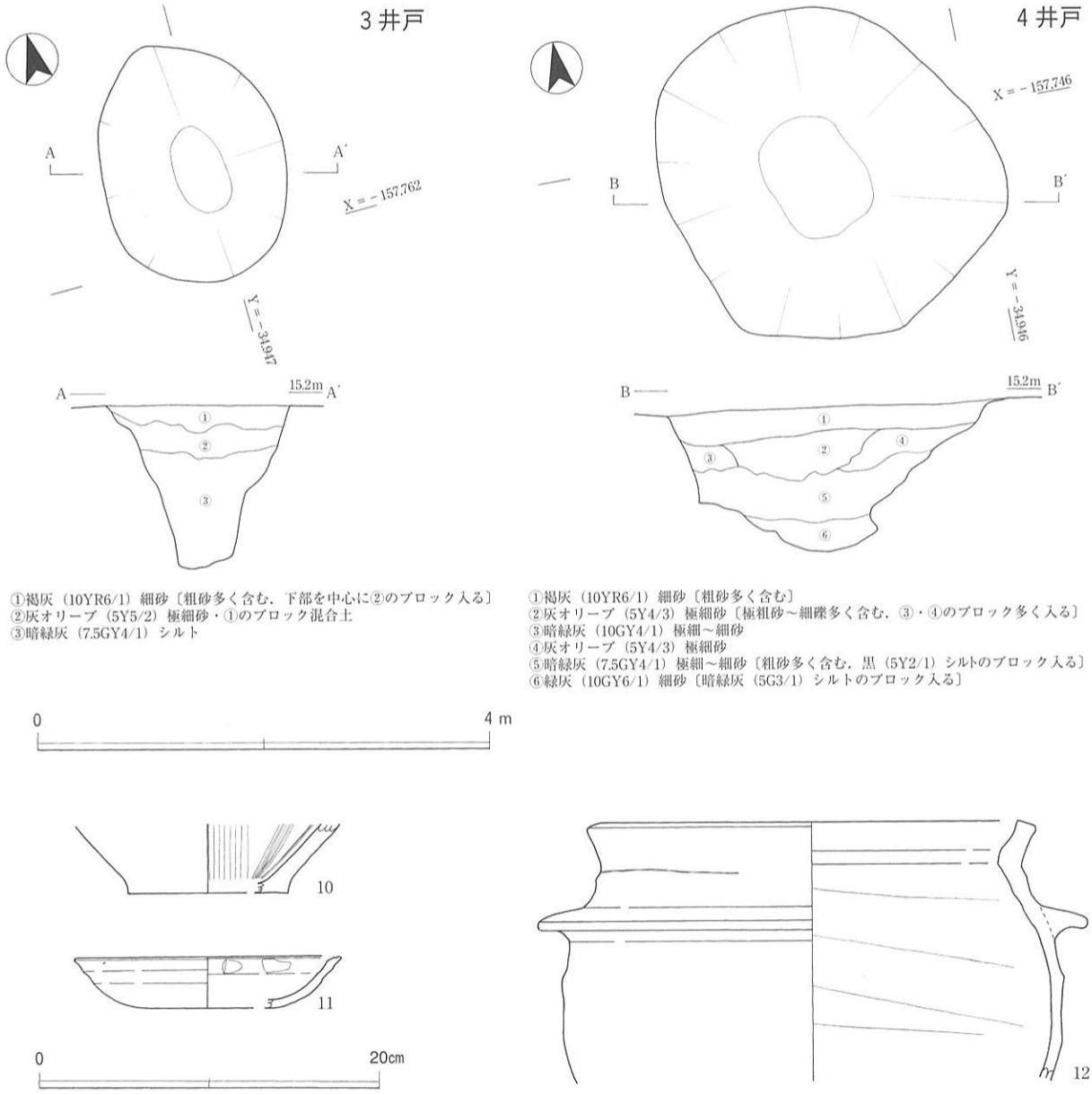



図13　3・4井戸　平・断面図，出土遺物

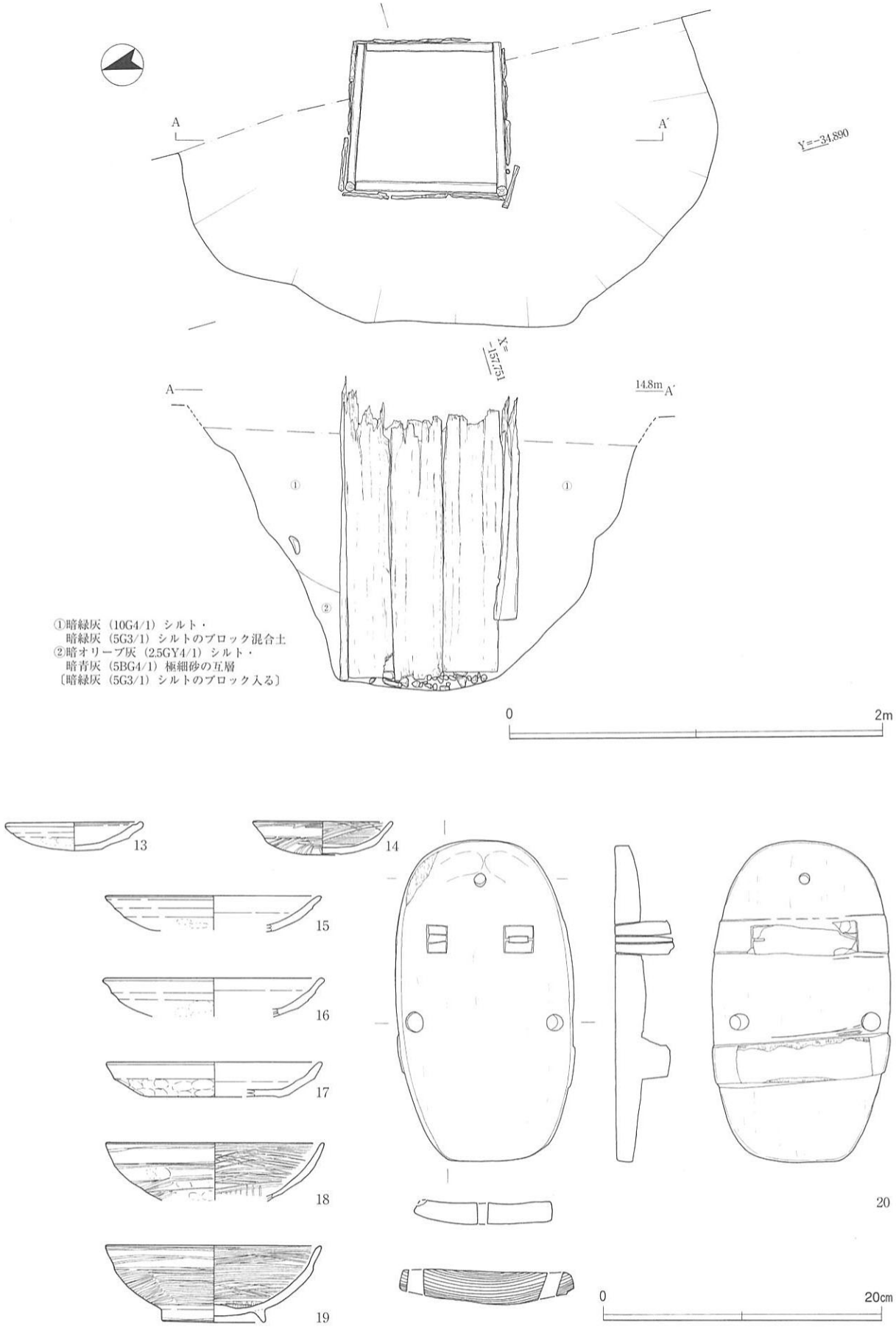



図14　10井戸　平・立面図，出土遺物

## 第２ｂ面（図15，図版６－１）

２ａ層を除去して検出される面であり、２ｂ層とした第３面を覆う鈍い黄褐～灰オリーブ色のシルト質極細砂～細砂層の上面である。遺構面の標高は調査区東半及び西半の南端で15.0～15.2m、北西隅で14.6～14.7mを測り、やはり南東から北西方向へ緩やかに傾斜している。標高の高い東半では、掘立柱建物５棟のほか井戸や土坑・落ち込み・溝状遺構・ピットなどの遺構が稠密に分布しているのに対し、西半では数基の土坑・落ち込み・ピットや溝状遺構を検出し得たのみであり、地形によって土地利用のあり方が異なっていたと考えられる。なお、検出した遺構の大部分は２ａ層と同様の暗色のシルト～極細砂を埋土としているが、ピットを中心に２ｂ層に近似した黄褐色の極細砂～細砂を埋土とする遺構も存在しており、これらのほとんどは下面である第３面で検出した。

〔ピット列１〕（図16）

Ｃ９－ｄ10区からＣ10－ｄ１区にかけて検出したピット列である。座標上の東西にほぼ平行して並ぶ87・254～258ピットの６基から構成され、全長約11.4m、柱芯間隔は1.7～3.9mを測る。254・256・258ピットには柱根が遺存し、このピット列から北には顕著な遺構がほとんど認められないことから、南側に広がる居住空間の北辺を画す塀あるいは柵であった可能性が高い。

〔掘立柱建物１〕（図17，図版７－１）

Ｃ10－ｄ２区で検出した南北方向の建物である。235～242ピットの８基の柱穴から構成され、２×２間の柱配置を想定できる。Ｎ５°Ｅ方向に長軸を置き、長辺長は約4.3m、柱芯間隔は2.15m、直交する短辺長は約3.4m、柱芯間隔は1.6～1.8mをそれぞれ測る。

〔掘立柱建物２〕（図17～19，図版６－２）

Ｃ10－ｅ１・２区で検出した東西方向の建物で、掘立柱建物１から３m隔てた南側に位置する。200・202～204・206・208・211・215・225・231～234・260・269～274・298・299ピットから構成される５×３間の柱配置を想定できるが、北辺の柱穴列はその南側の柱穴列との間隔が1.45～1.7mと他と比して短いことから、５×２間の建物の北面庇あるいは塀の可能性がある。さらに、東西辺の外側に存在する194・363ピット、275・276・307ピットに関しても、建物との間隔がやや不揃いではあるものの各柱穴列のライン上に位置しており、やはり庇などの柱穴と考えられる。N87°W方向に軸を置く建物の長辺長は10.65m前後、柱芯間隔は2.1～2.2m、５×２間と想定した場合の短辺長は約4.2m、柱芯間隔は2.1～2.2mを測る。東西辺外側の５基を含む計27基の柱穴のうち、200・231・260・273・274・363ピットの６基には柱根が遺存し、194・204・208・215・269・299・363ピットの７基には礫が据えられていた。

出土遺物には土師器皿類（21～26）、瓦器椀・鉢（27～29）、滑石製石鍋の転用品（30）があるが、土師器小皿には口縁が「て」字状を呈するものは含まれておらず、瓦器椀も外面のヘラミガキ調整が粗雑化し、高台も矮小化しており、12世紀後半の所産と考えられる。

〔掘立柱建物３・４，ピット列２・３〕（図20）

Ｃ９－ｅ・ｆ10区で検出した南北方向の建物である。時期的な前後関係は不明確であるが、柱穴はいずれも２基が重複あるいは近接しており、２棟の建物が存在していたと考えられる。その場合、掘立柱建物３は14・22・28・30・43・44・56・139ピット、掘立柱建物４は16・23・29・30・34・57・373・374ピットから構成される３×１間の柱配置が想定できる。両建物ともＮ２°Ｅ方向に長軸を置いているが、短軸は建物３がN83°W、４がN81°W方向とやや北に振っており、平面形は平行四辺形を呈す

X = − 157.720
X = − 157.740
X = − 157.760
Y = − 34,900
Y = − 34,920
Y = − 34,940
Y = − 34,960
ピット列2・3
ピット列1
建物1
建物2
建物3・4
建物5
0
40m

図15　第２ｂ面　全体図

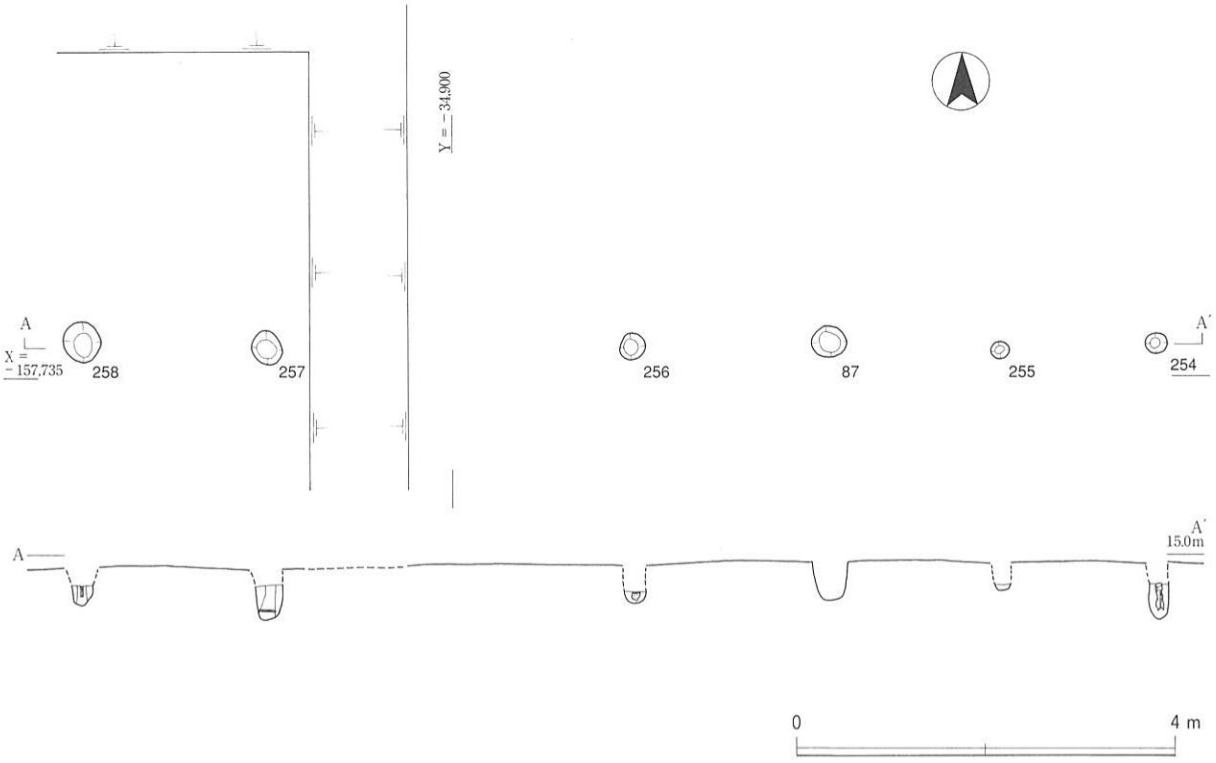



図16　ピット列1　平・断面図

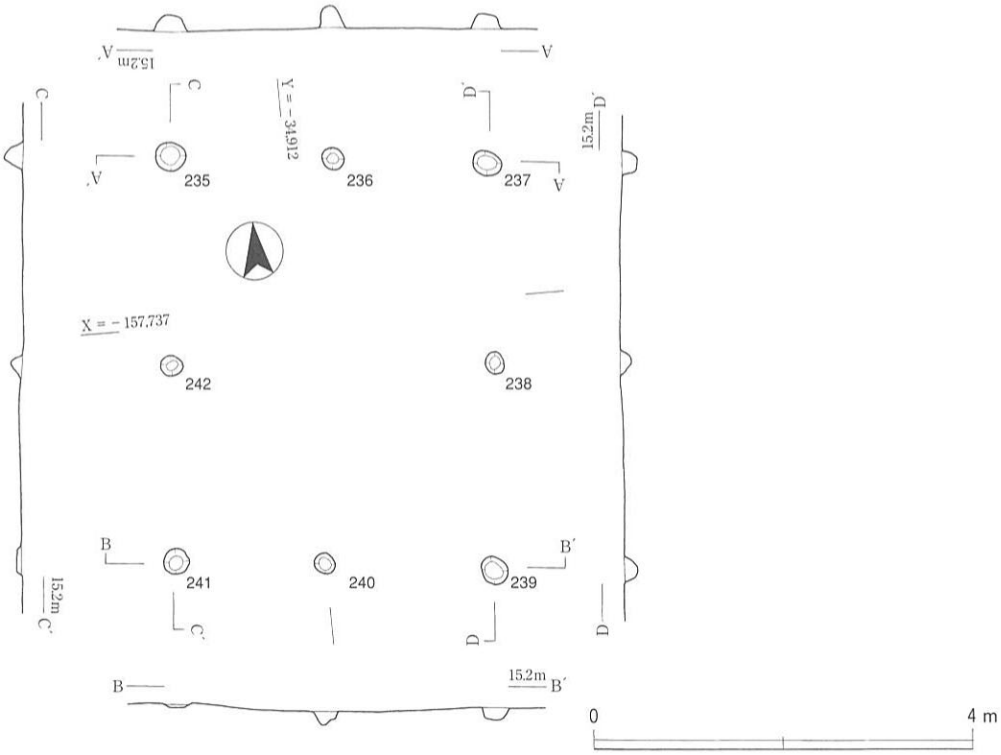



図17　掘立柱建物1　平・断面図

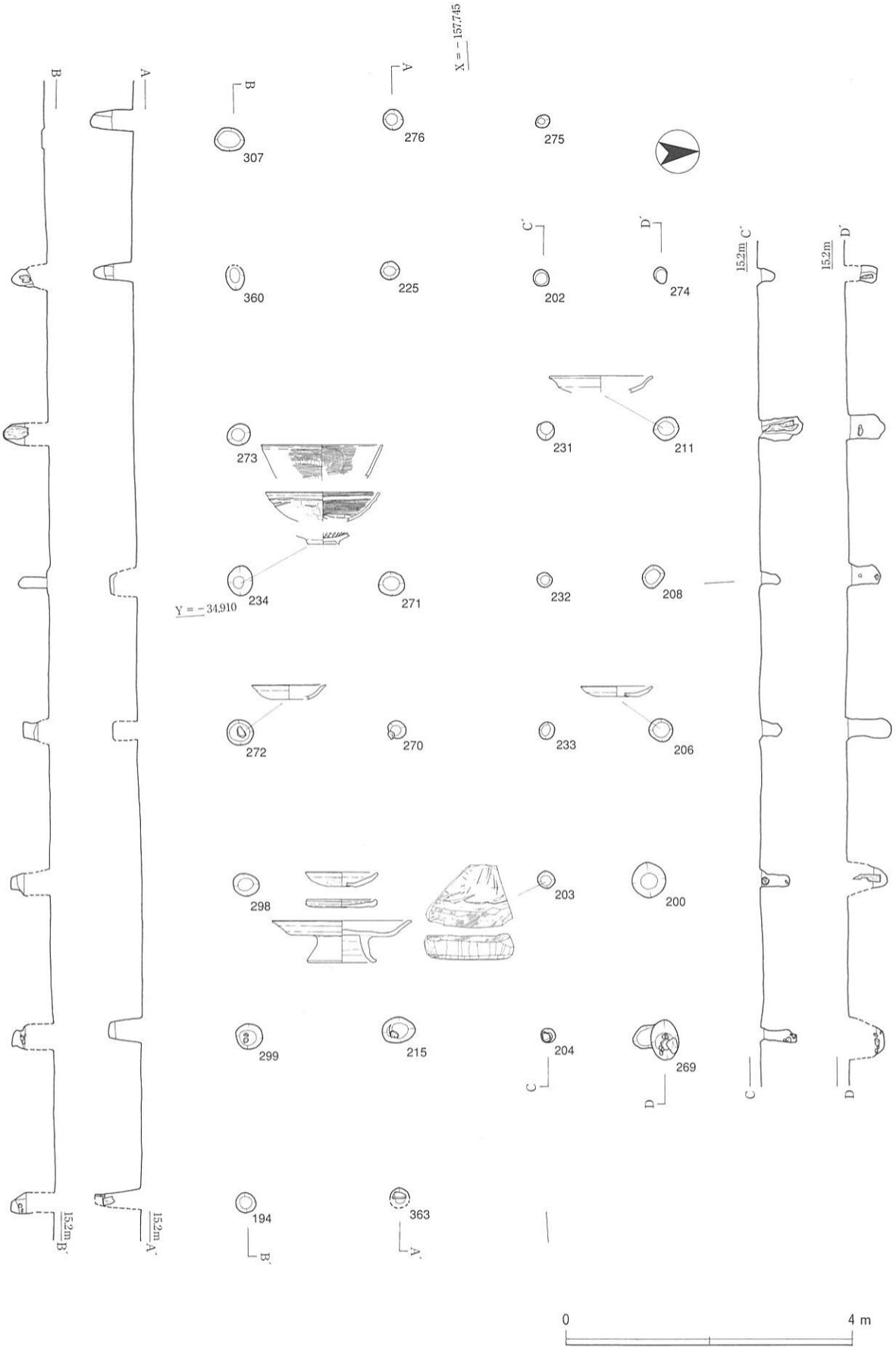



図18　掘立柱建物２　平・断面図

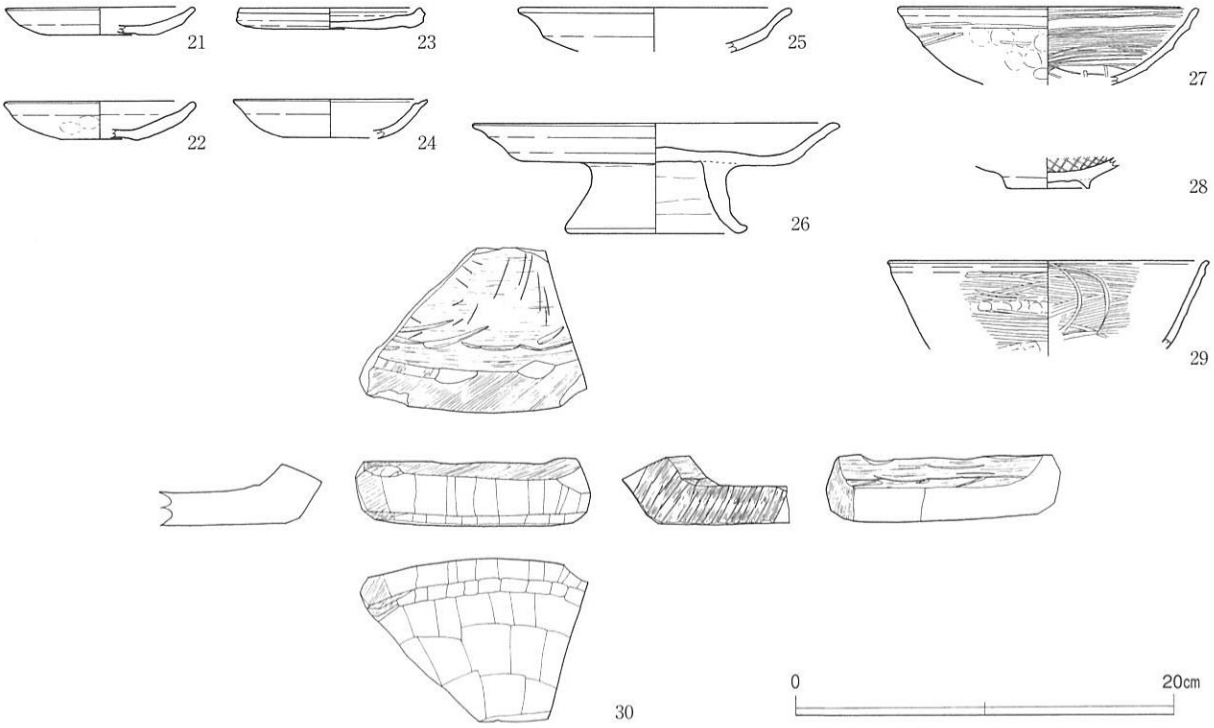



図19　掘立柱建物２　出土遺物

る。建物３は長辺長約6.8m、柱芯間隔は2.0～2.4m、短辺長約3.8m、建物４は長辺長約6.75m、柱芯間隔は2.2～2.3m、短辺長約3.5mをそれぞれ測り、前者の方がわずかに規模が大きい。柱穴のうち14・34・57・374ピットの４基には柱根が遺存し、34・56・374ピットの底面には拳大の礫が据えられていたほか、44ピットには埋土の上位に２個の礫が投棄されていた。出土遺物には土師器小皿（31）と瓦器椀（32～34）があるが、後者は外面にヘラケズリ調整を施すものを含むものの、内外面のヘラミガキ調整は全体的にやや粗雑化しており、11世紀末～12世紀前葉の所産と考えられる。

掘立柱建物４の東側には、1.0～1.15mの間隔を置いて並ぶ２列のピット列が存在している。西側のピット列２は17・244～248ピット、東のピット列３は249～252・264・365ピットの各６基のピットから構成され、244・246ピットの２基には柱根が遺存していた。列の方向はＮ３～４°Ｅを示し、掘立柱建物の長辺にほぼ平行しているが、各ピットは建物の柱穴とは北側にずれて配置され、さらに建物の北辺から3.5～3.65mほど北へ延びていることから、塀あるいは柵である可能性が高い。列の長さはともに10.4mと共通し、柱芯間隔はピット列２が1.2～2.4m、ピット列３が1.3～2.3mをそれぞれ測る。

〔掘立柱建物５〕（図21）

Ｃ９－ｆ10・Ｃ10－ｆ１区において検出した東西方向の建物である。60・74・117・280・283・287・289・292・295・364ピットの10基の柱穴から構成される３×２間の柱配置が想定され、Ｎ87°Ｗ方向に軸を置く長辺長は6.55m、柱芯間隔は1.75～2.45m、直交する短辺長は約4.7m、柱芯間隔は2.05～2.6mを測る。なお、本建物は127・316ピットを加えた総柱と考えることもできるが、前者は掘り方が小さく、床の束柱の可能性が高い。さらに、建物東側には東辺の各柱穴に対応して290・293・296ピットが並ぶが、建物との間隔は約0.8mと狭く、東面庇あるいは塀の柱穴と考えられる。出土遺物は少なく、60ピットから出土した２点の土師器（35・36）を図示し得たのみである。ともに口径約10cm、器高1.5cm強を測る「て」字状口縁の小皿であるが、口縁部の屈曲は鈍く、器壁が厚いうえに器高も深くなっており、11世紀末～12世紀初頭の所産と考えられる。

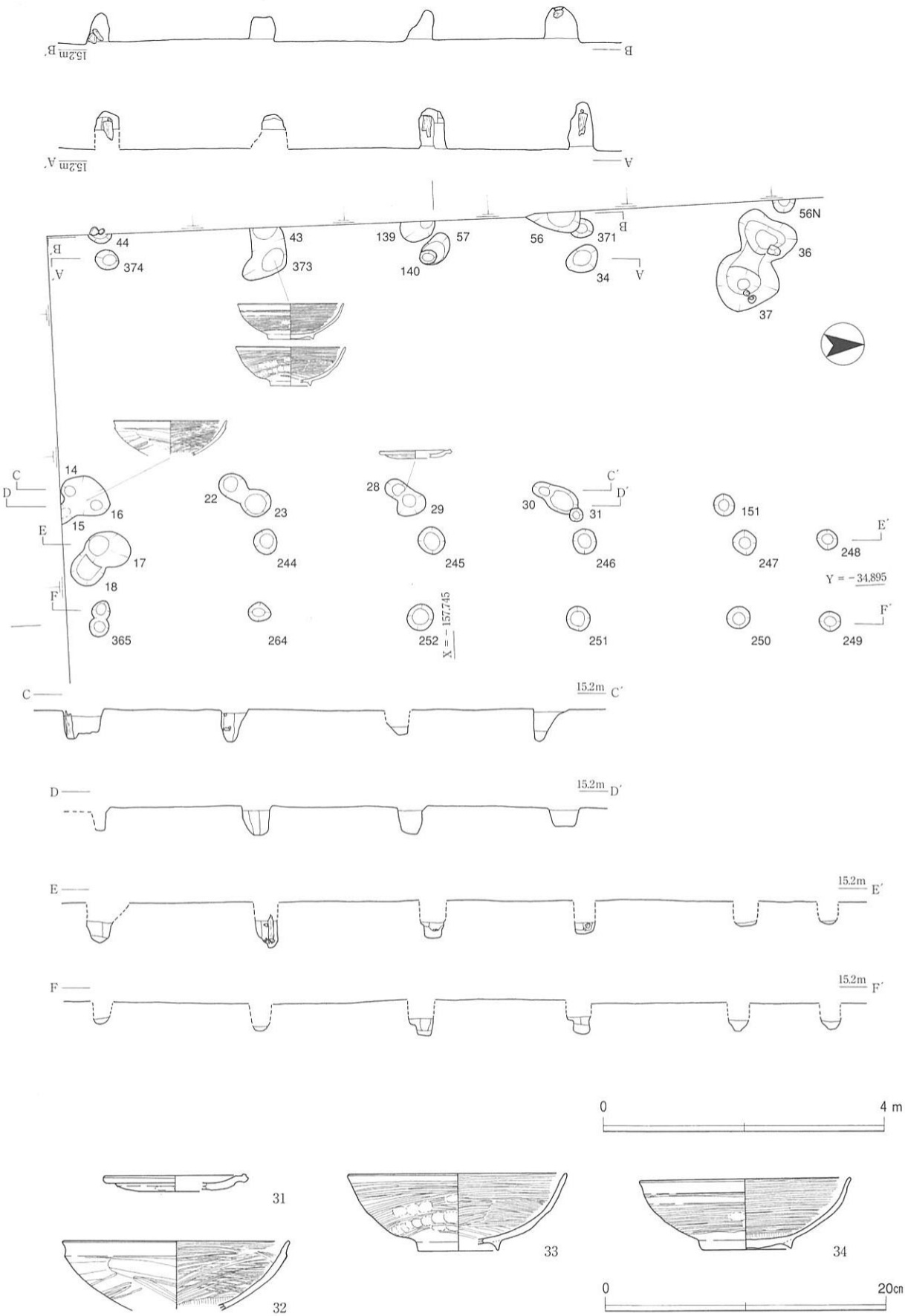



図20　掘立柱建物３・４　ピット列２・３　平・断面図，出土遺物

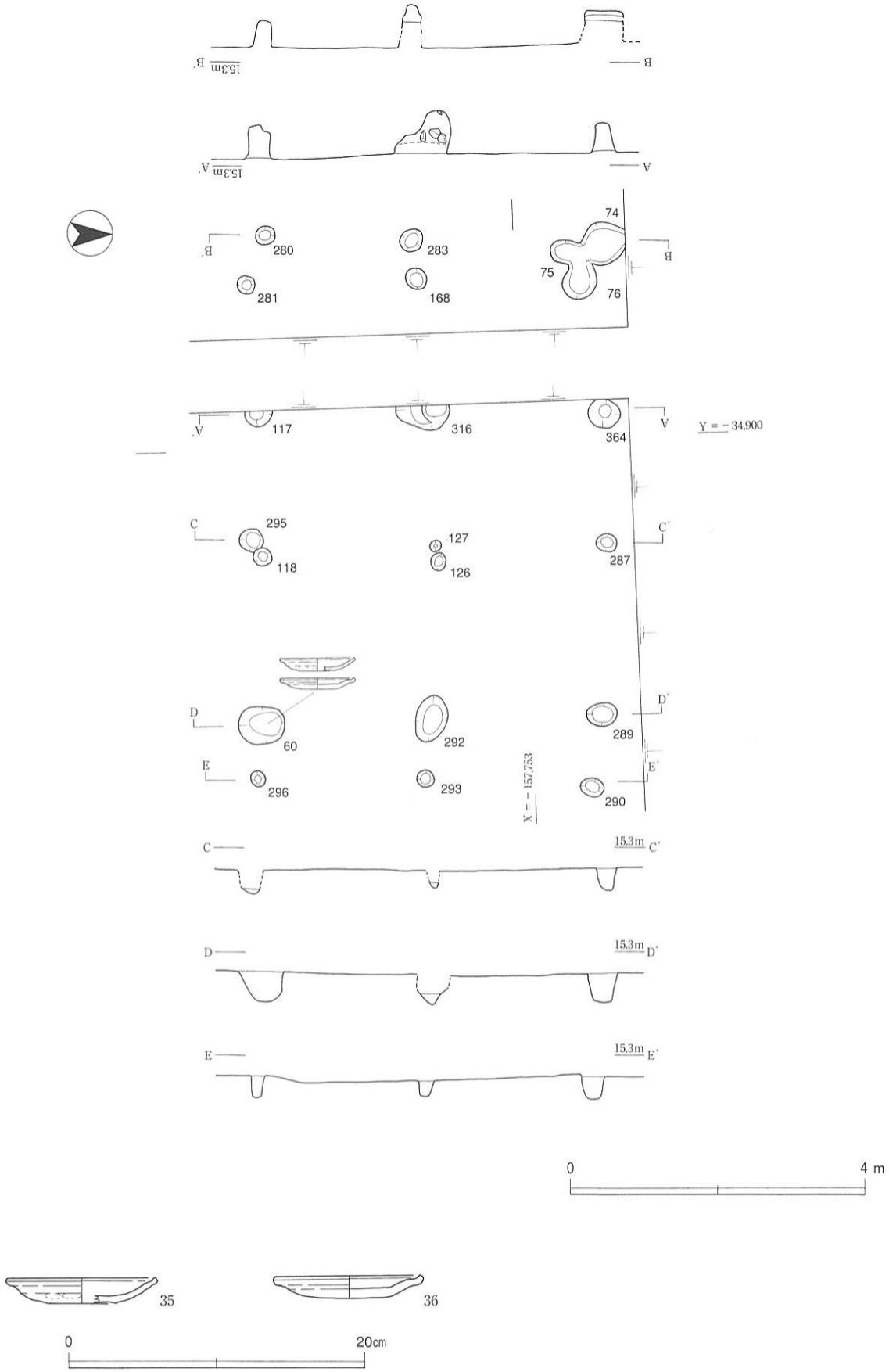



図21　掘立柱建物５　平・断面図，出土遺物

〔12井戸〕（図22，図版７－２）

Ｃ９－ｆ・ｇ９区において検出。調査区の東側法面に当たってしまったため、西半分のみ調査を行った。掘り方は推定長径約2.6m、短径約2.0mの不整楕円形で、深度は検出面から約1.7mを測り、坑底は７ｂ層に達している。井戸側は確認できなかったが、坑底には曲物の側板を２段重ねた水溜めが設けられており、曲物を埋設した上面には拳大ほどの礫が多数敷き詰められていた。掘り方埋土は中位の炭化物層を挟んで上下で大きく異なり、上層は灰オリーブ系の極細砂～細砂を主体とするのに対し、下層はオリーブ黒色シルト、最下層の曲物埋設土は７ａ層のブロックを含んだ暗緑灰色砂質シルトとなっている。また、曲物内の埋土は有機物を多く含んだ粘土質シルト～シルトで、底にはやはり拳大の礫が詰められていた。炭化物層から下位の埋土からは比較的残存率の高い土師器皿が出土し、他に木簡の可能性のある板片（45・46）も伴出している。土師器大皿（41～44）は口径14.8～15.5cmを測り、いずれも外反する口縁部に２段ナデ調整を施している。「て」字状口縁の小皿には、器壁がやや薄手のもの（38・39）と器壁が厚く「て」字が退化したもの（40）が見られることから、11世紀後葉～12世紀前葉の時期幅が想定される。

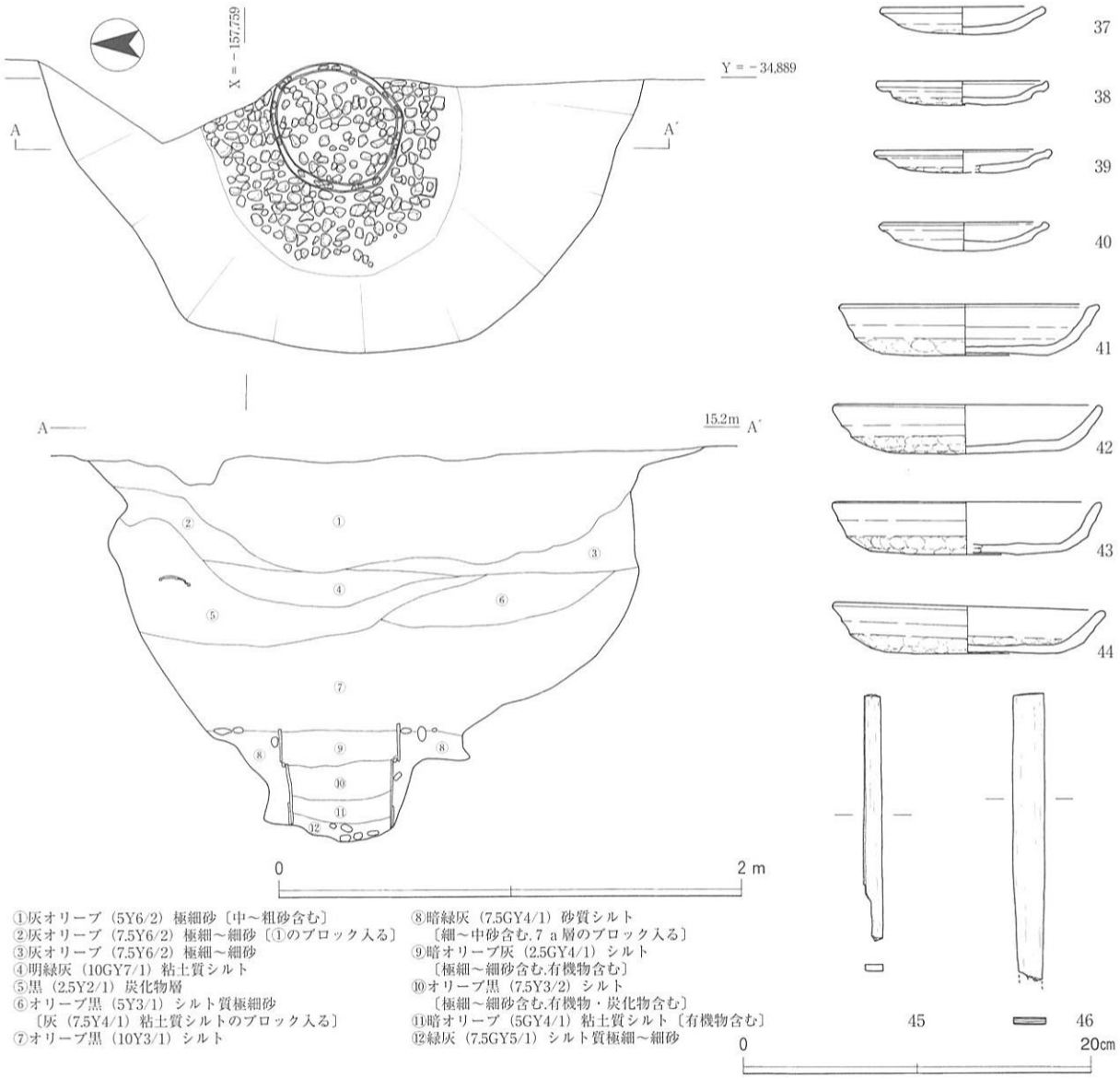



図22　12井戸　平・断面図，出土遺物

〔９土坑〕（図23，図版７－３）

Ｃ９－ｇ10区において検出。検出長1.45ｍ以上、深さ10cm前後を測る不定形の土坑であるが、直線的な東肩に対し西側の肩は中央付近で大きく括れ、南北両端がそれぞれ擂鉢状に１段下がることから、本来は２基の土坑が重複していた可能性がある。また、東肩際には直径・深さとも0.3ｍ前後のピット（42ピット）が重複し、これに切られている。埋土は上下２層に分かれ、全体を覆う上層には中央付近を中心に炭化物・焼土ブロックが多量に含まれていた。遺物は主として北半に伴っており、土師器皿と瓦器椀が坑底よりやや浮いた状態で出土している。「て」字状口縁の土師器小皿（47～49）は、ヨコナデ調整による口縁部の屈曲を依然として保持し、瓦器椀（51）は、深い椀形態の体部に高く直径の大きい高台を付し、内外面ともヘラミガキ調整を密に施していることから、いずれも11世紀後葉の所産と考えられる。

〔32土坑〕

Ｃ９－ｅ10区において検出。掘立柱建物４の２ｍ北側に位置し、長径0.55ｍ、短径0.35ｍの楕円形を呈する。深さは検出面から７cmと浅く、埋土中からは器面が磨耗した土師器小皿が１点（図32－244）が出土している。

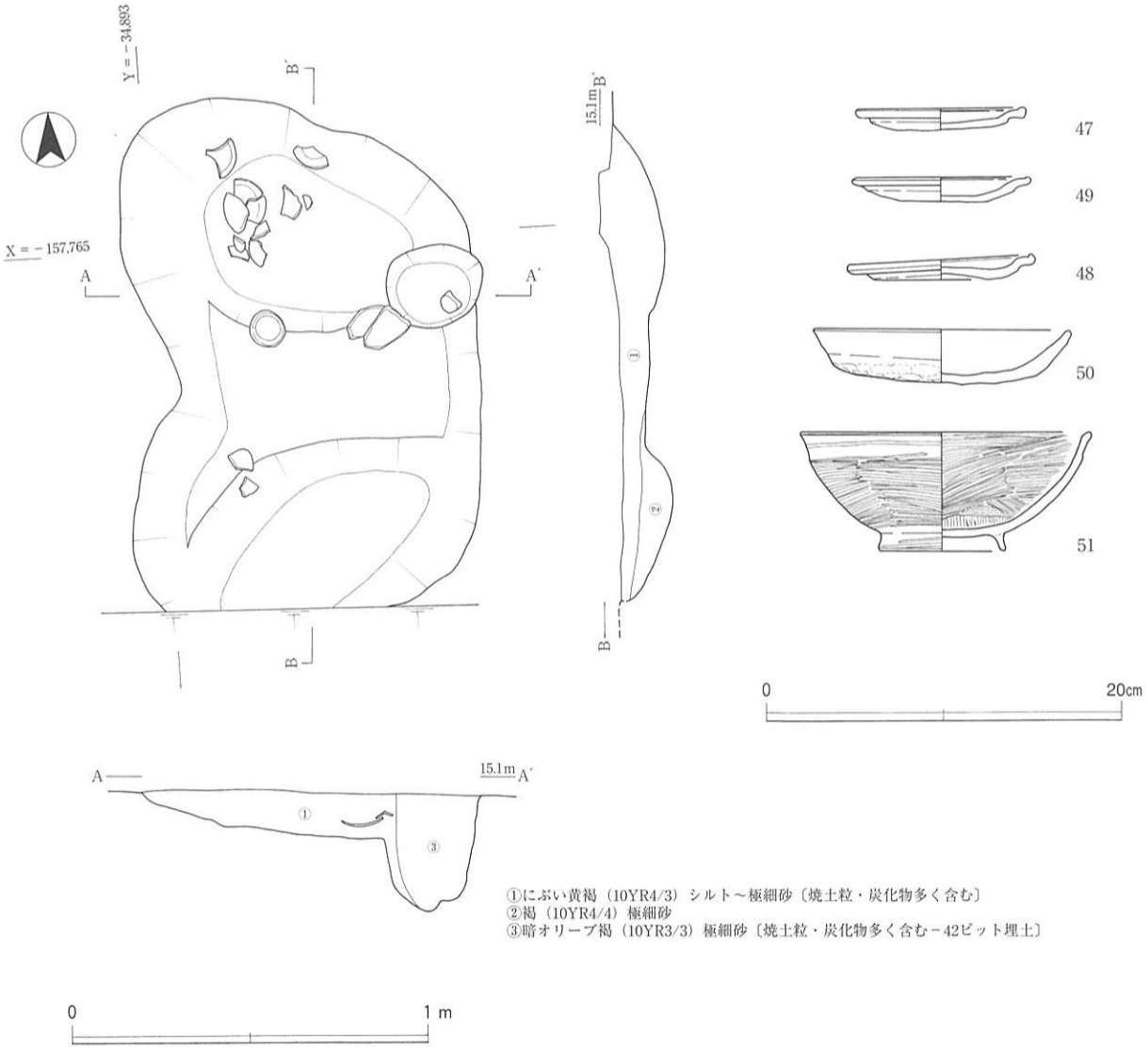



図23　９土坑　平・断面図，出土遺物

〔36・37土坑〕（図版８－１）

Ｃ９－ｅ10・Ｃ10－ｅ１区で検出した土坑で、32土坑の１ｍ西側に位置する。検出時には明瞭な切り合いは確認できなかったが、平面形が奴形を呈し、擂鉢状に１段下がったところから東西両端がさらに0.2～0.25ｍほど掘り込まれていることから、やはり長径0.9ｍ前後の不定形土坑２基が重複しているものと推定される。埋土は上部が灰～オリーブ灰色、下部が黄褐色の極細砂～細砂で、東側の37土坑の最下部には黒褐色粘土質シルトの堆積が認められた。36土坑の埋土最上部からは投棄された人頭大の礫が出土し、37土坑の埋土上部からは図32－247・279に示した土師器小皿・台付皿が出土している。

〔39土坑〕

Ｃ９－ｆ９・10区において検出。調査区東端に位置し、中央を６溝に切られているため、本来の形状・規模は不明であるが、検出長は1.8ｍ以上、検出面からの深さ0.1～0.2ｍの不定形土坑である。埋土は黄灰色極細砂で、中からは土師器小皿が１点（図32－240）出土している。

〔55土坑〕（図24，図版８－２）

Ｃ10－ｆ１区において検出した隅丸方形の土坑である。北肩が第２面の１溝に切られ、東側が筋堀に当たってしまったため、本来の規模は不明であるが、南北長1.65ｍ以上、検出面からの深さ５～10cmを測る。埋土は炭化物・焼土ブロックを多量に含む灰オリーブ色シルトで、中からは土師器皿・瓦器・土師質羽釜・須恵器捏鉢などが比較的多く出土している。土師器小皿（52～57）は「て」字状口縁を有するもののほか、２段あるいは１段のヨコナデ調整を施したものがあり、口径も9.4～10.0cmと幅を有する。「て」字状口縁の小皿には、口縁部の屈曲が不明瞭となったものも見られ、11世紀後葉～末の所産と考えられる。一方、土師器大皿（58～63）は、口径15cm前後を中心に14.5～15.3cmのものがある。58は口縁部に１段、その他は２段のヨコナデ調整を施すが、ナデが甘く凹みが不明瞭となった例が多い。瓦器椀は器壁がやや薄く、体部外面のヘラミガキ調整が粗雑化した12世紀後半のもの（65・66）が中心であるが、図示していない資料の中には高くて厚い高台を付した底部片も含まれている。土師質羽釜（68）は、口縁部が短く「く」字に外反する器形である。これらは、12世紀後半～13世紀前葉の所産と考えられる。東播系の須恵器捏鉢（67）は、口縁端部が肥厚しない段階のものである。

〔61土坑〕

Ｃ９－ｆ10区において検出。51落ち込みとした皿状の落ち込みの底面で確認された瓢形の土坑で、長軸長0.75ｍ、検出面からの深さ0.7ｍを測る。埋土は上部が３・４層のブロックを含む黄褐色シルト質極細砂、下部が灰色シルトで、埋土中からは土師器小皿が１点（図32－266）出土している。

〔65土坑〕

Ｃ10－ｅ２区において検出した長径0.85ｍ、短径0.6ｍ弱の楕円形土坑である。断面形は深さ0.25ｍの擂鉢状を呈し、２ｂ層のブロックや炭化物・焼土を少量含んだ暗灰黄色シルト質極細砂を埋土としている。出土遺物には「て」字状口縁の土師器小皿（図32－261）と２段ナデ調整の土師器大皿（同269）があり、11世紀末～12世紀前葉に位置付けられる。

〔68・69土坑〕

Ｃ10－ｅ２区において南北に並んで検出された土坑である。掘立柱建物２の西面庇部分と重なる68土坑は東西1.8ｍ、南北1.35ｍを測る不定形土坑で、断面形は皿形を呈し、深さは７cm前後と非常に浅い。出土遺物として図示した土師質羽釜（図32－282）は、「く」字に外反する口縁部が短くなっており、12世紀後半の所産と考えられる。

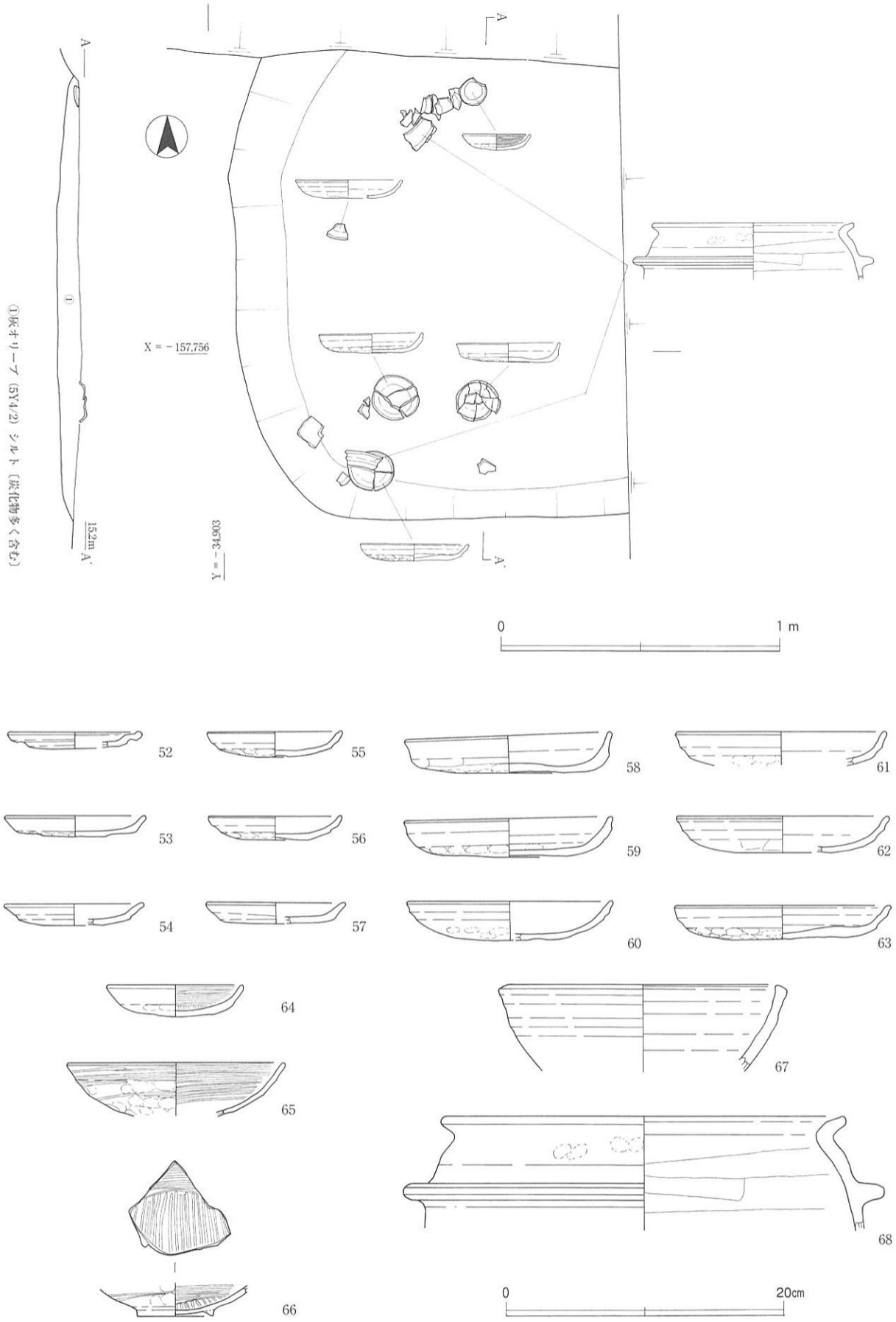



図24　55土坑　平・断面図，出土遺物

一方、その南側に位置する69土坑は、一辺約1.5mを測る隅丸方形土坑で、南東隅を300溝に切られている。検出面からの深さは７㎝前後と浅く、埋土からは土師器小皿が２点（図32－264・267）出土している。11世紀末～12世紀初頭の所産。

〔70土坑〕（図版８－３）

Ｃ10－ｆ１・２区において検出した土坑で、掘立柱建物２の１ｍ南側に位置する。中央部が筋堀と重複してしまったために十分な調査はできなかったが、平面形状は長径約2.8m、短径約2.2mの楕円形を呈し、擂鉢状に掘り込まれた坑底までの深さは検出面から0.75mを測る。埋土は２ｂ層の小ブロックを多く含むオリーブ灰色極細砂～細砂で、下部はグライ化が著しく青灰色を呈する。埋土中からは投棄された15～25㎝ほどの角礫数個とともに、瓦器・土師器を中心に白磁・瓦類などの破片が比較的多く出土した（図32－239・274・276・283）。このうち、土師器小皿は口縁部に１段のナデ調整を施し、端部を立ち上げることによって断面を三角形に仕上げており、12世紀後葉～13世紀初頭に位置付けられる。また、今回図示していないが、伴出した瓦器椀は外面のヘラミガキ調整が下半に及ばず、高台も径・高さともに矮小化して断面三角形となっていることから12世紀後葉の所産と考えられ、体部上半が強く内湾し、口縁部が短く「く」字に外反する羽釜も同時期に位置付けられる。

〔71・72土坑〕

Ｃ10－ｆ２・ｆ１区において検出。71土坑は70土坑の南西1.2mに位置する長径1.0m、短径0.9mの楕円形土坑で、断面皿状を呈する坑底までの深さは検出面から７㎝を測る。埋土中からは、拳大の礫とともに器面が磨耗した瓦器椀が１点（図32－291）出土している。12世紀後半の所産。

72土坑は70土坑の南南東1.4mに位置し、長径1.1m、短径0.95m、検出面からの深さは0.2m強を測る。埋土であるオリーブ灰色極細砂からは、土師器小皿と瓦器小皿・椀が出土している（図32－242・277・289）。12世紀後葉～13世紀前葉に位置付けられる。

〔73土坑〕

Ｃ10－ｇ１区において検出。現代の攪乱や第２面検出の溝と重複していたため、遺存状況は不良であるが、長辺約3.0m、短辺約2.5mの歪な長方形を呈し、検出面からの深さは５～10㎝を測る。上下２層に分かれる埋土は炭化物を多く含んだオリーブ灰・暗オリーブ褐色の極細砂で、下層からは拳大の礫数個とともに土師器小皿・瓦器椀（図32－245・290）が出土した。底部に「中」と墨書された後者は、深い椀形態を採るものの体部外面のヘラミガキ調整はやや粗雑化しており、12世紀前葉に位置付けられる。なお、本遺構の南西辺と北東部には157土坑・158ピットが重複しており、後者からは土師器小皿（図32－243）が出土している。

〔79土坑〕（図版９－１）

Ｃ10－ｅ１区において検出した不整円形の大型土坑である。南端が筋堀と重なったため本来の規模は不明であるが、東西方向の直径は約4.0m、検出面からの深さは0.2m前後を測り、２段落ちする東側の内肩はやや急であるものの、全体としては皿状の断面形を呈する。埋土であるオリーブ灰色極細砂からは、土師器小皿・台付皿や瓦器小皿・椀（図32－251・265・278・280・295）が出土し、上部からは20㎝前後の礫７個が検出された。

〔92土坑〕

Ｃ10－ｆ１区において検出した小判形の土坑で、長径1.1m、短径0.6m、検出面からの深さ７㎝前後を測る。埋土であるオリーブ灰色極細砂からは、やや水色味を帯びた釉色を呈する白磁皿の口縁部破片

（図32－281）が出土している。12世紀後半の所産。

〔112土坑〕

Ｃ９－ｆ10区において検出。掘立柱建物５の南東1.5mに位置する不整円形の土坑で、径は1.6～1.8m、断面皿状を呈する坑底までの深さは８cm前後を測る。埋土であるオリーブ灰色極細砂からは、口縁部の屈曲が不明瞭となり、「て」字が退化した土師器小皿が１点（図32－254）出土している。

〔207土坑〕

Ｃ10－ｅ１区において検出した土坑で、位置的には掘立柱建物２の北面庇部分と重なる。長径0.9m、短径0.65mの楕円形を呈し、検出面からの深さは６cmと浅い。埋土であるオリーブ灰色極細砂からは、器面が磨滅した土師器大皿（図32－271）が出土している。口径が14cm強とやや縮小しており、12世紀後半の所産と考えられる。

〔243土坑〕（図25，図版９－２）

Ｃ10－ｆ・ｇ１区において検出。灰黄色の極細砂～細砂を埋土としていたため上面では把握できず、２ｂ層掘削中に多量の土師器が出土したことから確認された。長径約1.1m、短径0.55m、検出面からの深さ15cmを測る小判形の土坑で、中には完形・破片を合わせて40点以上の土師器皿が納められていた。皿には大小２種があり、一部底部を上にしたものや縦位となった破片が存在するものの、大半は口縁を上に向け重なった状態で出土した。小皿（69～103）は、口縁部に幅狭のヨコナデ調整を施して直立気味にさせたもので、器壁は厚く、底部内面に指押えを１か所施している。法量的には口径9.4～9.6cm、器高2.0～2.5cmを中心とする。一方、大皿（104～107）は、小皿と同様に底部側面に指押えを加えて平底気味に作られており、口径14.2～14.9cm、器高2.5～3.8cmを測る。両者とも器形・法量に統一性が窺われ、12世紀後葉～13世紀初頭の所産と考えられる。

〔49溝〕（図版９－３）

Ｃ10－ｅ１・２区において検出。掘立柱建物２の北辺に沿って走行する東西方向の溝状遺構で、長さ6.25m、幅0.6～0.85m、検出面からの深さ10cm前後を測る。出土遺物には土師器大皿（図32－275）・高坏脚部（同292）、瓦器椀破片などがあり、これらはすべて西半の埋土最上部より出土している。

〔81溝〕

Ｃ10－ｆ１・２区において検出。掘立柱建物５の２m南に位置する東西方向の溝状遺構で、検出長約11m、幅0.3～0.5m、検出面からの深さ５cm前後を測る。埋土からは、口縁部に幅狭のヨコナデ調整を施した土師器小皿２点（図32－249・250）が出土している。

〔85溝〕

Ｃ10－ｄ・ｅ３区において検出した南北方向の溝状遺構で、南端は64落ち込みに接続する。検出長約13m、幅0.5～0.9m、検出面からの深さ10cm前後を測る。埋土からは、「て」字状口縁の土師器小皿（図32－262）と口縁部に１段のナデ調整を施した大皿（同273）が出土している。

〔５落ち込み〕（図26・27，図版10－１）

Ｃ９－ｄ９・10～ｅ９・10区にかけて検出した南北方向の落ち込みである。調査区東端に位置するため東側の肩部を検出し得ず、全体の形状は不明であるが、南北20m以上にわたって帯状に凹み、南端は溝状となって51落ち込みと繋がっている。埋土は２ａ層であるオリーブ灰色極細砂～細砂で、検出面からの深さは西側で0.1m前後、東端で0.3mを測り、西肩から１～３mほどのところで１段下がっている。出土遺物には土師器小皿（108～142）・大皿（143～147）、瓦器椀（148～152）・小皿（153）、白磁碗

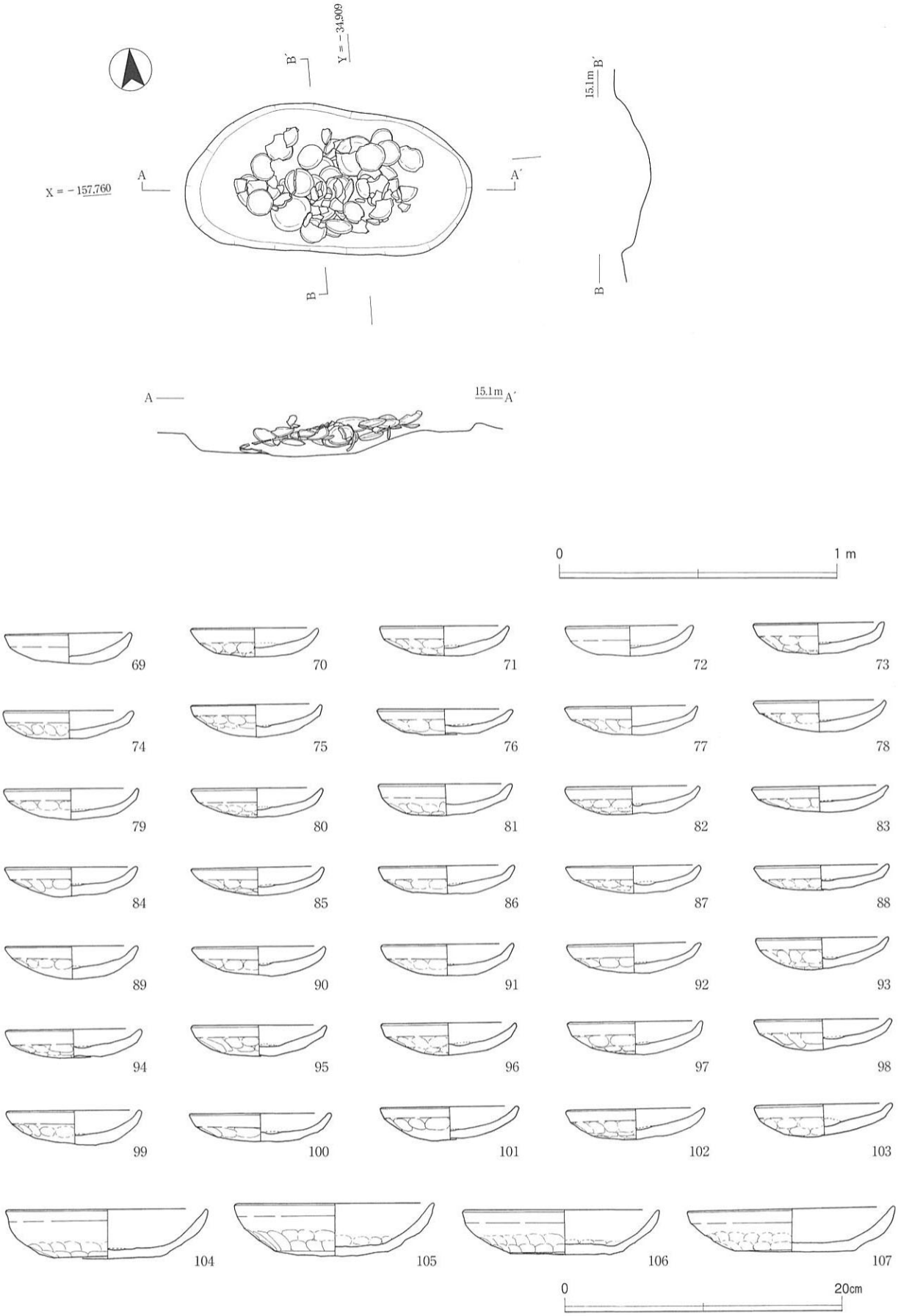



図25　243土坑　平・立面図，出土遺物

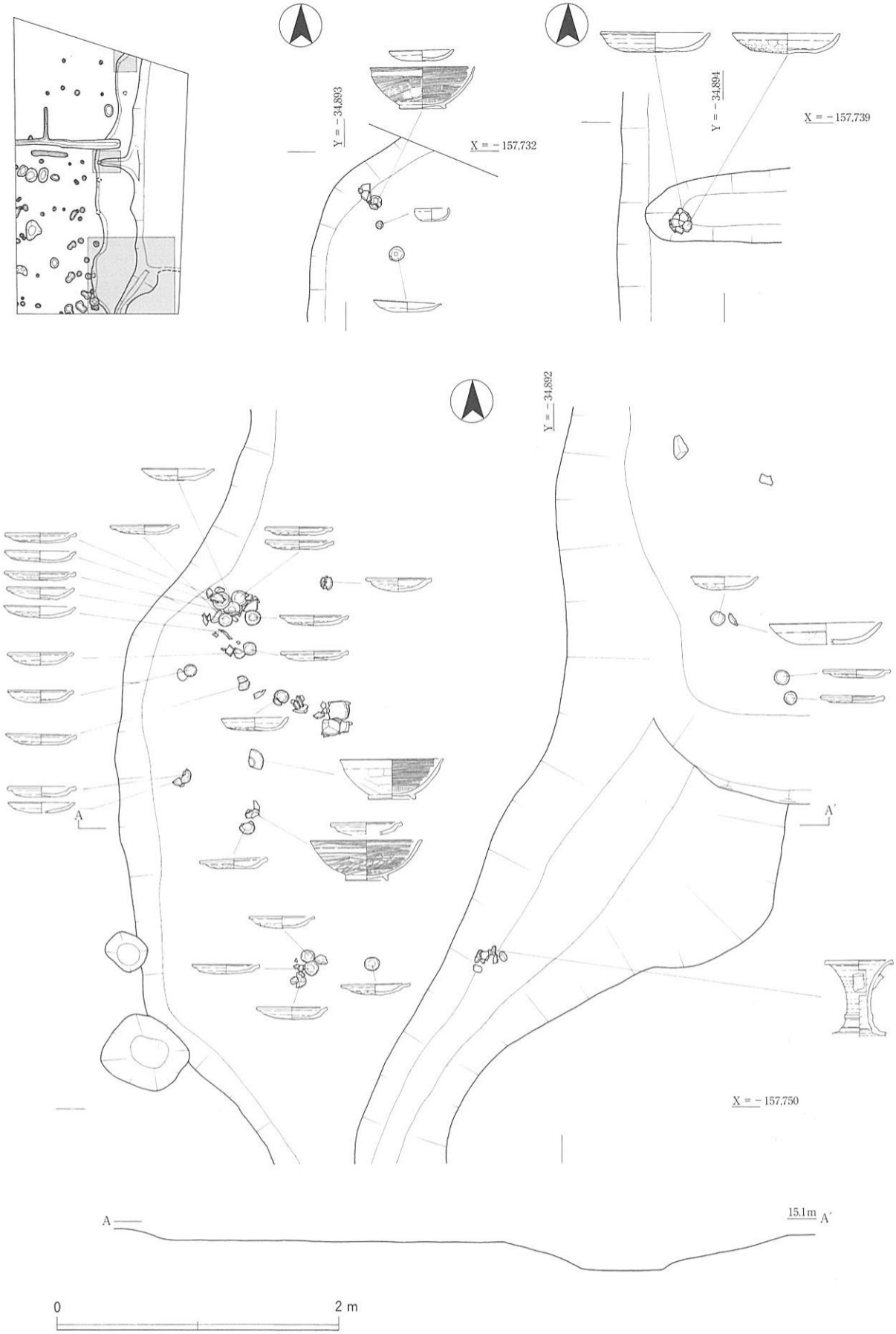



図26　5落ち込み　平面図

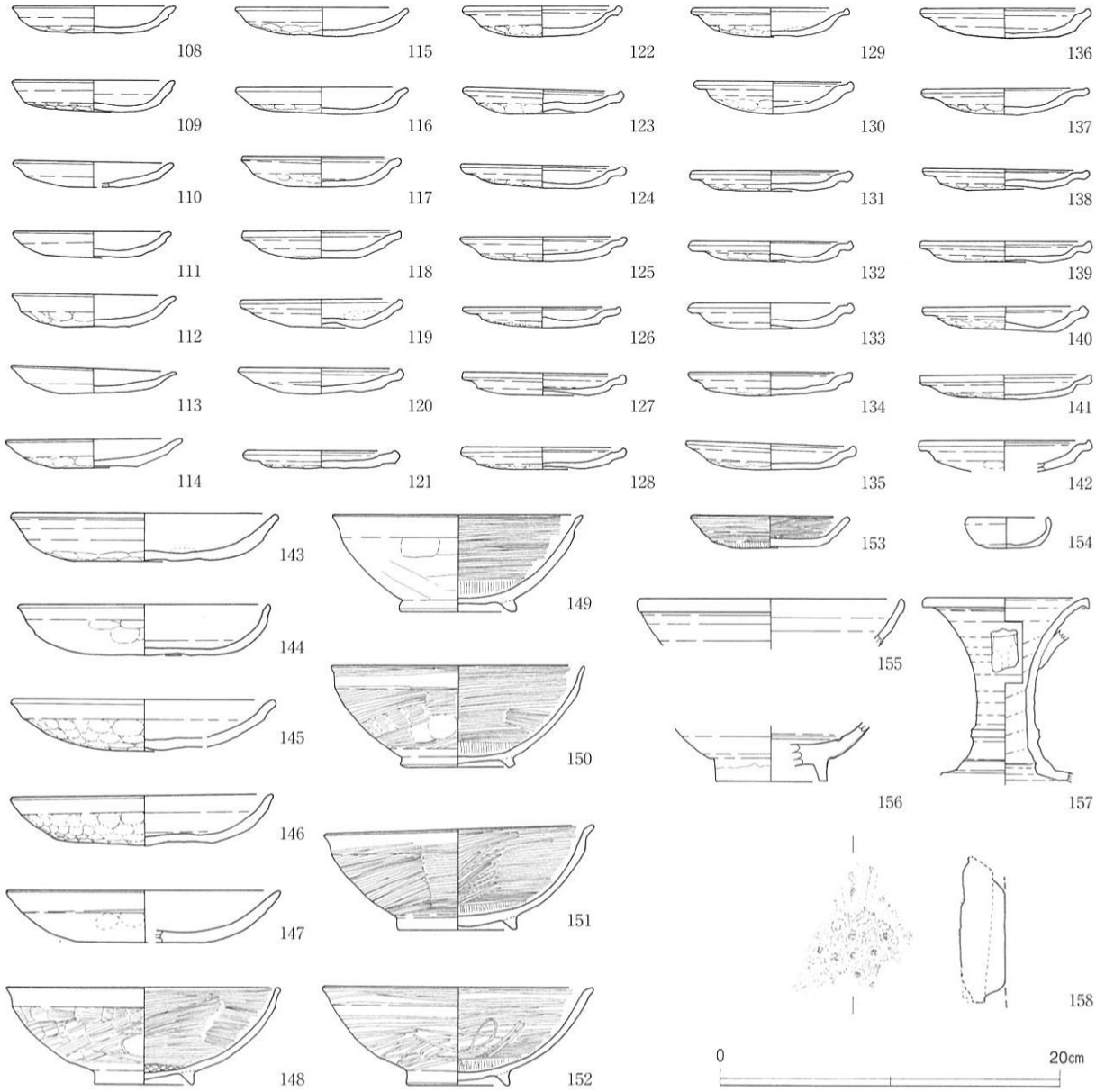
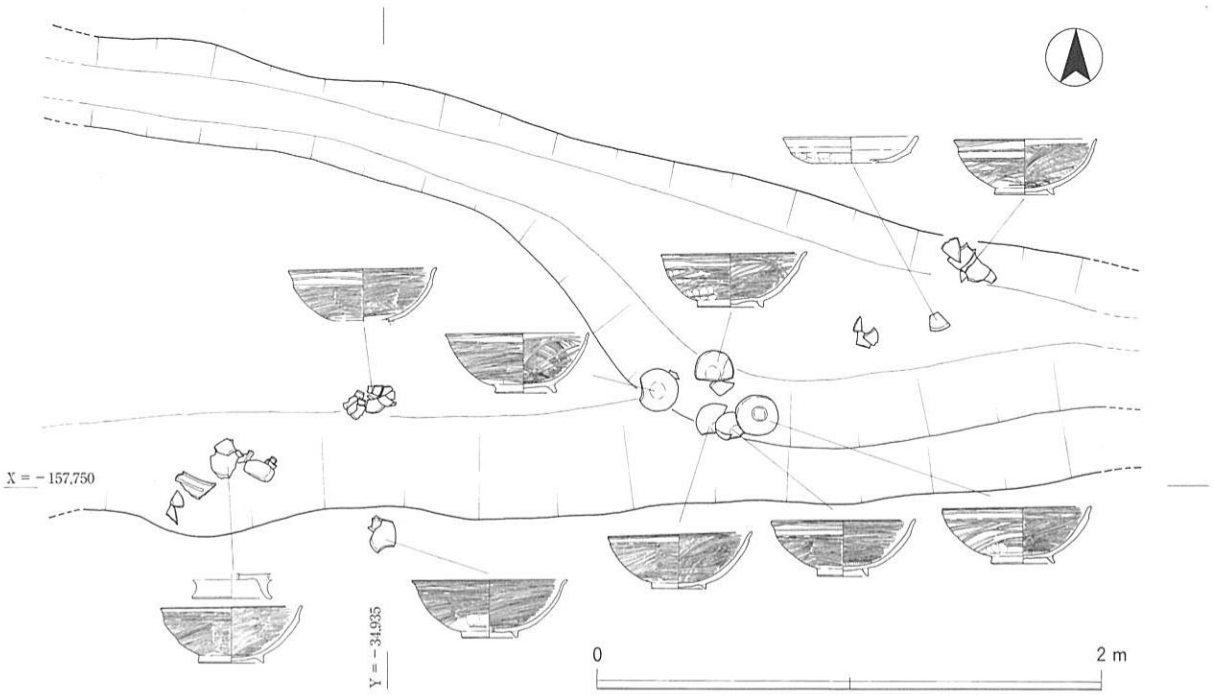



図27　５落ち込み　出土遺物

（155・156）・手付瓶（157）、軒丸瓦破片（158）などがあり、これらは南半の西肩付近を中心に数か所で纏まって出土した。多くの遺物が底面から10cmほど浮いていることから、埋没が一定程度進行した段階に廃棄されたと考えられるが、X＝－157,740ライン付近で内肩から西へ延びた溝状の凹みの先端では、２個体の土師器大皿（143・144）が上下合わせ口の状態で出土しており（図26右上）、地鎮などのまじない行為によって意図的に置かれた可能性もある。最も出土量の多い「て」字状口縁の土師器小皿には、口縁部の屈曲が比較的明瞭なものと「て」字が退化したものが見られ、瓦器椀においても、体部内外面に比較的密にヘラミガキ調整を施したものと外面のヘラミガキがやや粗雑となったものが認められることから、11世紀後葉～12世紀前葉の時期幅が想定される。

〔64落ち込み〕（図28，図版10－２）

Ｃ10－ｇ２・３区からＣ10－ｄ・ｅ４区にかけて検出。検出長約35m、幅６～11m、検出面からの深さ0.1～0.3mを測る帯状の落ち込みで、南半は北北西方向、X＝－157,750ライン以北では北西方向へと向きを変える。この方向は第３面検出の343流路と合致し、位置的には右岸に沿って設けられた堤の背



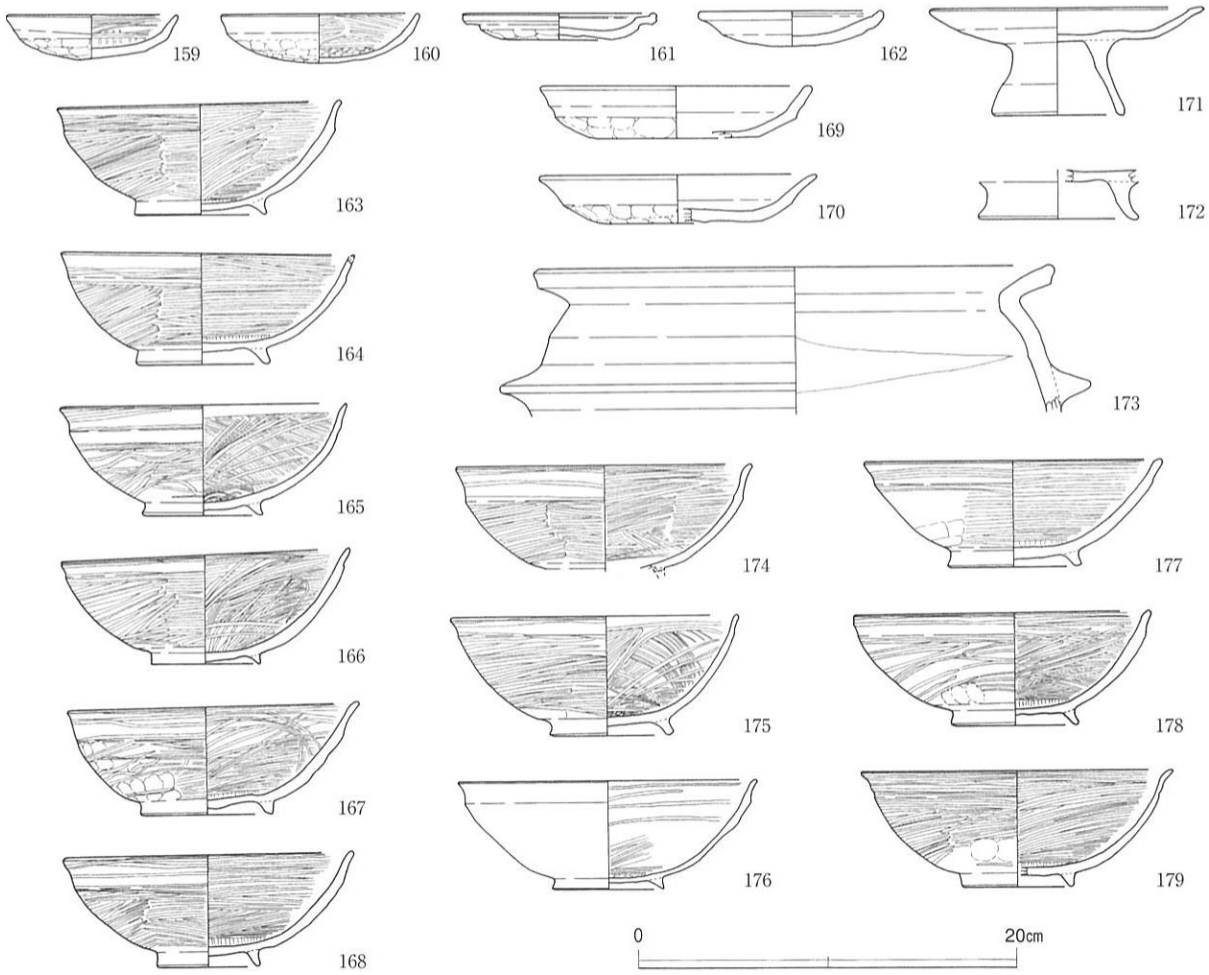




図28　64落ち込み　平面図，出土遺物

後に当たっていることから、この堤によって２ｂ層の供給がブロックされた結果形成された自然の凹みと考えられる。遺物はＣ10－ｅ４区の南肩付近に集中し、瓦器椀（163～168・174～179）を中心に瓦器小皿（159・160）、土師器小皿（161・162）・大皿（169・170）・台付皿（171・172）、土師質羽釜（173）が出土した。瓦器椀・土師器小皿にはそれぞれ１点ずつ完形品が含まれ（178・162）、他の個体も全体的に残存率が高い。同様の出土状況は96－1調査区１トレンチにおいても認められ、流路の左岸肩部に当たる凹みから完形品を含む瓦器椀や土師器皿類、土師質羽釜が纏まって出土している。このうち、２点の瓦器椀には外面の高台内側に「大」が墨書されており、遺物群の性格を類推するうえで注目される。今回出土した遺物のうち、瓦器椀には厚くしっかりとした高台を付し、体部外面にヘラケズリ調整の跡が認められる例が存在する一方で、高台が小型となり、体部内外面のヘラミガキ調整がやや粗雑となったものもあり、同様に「て」字状口縁の土師器小皿にも、口縁部の屈曲を明瞭に留めるものと「て」字が退化したものが見られることから、11世紀後葉～12世紀前葉に位置付けられる。

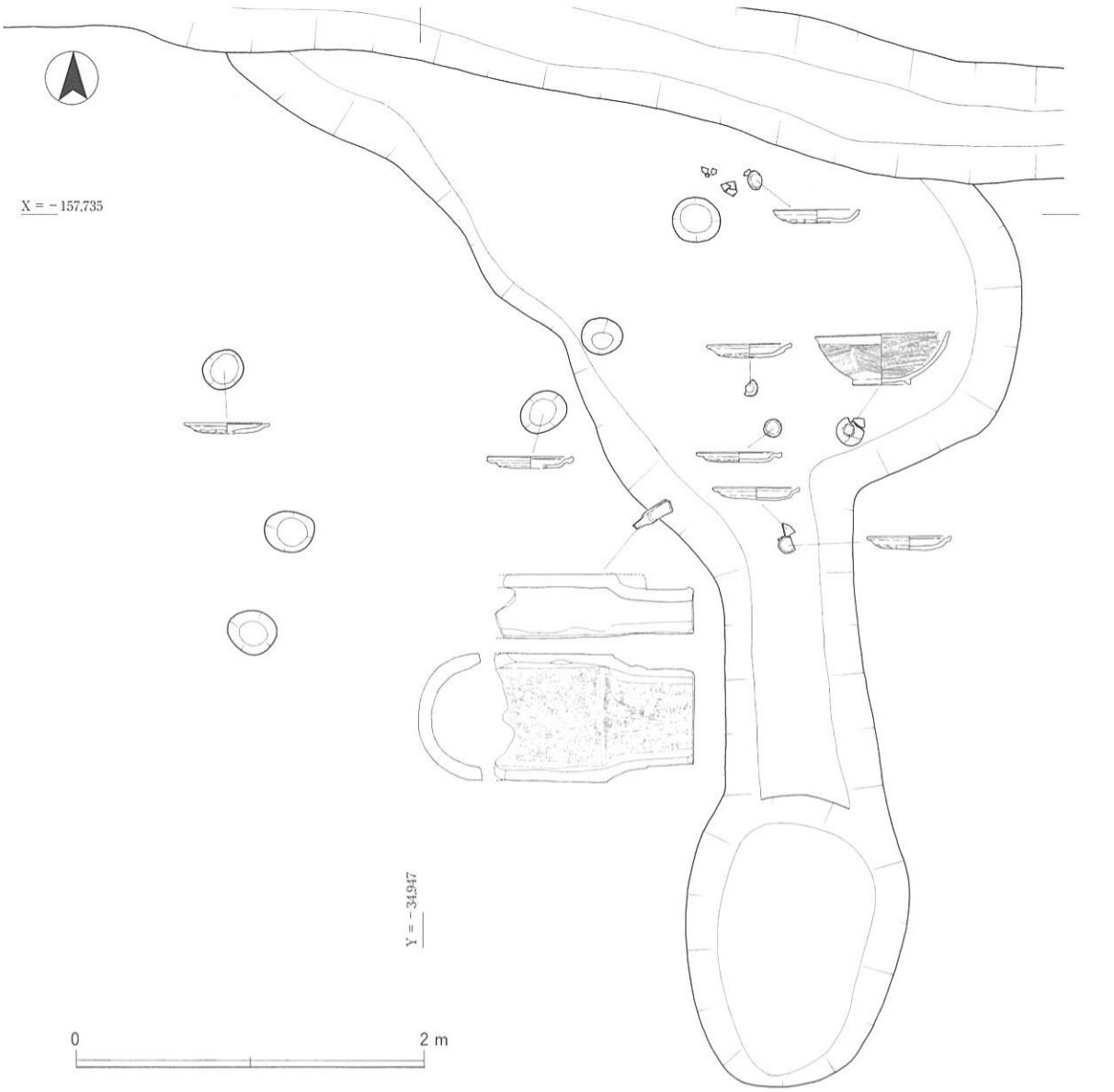
〔322落ち込み〕（図29）

Ｃ10－ｄ５区において検出。北端を東西方向に走行する93溝に切られているため、全体の形状は不明であるが、不定形の浅い土坑状の落ち込みに溝が接続したような平面形を呈し、溝の南端に当たる部分は皿状に凹んでいる。検出長5.5m、検出面からの深さは５～10cmを測り、埋土である灰黄色極細砂からは、土師器小皿（180～184・187）や瓦器椀（188）、丸瓦（189）が出土した。これらの大部分は落ち込みの底面から数cm～10cmほど浮いた状態で検出されたが、187は底面直上、189は西側肩部に跨るような状況で出土した。土師器小皿には「て」字状口縁を有するもののほか、口縁部に１段あるいは２段のヨコナデ調整を施すものがあり、前者には器壁が２㎜程度と薄く比較的シャープな作りのものと、器壁が３㎜強とやや厚く口縁部の屈曲が鈍くなったものが認められる。瓦器椀は体部の磨耗が著しいが、内外面とも比較的密にヘラミガキ調整を施し、外面の一部にはヘラケズリ調整の跡を留めている。11世紀後葉～末の所産。

なお、322落ち込みの内外には６基のピットが分布しており、西側に位置する334ピットからは186、335ピットからは185の「て」字状口縁の土師器小皿が出土している。

〔45土器溜り〕（図30・31，図版10－３）

Ｃ10－ｅ１区において検出した土器群である。掘立柱建物２の北東側に位置し、南北約4.0m、東西約3.5mの範囲内で、50個体以上の土器と20cm前後の礫数個が検出面に撒かれたような状態で出土した。土器の主体は大小の土師器皿類で、これに白磁碗や瓦器椀、須恵器などが加わるが、土師器皿の多くが完形品あるいは残存率の高い個体であるのに対し、付随する他の遺物は破損した破片が多く、対照的なあり方を示している。土師器小皿（190～227）には、「て」字状口縁を有するものと口縁部を外方へ摘み出すものがある。このうち主体となるのは前者であるが、口縁部の屈曲が弱まり「て」字が退化した個体が多い。法量は口径9.2～9.6cm、器高1.1～2.0cmを中心とするが、後者に属する193・194は口径・器高ともやや大振りである。土師器大皿（230～233）には、口縁部に２段のヨコナデ調整を施したものと１段調整のものがある。口径は15cm台が中心であるが、口縁部が大きく外反する232は14.1cmと小さい。白磁碗には、口縁部に玉縁を持つもの（234・235・237・238）と口縁端部を丸く仕上げたもの（236）がある。後者は削り出しの低い輪高台を有しており、同様の特徴を持つ229の底部破片も同一器種と考えられる。この他、須恵器小皿（228）や断面三角形の高台を持つ瓦器椀の底部片も見られ、以上からこの土器溜りは11世紀末～12世紀初頭の遺物により構成されていると考えられる。



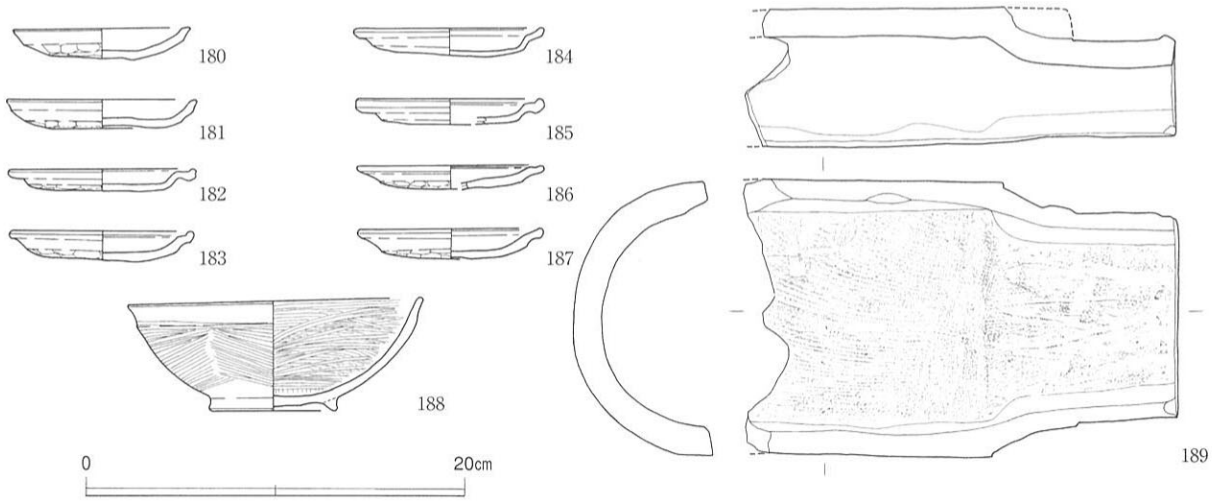




図29　322落ち込み　平面図，出土遺物

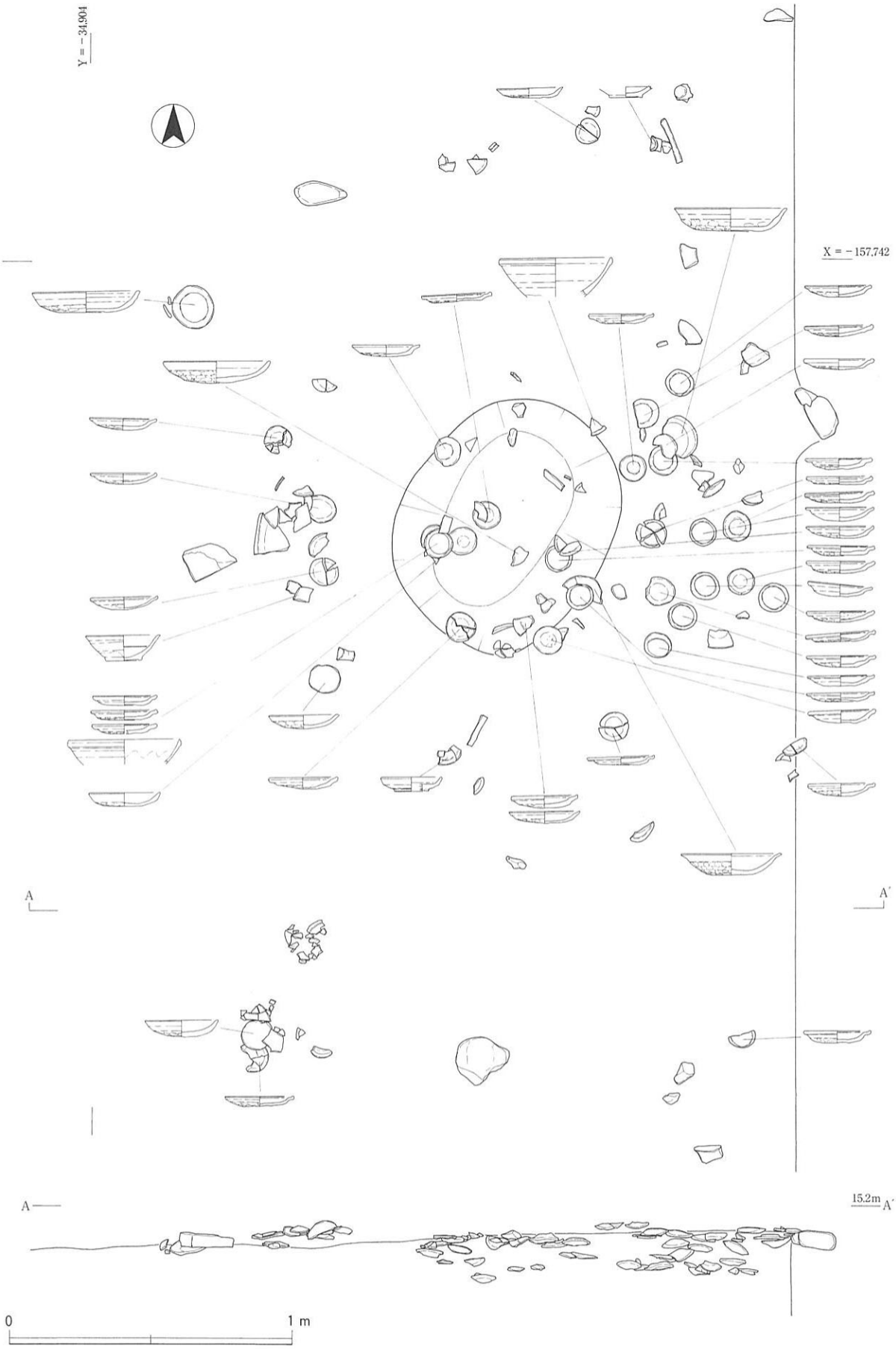



図30　45土器溜り　平・立面図

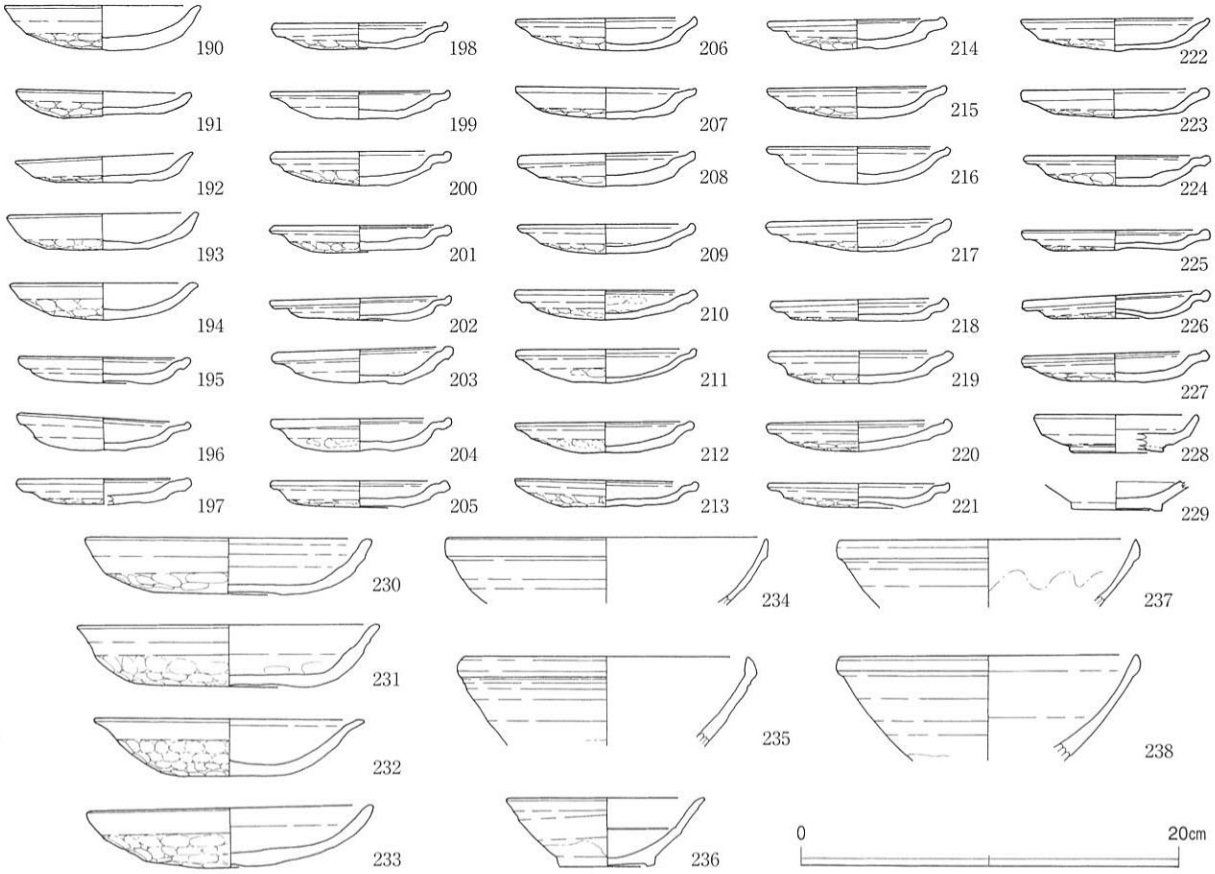



図31　45土器溜り　出土遺物

なお、これらの遺物を取り上げた後に遺構面の精査を実施したが、下部遺構としては土坑１基（197土坑）を確認したのみで、土器群に直接関連する遺構は認められなかった。197土坑は長径約0.9m、短径約0.7mの楕円形土坑で、検出面からの深さ７cmを測り、黄灰色極細砂を埋土としている。

〔ピット〕

調査区東半では、前述した掘立柱建物や塀あるいは柵を構成する柱穴以外にも多数のピットが検出されている。このうち、133・259・361・367・368ピットには柱根が遺存し、116・128ピットでは断面で柱痕が確認されたことから柱穴であることは確実であるが、調査では建物などを想定することはできなかった。ただし、259・368ピットはピット列１北側に列から等距離で存在し、116・128・133・361ピットは掘立柱建物５に近接して存在しており、それぞれの遺構に関連する柱穴の可能性がある。

各ピットからの遺物には、土師器小皿（図32－241・246・248・252・253・255～260・263）・大皿（268・270・272）・三足付鉢（284）、瓦器椀（285～288・293・296）、須恵器底部（294）があり、これまで述べてきた遺物と同様に11世紀後葉～13世紀前葉の所産と考えられる。241は210ピット、246は24ピット、248・287は35ピット、252・253・255・257・260は38ピット、256は120ピット、258は198ピット、259は169ピット、263は106ピット、268は19・20ピット、270は310ピット、272は170ピット、284は224ピット、285・296は317ピット、286は217ピット、288は172ピット、293は133ピット、294は314ピットから出土。なお、287は灰白色を呈する体部内外面に細いヘラミガキ調整を施し、口縁部の内端に沈線を巡らした大和型瓦器椀で、和泉型を主体とする当遺跡では出土例は少なく、客体的な存在となっている。

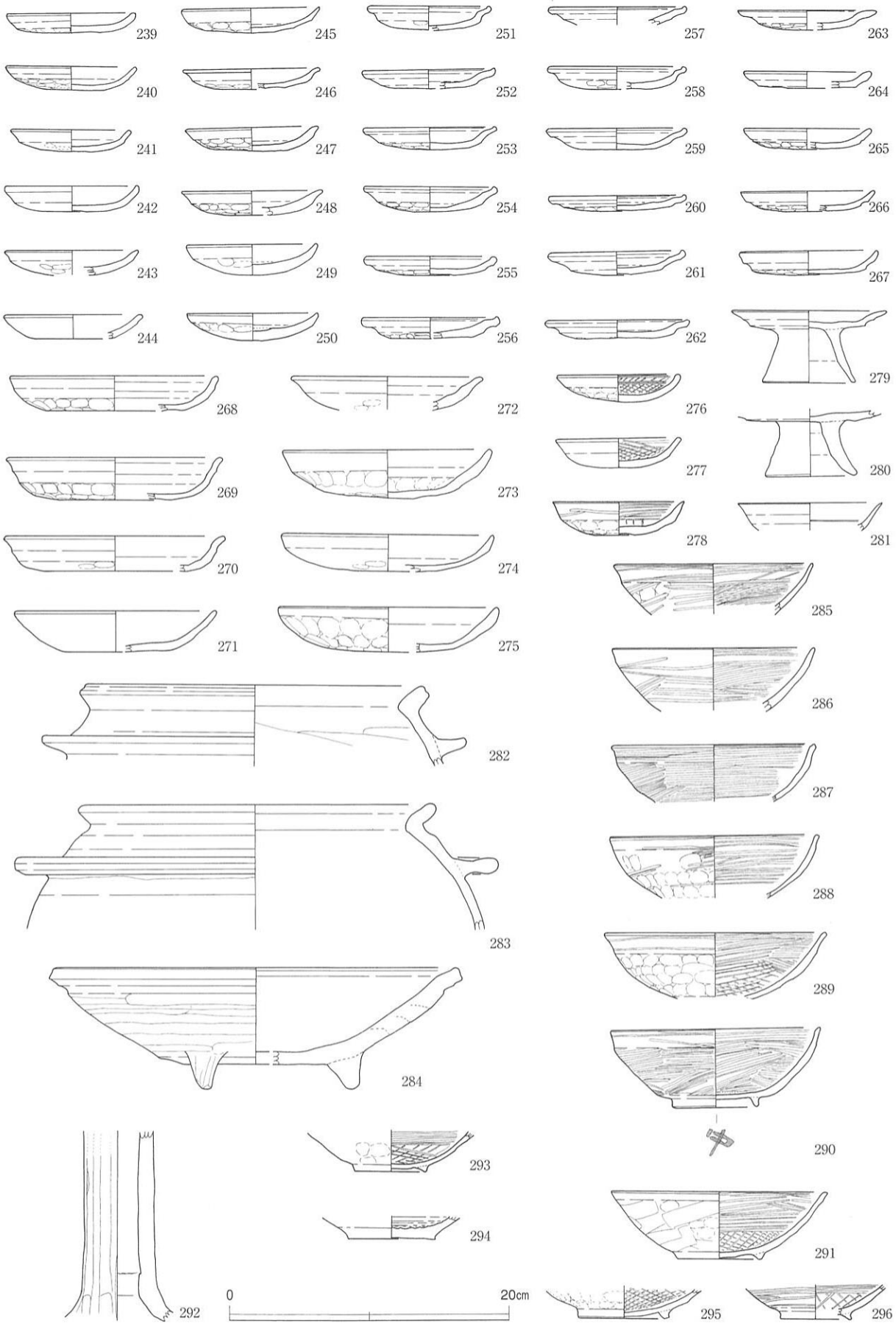



図32　土坑・ピット・溝　出土遺物

第３面（図33，図版11・12－１）

２ｂ層を除去して検出される遺構面である。前節でも述べたように、２ｂ層は第３面に存在する２条の流路を埋積した氾濫堆積物であり、流路下部では細～中礫を多く含む中～極粗砂、流路上部ならびにその外側ではシルト質極細砂～細砂を主体とし、流路を除くと平均で約30cmの層厚を有する。ただし、ラミナが部分的にしか認められないことからこの層自体も土壌化しており、本面において確認された３層のブロックを含んだ砂層を埋土とする溝状遺構・不定形土坑は、２ｂ層の堆積途中で実施された耕作などの作業の結果遺された下面遺構と考えられる。

本面ではこの他、流路とこれに並行する溝、畦畔、大型土坑が検出され、その内容から水田として土地利用が行われていたと考えられる。現行の条里地割は調査地周辺で乱れているが、東半で確認した畦畔は２条が並行して南北に延びており、条里地割に沿っている可能性が高い。なお、遺構面の地形は南東から北西方向へ緩やかに傾斜しているが、標高は南東部で約14.8m、北西隅で約14.5mを測り、上面と比べ比高差は縮小している。

〔343流路〕（図34・35，図版12－２・13－１）

調査区南端のＣ10－３・４区からＣ10－ｄ・ｅ７区にかけて検出した流路で、96－1調査区１トレンチにおいて第４面１遺構と呼称された流路と同一の遺構である。96－1調査区では調査区東端から西南西へ向かい、調査区のほぼ中央部で北方向へ向きを変えているが、本調査区内ではわずかに蛇行しつつ南東から北西方向へ向かっている。流路の幅は８～14m、深さは完掘し得た部分で1.8～1.9mを測り、右岸側には盛土によって構築された上端幅0.9～2.2m、高さ約0.3mの堤が設けられている。96－1調査区の報告ではこの堤に関する記述は見られないが、図５として掲載されたＥ・Ｆラインの断面図ではいずれも南側に高まりが表現されており、流路左岸にも同様の堤が存在していたと考えられる。流路を埋積した埋土は大きく二分され、下層は粗粒の中礫以細の礫を多く含む中～極粗砂、上層は極粗砂～細礫を多く含む粗粒シルト～シルト質極細砂を主体としている。

343流路から出土した遺物には、弥生時代～中世までの幅広い時期のものが含まれており、図34には上層、図35には下層の出土遺物をそれぞれ掲載している。

弥生時代の遺物としては、344・345・347・348がある。347は直口する口縁部の外面に櫛描列点文を施した高坏坏部、348は中空柱状の高坏脚部で、中期中葉後半の所産。344は直線的に外傾した頸部から口縁部が外反し、上方へわずかに肥厚させた口縁端部に面を持つ広口壺で、後期前半に位置付けられる。345は小型の長頸壺で、後期後半の所産であろう。

古墳時代初頭～前期の遺物としては、328・329・339・340・343・346がある。このうち、下層から出土した土器は器面の磨耗が著しく、調整手法が不明となった個体が多い。328は太く短い中空の脚柱部から裾部が直線的に「ハ」字に開く器台で、裾部には四方に円形透孔を持つ。329は球形の体部に内湾気味に短く延びる口縁部を備えた小型丸底土器。340・341は端部を上方に摘み上げた皿状の受部と円錐状の脚部を有する小型器台で、前者の受部端部の摘み上げは小さく、後者はやや長めである。343は扁球状の体部に体部高を凌駕する長さの口縁部を備えた小型丸底鉢、346は山陰系とされる鼓形器台である。以上の土器は、庄内式期前半の所産と考えられる328を除き、庄内式期末～布留式期前半に位置付けられる。この他、古墳時代の遺物として342の円筒埴輪片（６世紀）が存在する。

以上に述べた以外の資料は、古代～中世の遺物である。339は球形の体部に端部を丸く仕上げた外反する口縁部を持つ土師器甕で、奈良時代の所産であろう。この他、土師器には297～306・327・330～

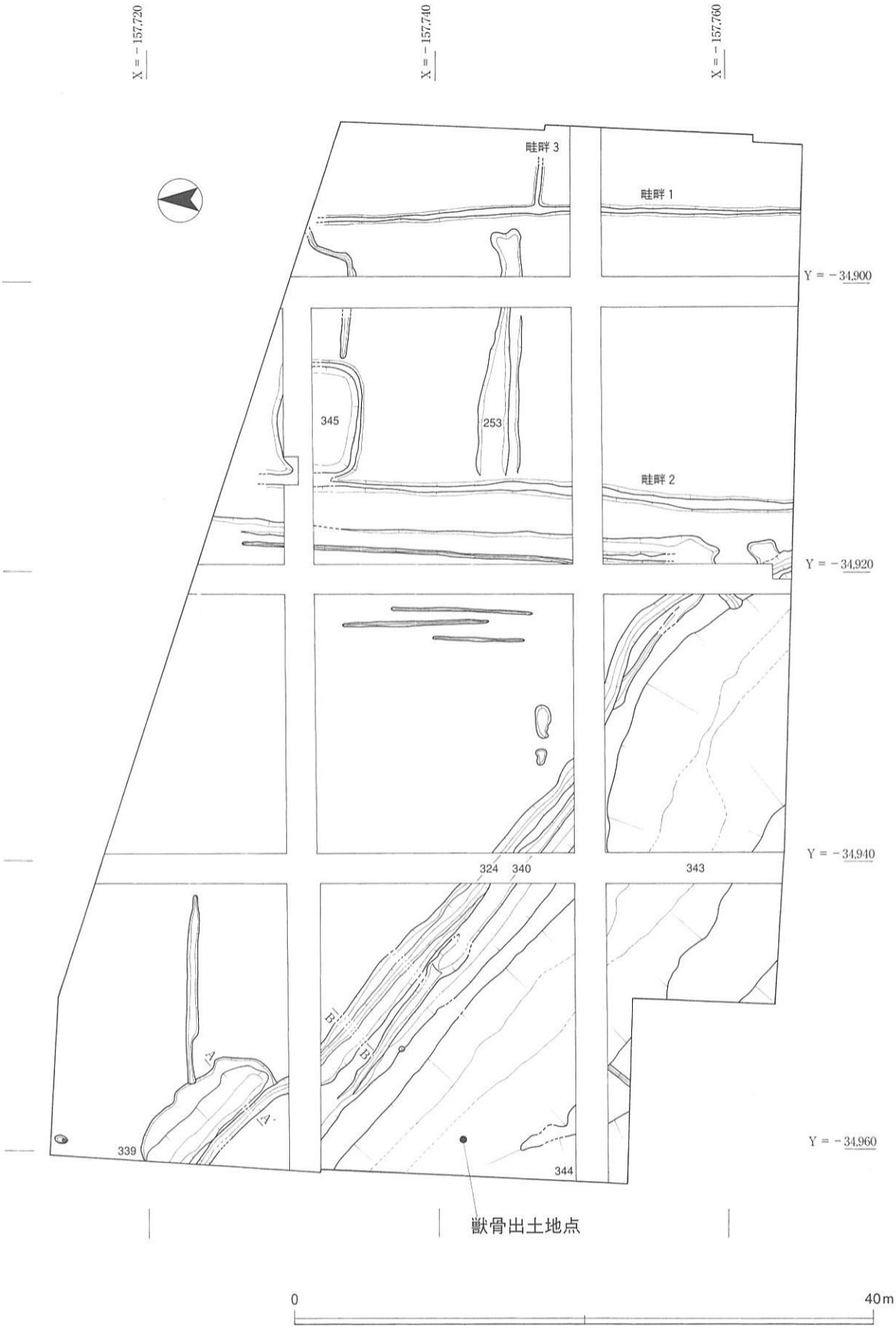

X = − 157.720
X = − 157.740
X = − 157.760
畦畔 3
畦畔 1
Y = − 34.900
345
253
畦畔 2
Y = − 34.920
Y = − 34.940
324
340
343
339
344
Y = − 34.960
獣骨出土地点
0
40m

図33　第３面　全体図

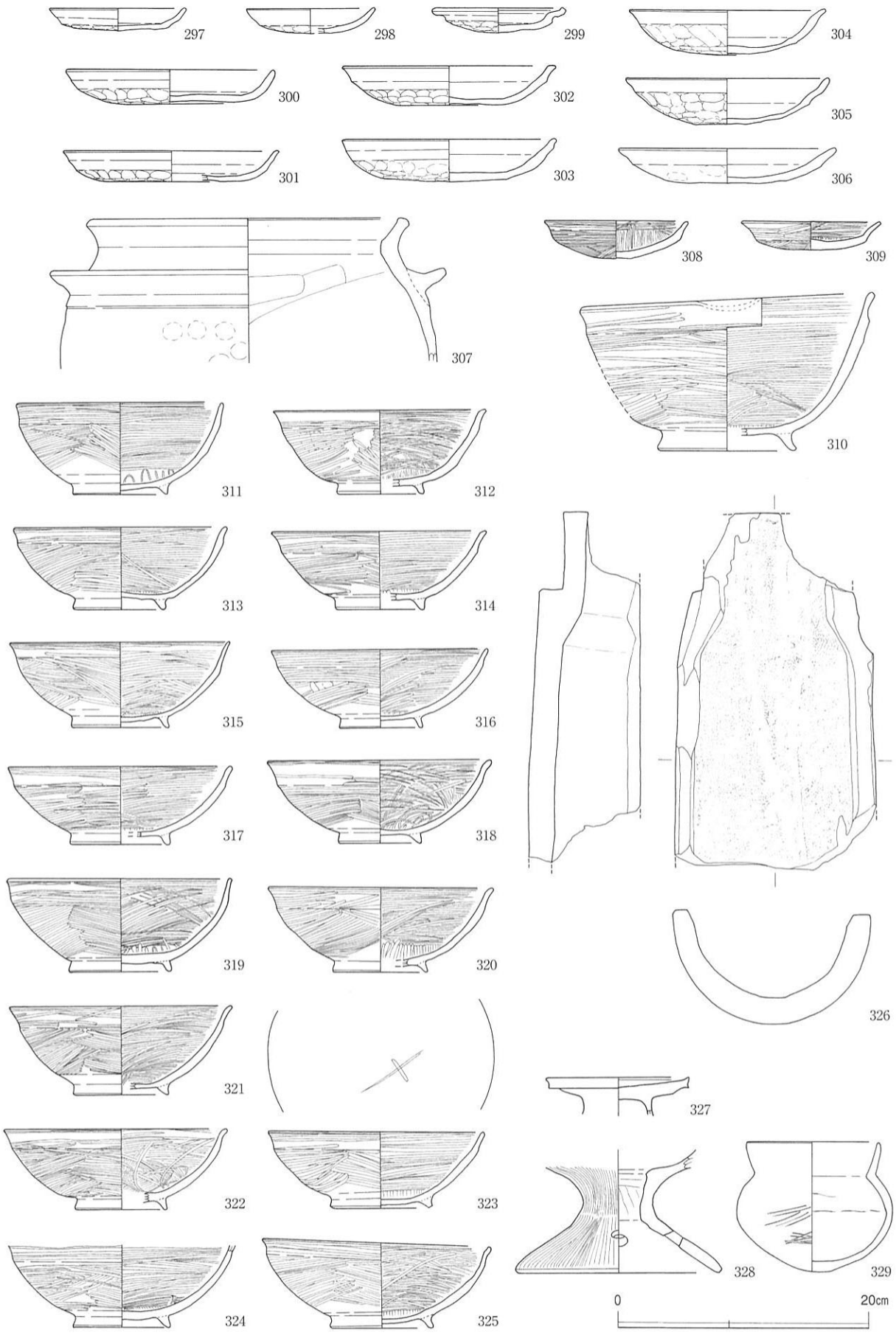



図34　343流路　出土遺物（1）

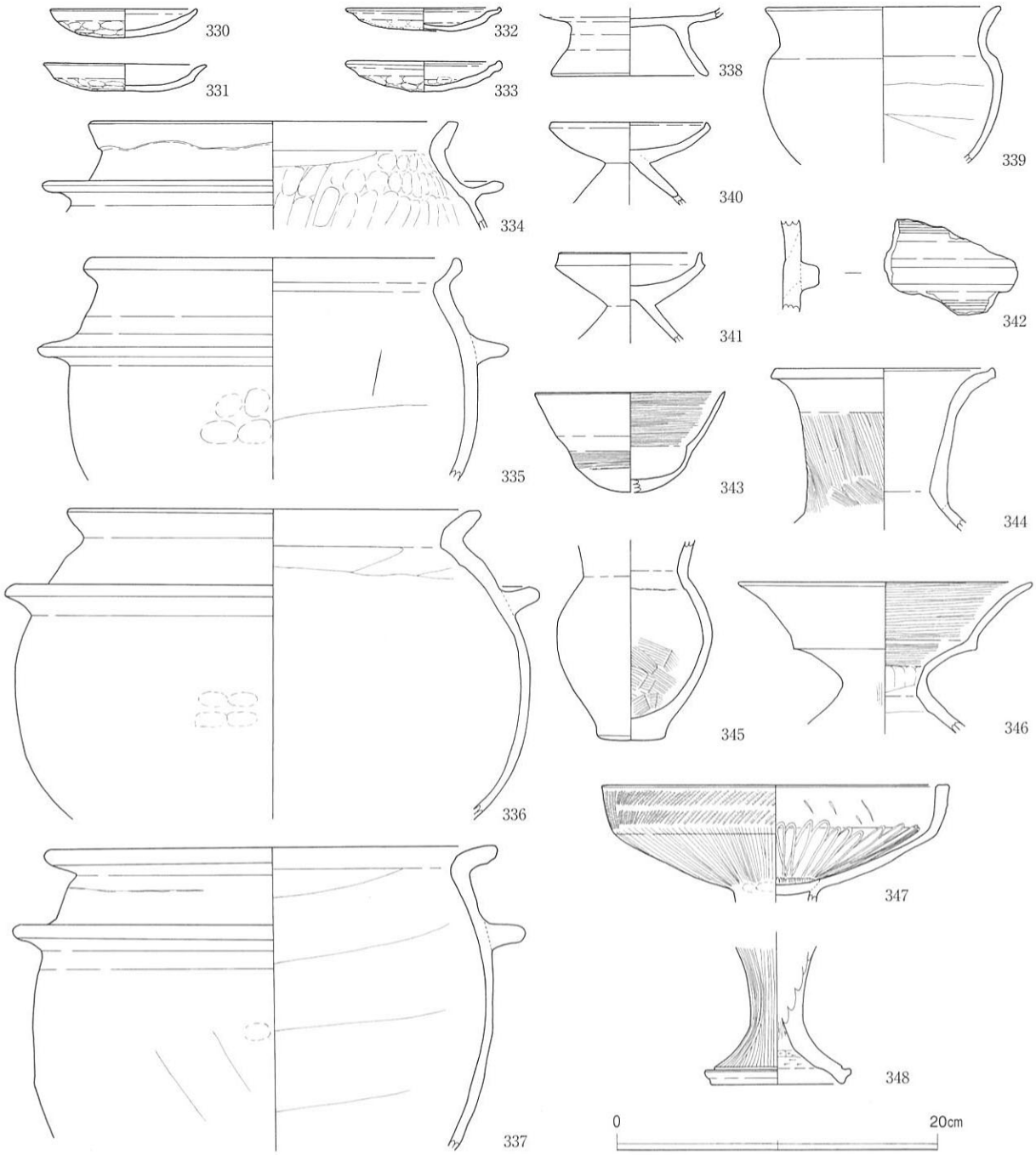



図35　343流路　出土遺物（２）

333・338に示した大小の皿類や台付皿がある。307と334～337は土師質の羽釜である。肩部の傾斜に差異が認められるものの、いずれも口縁部が「く」字に外反するもので、11世紀後半の所産と考えられる。326は丸瓦。308～325は埋土最上部から出土した瓦器で、小皿（308・309）・椀（311～325）・片口鉢（310）がある。椀は大和型である311以外はすべて和泉型で、いずれも深い椀形態を呈し、体部内外面には密にヘラミガキ調整を施している。これらは、ヘラミガキの分割性やヘラケズリ調整の跡を留める資料が多いなど、第２ｂ面検出の各遺構出土資料と比較すると古い様相が看取でき、11世紀後葉に位置付けることが可能である。

この他、調査区西端では、馬と考えられる獣骨１頭分が出土している。

〔344流路〕

調査区の南西隅で右岸の肩部を部分的に検出した。96－１調査区１・３・５トレンチにおいて、やはり右岸肩部が確認された第４面５遺構と同一の流路で、同調査区５トレンチから蛇行しつつ北西方向に延び、本調査区の西端で343流路と合流している。ただし、左岸についてはこれまでの調査では確認できておらず、流路幅など規模については不明である。

〔324・340溝〕（図36，図版13－２）

324溝は、343流路右岸の堤の外側においてこれと並行して走行する溝状遺構である。96－１調査区１トレンチで遺構２とされた流路（遺構１）から分岐して北西方向へ延びる溝と同一遺構で、今回の検出分を含めた総延長は約80mに及ぶ。掘削規模から調査区外北西域へ導水する水路と想定され、その場合、分岐点東側の流路肩部が北へ大きく浸食されていることから、この付近で取水していた可能性が考えられる。溝の規模は幅0.8～1.15m、深さ0.35～0.55mを測るが、Ｃ10－ｄ５・６区～ｅ５区では1.9～2.7mと幅広となっており、断面観察の結果、深さ0.3m前後の溝を一旦意図的に埋め戻した後に再び溝を掘削していたことが判明した。なお、埋土はラミナ状に細砂を挟むシルト～シルト質極細砂を主体とし、最上部を２ｂ層である黄褐色極細砂～細砂が覆っている。

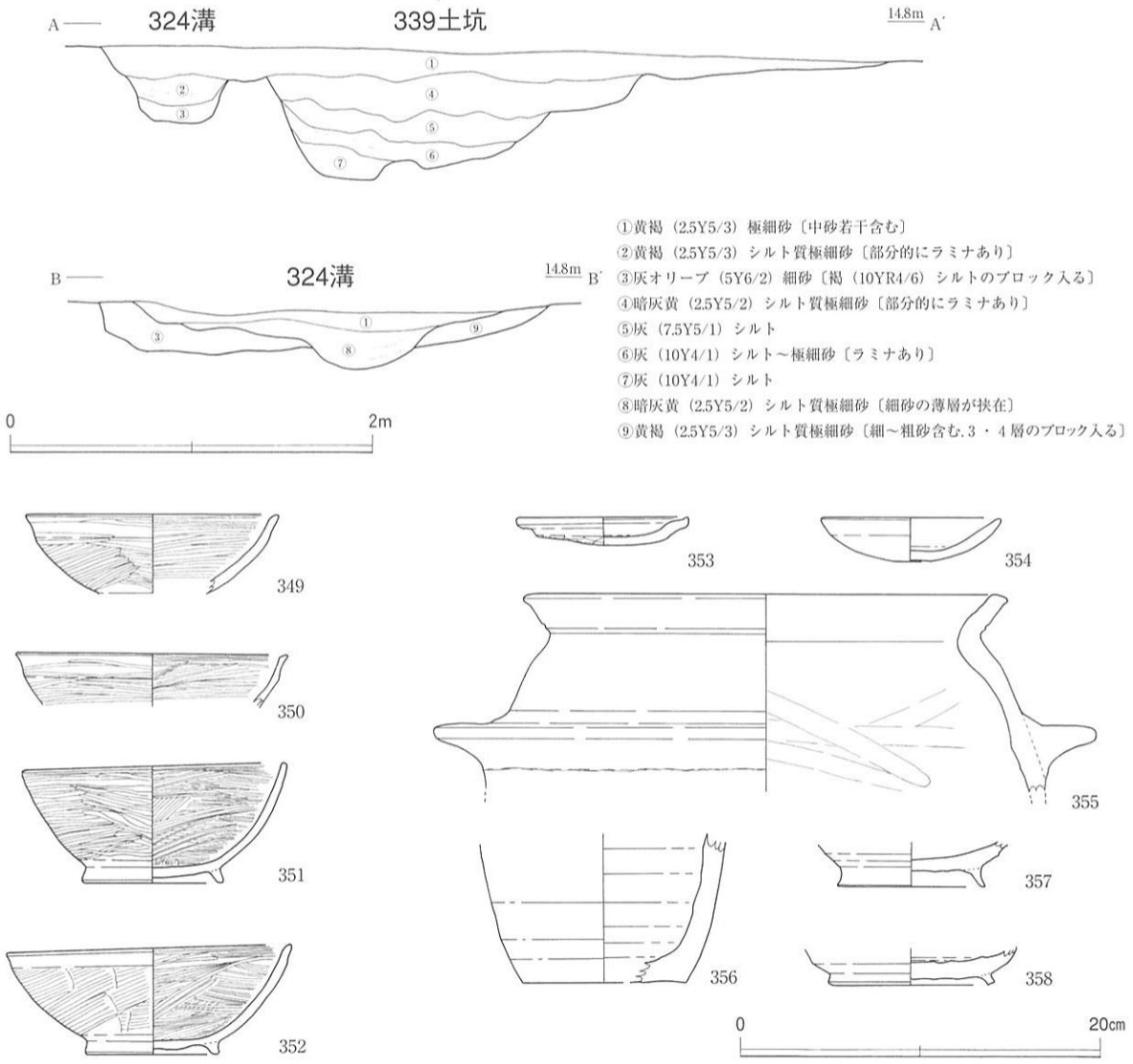



図36　324溝・339土坑　断面図，324・340溝　出土遺物

また、324溝の南西側には、340溝とした幅0.5～1.0m、検出面からの深さ0.15m前後の溝状遺構が40m以上にわたって延びている。２ｂ層の範疇で捉えたオリーブ灰色極細砂～細砂を埋土としており、324溝の機能停止後のある段階に再度掘削・復旧された水路であった可能性が高い。

各溝からは図36に示した遺物が出土しているが、いずれも出土点数は少なく、遺構の時期を特定するうえでは資料不足の感がある。

340溝からは、土師器小皿（354）と瓦器椀（349・350）が出土している。土師器小皿は体部が上方に開く器形で、口径10cm、器高2.4cmとやや深身である。口縁部にはヨコナデ調整を施し、体部下半には指押え痕を明瞭に留めている。瓦器椀は器壁の厚みに差異はあるが、内外面にはともにヘラミガキ調整が密に施されている。11世紀後葉の所産。

324溝からは、土師器小皿（353）、灰釉陶器椀（357）、須恵器坏・壺あるいは鉢（356・358）、黒色土器椀（351・352）・土師質羽釜（355）が出土しているが、いずれも破片であり、全体の器形が窺える資料は少ない。口縁部が「て」字状を呈する土師器小皿は、白色味が強く、胎土も精良なものを用いているが、外面の整形・調整及び表現手法に関しては稚拙な箇所が見受けられる。黒色土器椀には、口径に比して器高が低く内黒のもの（352）と両黒で深い椀形を呈するもの（351）が認められ、いずれも体部外面にはヘラミガキ調整に先行するケズリの痕跡が明瞭に認められる。11世紀中葉の所産であろう。土師質羽釜は「く」字に外反した口縁部の端面が外傾するもので、ヨコナデ調整により下端が摘み出されたような形状を呈する。

〔339土坑〕（図36）

Ｃ10－ｃ６・７区において、324溝に接するようにその東側で検出した大型土坑である。平面形は小判形を呈し、長径10.6m以上、短径約4.0m、深さ約0.8mを測る。断面形状は、西肩が坑底まで斜めにまっすぐ落ちるのに対し、東肩は１段下がって平坦面となり、そこから緩やかに落ちて坑底に至っている。324溝との間には明確な重複関係は認められず、両者の間は検出面より20cmほど低くなっており、水路開削の際に水溜めなどの目的のために同時に掘削された可能性が考えられる。土坑の埋土は４層に細分され、この上を324溝ともども２ｂ層が覆っている。

なお、Ｃ10－ｃ５・６区で検出した土坑東肩から東へ延びる溝状遺構は、第２ｂ面において北側５ｍで検出された溝と同様、本来は上面で確認されるべき２ａ層下面遺構であるが、攪拌した２ｂ層を埋土としていたことから見落としてしまったものと思われる。

〔畦畔１～３〕（図37）

調査区東半では、20mほどの間隔をおいて並行して延びる南北方向の畦畔２条（畦畔１・２）、東側の畦畔１から途中分岐して東に延びる東西畦畔（畦畔３）が検出されている。畦畔１・３が下端幅45～80cm、高さ５～10cmであるのに対し、畦畔２は下端幅80～120cm、高さ７～15cmを測り、大畦畔と捉えるべき規模を有している。また、畦畔２の盛土内からは359・360の土器が出土し、後述する345土坑の堤状高まりが分岐するところでも、盛土内より361が出土している。359は口径9.8cm、器高2.6cmを測る深身の土師器小皿で、口縁部はヨコナデ調整により端部がわずかに摘み出されている。360・361は瓦器

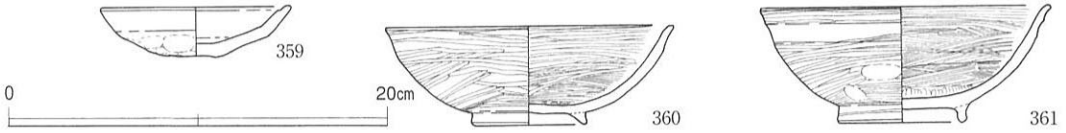



図37　畦畔２　出土遺物

椀で、後者は磨耗により不明瞭となっているが、ともに体部内外面にヘラミガキ調整を密に施している。11世紀後葉の所産。

〔345土坑〕（図38，図版13－４）

Ｃ10－ｄ１・２区において検出した隅丸長方形の大型土坑で、周囲には畦畔２から連続する堤状の高まりが巡らされている。高まりの大きさは上端幅30～45cm、高さ10～15cmで、これを含めた土坑の規模は東西長８ｍ強、南北長約6.5ｍを測る。ただし、この形状・規模となるのは本面に畦畔が設置された

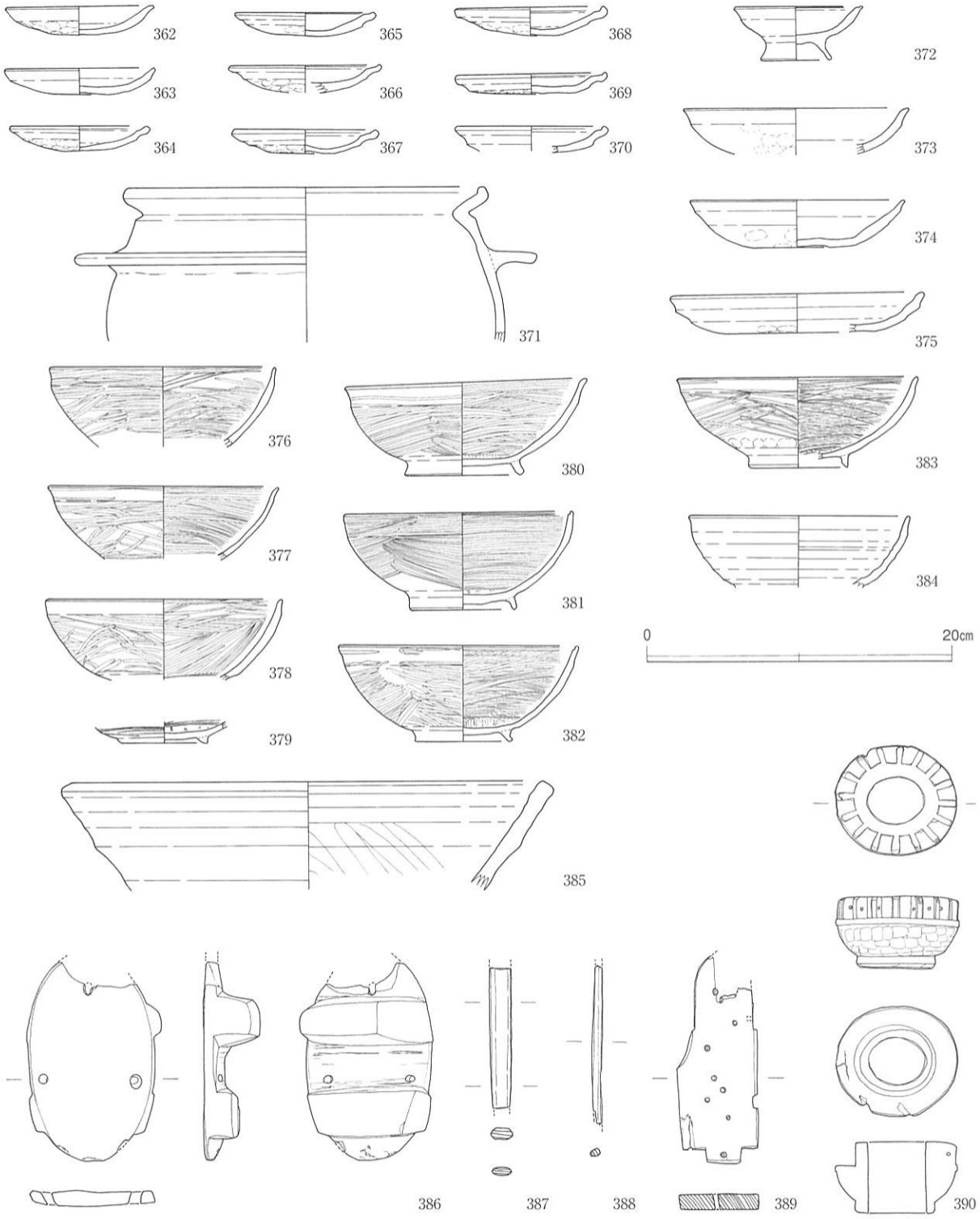



図38　345土坑　出土遺物

段階であり、掘削当初は高まりを有さず、東西長約6.9m、南北長約4.4m、検出面からの深さ約0.6mの規模であったことが、次の第４面の調査で明らかとなっている。埋土は最下部に緑灰色粘土質シルト、その上に植物遺体や炭化物を多く含むオリーブ黒～灰色シルト～極細砂が４層ほどに分かれて堆積し、最上部に２ｂ層である黄灰色極細砂が覆っている。

本遺構の出土遺物は比較的多く、図38に示したように土師器・瓦器・須恵器といった土器類のほか、木質遺物も存在している。

土師器には大小の皿と台付皿がある。小皿（362～370）は、「て」字状口縁を有するものを中心に、１段のナデ調整を施したものがこれに加わる。前者には、色調・胎土・表現手法とも非常に精緻な作りのものと口縁部がほとんど屈曲せず、端部を軽く摘み上げるものとが見られる。大皿には、口縁部が外反する坏様のもの（373）と口縁部に２段あるいは複数回のナデ調整を施すもの（374・375）の二者が認められる。台付皿（372）は深身の坏様の器形に高台を付したもので、口縁端部が摘み出されている。

瓦器はすべて椀で、大和型・和泉型の両者が見られる。大和型（380・384）は体部内外面に幅の狭いヘラミガキ調整を密に施しているが、見込みのジグザグ状ミガキはやや粗く、間隙にはナデ調整の痕跡が認められる。和泉型（376～379・382）も深身の体部内外面にヘラミガキ調整を比較的密に施した個体が多く、高台も直径が大きくしっかりしている。このうち、377は器壁が他と比して薄く、379の体部外面にはヘラケズリ調整の痕跡が認められる。また、381は外反する口縁部内側に沈線を巡らすが、内面のヘラミガキ調整は大和型のように口縁部に整然と平行するものではなく、ミガキの幅も比較的太い。以上から、これらの瓦器椀は11世紀後葉の所産と考えられる。

須恵器には椀・捏鉢がある。椀（383）は白っぽい灰白色の色調を呈し、体部は丸味をもって内湾気味に立ち上がる。口縁端部は外反せず、内面にロクロによる条線状の調整痕が顕著に残されるなど、山陽地方東部の資料に類似している。東播系の捏鉢（385）は口縁端部が肥厚しないもので、11世紀後半に位置付けられる。土師質羽釜（371）は体部内外面をナデにより調整し、「く」字に外反した口縁部の端部を内側に短く折り返した大和型とされるもので、やはり11世紀後半の所産と考えられる。

木質遺物については４点（386～390）を図化した。386は台平面形が小判形を呈する連歯下駄で、台長推定14cm前後と小さく、子供用であろう。387・388は用途不明品。389は指物の部材と想定される板材で、側面に作出した出枘、下端に入れた刳込みによって他の部材と組み合わせていたと考えられる。表面に10か所、下端に１か所の釘孔が認められ、うち３か所の孔には木釘が遺存している。390は平面楕円形を呈する亀の甲羅を伏したような形状の精巧品で、傘の柄の先に取り付け、傘を開閉できるようにする「ろくろ」と呼ばれる部品である。臼形の部分と歯車状の刻み部分からなり、中央には傘の柄を挿入する長径3.8cm、短径3.1cmの孔が貫通している。傘の骨を受ける刻み部分には16枚の歯が作出され、いずれも小孔が穿たれている。

〔３層出土遺物〕（図39，図版13－３）

最後に、第４面検出時に343流路の堤盛土ならびに３層から出土した遺物について触れておきたい。

図39上段の資料は堤に伴って出土した遺物で、盛土内から出土した２点の管状土錘（398・399）を除き、図示した土師器・黒色土器は盛土下面で纏まって出土したものである。土師器には皿・甕・椀があり、このうち皿は器高が高く坏様を呈するもの（394・395）と「て」字状口縁のもの（391～393）が存在する。ただし、395は口径11cm以上を測り、底部が平坦気味に作られており、坏と呼称すべきかもしれない。また、「て」字口縁皿には大・小２種が認められるが、いずれも器壁が薄く精巧な作りとなっ

ている。甕（397）は撫で肩の器形を呈するもので、口縁部は短く立ち上がり、端部は鈍いながらも平坦面を有する。椀（396）は高台を付したもので、口縁端部内側には段状の沈線が巡っている。一方、黒色土器の椀には内黒（400）・両黒（401・402）の両者が見られ、後者には体部が内湾気味に立ち上がるものと直線的に開くものがある。以上の特徴からこの土器群は10世紀末～11世紀初頭に位置付けられ、水路である溝324出土遺物の時期を勘案すれば、流路の築堤は11世紀前半に行われたと想定される。

3層からは、図39下段に示した土師器・黒色土器・緑釉陶器が出土している。土師器には皿・坏のほか、ミニチュアの手捏ね土器（405）が存在する。皿には大小があり、小皿は器壁がやや厚い「て」字状口縁のもの（403）と口縁端部内側のみが玉縁状となったもの（404）、大皿は堤盛土の下面資料と同様の精巧な作りの「て」字状口縁のもの（406）である。坏（407）は口縁部が外反せず斜めに立ち上がるもので、口径は13cm強を測る。黒色土器椀には内黒（408・410）・両黒（409）の両者があり、唯一器形が判明する408は、内湾して立ち上がった体部内外面に粗いヘラミガキ調整を施している。緑釉陶器（411～413）はいずれも全面に施釉されており、411・412は貼り付けの有段輪高台、413は三角高台を有する。以上から3層出土土器は10世紀～11世紀前半の所産と捉えられ、第3面検出の遺構から出土した遺物とは若干重複しつつも明らかに時期差が存在する。このことは、数層の土壌化層から構成される3層中に旧地表面が存在していたことを示唆するものと考えられる。

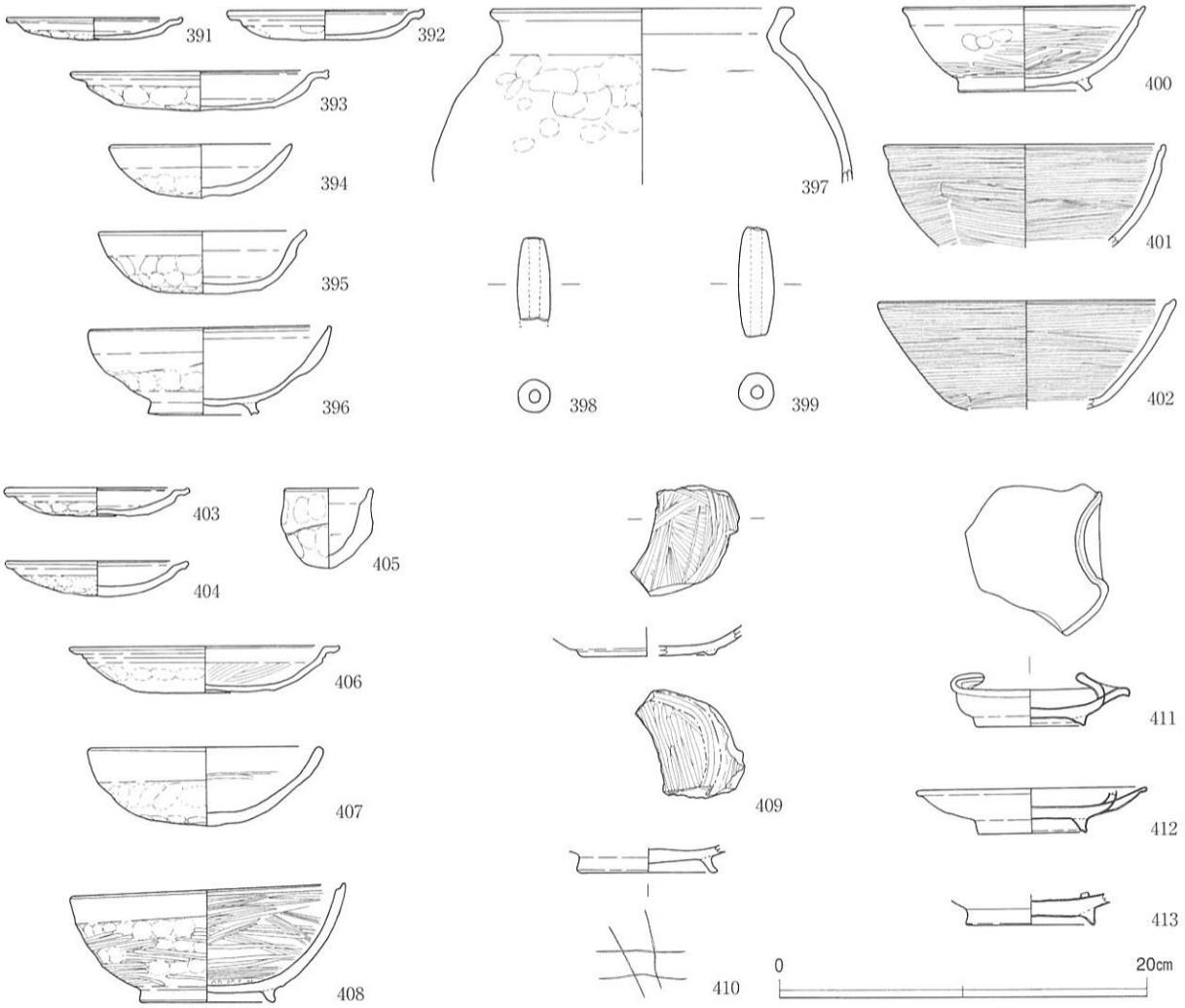



図39　3層関連　出土遺物

**第４面**（図40，図版13－５・14－１）

３層である灰～黄灰色シルト～シルト質極細砂層を除去して検出される遺構面であり、96－1調査区１～３トレンチの第４面ベース、４・５トレンチの第５－１面に対応する。同調査区の報告でも述べられているように、３層は色調・粒度や砂礫の含有量の差異から場所によって２～３層に細分することが可能であったが、今回の調査においても調査区全体で面として捉えることができなかったため、一括して掘削を行った。この層の下には４層である黒っぽい灰色シルト層が本来存在するが、良好な形で堆積が確認できたのは調査区東端のみであり、大部分は次の５層が露出している。

検出した遺構はいずれも３層を埋土とする３層下面のもので、溝状遺構・ピット・井戸などがある。調査区のほぼ中央をクランク状に走行する東西方向の溝を境に、北半に南北方向を中心とした溝群、南半にピットや井戸が纏まって分布することから、各々で土地利用の状況が異なっていた可能性が高い。このうち南半については、調査区の南東・中央・西の３か所でピットが集中して検出され、南東・中央のピット群では掘立柱建物が２棟重複して存在し、中央と西側では１～２基の井戸が伴っていることから、居住空間として土地利用が行われていたと想定される。一方、北半の溝群は第３面検出畦畔と同様に条里地割に沿っており、３層堆積中のある段階に行われた耕作痕跡と考えられる。なお、遺構面の地形は、第６面の486流路に当たる部分はわずかに低くなっているものの、全体的にはほぼ平坦で、標高は14.5～14.6mを測る。

〔溝状遺構〕（図版14－２～４）

調査区の北半及び東端を中心に検出した耕作関連の遺構で、東西・南北両方向の溝からなり、東西溝で画された間を南北方向の溝群が並行して走行している。一部の溝には重複関係が確認されたが、明確な規則性は看取できなかった。いずれの溝も３層と同じ中～粗砂を多く含む灰色シルトを埋土としているが、上層と比べると粒度が粗く、砂粒の包含量も多い。各溝の平均的な規模は幅0.3～0.5m、検出面からの深さは0.05～0.2m前後であるが、図40でアミカケした溝は0.2～0.3mと他と比して深度が深く、土地区画あるいは水利に関わっていた可能性がある。なお、一部の溝は南半まで延びてピットと重複するが、先後関係については把握できなかった。

〔355溝〕（図版14－５）

Ｃ10－ｆ・ｇ５区において検出した南西－北東方向の溝状遺構で、検出長5.2m、幅1.3～1.5m、検出面からの深さ0.3～0.4mを測る。溝の走行方向から、調査区中央を東西に走行するクランク状の溝と繋がる可能性も考えられるが、両者の間が第３面の343流路によって浸食されており、その当否は明らかにできない。出土遺物には黒色土器と土師器皿・甕（図48－441・448・451）があり、このうち内黒の黒色土器椀は高台径が大きく坏に近い形状を呈し、土師器甕は口縁部が短く外上方へ立ち上がり、端部にナデ調整による平坦面をもつもので、10世紀末～11世紀初頭の所産と考えられる。

〔掘立柱建物６〕（図41上段，図版15－１）

南東ピット群が位置する、Ｃ10－ｆ・ｇ１区において検出した建物である。380～387ピットの８基の柱穴から構成される２×２間の柱配置が想定され、規模は東西長約3.5m、南北長約3.0mと東西方向がわずかに長く、N85°Ｗ方向に長軸を置く。柱芯間隔は長辺が1.65～1.7m、短辺は1.4～1.5mである。柱穴の掘り方はいずれも径0.2m前後と小規模で、検出面からの深さも387ピットが24cm、383が18cm、386が12cmを測る以外、他は３～４cmと非常に浅いことから、本来の掘り込み面がより上位に存在していたものと推定される。なお、出土遺物はなく、柱根も遺存していなかった。

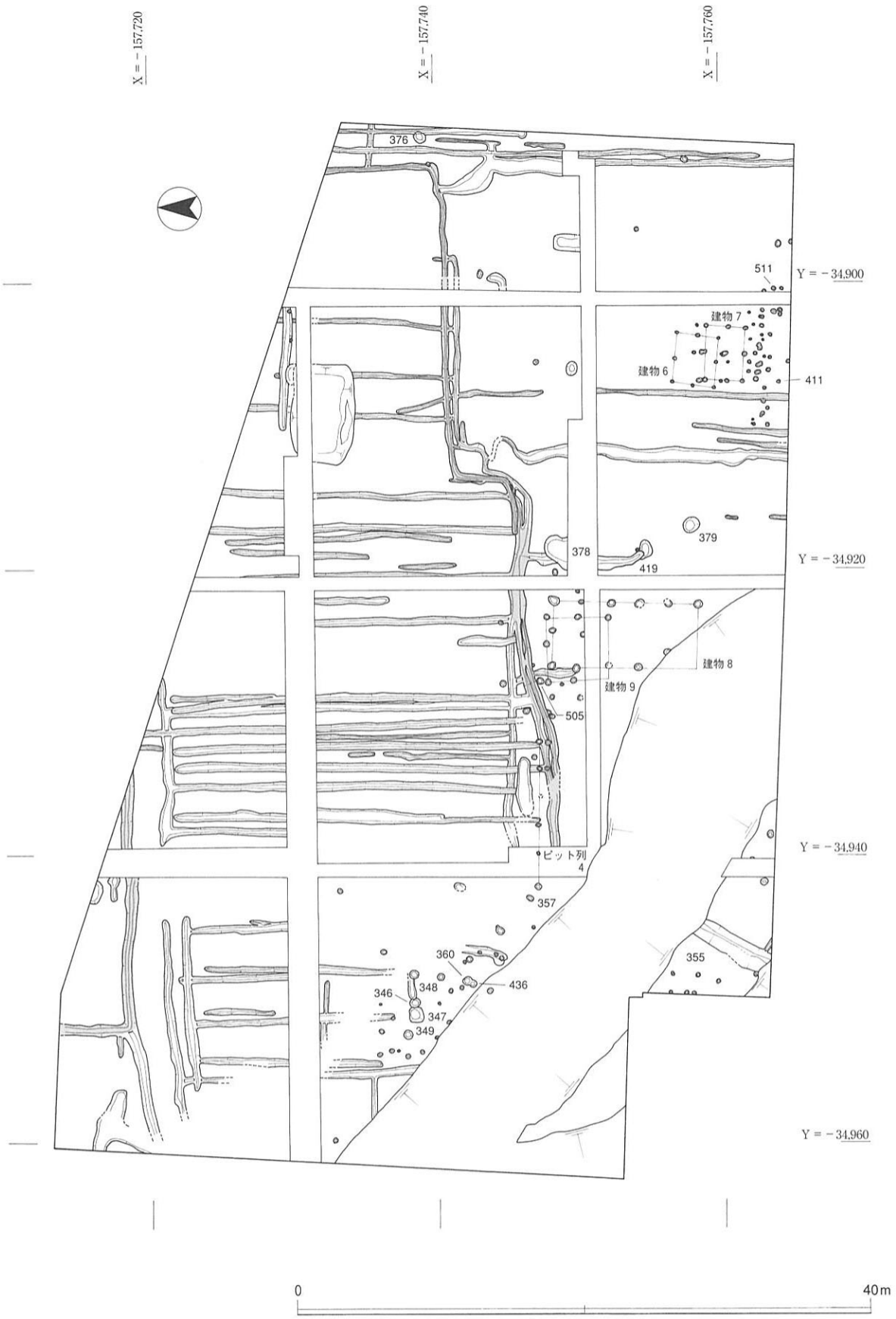
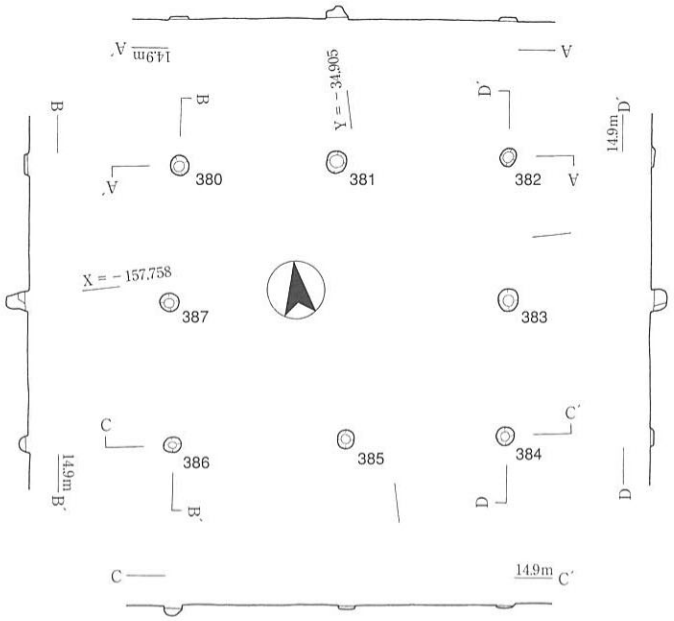
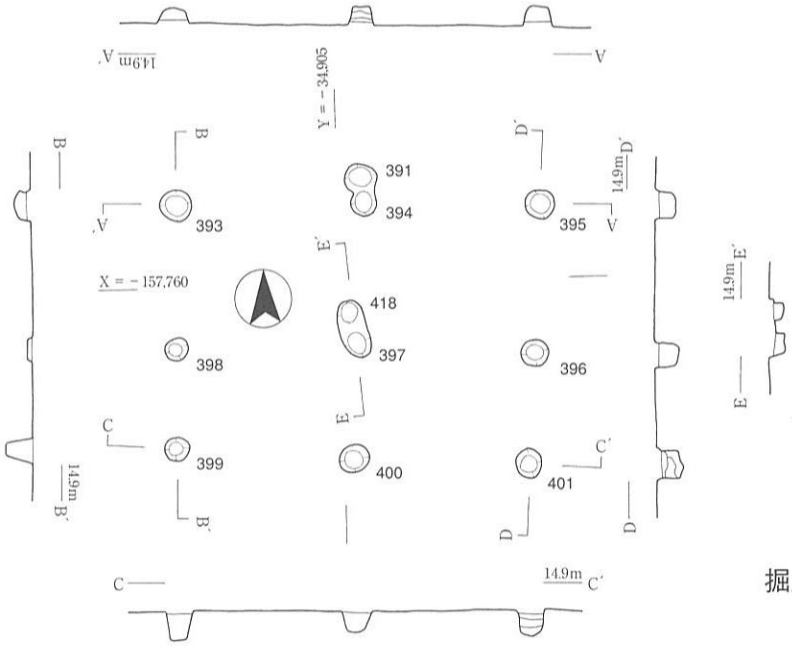

X＝－157.720
X＝－157.740
X＝－157.760
Y＝－34.900
Y＝－34.920
Y＝－34.940
Y＝－34.960
376
511
建物7
建物6
411
379
378
419
建物8
建物9
505
ピット列4
357
360
436
346
348
347
349
355
0
40m

図40　第4面　全体図




掘立柱建物６




掘立柱建物７

0　　4 m

図41　掘立柱建物６・７　平・断面図

〔掘立柱建物７〕（図41下段，図版15－１）

Ｃ10－ｆ・ｇ１区において検出した東西方向の建物で、掘立柱建物６と一部重複しつつ、その南側に位置する。393～401ピットの９基の柱穴から構成される２×２間の柱配置が想定され、中央に存在する柱穴によって床支えの梁の設営が可能なプランであることから、床構造を持った建物であったと推定される。N87°W方向に軸を置く長辺長は3.8m、柱芯間隔は1.85mと1.9m、短辺長は2.7m、柱芯間隔は1.1mと1.6mである。柱穴の掘り方は径0.25～0.3m、検出面からの深さは398ピットを除き17～30cmを測り、掘立柱建物６よりは若干規模が大きい。各柱穴からの出土遺物はやはりなく、柱根も遺存していなかった。

なお、建物などは認識し得なかったが、掘立柱建物７の南側には多数のピットが分布しており、このうち411ピットからは両黒の黒色土器破片（図48－446）、511ピットからは土師質羽釜（同450）が出土している。後者は口縁部が緩やかに外反し、端面に浅い凹線を有するもので、10世紀後半の所産と考えられる。

〔掘立柱建物８〕（図42・43，図版15－２）

中央ピット群が位置する、Ｃ10－ｅ・ｆ３区において検出した南北方向の建物である。319・442～451ピットを含む14基の柱穴から構成される５×２間の柱配置が想定されるが、西辺南側の２基の柱穴と南辺中央の柱穴は第３面343流路の浸食により検出できなかった。Ｎ２°Ｅ方向に軸を置く長辺長は約10.2m、柱芯間隔は1.7～2.3m、直交する短辺長は4.45m、柱芯間隔は2.1mと2.35mである。柱穴掘り方の平面形は楕円形あるいは不整楕円形を呈するものが多く、長径は0.4～0.75m、検出面からの深さは40～92cmを測る。なお、319・443・448・449ピットの４基には、基部付近に水平方向の目渡孔を穿った直径15cm前後の柱根（図43）が遺存していた。出土遺物はすべて細片の土器類で、451ピットから出土した緑釉陶器（414）と両黒の黒色土器椀（415）を図化し得たのみである。

〔掘立柱建物９〕（図44上段，図版15－２）

掘立柱建物８の北半に重複して位置する建物である。455～460ピットを含む７基の柱穴から構成される２×２間の柱配置が想定されるが、南西の隅柱に当たる部分は第３面において324溝が掘削されており、該当する柱穴は検出できなかった。建物の規模は東西長約4.5m、南北長約4.3mとわずかに東西方向が長く、長軸はN89°Ｅ方向を指す。柱芯間隔は長辺が1.8mと2.7m、短辺のうち東側が2.15m、西側が1.9mである。柱穴掘り方の平面形は円あるいは楕円形で、長径は0.4～0.6m、検出面からの深さは460ピットが14cm、他は33～60cmである。出土遺物はなく、柱根も遺存していなかったが、457・459ピットの断面では、柱痕と考えられる柱状の黄灰～緑灰色粘土質シルトが確認できた。

なお、459ピットの北側に位置する505ピットからは、８世紀の所産と考えられる須恵器坏の底部片（図48－449）が出土している。

〔ピット列４〕（図44下段）

Ｃ10－ｅ４・５区において検出したピット列で、南側の居住空間の北辺を画す塀あるいは柵の可能性が考えられる。座標上の東西方向にほぼ平行して並ぶ356・492・494・495・498・502ピットの６基から構成され、全長約10.2m、柱芯間隔1.9～2.3mを測る。掘り方の平面形は円あるいは楕円形を呈し、径は0.25～0.3m、検出面からの深さは20～50cmである。いずれのピットからも柱根・柱痕は確認できなかったが、西端の356ピットからは両黒の黒色土器椀の破片（420）が出土している。10世紀後半～11世紀前半の所産と考えられる。

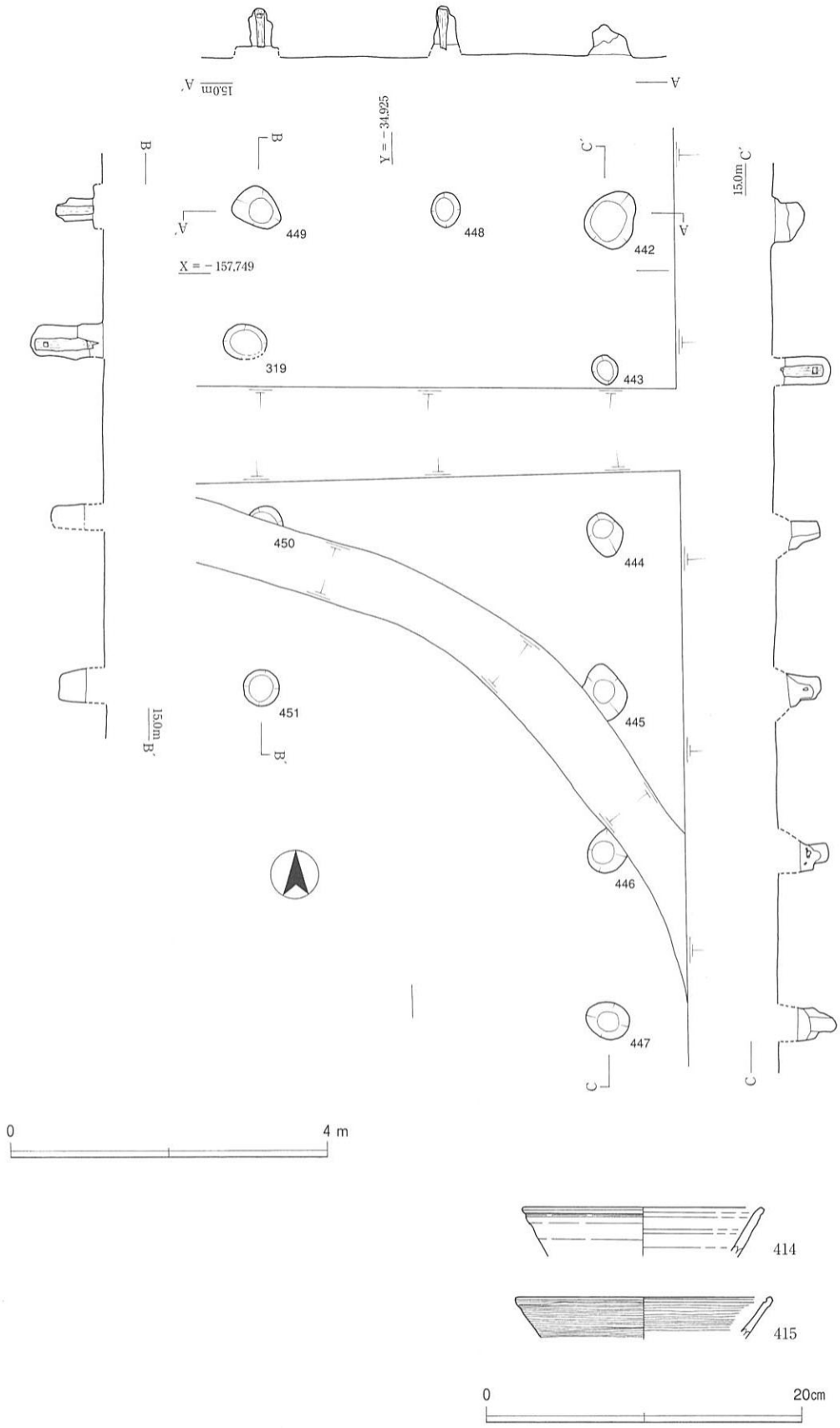



図42　掘立柱建物８　平・断面図，出土遺物

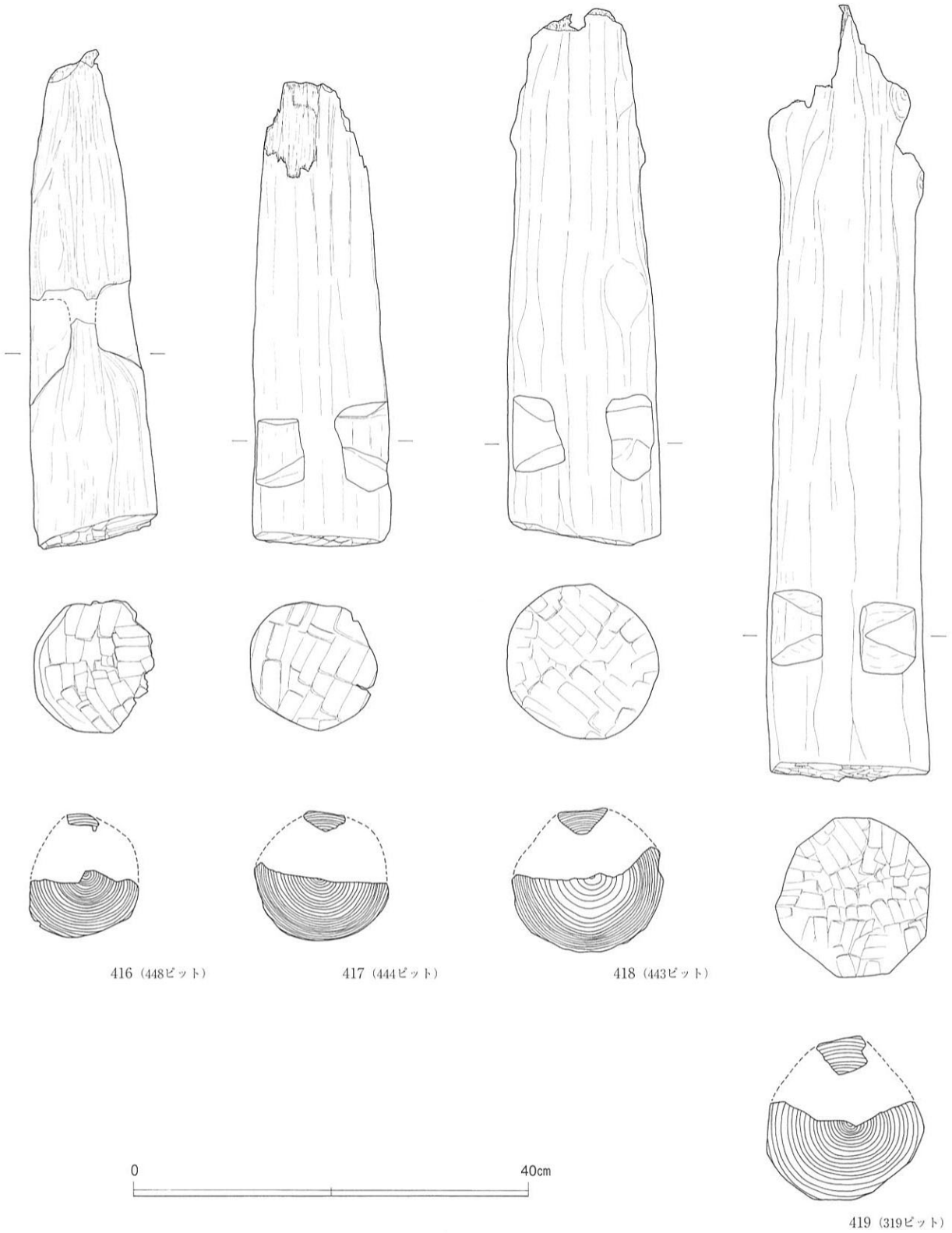



図43　319・443・444・448ピット　柱根

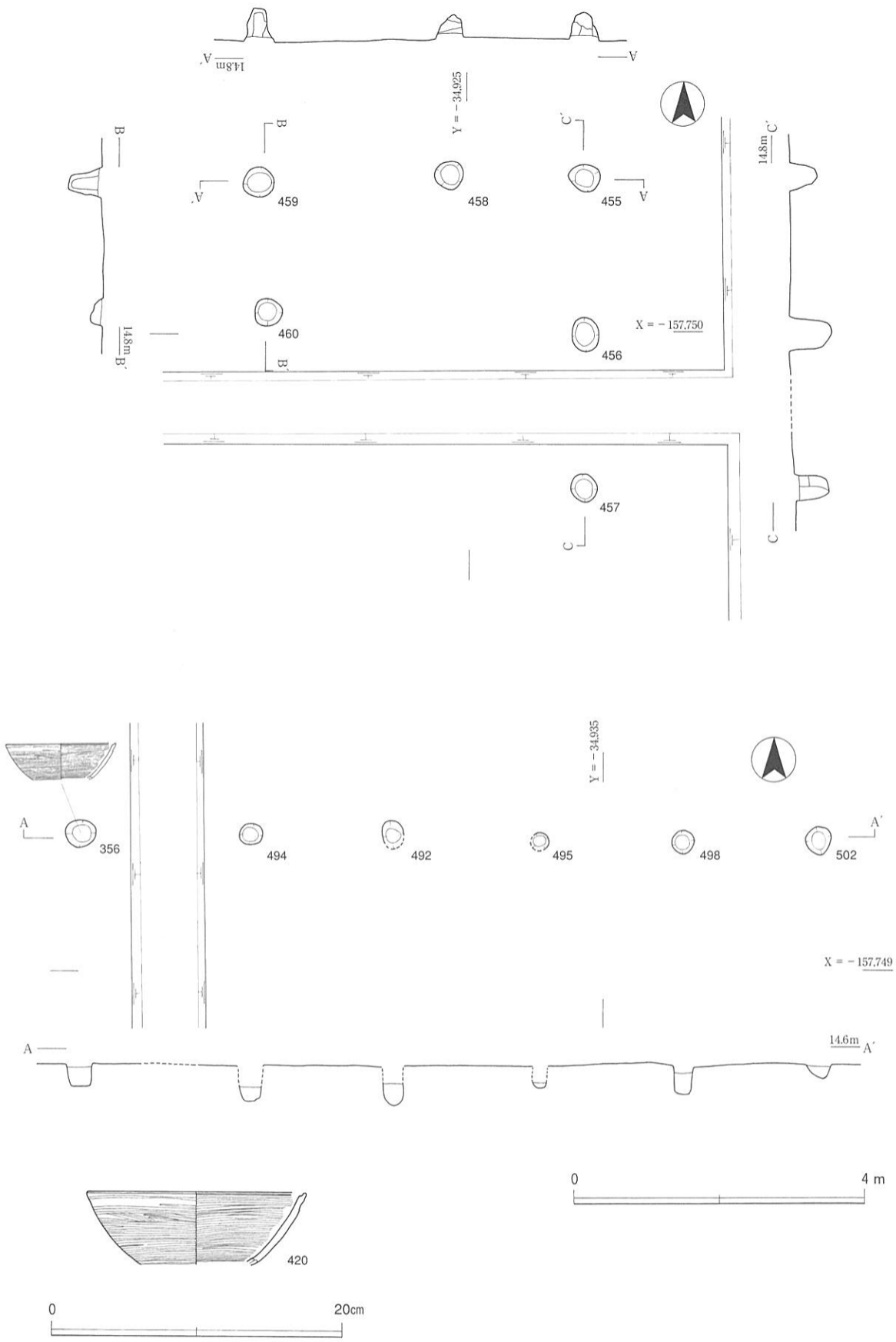



図44　掘立柱建物９・ピット列４　平・断面図，出土遺物

〔378土坑〕（図45）

掘立柱建物８から３ｍ東側に位置する土坑で、Ｃ10－ｅ２区において検出した。南端が断面観察用アゼ・筋堀と重なってしまったため本来の形状は不明であるが、長径３ｍ以上、短径約２ｍの瓢形を呈し、検出面からの深さは0.25ｍを測る。埋土は３層である粗～極粗砂を多く含む灰色粗粒シルトであり、下部には５層のブロックや炭化物が多く含まれていた。出土遺物には８世紀後葉の所産と考えられる須恵器蓋（425）とサヌカイト製の打製石槍未成品（428）があるが、後者は弥生時代に帰属するものであり、下層からの混入品と考えられる。

〔419土坑〕（図45）

Ｃ10－ｆ２区において検出した溝状の土坑で、378土坑の南側に位置する。形状・位置関係から、378土坑を挟んで北側に存在する南北方向の溝と同一遺構である可能性も考えられるが、底面のレベルに0.3ｍほどの差異があり、別の遺構と捉えることとした。検出し得た長さは約3.3ｍ、最大幅1.0ｍで、検出面からの深さは0.4～0.5ｍを測る。出土遺物としては、外面体部下半に指押え痕を明瞭に留める粗製土師器椀と呼ばれるもの（422）、法量が縮小した同系統の小皿（421）、土師器甕（423）、内黒の黒色土器椀（424）、須恵器鉢（426）があり、９世紀末～10世紀代の所産と考えられる。

〔379井戸〕（図46，図版15－３・図版16）

Ｃ10－ｆ２区において検出した井戸で、419土坑の南端から４ｍ南東に位置する。掘り方の平面形は長径1.15ｍ、短径0.95ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは約1.2ｍを測る。断面形状は１ｍの深さまでフラスコ状で、北西側ではそこからさらに１段（0.2ｍ）掘り下げている。掘り方の中位には直径65㎝の曲物の側板が遺存しており、断面においても曲物の上端から柱状に立ち上がるラインが確認できることから、本来は曲物を積み上げた井戸側が存在していたと考えられる。埋土に関しては、曲物より下位では暗緑灰色極細砂とオリーブ黒色シルトが掘り方全体に堆積しているが、その上では井戸側の内外で大きく異なり、内側が暗オリーブ灰～灰オリーブ色シルト、外側では緑灰色極細砂～細砂となっている。出土遺物には黒色土器椀（429～431）と土師器椀底部（432）・鍋把手（428）があり、このうち429～431は曲物埋土内、428・432は１段落ちの底面に敷かれていた礫の上面から出土したものである。黒色土器の椀には内黒（429・430）と両黒（431）の両者が見られ、10世紀末～11世紀前半の所産と考えら

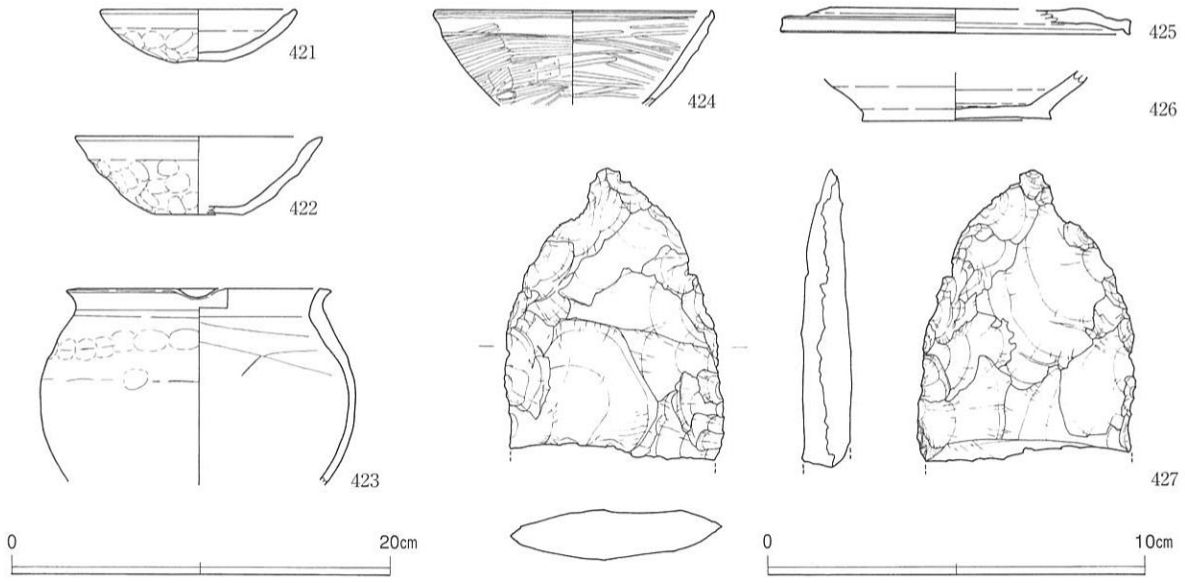



図45　378・419土坑　出土遺物

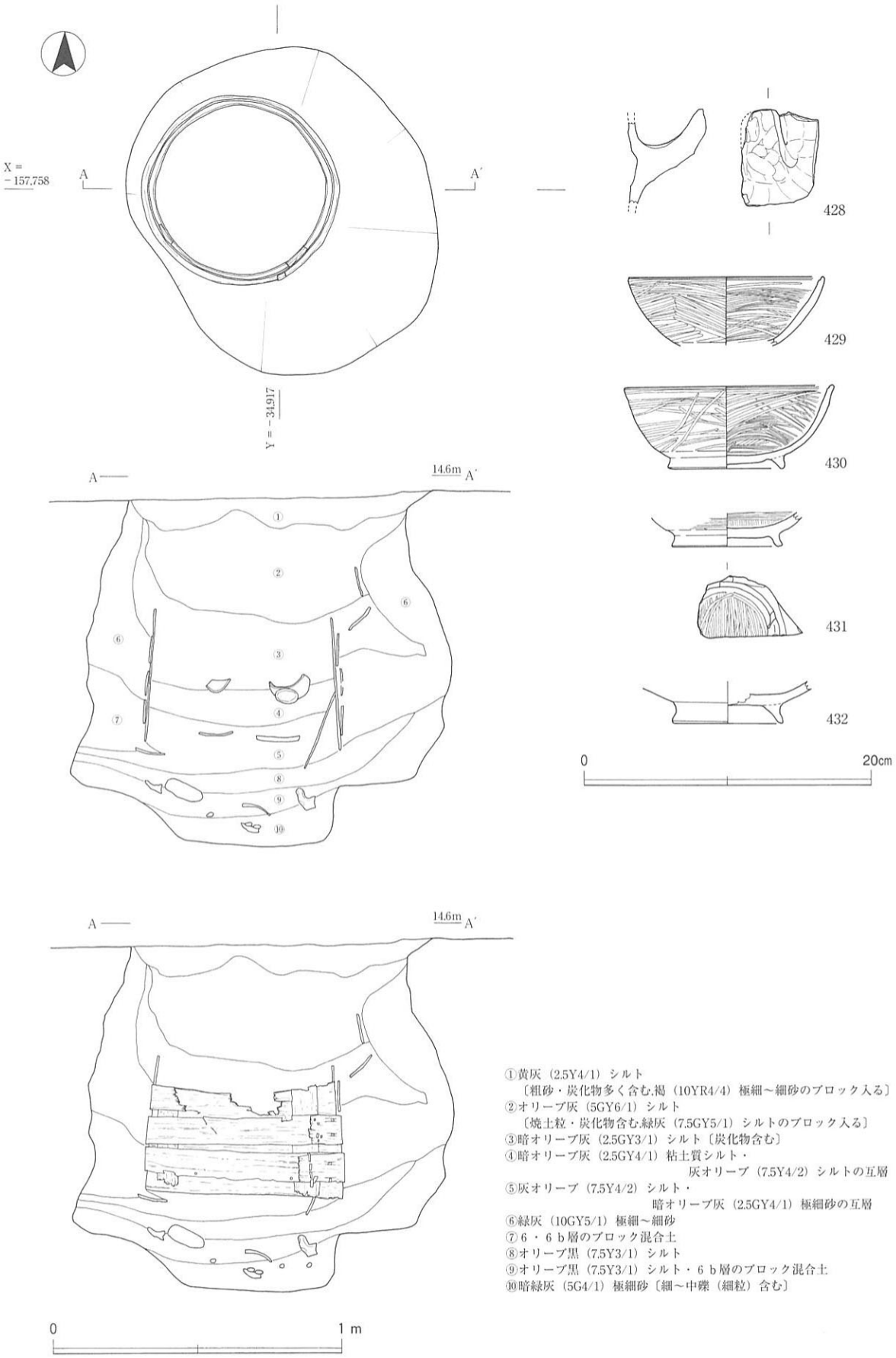



図46　379井戸　平・断・立面図，出土遺物

れる。

〔346・347井戸〕（図47，図版17）

C10－ｄ６区において、隣接して検出された井戸である。

346井戸は一辺約１ｍの隅丸方形を呈する素掘り井戸で、上半の約0.3ｍまでは斜め、そこから下へはほぼ垂直に掘削されており、検出面から底面までの深さは約0.7ｍを測る。埋土は中位の炭化物層を挟んで、下位に暗緑灰～緑灰色シルト、上に青灰色シルトが堆積し、最上部には３層であるオリーブ灰色シルト質極細砂が覆っている。底面付近には拳～掌大の礫数個が投棄されており、これとともに土師器

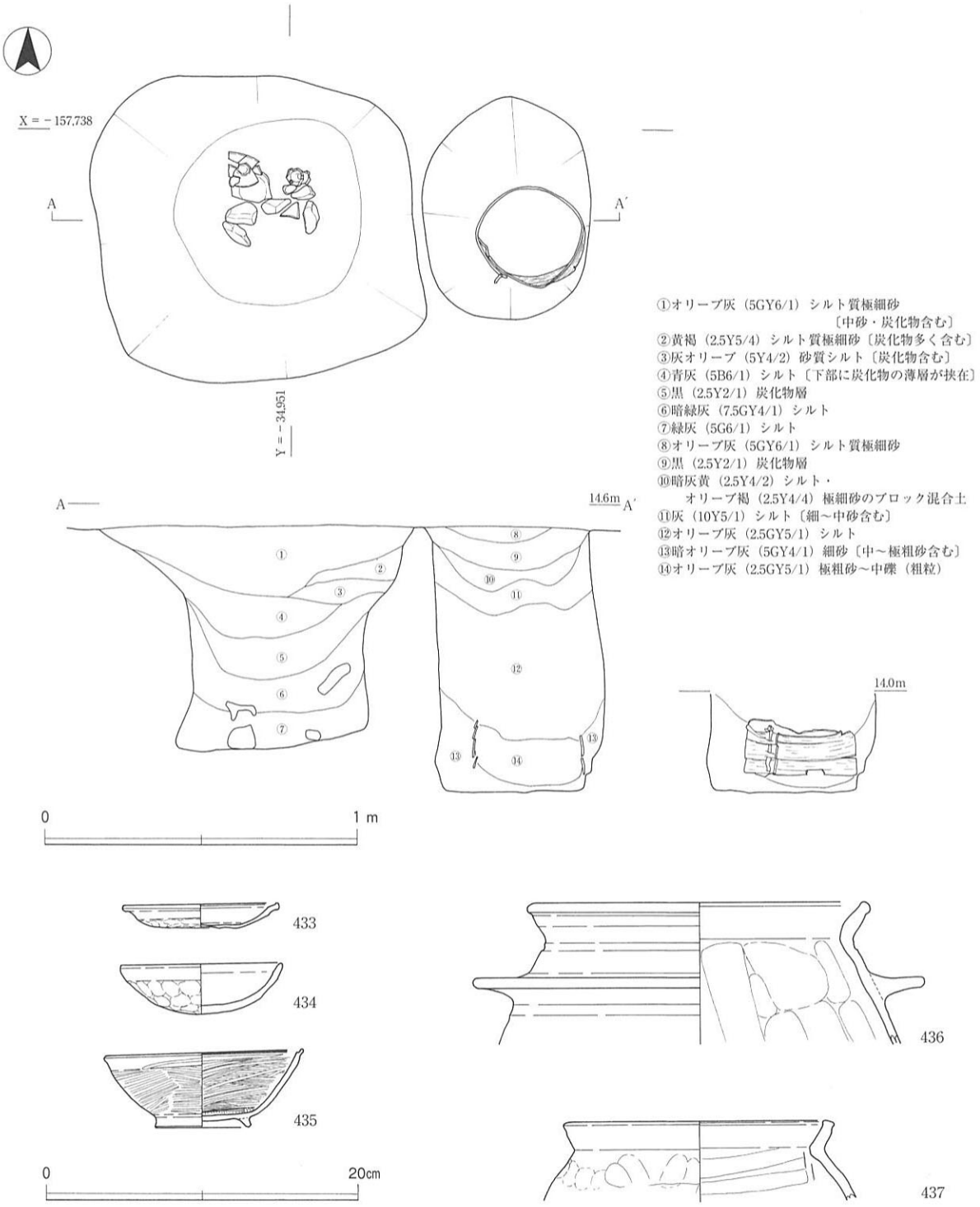



図47　346・347井戸　平・断・立面図，出土遺物

皿（433・434）、両黒の黒色土器小椀（435）、土師質羽釜（436）といった土器類や平瓦の破片が出土した。このうち土師器小皿には、器壁の薄い「て」字口縁のものと粗製椀の法量が縮小した深身のものの二者があり、口径はともに10cm強を測る。土師質羽釜は体部内外面をナデ調整で仕上げたもので、口縁部は「く」字に外反して長く延び、端部を内側に短く折り返している。以上は、10世紀末～11世紀前半の所産と考えられる。

346井戸の東隣に位置する347井戸については、検出当初その平面規模から土坑と捉えていたが、ほぼ垂直に掘削された掘り方の最下位において曲物側板の埋設が確認されたため、井戸であることが判明した。掘り方の平面形は長径約0.7m、短径約0.55mの楕円形を呈し、ほぼ平坦となった底面までの深さは検出面から約0.85mを測る。埋土は６層に細分でき、３層が落ち込んだ最上層の直下には炭化物層の堆積が10cmほど認められた。また、曲物は直径35cmのもので、内部には２～５cmほどの礫が詰まっていた。出土遺物は少なく、甕が１点（437）図示し得たのみである。口縁部が短く外上方へ立ち上がり、端部に平坦面を持つもので、10世紀末～11世紀初頭の所産と考えられる。

〔348土坑・ピット〕（図48）

348土坑はＣ10－ｄ５区において検出した東西に延びる溝状の土坑で、347井戸の東隣に位置する。東端が第３面324溝と重複していることから本来の規模は不明であるが、長さは1.6m以上、幅約0.5m、検出面からの深さは0.1m前後を測る。中からは346井戸と同様の２種の土師器小皿（439・440・442・443）が出土しており、10世紀末～11世紀初頭に位置付けられる。

この他、西側ピット群には30基余りのピット・土坑などが分布しており、このうち349ピットからは二次焼成を受けた黒色土器椀（444）と内黒の黒色土器椀底部（447）、357ピットからは「て」字口縁の土師器小皿（438）と内黒の黒色土器椀（445）、360・436ピットからは口径30cmを超える土師器の高台付き大型鉢（452）がそれぞれ出土している。

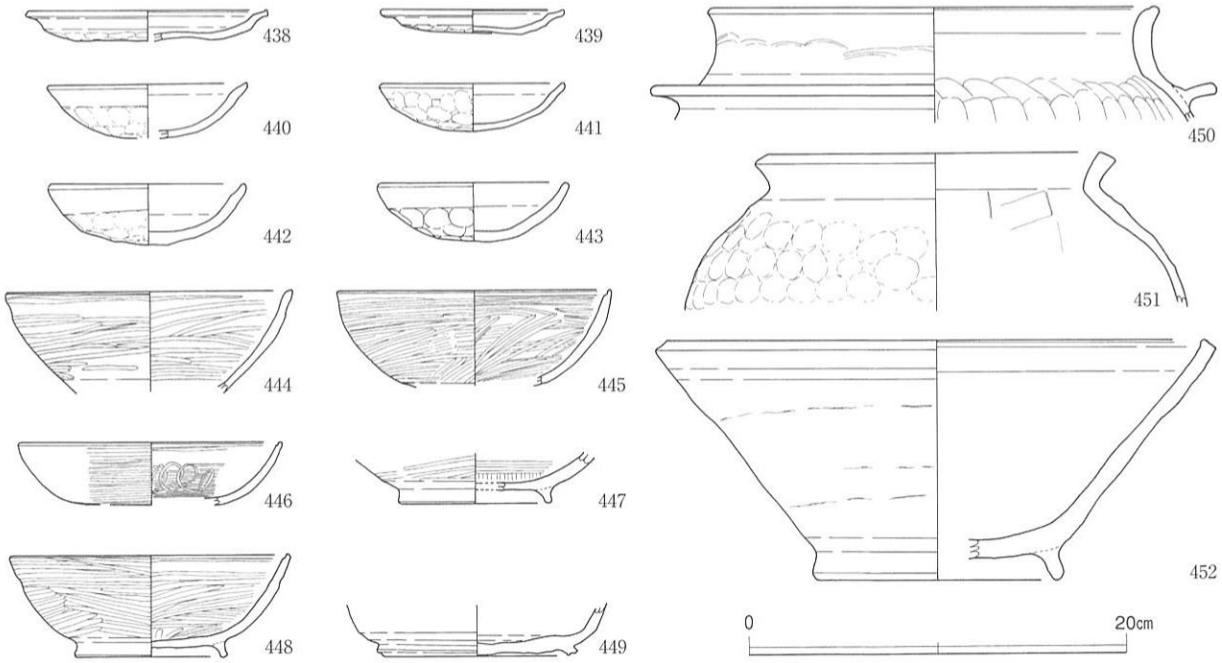



図48　348土坑・ピット　出土遺物

## 第５面（図50，図版18・22・23－１）

４層を除去して検出される古墳時代初頭～前期を主体とする遺構面であり、96－１調査区１～３トレンチの第５面、４・５トレンチの第５－２面に対応する。４層は層内に含まれる遺物（図49）から古墳時代前期に形成された土壌化層と推定されるが、前述したように安定して堆積が認められるのは調査区東端に限られており、おそらくは第３面段階の攪拌・削平により失われてしまったものと考えられる。したがって、第５面と認識した５層上面は本来的な古墳時代前期の地表面ではなく、５層が第６面段階の流路によってもたらされた弥生時代中期の氾濫堆積物であることから、むしろそのベース面と捉えられる。このことは、本面において古墳時代初頭～前期の諸遺構とともに、弥生時代中～後期の遺構が同時に検出されたことからも裏付けられる。

検出遺構のうち、古墳時代前期に帰属するものとしては竪穴住居・井戸・方形周溝墓・溝・土器埋設遺構・土器溜り・土坑・ピットなどがあり、弥生時代に遡る遺構には溝・土坑・土器埋設遺構がある。遺構面の標高は、埋没しきれずに残った流路の凹み（421落ち込み）を除き14.4～14.55mとほぼ平坦であり、検出した方形周溝墓のいずれにも盛土が残存していなかったことから、前述のとおり後の耕作によって上部が削平されてしまったものと考えられる。

〔513竪穴住居〕（図51，図版19－１）

Ｃ10－ｆ１区で検出した竪穴住居である。北東隅が514竪穴住居によって切られているが、平面形は東壁が北側に狭まった台形を呈し、規模は南北長が3.4m、東西長は北壁側が推定3.0m、南壁側が3.4mをそれぞれ測る。四辺のうち西壁は、N18°W方向を指す。

掘り方を含む埋土は大きく２層に分かれ、上層は粗砂～細礫を含む灰オリーブ色シルト、下層は極粗砂～細礫を含むオリーブ灰色砂質シルトから構成される。このうち、５～10cmの層厚を有する下層は上面が硬く締まり、この上で住居に関連する各遺構が確認されたことから貼床と考えられる。住居埋土である上層には炭化物・焼土粒が多く含まれるが、層厚５～10cmと薄く、上面は大きく削平を受けている可能性が高い。

床面上では壁溝・ピット・土坑が確認されたが、炉は認められなかった。壁溝は全周し、幅0.1～0.2mを測る。ピットは南東隅と中央からやや北東に寄った位置で各１基が検出されたが、前者は深さ約0.2mを測るものの、後者は0.1m以下と浅いことから主柱穴とは捉えがたく、柱配置については不明である。土坑（632土坑）は東壁際の中央付近に位置し、長径0.85m、短径0.6m、深さ0.35mを測る。埋土はオリーブ灰色シルトから構成され、下部には炭化物・焼土粒が多く含まれていた。

住居内からはコンテナ１箱分ほどの土器が出土したが、大部分は細片であり、図化し得たものは８点

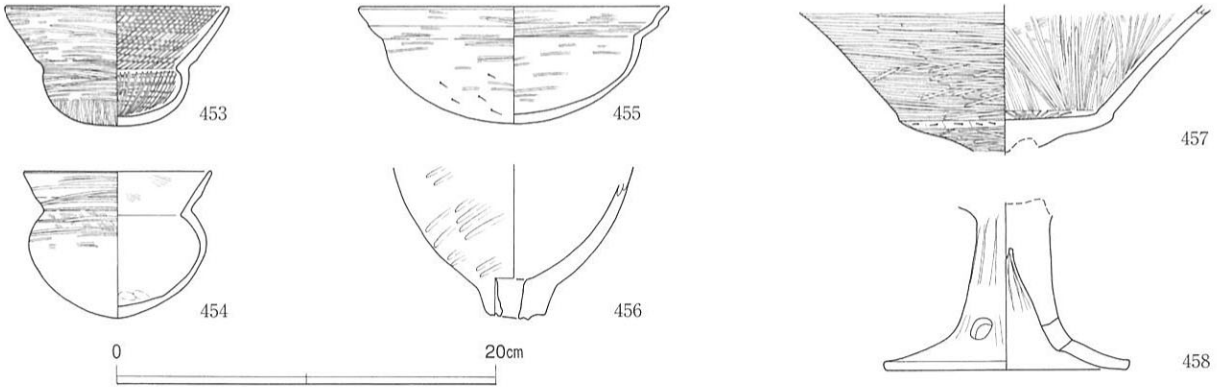



図49　４層　出土遺物

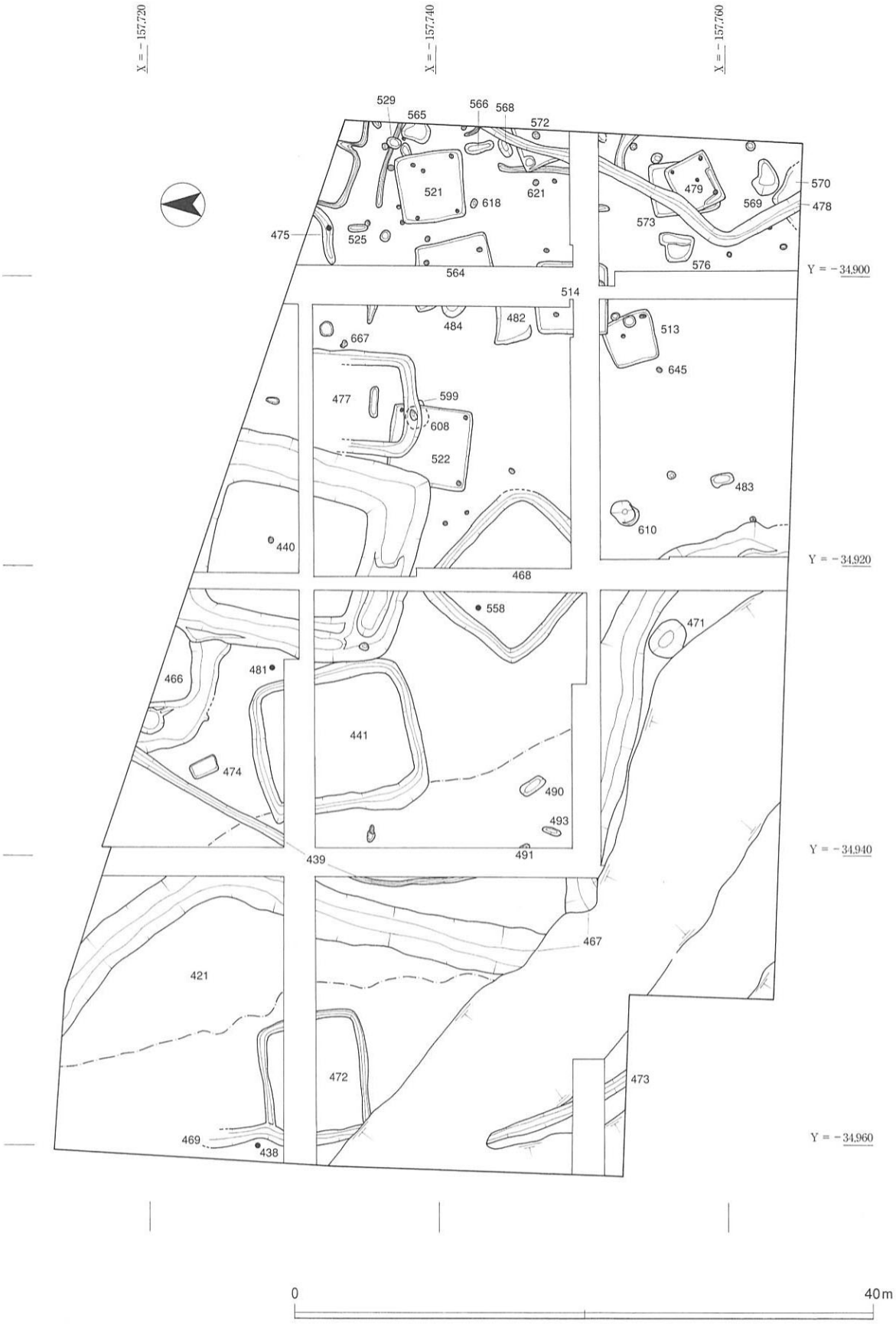

X = − 157.720
X = − 157.740
X = − 157.760
Y = − 34.900
Y = − 34.920
Y = − 34.940
Y = − 34.960
529
565
566
568
572
521
618
621
475
525
564
479
569
570
478
573
576
514
484
482
667
513
645
477
599
608
522
483
610
440
468
558
471
466
481
441
474
490
493
491
439
467
421
472
473
469
438
0
40m

図50　第５面　全体図

に過ぎない。このうち、住居の機能時あるいは廃絶直後の時期を示す床面出土資料は、北東部から出土した466のみであり、他はいずれも埋土からの出土である。

459～461は甕である。459は口縁部片で、体部外面に細筋のタタキ成形、内面にヘラケズリ調整を施した庄内式甕である。一方、わずかに上げ底状となった461の底部には、外面に太筋のタタキ痕が見られる。462～464は壺である。462は直口する口頸部を有する小型の短頸壺で、弥生時代後期末～庄内式期初頭の所産であろう。463は底部、464は体部で、いずれも弥生時代後期の所産と考えられる。466は受部径13.6cmを測る中空器台で、作りはやや粗雑であるが、内外面にはヘラミガキ調整が施されている。465は小型丸底土器の体部で、外面にはハケ調整後ケズリ調整が施されている。

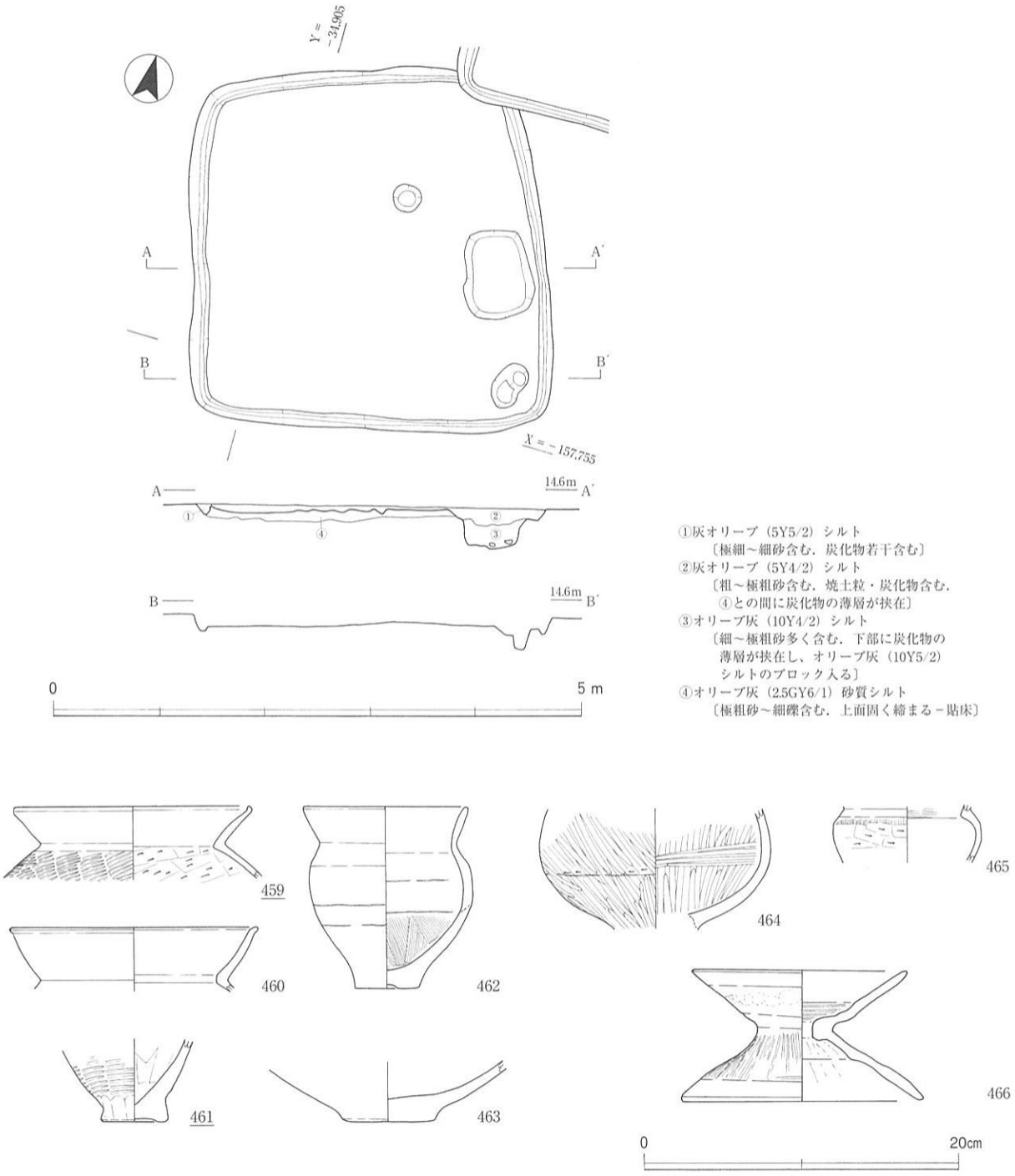



図51　513竪穴住居　平・断面図，出土遺物

以上の513竪穴住居出土土器は、庄内式期初頭以前に遡る462～464を埋土中への混入と見なせば、おおむね庄内式期後半におさまるものと考えられ、住居の機能～廃絶の時期を当該期に求めることができよう。

〔514竪穴住居〕（図52）

Ｃ９－ｅ～ｆ10・Ｃ10－ｅ～ｆ１区において検出した竪穴住居で、南西隅が513竪穴住居の北東隅と重複し、これを切っている。東西・南北両方向の筋堀と重なってしまったため、住居中央部分を中心に調査できなかった部分が多いが、平面形は一辺約4.9ｍの方形を呈し、南北軸はＮ２°Ｅ方向を指す。掘り方を含む埋土は３層に分かれ、このうち極粗砂～細礫を多く含むオリーブ灰色シルトから構成される層厚10cm前後の最下層は、上面が硬く締まり、この上で住居に関連する各遺構が確認されたことから貼床と認識した。住居埋土である上・中層は、いずれも炭化物粒を多く含む灰オリーブ色シルトであるが、上層には粗砂～細礫が多く含まれ、下層は相対的に砂質が強い。床面までの深さは検出面から0.1～0.15ｍと浅く、上面は削平を受けている可能性が高い。

床面上では壁溝・ピット・土坑が確認されたが、検出し得た床面が面積にして全体の３分の１ほどであるため、炉の存否を含め詳細は不明である。壁溝は検出した部分にはすべて存在し、本来は全周して

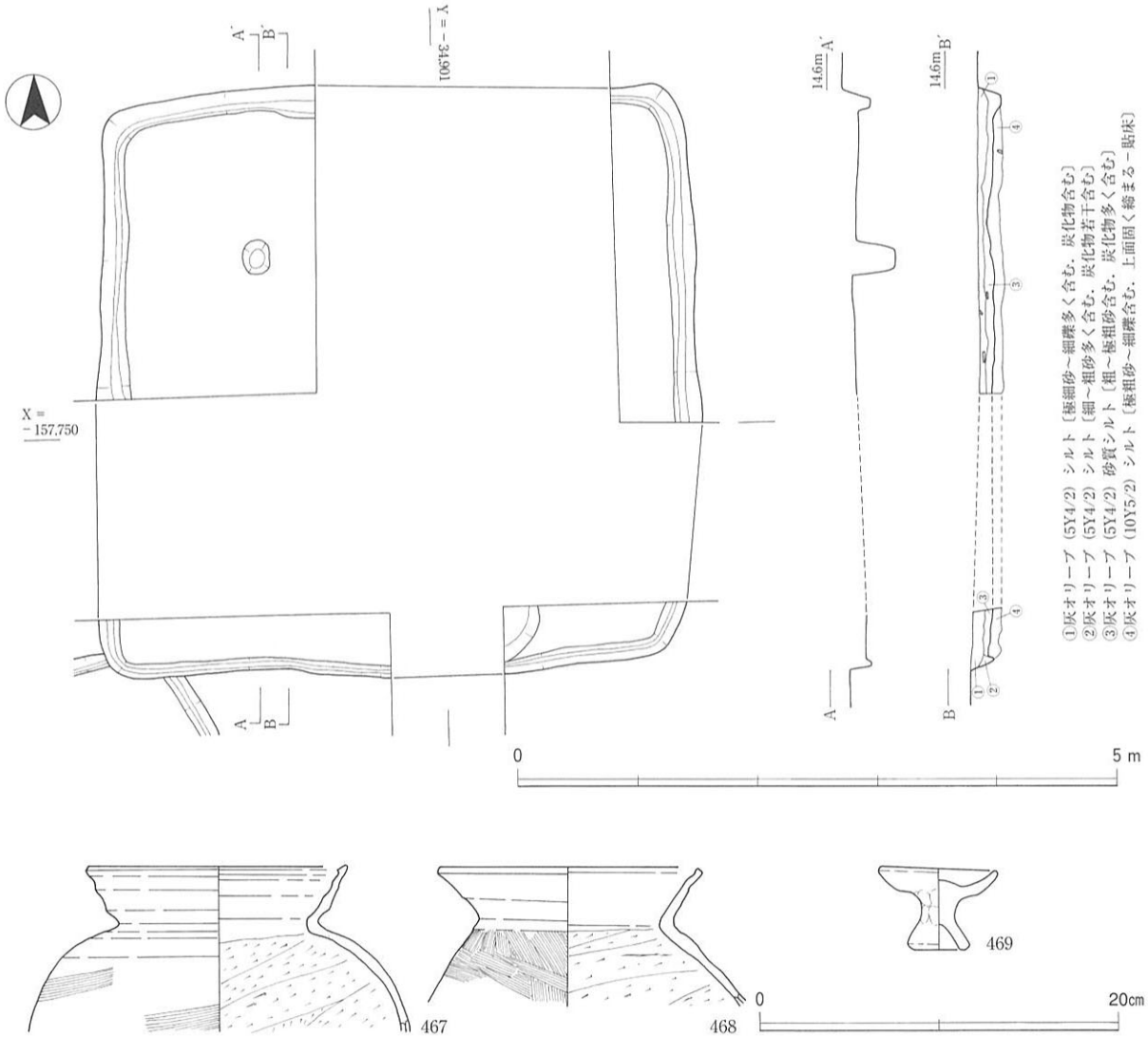



図52　514竪穴住居　平・断面図，出土遺物

いたと考えられる。溝幅は0.1～0.3mを測り、南壁際がやや幅狭で浅くなっている。ピットは、北西隅から対角線上1.7m内側の位置において1基検出された。長径0.3m、短径0.2m、床面からの深さ0.3m強を測り、位置的に見て主柱穴の可能性が高い。土坑は南壁際の中央からやや東側に寄った位置に存在する。平面規模は不明であるが、深さは0.3mを測り、炭化物・焼土粒を多量に含む灰色シルトを埋土としていた。

住居内からはコンテナ1箱分ほどの土器が出土したが、いずれも細片であり、図化し得たものは土坑から出土した3点に過ぎない。467・468はともに体部外面をハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げた布留式甕である。前者の口縁部が内湾して立ち上がり、端部を内側に肥厚させて内傾する端面を持つこの型式に定型的な形態を採っているのに対し、後者のそれは直線的で、端部は斜め上方に小さく摘み上げられている。469はミニチュアの土器である。

わずか3点ではあるが、514竪穴住居から出土した土器はいずれも布留式期前半の所産と捉えられ、先行して存在した513竪穴住居の時期を勘案すれば、本住居の機能～廃絶の時期も当該期に求めることができよう。

〔479・573竪穴住居〕（図53，図版19－2）

514竪穴住居の南東側、C9－f10区において検出した2棟の竪穴住居である。両者は重複関係を有し、南側の479が573の南半部と重なってこれを切り、さらにこの両住居を調査区南東端から北北西へ延び、途中「く」の字に曲がって北北東方向へ走行する478溝が切っている。

479竪穴住居は、北西隅を478溝によって失われているが、南北長3.2m、東西長3.6mを測るやや東西方向に長い方形を呈し、長軸はN65°E方向を指す。

住居埋土は大きく2層に分かれ、ともに層厚10cmほどの粗砂～細礫を含む灰オリーブ色シルトから構成されるが、下層の方がより細粒で、相対的に色調も暗い。なお、本住居では貼床は認められず、検出面から床面までの深さは0.2m前後と浅いことから、やはり上面が削平を受けているものと考えられる。

床面上では壁溝・ピットが確認されたが、炉は認められなかった。壁溝は全周し、溝幅0.15～0.2m、深さ0.05～0.1mを測るが、南壁中央付近から西壁中央にかけては0.4～0.5mと幅太となっている。ピットは北西隅を除く各隅において、対角線上0.5～0.7m内側で3基が検出された。径0.2～0.25m、深さ0.2mと小規模ではあるが、位置関係から主柱穴と考えられる。

住居内からはコンテナ2箱分近くの多量の土器が出土したが、大部分は細片であり、図化し得た資料は2点に過ぎない。このうち、470の小型丸底土器は中央からやや南寄りの床面から出土した完形品で、扁球形の体部から口縁部がやや急角度で長く延び、外面にはやや粗雑なヘラミガキ調整が横方向に施されている。471は南東部の床面に近い埋土中から出土した高坏坏部である。坏部屈曲部はシャープさが失われつつあるが、精良な胎土で製作され、直線的となった器体の内外面には緻密な横方向のヘラミガキ調整が施されている。

以上の479竪穴住居出土土器は、床面出土の小型丸底土器の形態的特徴から布留式期前半でも時期が下降する資料と考えられ、本住居の機能時あるいは廃絶の時期も当該期に求めることができよう。

一方、573竪穴住居については、検出当初における認識が不十分であったことも手伝って床面を確認できず、結果として掘り方を検出し得たのみである。平面形は南北に長い長方形を呈し、南北長推定4.8m、東西長3.65m、長軸はN10°W方向を指す。

掘り方内の埋土は大きく3層に分かれ、上・中層は層厚各10cmの灰オリーブ色シルト、下層は層厚15

～20cmのオリーブ灰色砂質シルトから構成される。掘り方の下面が軟弱で凹凸が著しいことから、下層は住居の貼床であった可能性が高く、上・中層が住居埋土であったと捉えられる。住居に伴う施設に関しても明確ではないが、479竪穴住居の床面を掘り下げる途中で検出した長径0.55m、短径0.45mの楕円形土坑は、本住居に伴っていた可能性がある。なお、性格は不明であるが、土坑西側の下層中からは拳大の礫が集中して出土した。

住居内からはコンテナ半箱分ほどの土器が出土したが、細片が大半を占めており、下層から出土した

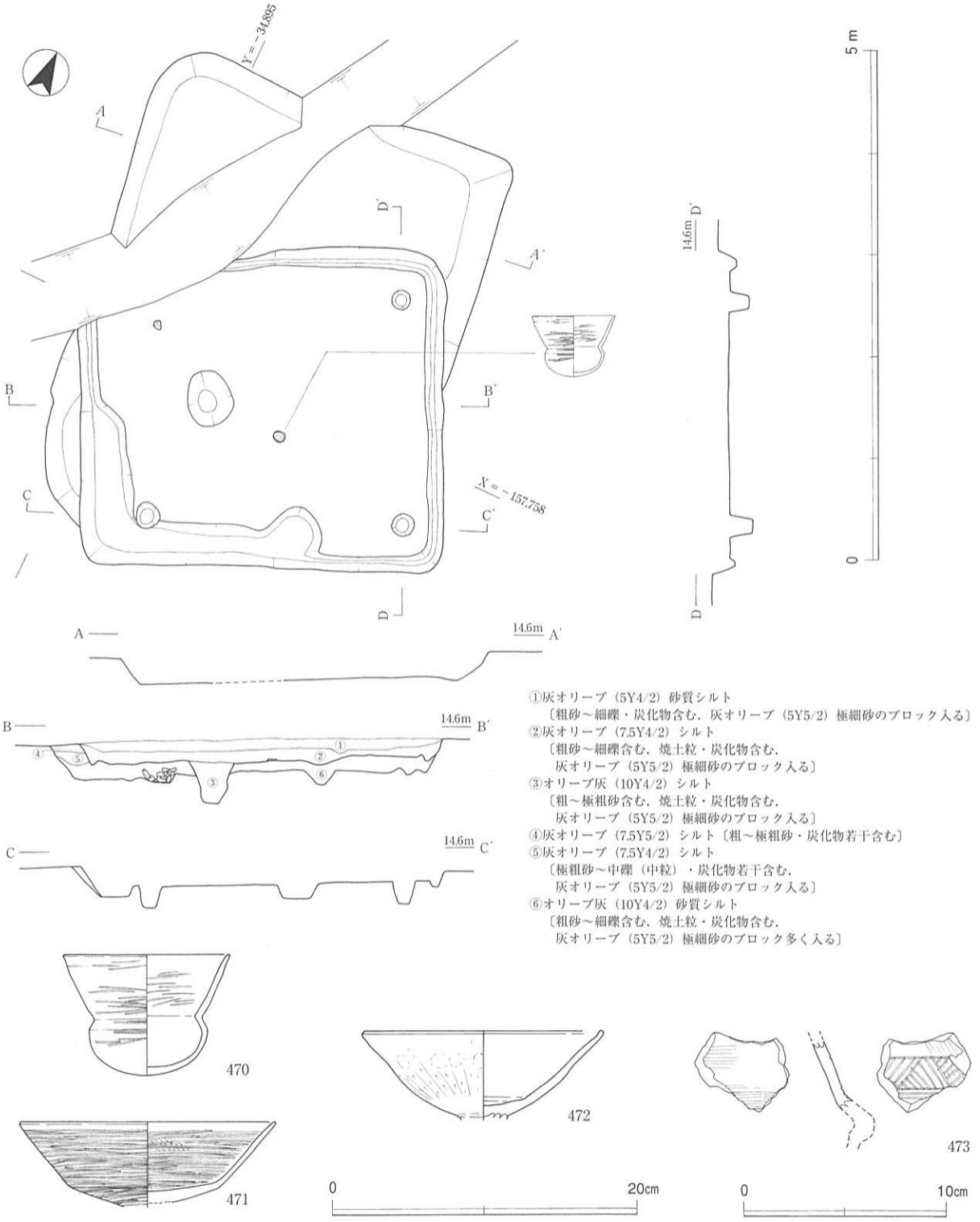



図53　479・573竪穴住居　平・断面図，出土遺物

２点を図化し得たのみである。472は脚部接合部から鉢状に開く高坏坏部で、外面は口縁部付近にヨコナデを施した後に縦方向のヘラケズリ調整を行い、内面はナデ調整で仕上げている。473は手焙形土器の覆部破片で、ヘラ状工具による鋸歯文が描かれている。この他図示していないが、出土土器の中には弥生時代後期の甕の系譜を引く太筋のタタキ成形を施した甕の体部や平底底部、低脚高坏の脚部などの破片も含まれており、本住居は479竪穴住居に先行する庄内式期後半～布留式期初頭に機能していたものと捉えておきたい。

〔521竪穴住居〕（図54・55，図版19－３）

Ｃ９－ｄ・ｅ10区において検出した住居である。平面形は東・西壁が胴張りとなった東壁側へ開く台形を呈し、規模は南北長が西壁寄りで4.3m、東壁寄りで4.7m、東西長は最も胴の張った部分で4.8mをそれぞれ測り、東西軸はＮ80°Ｅ方向を指す。

掘り方を含む埋土は大きく６層に分けられるが、上部の２層及びその下に存在する炭化物の薄層を除去したオリーブ灰あるいは灰色シルト層の上面は硬く締まり、住居に関連すると考えられる諸遺構もこの上で確認されたことから、この炭化物層除去面を床面と認識し、以下の層を貼床と捉えた。床面まで

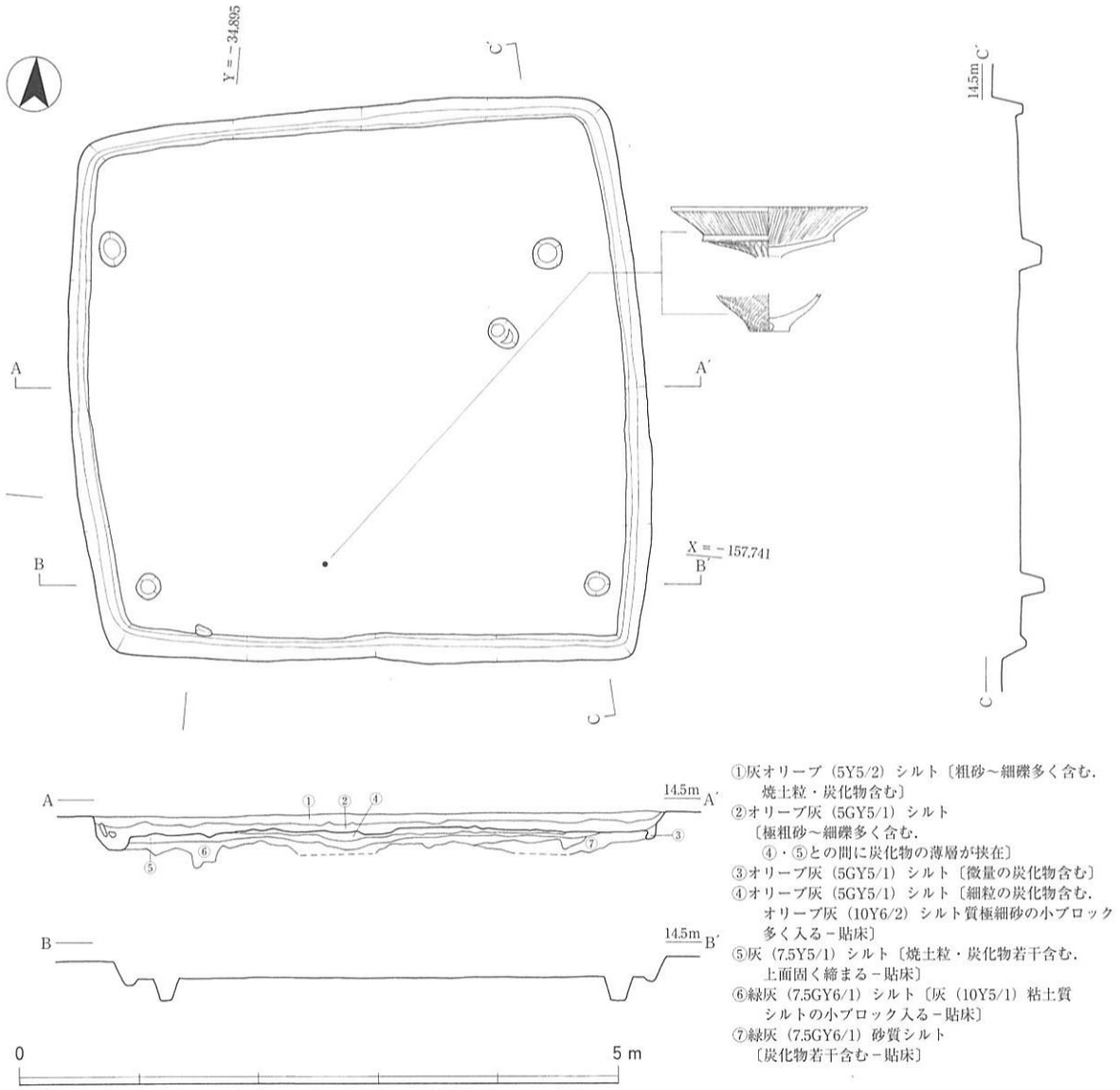



図54　521竪穴住居　平・断面図

の深さは検出面から0.15m前後と浅く、上面は削平を受けているものと考えられる。

床面上では壁溝・ピットが確認されたが、炉は認められなかった。壁溝は全周し、幅0.2～0.25m、深さ0.05m前後を測る。ピットは計５基を検出した。いずれも径0.2～0.3m、深さ0.2m前後と小規模であるが、東・西壁際に存在する４基が位置関係から主柱穴として組み合うものと推定される。

住居内からはコンテナ１箱分ほどの土器が出土し、このうち５点を図示した。474・478は住居南東部、476は北西部のそれぞれ埋土中より出土し、475は477とともに南壁際中央の床面から出土したものである。474は広口壺の口縁部で、外面タテハケ、内面ヨコハケ調整の後、ナデ調整を加えている。475は有稜の高坏坏部である。比較的下位に位置する屈曲部から口縁が外反して広がり、内外面には縦方向のミガキ調整が往復するように施されている。476～478は体部外面に右上がりの太筋のタタキ痕を残す甕で、内面は476・477がナデ調整、478がハケ調整後ナデにより仕上げている。

以上の521竪穴住居出土土器のうち、床面から出土した高坏はその形態的特徴から庄内式期初頭の所産と見なされ、本住居の機能時あるいは廃絶直後の時期も当該期に求められるものと考えられる。

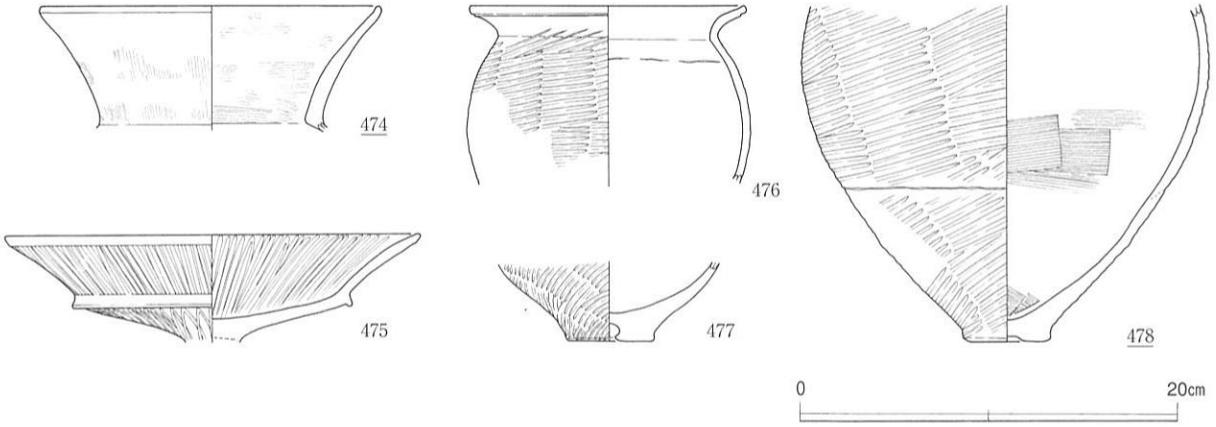



図55　521竪穴住居　出土遺物

〔522竪穴住居〕（図56，図版20－１）

Ｃ10－ｄ～ｅ１・２区において検出した方形の竪穴住居である。重複する440・447方形周溝墓によって西壁の北半と北・東壁の一部が失われているが、一辺5.5mと今回検出した住居の中では最大の規模を擁し、南北軸はＮ７°Ｅ方向を指す。

掘り方を含む埋土は、局所的な堆積物を除けば大きく３層に分かれ、上・中層は粗砂を多く含む灰オリーブ色シルトと灰色シルト、下層は緑灰色シルトのブロックを多量に含む灰オリーブ色シルトから構成される。このうち10cm前後の層厚を有する下層は、上面が硬く締まり、この上で住居に関連する各遺構が確認されたことから貼床と考えられる。住居埋土である上・中層の層厚は、両層合わせても10cm以下と非常に薄く、上面はかなりの削平を受けているものと考えられる。

床面上では壁溝・ピットが確認されたが、炉は認められなかった。壁溝は壁を検出し得た部分にはすべて存在し、幅0.1～0.2m、深さ0.05m前後を測る。ピットは３基検出され、440方形周溝墓に切られた北西隅を除く各隅の対角線上0.5m内側に位置する。いずれも径0.2～0.3m、深さ0.2m前後と小規模ではあるが、位置関係から主柱穴の可能性が高い。

住居内からはコンテナ半箱分ほどの土器が出土したが、細片が大部分を占め、図化し得たのは南壁際西寄りの床面から出土した小型丸底土器１点（479）のみである。口径と体部最大径がほぼ等しい鉢形を呈し、口縁部が短く直立気味に外傾するという特徴から庄内式期後半～末の所産と考えられ、本住居

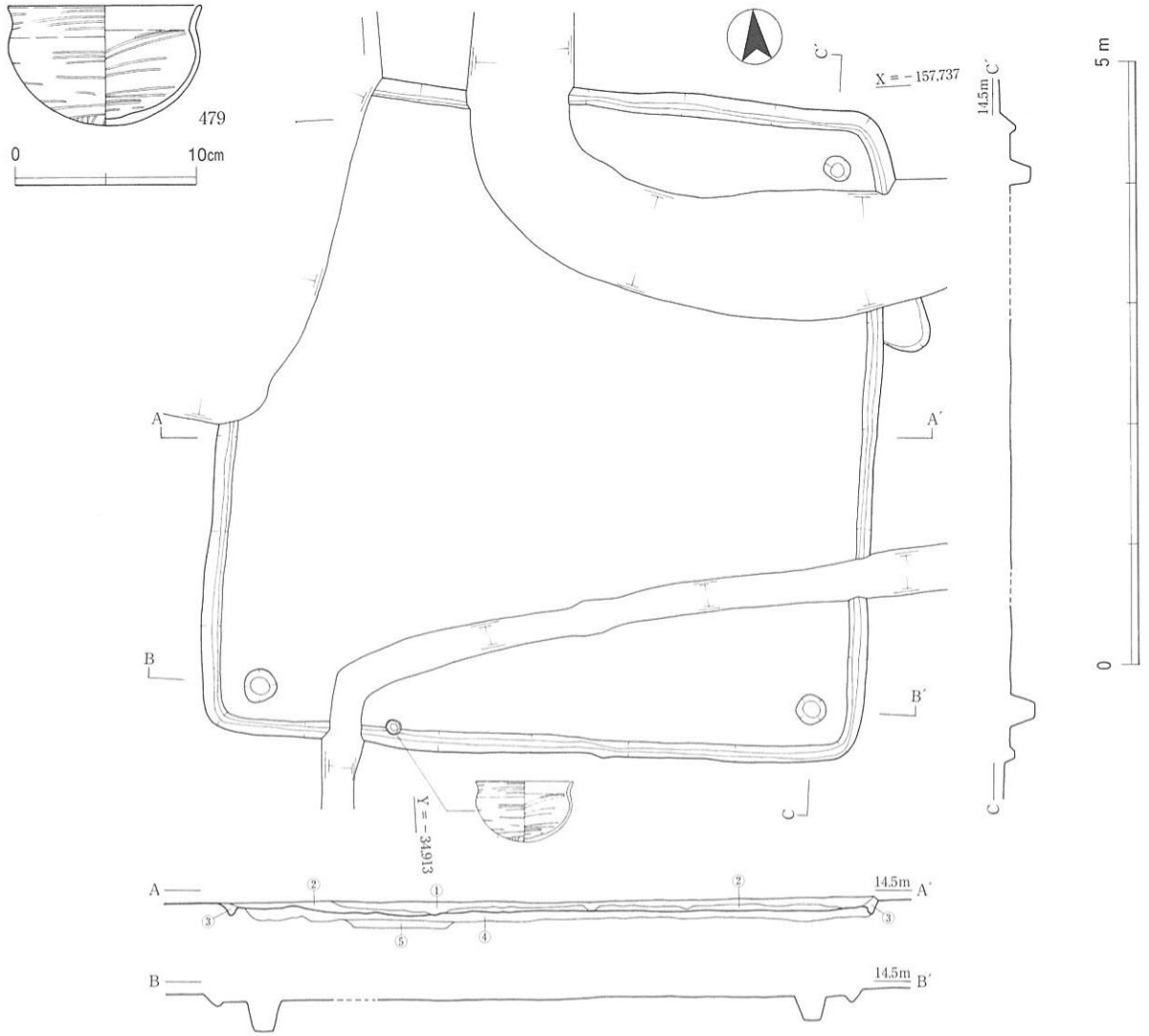



図56　522竪穴住居　平・断面図，出土遺物

の機能時あるいは廃絶直後の時期も当該期と捉えておきたい。

〔564竪穴住居〕（図57，図版20－２）

Ｃ９－ｄ・ｅ10～Ｃ10－ｄ・ｅ１区において検出した竪穴住居で、521竪穴住居の1.4m西側に位置する。南北方向の筋堀と重複してしまったため、北西隅を除き西半の大部分が失われているが、南北長5.2m、東西長4.3mの長方形を呈し、長軸は同じく長方形住居である573竪穴住居とほぼ同一のＮ13°Ｗ方向を指す。

住居内の埋土は、粗砂～細礫を多く含む灰オリーブ色シルト～砂質シルトから構成されるが、貼床に関しては、住居周辺が第７～６面の流路と重なり複雑な堆積状況を呈していたことから、明確に把握できなかった。検出面から床面までの深さは0.1～0.15mと浅く、上面はやはり削平を受けているものと考えられる。

床面上では壁溝・ピットが確認されたが、筋堀によって床面西半部が検出できなかったため、炉の存

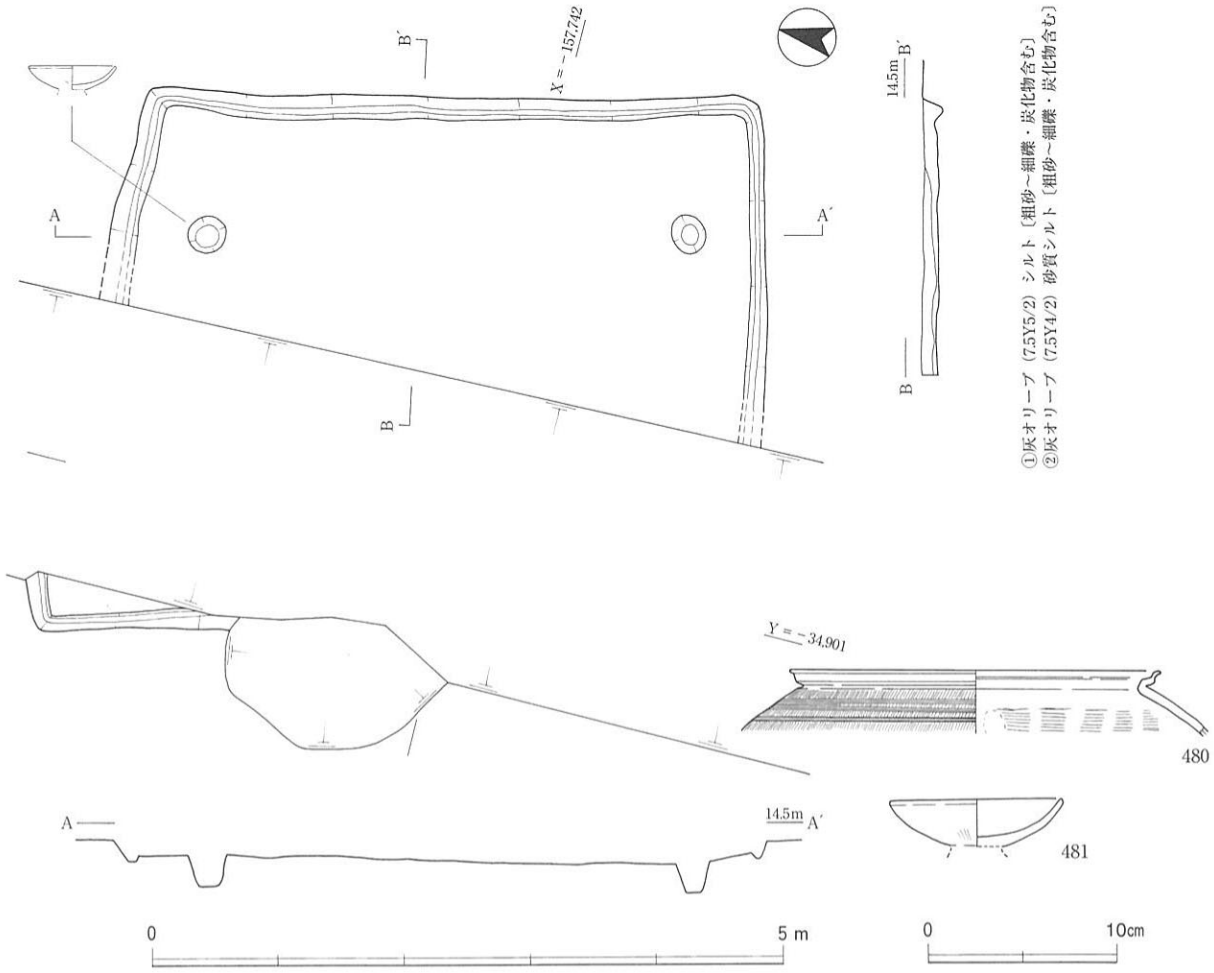



図57　564竪穴住居　平・断面図，出土遺物

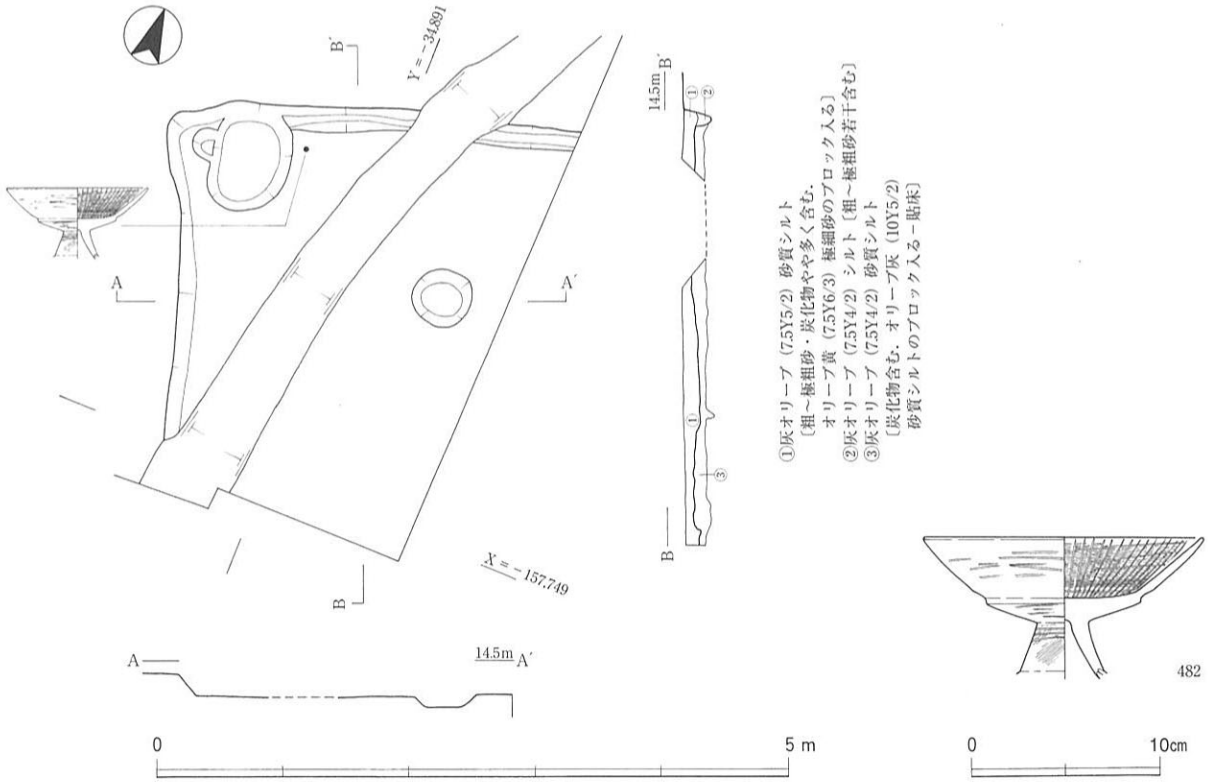



図58　572竪穴住居　平・断面図，出土遺物

否については不明である。壁溝は壁を検出し得た部分ではすべて存在し、幅0.1～0.2m、深さ0.05m前後を測る。ピットは2基検出され、東壁の内側1.1m辺りに壁と平行して存在する。いずれも径0.3m前後、深さ0.25mと小規模であるが、主柱穴である可能性が高い。

住居内からはコンテナ1箱分ほどの土器が出土したが、細片が大部分を占め、図化し得たのは2点のみである。480は伊勢湾沿岸地域に通有なS字状口縁台付甕の口縁部で、住居南半の埋土中から出土した。口縁部は上段が外反し、体部外面の上半にはタテハケの後、ヨコハケ調整が施されている。481は北側のピットから出土した小型器台の受部で、口縁端部は上方への摘み上げを行わずに丸く仕上げている。いずれも庄内式期後半の所産と考えられる。

〔572竪穴住居〕（図58，図版20－3）

C9－e9・10区において検出した方形の竪穴住居である。南側が東西方向の筋堀と重なり、東側が調査区外となってしまったことから本来の規模は不明であるが、検出し得た長さは北壁で3.3m、西壁で2.6mを測り、西壁はN18°W方向を指す。

掘り方内の埋土は大きく2層に分かれ、上層は粗砂～極粗砂を含む灰オリーブ色砂質シルト、下層はそれよりもやや暗色の灰オリーブ色砂質シルトから構成される。このうち、層厚5～10cmを測る下層にはオリーブ灰色砂質シルトのブロックが多く含まれ、この上面で住居に関連する遺構が確認されたことから貼床と考えられる。検出面から床面までの深さは0.1m前後と浅く、上面は削平を受けているものと考えられる。

床面上では壁溝・土坑・ピットが確認された。壁溝は北壁際にのみ存在し、幅0.15～0.2m、深さ0.1mを測る。土坑は2基検出され、うち1基は北西隅から0.5mほど東に寄った北壁際に存在する。長径0.9m、短径0.6m、深さ0.2mの楕円形土坑で、西側肩部中央には径0.25m、深さ0.15mのピットが掘られていた。もう1基の土坑は北西隅から対角線上2.5m内側に位置し、径0.45mの円形を呈する。床面からの深さは0.1m足らずと非常に浅く、皿形の壁面には弱いながら被熱が認められたことから、炉の痕跡の可能性が考えられる。

住居内からの出土遺物はコンテナ半箱弱と他の住居と比して少なく、図化し得たのは楕円形土坑の東側の床面上で、口縁部を下にして出土した高坏1点（482）のみである。断面逆台形の坏部に短い脚部を付すもので、坏部と脚部外面の最終調整は横方向のヘラミガキ、坏部内面にはハケ調整の後に細いヘラミガキを放射状に加えている。庄内式期末～布留式期初頭の所産と考えられ、本住居の機能時あるいは廃絶直後の時期も当該期と考えられる。

〔471井戸〕（図59）

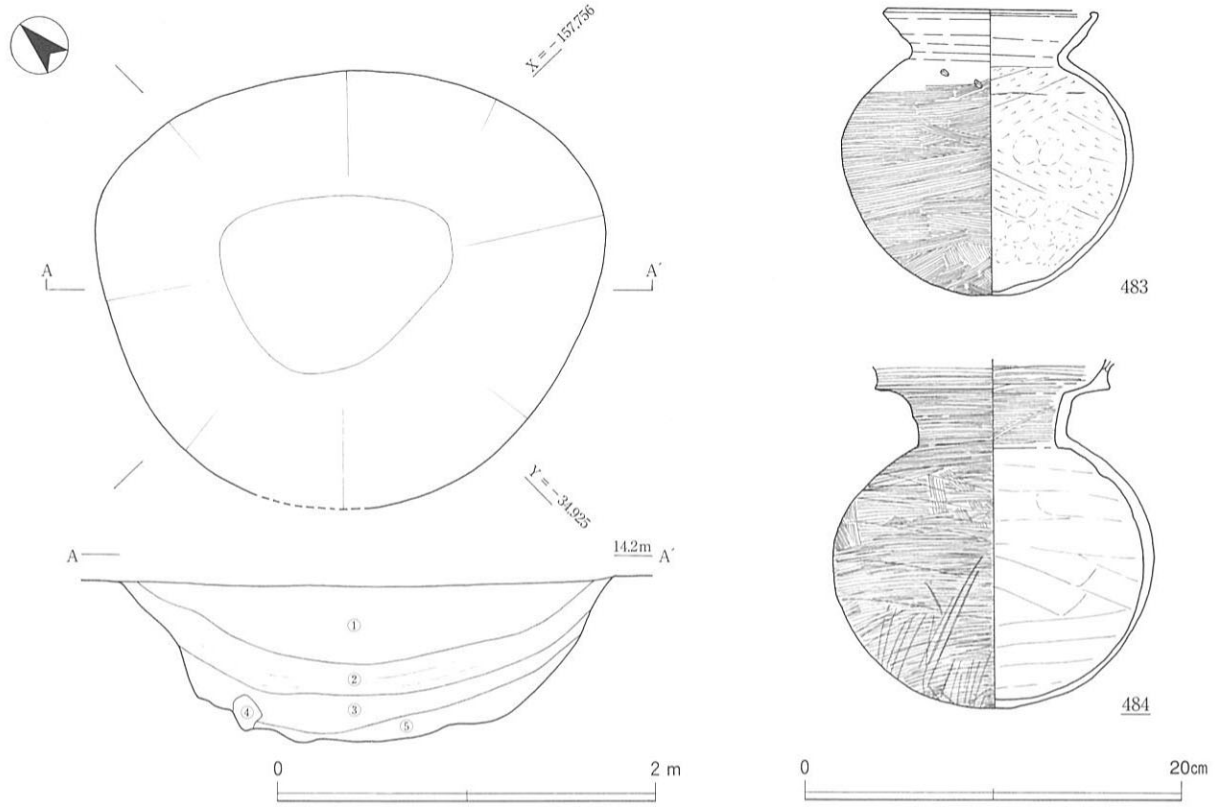
C10－f3区において検出した素掘りの井戸である。平面形は北西－南東方向に長い楕円形を呈し、長径2.65m、短径2.3mを測る。検出面からの深さは0.8mで、側壁は長径1.2m、短径0.9mほどのやや凹凸のある底面から比較的緩やかに立ち上がる。埋土は4層に分かれ、底面に近いオリーブ黒色粘土層からは図示した2点の土器が出土した。

483は内湾して立ち上がる口縁部の端部内側を小さく肥厚させ、体部外面をタテハケの後にヨコハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げた定型的な布留式甕である。体部上半には押捺紋が認められる。484は頸部が垂直に立ち上がる二重口縁壺で、二次口縁部分は欠損している。丸底球形の体部外面には縦方向のハケ調整の後に疎らながら細いヘラミガキを加え、頸部には内外面とも細密な横方向のヘラミガキ調整を施している。以上はいずれも布留式期前半の所産と考えられ、471井戸の廃絶も当該期に求

められよう。

〔608井戸〕（図60・61，図版21）

Ｃ10－ｃ１・２区において検出した素掘りの井戸である。平面形は径1.5～1.6ｍの不整円形を呈するが、上部の20cmほどを477方形周溝墓の南周溝及び522竪穴住居によって壊されており、本来は径1.7ｍ程度の規模を有していたものと考えられる。検出面からの深さは1.8ｍを測り、側壁は径0.7ｍほどの底面から急傾斜で立ち上がっている。埋土は９層に分かれ、いずれも粘土質シルト～シルト質極細砂といっ




①オリーブ黒（5Y3/1）シルト〔粗砂多く含む〕
②灰（5Y4/2）シルト〔有機物の薄層が数枚挟在〕
③オリーブ黒（7.5Y3/1）粘土質シルト〔有機物多く含む〕
④暗緑灰（7.5GY4/1）シルト
⑤オリーブ黒（7.5Y3/1）粘土質シルト〔暗緑灰（10GY4/1）極細砂のブロック多く入る〕

図59　471井戸　平・断面図，出土遺物

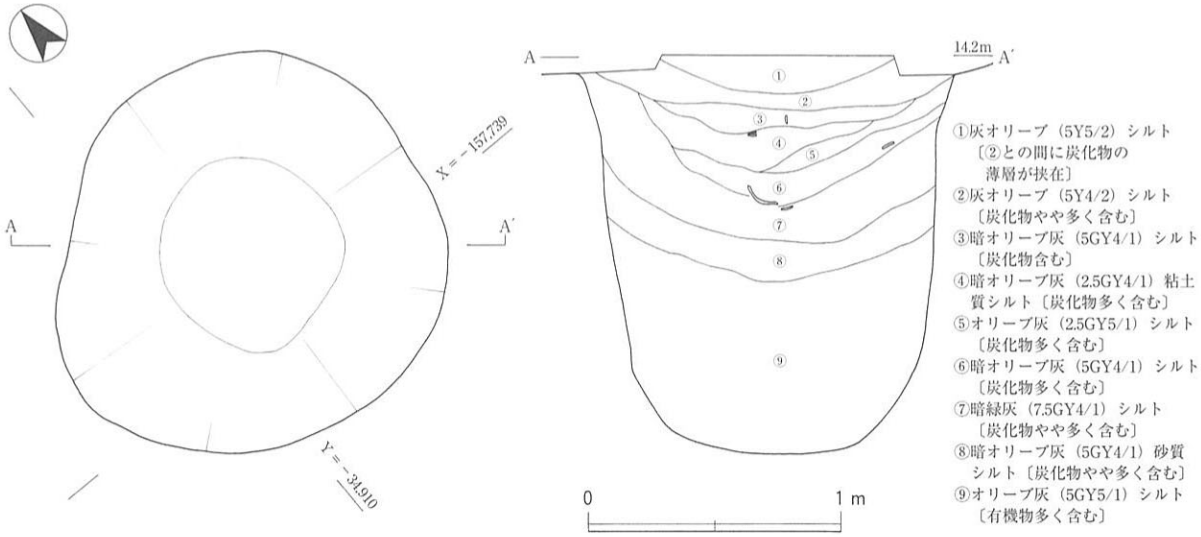



図60　608井戸　平・断面図

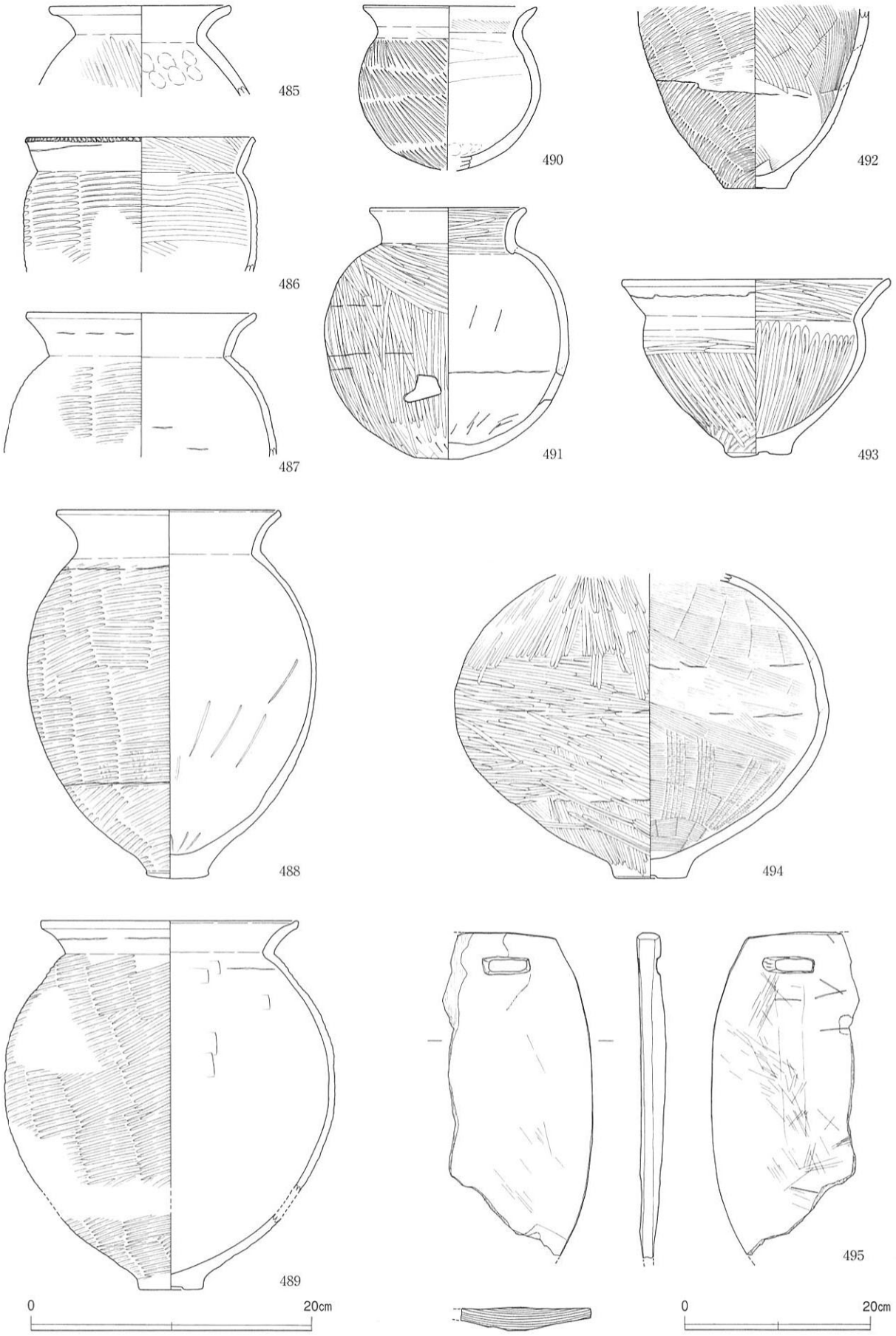



図61　608井戸　出土遺物

た細粒の堆積物により構成されている。このうち、上から③～⑦層の暗オリーブ灰～暗緑灰色の粘土質シルト～シルト層と層厚70cmを測る最下層のオリーブ灰色シルト層には、炭化物粒・有機物が多く含まれ、遺物の大半もこの両者から出土した。

485～487・490・492は③～⑥層までの比較的上位より出土した資料で、485は広口壺、他は甕である。甕には体部外面に太筋のタタキ痕を残すものが多いが、490は同じ工具を用いてハケ状の調整を行っている。491・493はほぼ完形品で、⑦層中から口縁部を下にして並んで出土した。491は小さな平底を持つ球形の体部に短い口頸部を付した広口壺で、ヘラミガキ調整で仕上げられた体部下半には焼成後の穿孔が存在している。493はやや深めの体部から口縁部が直線的に外反する鉢で、底部は中央が凹んでドーナツ状を呈する。体部外面はタタキ成形後ヘラミガキ調整、内面は口縁部・体部ともヘラミガキ調整で仕上げられている。488・489・494は最下層の下部より出土した資料で、488・489は甕、494はおそらく広口壺であろう。甕の体部外面には、いずれも太筋のタタキ痕が明瞭に残っている。495は最下層の上部より出土した指物腰掛の座板の可能性が考えられる板状木製品で、長方形の枘孔が短辺に平行して設けられている。

以上の出土遺物を通観すると、甕はいずれも弥生時代後期以来の手法で製作されたものに限定されるものの、489のように胴が膨らんで球形化の進んだ個体が存在し、広口壺491の底部も平底が痕跡的となって丸底に近くなっていることから、庄内式期前半の所産である可能性が高く、608井戸の廃絶時期も当該期と考えられる。

〔610井戸〕（図62）

Ｃ10－ｆ２区において検出した素掘りの井戸である。平面形は北北東－南南西方向に長い楕円形を呈し、長径1.95m、短径1.65mを測る。検出面からの深さは1.3mで、側壁は径0.4mほどの小さな底面から70°前後の傾斜で立ち上がっている。５層に大別された埋土は、いずれも炭化物粒や有機物を多く含むシルトから構成され、このうち中心部で45cmほどの層厚を有する最下層の暗オリーブ灰色シルト層からは、図示した遺物が木片とともに出土した。

496はサヌカイト製石槍の折損品。497は近江系と考えられる受口状口縁甕で、口縁部外面には浅い２条の沈線が施され、端部は丁寧なヨコナデ調整によって平坦面を持つ。球形化が進んだ体部は、内面ナデ調整、外面は繊維束状の工具による条痕風のハケ調整の後、肩部と下半に浅い粗雑な沈線を加えている。498は尖底気味の底部を持つ庄内式甕で、タタキ成形後のハケ調整は体部上半まで施されている。499は平底を持つ壺の体部で、体部外面の最終調整は粗いヘラミガキである。500は小型直口壺の体部で、外面にはヘラケズリ調整の後、横方向の緻密なヘラミガキ調整が施されている。601は受部の口縁端部が僅かに上方に立ち上がる小型器台で、外面ならびに受部内面にはやはり横方向の緻密なヘラミガキ調整が施され、受部内面にはさらに暗文風の放射状のヘラミガキが加えられている。

以上の出土遺物のうち、土器類に関してはいずれも庄内式期後半の所産と考えられ、610井戸の廃絶も当該期に求められよう。

〔440方形周溝墓〕（図63～67，図版23～25）

Ｃ10－ｃ２・３～ｄ２・３区において検出した長方形の方形周溝墓で、Ｎ10°Ｅ方向に長軸を置く。検出面の標高は、墳丘上で14.5～14.55m、周溝の外側で14.45～14.5mと墳丘の方がわずかに高くなっているが、調査では主体部あるいはその痕跡を確認することはできなかった。

墳丘の規模は長辺長約10.2m、短辺長約8.9mを測り、今回検出した周溝墓の中では最大規模を擁する。

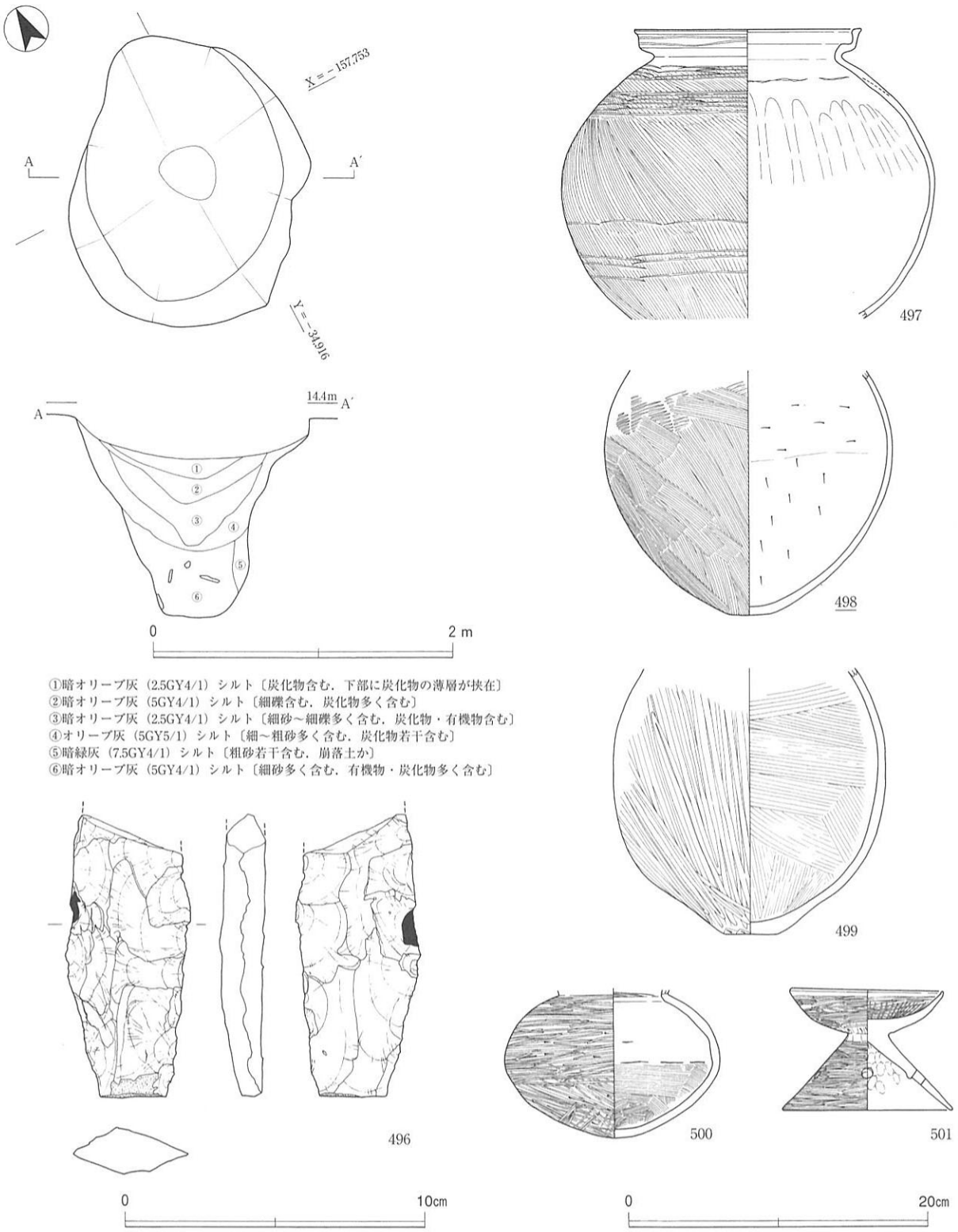
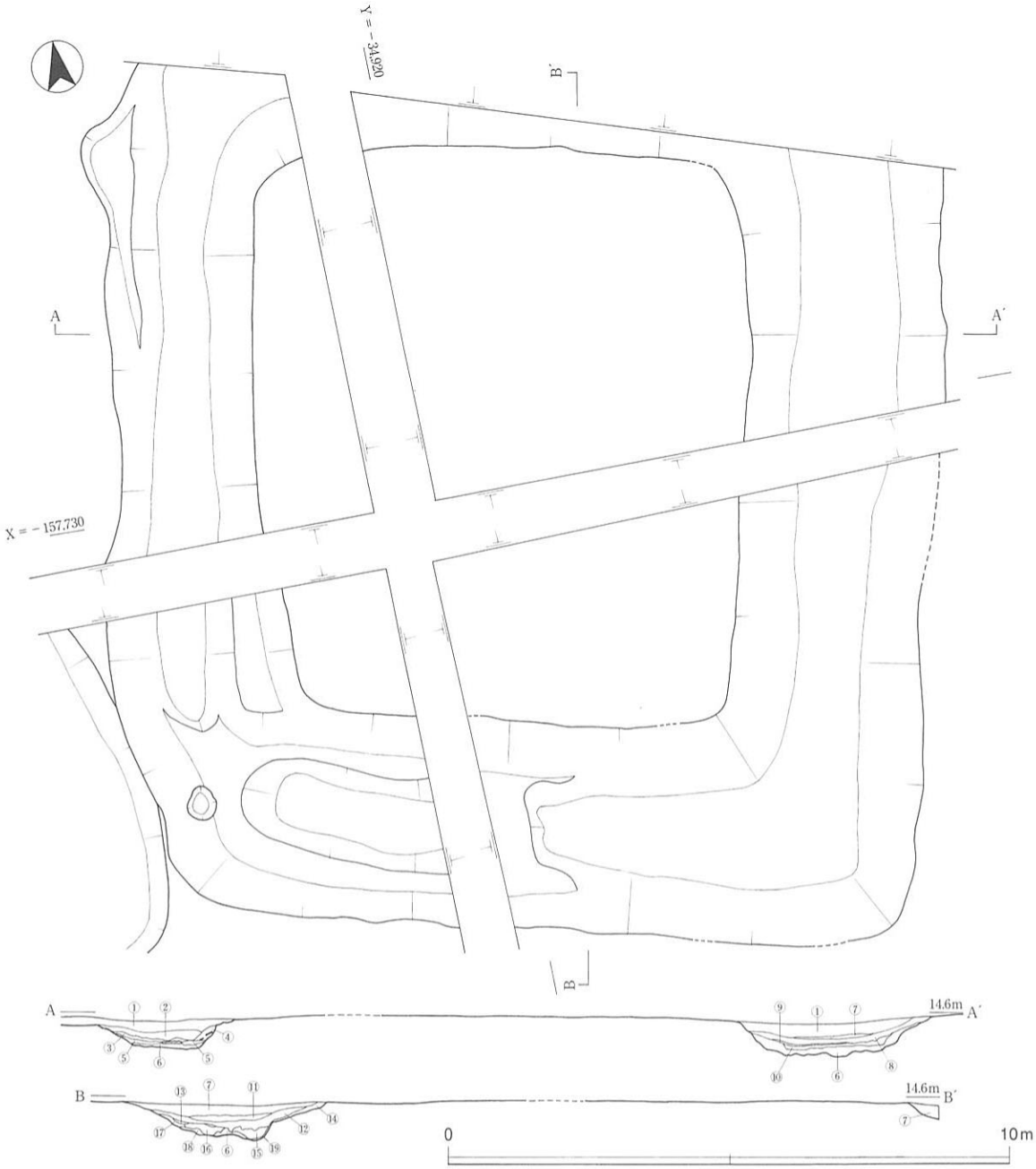



図62　610井戸　平・断面図，出土遺物

周溝は完周し、溝の肩は墳丘側がやや傾斜がきつく、外側は緩やかに掘られている。ただし、北側周溝については、大半が調査区外となってしまったため、墳丘側の肩部を確認し得たのみである。周溝の幅は2.4～3.9mで、西側が狭く、南側の周溝が最も広く掘削されている。検出面からの深さは平均で約0.5mを測るが、南側周溝の中央部と南西コーナーの２か所には幅１m前後の陸橋状の掘り残し部分が存在し、その両側では逆に0.7m以上と深くなっている。周溝の埋土は大きく３層に分かれ、下層に暗緑灰




①灰オリーブ（5Y5/2）シルト～極細砂〔細～粗砂含む〕
②オリーブ黒（7.5Y3/2）シルト質極細砂〔オリーブ褐（2.5Y4/4）極細砂のブロック入る〕
③灰オリーブ（5Y4/2）シルト〔炭化物含む〕
④オリーブ褐（2.5Y4/4）シルト質極細砂
⑤暗オリーブ灰（2.5GY4/1）シルト質極細砂
⑥暗緑灰（7.5GY4/1）砂質シルト〔暗オリーブ灰（2.5GY4/1）シルト質極細砂のブロック入る〕
⑦オリーブ黒（5Y3/2）粘土質シルト
⑧オリーブ黒（7.5Y3/2）粘土質シルト〔炭化物含む〕
⑨灰オリーブ（5Y4/2）粘土質シルト〔炭化物含む〕
⑩暗オリーブ灰（2.5GY4/1）シルト〔炭化物含む．暗緑灰（7.5GY4/1）砂質シルトのブロック入る〕
⑪オリーブ黒（5Y3/2）砂質シルト〔細～中砂含む．オリーブ黄（5Y6/3）極細砂のブロック入る〕
⑫灰オリーブ（5Y4/2）シルト〔粗砂・炭化物含む．灰オリーブ（5Y6/2）極細砂のブロック入る〕
⑬オリーブ黒（5Y3/1）シルト
⑭オリーブ黒（5Y3/2）シルト〔炭化物多く含む〕
⑮灰オリーブ（7.5Y5/2）シルト〔暗緑灰（7.5GY4/1）砂質シルトのブロック多く入る〕
⑯灰オリーブ（7.5Y4/2）シルト〔炭化物含む．暗緑灰（7.5GY4/1）砂質シルトのブロック入る〕
⑰灰オリーブ（7.5Y5/2）シルト〔炭化物若干含む〕
⑱暗オリーブ灰（2.5GY4/1）シルト質極細砂〔炭化物含む〕
⑲オリーブ灰（2.5GY6/1）砂質シルト

図63　440方形周溝墓　平・断面図

色砂質シルト、中層にオリーブ黒～暗オリーブ灰色の粘土質シルト～シルト質極細砂、上層に灰オリーブ色シルト～極細砂が堆積している。

周溝内からは、溝底あるいは肩部に接して比較的多くの遺物が出土しており、図64にはその出土状態を示した。西側周溝の中央部では、40個ほどの河原石や用途不明の板状木製品とともに5個体の土器が出土した。二重口縁壺4個体と直口壺1個体からなり、底部の遺存しない1点を除き、いずれも底部には焼成後の穿孔が認められる。こうした底部への穿孔は、南側周溝中央部の陸橋状部分から出土した二重口縁壺にも認められ、南東コーナーの墳丘裾から出土した二重口縁壺についても、出土位置や器種の共通性から穿孔が存在していた可能性が高い。これらの底部穿孔壺は、埋葬時に執行された葬送儀礼に使用された祭祀土器であったと考えられ、出土状態を勘案すれば、本来は墳丘上に置かれていたものが周溝内に転落したものと推定される。また、西側周溝の中央部で3個体の穿孔壺とともに検出された前述の板状木製品（502・503）は、これらの土器を載せておく台のような役割を果たしていた可能性が考えられる。

二重口縁壺は、いずれも筒状の頸部から口縁部が屈曲して外反する「茶臼山型」と呼ばれるもので、器高20cm未満の小型品（510～513）と25cmを超える中型品（514・519）がある。後者は2点とも生駒山西麓産の胎土で製作され、514には口頸部外面及び口縁端部内側の幅1.5cmの範囲、519には外面全体に淡黄褐色の化粧土が施されている。直口壺（508）は器高15cmに満たない小型品で、頸部の締まった球形の体部から口縁部が直線的に立ち上がる。口縁部内外面はヘラミガキ、体部外面下半はヘラケズリ調整で仕上げている。

一方、同じ南東コーナーでも対向する外辺に近い位置からは、広口壺・直口壺・甕・小型丸底土器・高坏・鉢といった二重口縁壺以外の器種が纏まって出土している。前述の祭祀土器がそれぞれ単独でかつ完形復元が可能な状態で出土しているのに対し、一部器形を留める個体は存在するものの、多くは破砕された状態で出土しており、出土位置を勘案すれば、周溝外側から廃棄されたものと考えられる。

壺には広口壺（517）と直口壺（521）があり、口縁部を欠損している518は508と同様の小型直口壺と考えられる。521は器高30cmを超える大型の直口壺で、口縁部は斜め上方へ外反気味に立ち上がり、丸底の体部は外面が縦あるいは斜方向のハケ、内面は頸部のやや下方までヘラケズリを施すなど、次に述べる甕と同様の調整で仕上げられている。甕は2個体（522・523）あり、いずれも体部外面全体を縦あるいは斜方向ハケ調整で仕上げ、内面は頸部よりわずかに下がった位置までヘラケズリ調整を施している。このうち器形全体が判る522は、口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部内側を小さく肥厚させている。高坏には、有段高坏（515）と有稜高坏（516）の2種が見られる。前者の坏部外面には櫛描列点文と波状文が施されているが、内面の稜線は鈍く、器壁も厚くなっている。また、後者は口縁部が外反して広がり、坏部の屈曲部はやや丸みを帯びている。小型丸底土器には、口径が器高を凌駕するものと若干器高が上回り、口径と体部最大径がほぼ同大の壺形のもの（509）とがあり、前者はさらにやや急角度で立ち上がった口縁部が長く延びるもの（505）、口縁部高と体部高がほぼ等しいもの（506）、口縁部が未発達なもの（507）がある。鉢（520）は口径が30cmを超える大型品で、口縁部は屈曲して立ち上がり、口縁端部内側を丸く肥厚させている。この他、土器以外では南東コーナー中央の溝底から用途不明の棒状木製品（504）、東側周溝の埋土上部からは混入品と考えられるサヌカイト製石槍の折損品（524）が出土している。

周溝から出土した以上の土器群は、庄内式期に遡る可能性を有する有飾の有段高坏を除けば、祭祀土

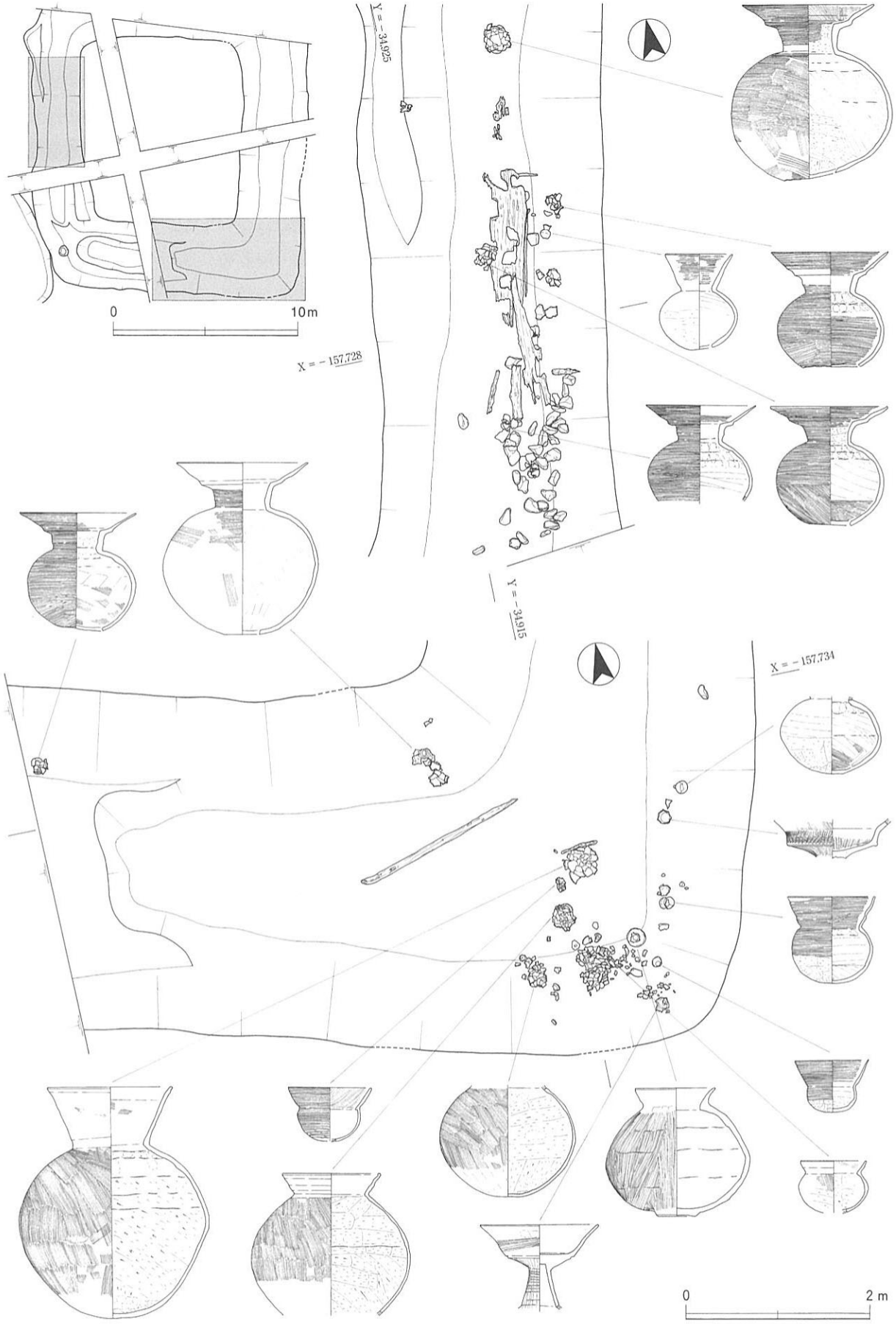



図64　440方形周溝墓　遺物出土状態図

図65　440方形周溝墓　出土遺物（1）

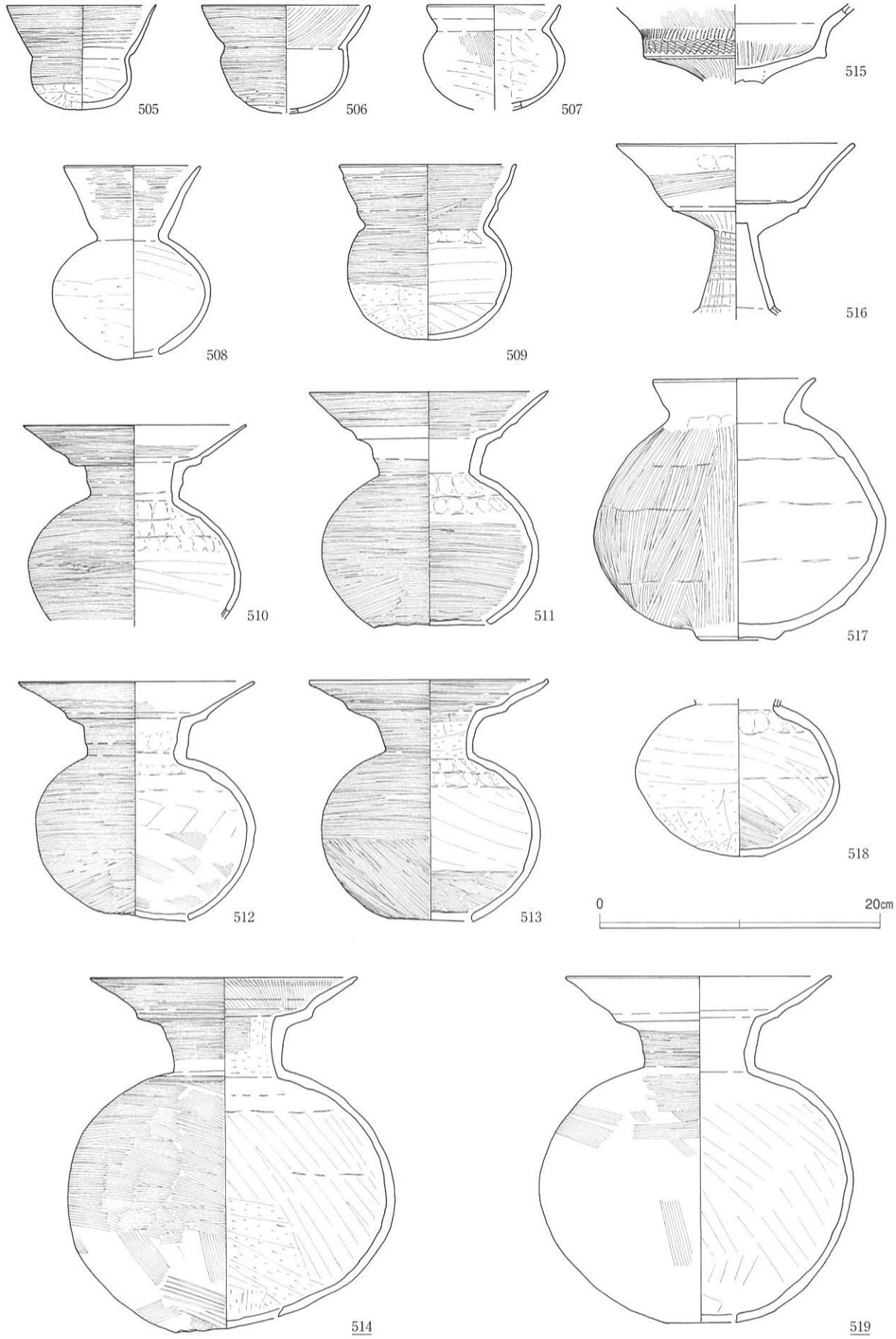



図66　440方形周溝墓　出土遺物（２）

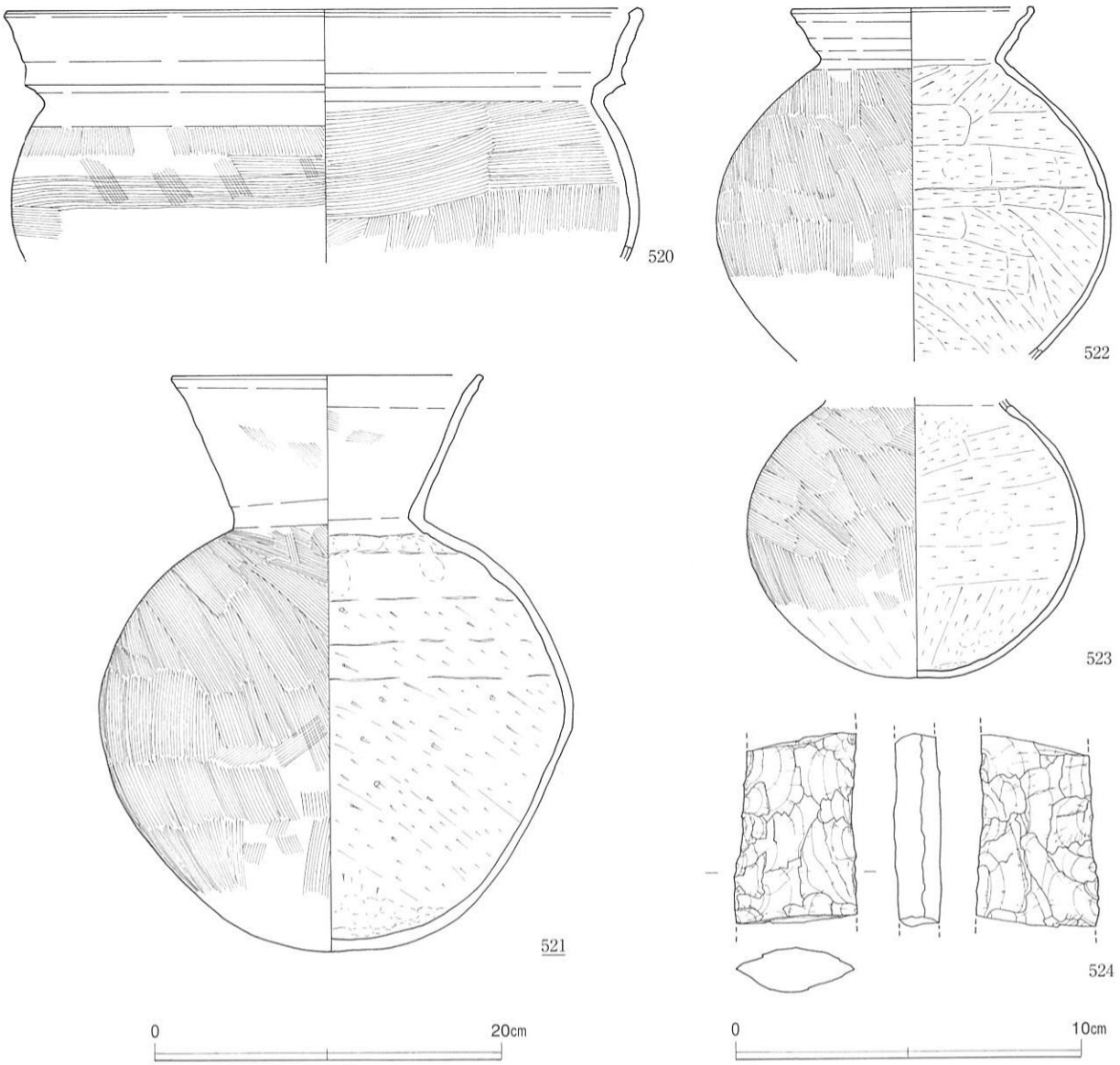



図67　440方形周溝墓　出土遺物（3）

器と見なした二重口縁壺・小型直口壺をはじめ、他はいずれも布留式期前半の所産と考えられ、甕に定型的な布留式甕が認められないものの、440方形周溝墓の築造時期についても当該期に位置付けておきたい。

〔441方形周溝墓〕（図68・69，図版23－1・図版26）

C10－c3・4～d3・4区において検出した長方形の周溝墓である。440方形周溝墓の西側に位置し、東側周溝の一部が440周溝墓の西側周溝と接するが、周溝埋土の観察では前後関係を確認することはできなかった。検出面の標高は、421落ち込みの東肩部に当たる西側周溝の外側を除き、墳丘上・周溝外とも14.5m前後とほぼ平坦である。

墳丘はN11°W方向に長軸を置き、長辺長約9.8m、短辺長約7.8mの規模を擁する。周溝は浅く掘り残されることなく完周し、溝の断面はいずれも椀形を呈する。幅は0.6～1.2m、検出面から溝底までの深さは0.3～0.5mを測るが、南西コーナーはやや丸味を帯びて張り出しており、幅も約1.6mと広がっている。周溝の埋土は1～2層に分かれ、中砂～中礫を多量に含む色調の暗い褐色系の極細砂を主体としている。ただし、421落ち込みと接する西側周溝は、埋土が4層に細分されるなど様相が異なっており、

下層～最下層に暗オリーブ灰～オリーブ黒色シルト、中層に黒褐色シルト質極細砂、上層に暗褐色極細砂が堆積している。

周溝から出土した遺物は比較的少ないが、二重口縁壺・直口壺・甕・小型丸底土器・椀形高坏の各器種計７点を図示し得た。いずれも溝底から0.2～0.3mほど浮いた位置で出土しており、周溝の埋没が一定程度進行した段階で溝内に入れられたものと考えられる。

二重口縁壺（525）は、南側周溝の中央からやや西に寄った位置で出土した。体部から口頸部が外反して立ち上がるもので、内面には一次・二次口縁間の段あるいは稜線は見られないが、外面には粘土帯を付加して明瞭な段を作出している。直口壺には、器高が20cmに満たない小型品（526）と25cm前後の中型品（528）がある。前者は外面にヘラミガキ調整を密に施した精製品で、口縁部内面にはハケ調整

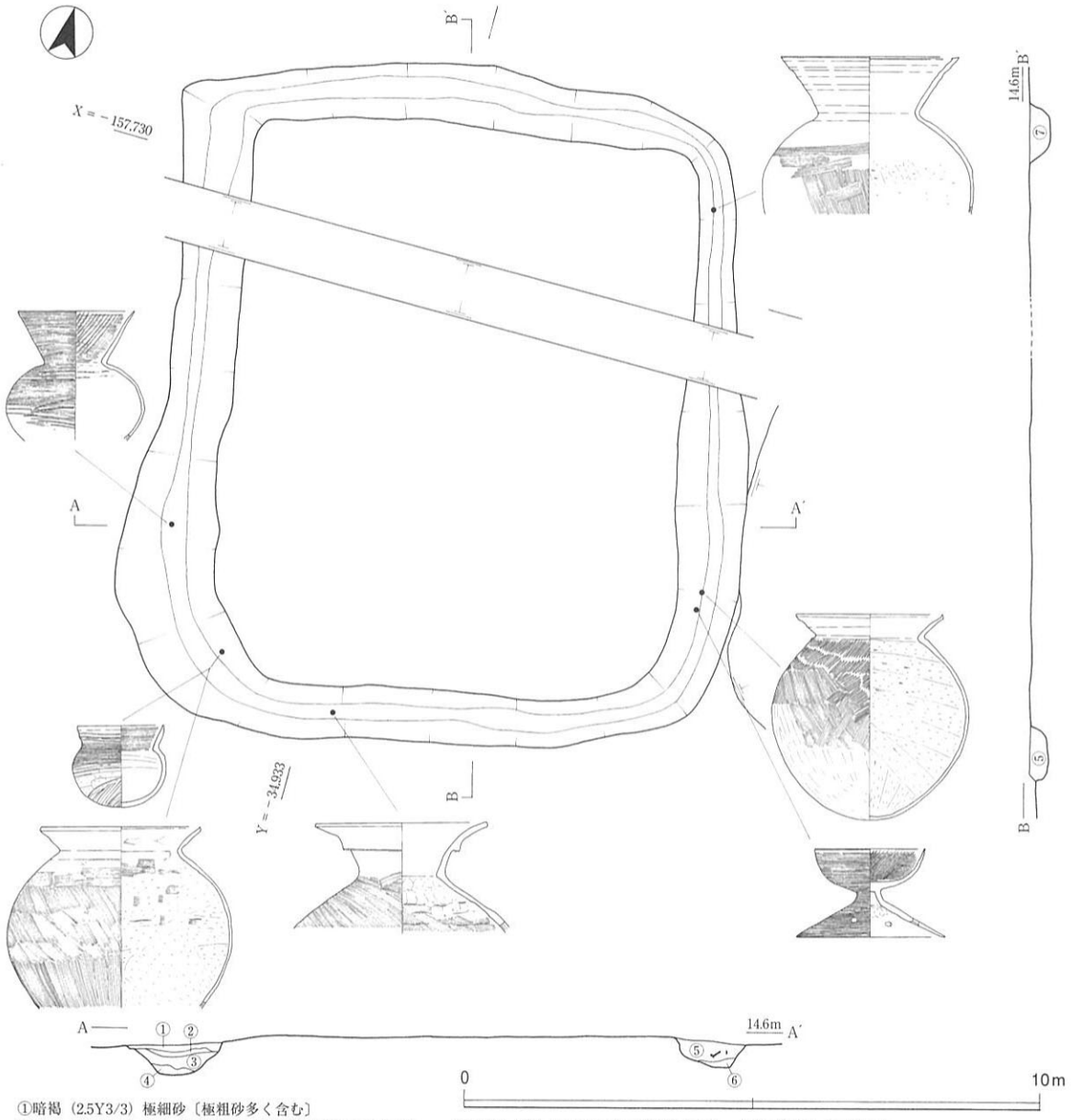



図68　441方形周溝墓　平・断面図

の上に暗文風のヘラミガキを加えている。一方、後者は口縁部が外反気味に大きく広がり、口縁端部には強いナデによって水平な幅広の端面が作り出されている。また、体部外面はタテハケ後に上半ヘヨコハケを加え、内面はヘラケズリを施すなど、定型的布留式甕と同様の調整手法を採っている。甕には、体部外面を右上がりのタタキ成形後ハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げた庄内式甕（527）と、体部外面全体にタテ・ナナメハケ調整を施した後上半ヘヨコハケを加え、内面をヘラケズリ調整で仕上げた布留式甕（529）の２種類がある。ただし、後者の口縁部は直線的に開き、口縁端部も上方に小さく摘み上げており、庄内式甕と同様の口縁部形態が採られている。小型丸底土器（530）は、口縁部の長さが器高の３分の１に満たない短いもので、体部外面の上半にハケ、下半にヘラケズリ調整を行った後、外面全体及び口縁部内面にヘラミガキ調整が施されている。椀形高坏（531）は、脚裾部の径が坏部径を大きく上回るもので、外面及び坏部内面には緻密なヘラミガキ調整が施されている。

以上の土器を通観してみると、庄内式甕や口縁部が未発達な小型丸底土器、低脚の椀形高坏など庄内式期に遡り得る資料が存在する一方で、口縁端部内側に端面を有する直口壺など布留式期前半でも後出する要素も認められ、出土土器には一定の時期幅を考慮する必要がある。前述した出土状況を勘案すれば、周溝の掘削自体は土器が示す時期より遡ることは確実であり、本周溝墓は440方形周溝墓に先行して築造された可能性が高いと考えられる。

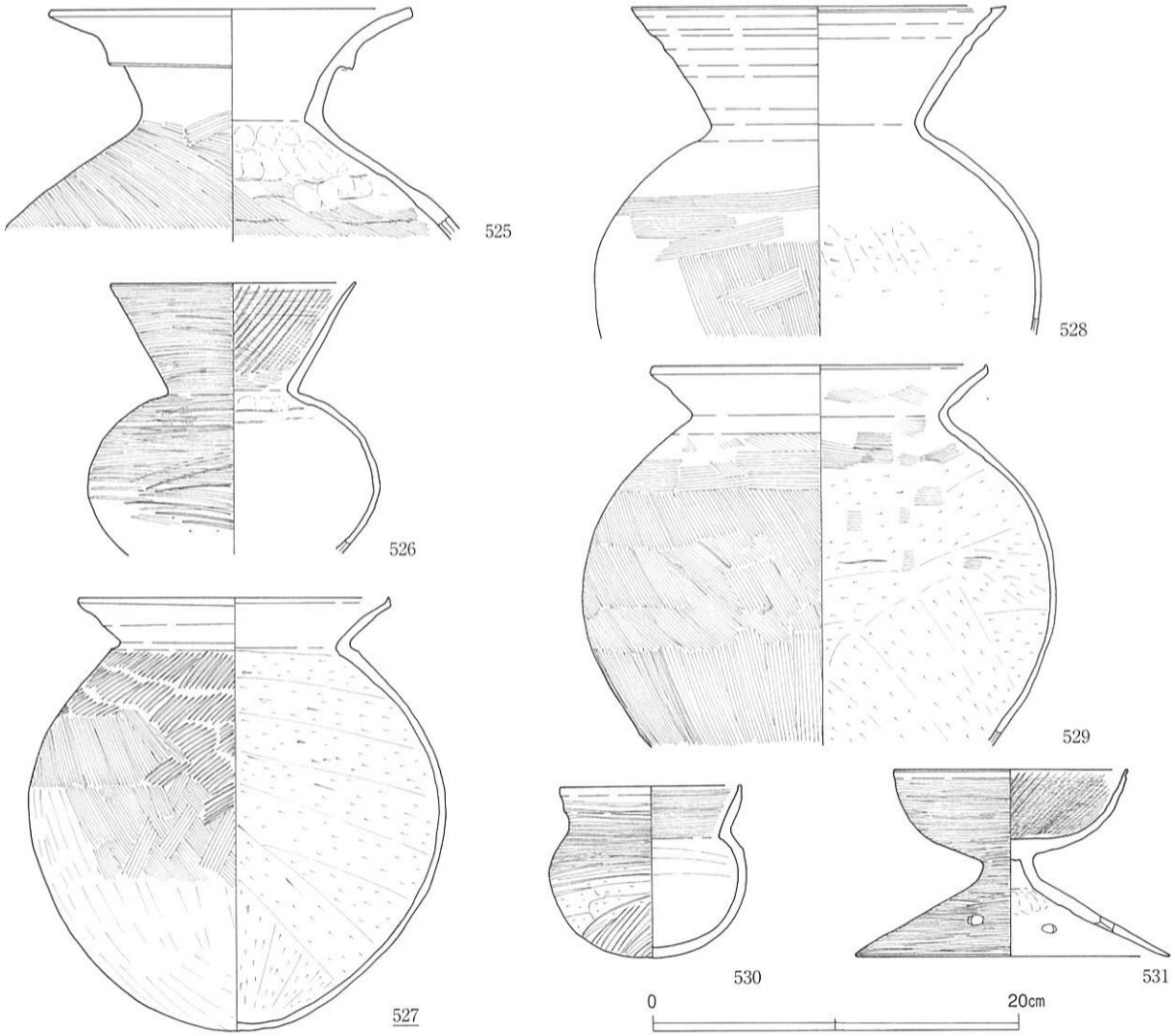



図69　441方形周溝墓　出土遺物

〔468方形周溝墓〕（図70～79，図版27）

Ｃ10－ｅ２・３区において検出した長方形の周溝墓で、検出面の標高は14.5～14.55ｍである。440方形周溝墓の南側に位置し、他の周溝墓と重複あるいは接することなく、単独で存在している。また、北側の３基の周溝墓が、いずれも座標北から東西10°前後の方向に墳丘長軸を置いているのに対し、南東－北西方向を向いて造営されており、長軸方位はＮ48°Ｗ方向を示す。

墳丘の規模は、長辺長約8.4ｍ、短辺長約7.2ｍを測る。周溝は南・北両コーナーが筋堀に当たってしまったため、完周していたかどうかは不明であるが、検出し得た範囲では掘り残されることなく巡り、幅0.75～1.1ｍ、検出面からの深さは0.25ｍを測る。溝の断面はいずれも椀形を呈し、鈍い黄褐色あるいは灰オリーブ色の中砂～粗砂を多く含んだ砂質シルト～極細砂を埋土としている。

周溝内からは、今回図示しただけでも150個体を超える夥しい量の土器が出土しており、３層下面の溝によって巻き上げられて失われた分を加えれば、本来はさらに多くの土器が伴っていたと推定される。

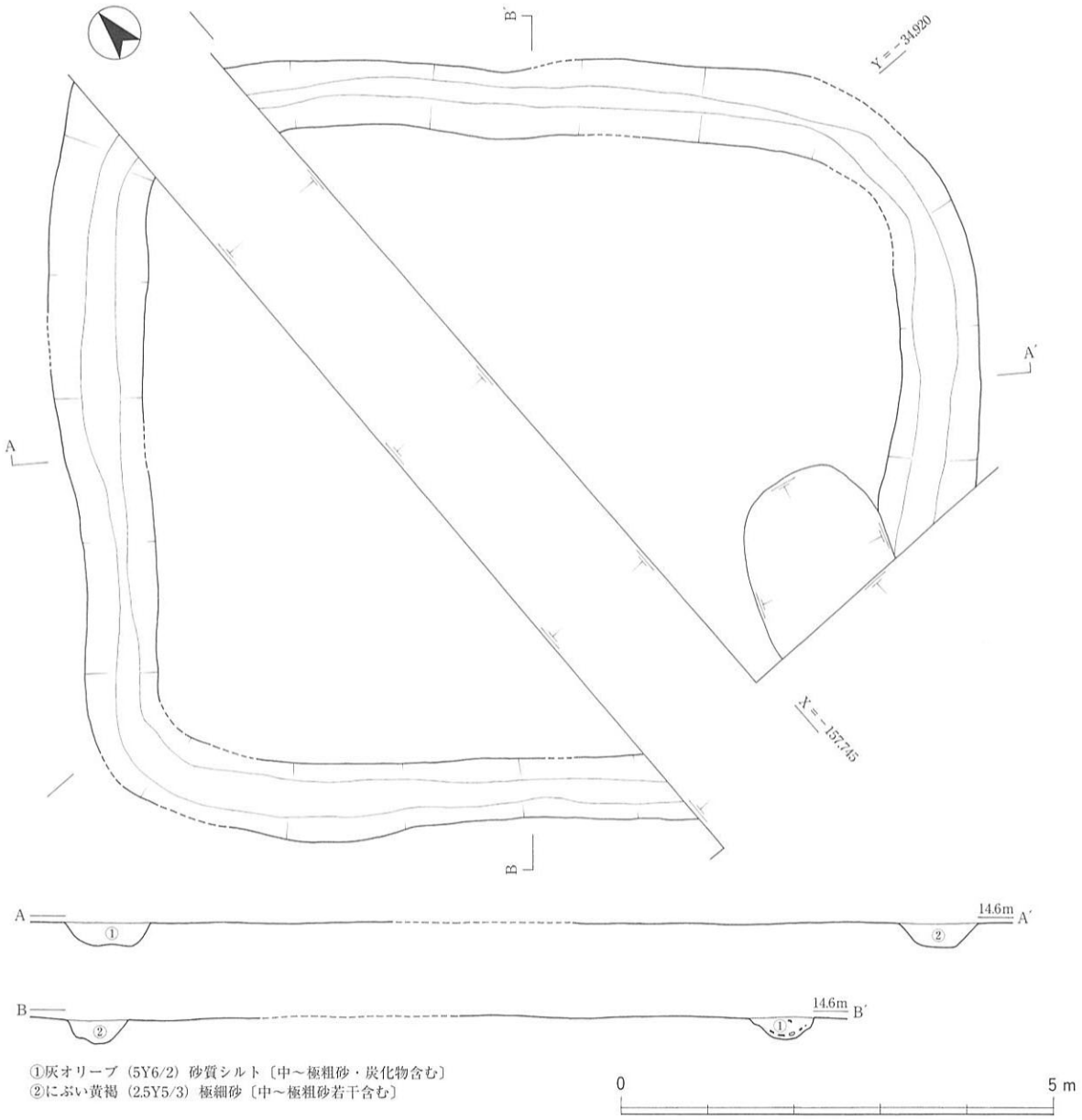



図70　468方形周溝墓　平・断面図

これらの土器はすべて南・北コーナーから東側、すなわち北東・南東側周溝から出土したものであり(図71・72)、対向する北西・南西側の周溝埋土においては、極少量の土器片を確認できたに過ぎない。土器の大半は、溝底から0.2～0.3mほど浮いた位置において破砕された状態で出土しており、周溝が一定程度埋没した段階に、主として周溝墓の東側から廃棄されたものと推定される。

図73～79には、今回出土した土器を示してある。出土状況を反映して破片が多く、器形全体を窺うことができる資料は比較的少ない。

壺には、広口壺・二重口縁壺・直口壺・長頸壺・短頸壺・細頸壺など各形式が存在する。広口壺には、文様が施された有飾のものと文様を持たない無文のものの二者が存在する。前者はいずれも垂下あるいは拡張させた口縁端部外面を装飾するもので、弥生時代後期末～庄内式前半の所産であろう。532には擬凹線と円形浮文、544には凹線が施され、533は櫛描波状文を２帯施し、体部にも同様の櫛描波状文を加えている。また、欠損のため口縁部の状況は不明であるが、頸部に突帯を巡らし、上下に刻みを入れた541もこの類に含めるべきかもしれない。一方、後者は球形あるいは無花果形を呈すると考えられる体部から口縁部が強く外反するもので、頸部の括れが明瞭なもの（560・561）と体部上半から緩やかなカーブを描いて口縁部が外反するもの（564）がある。器面はヘラミガキもしくはハケ調整によって仕

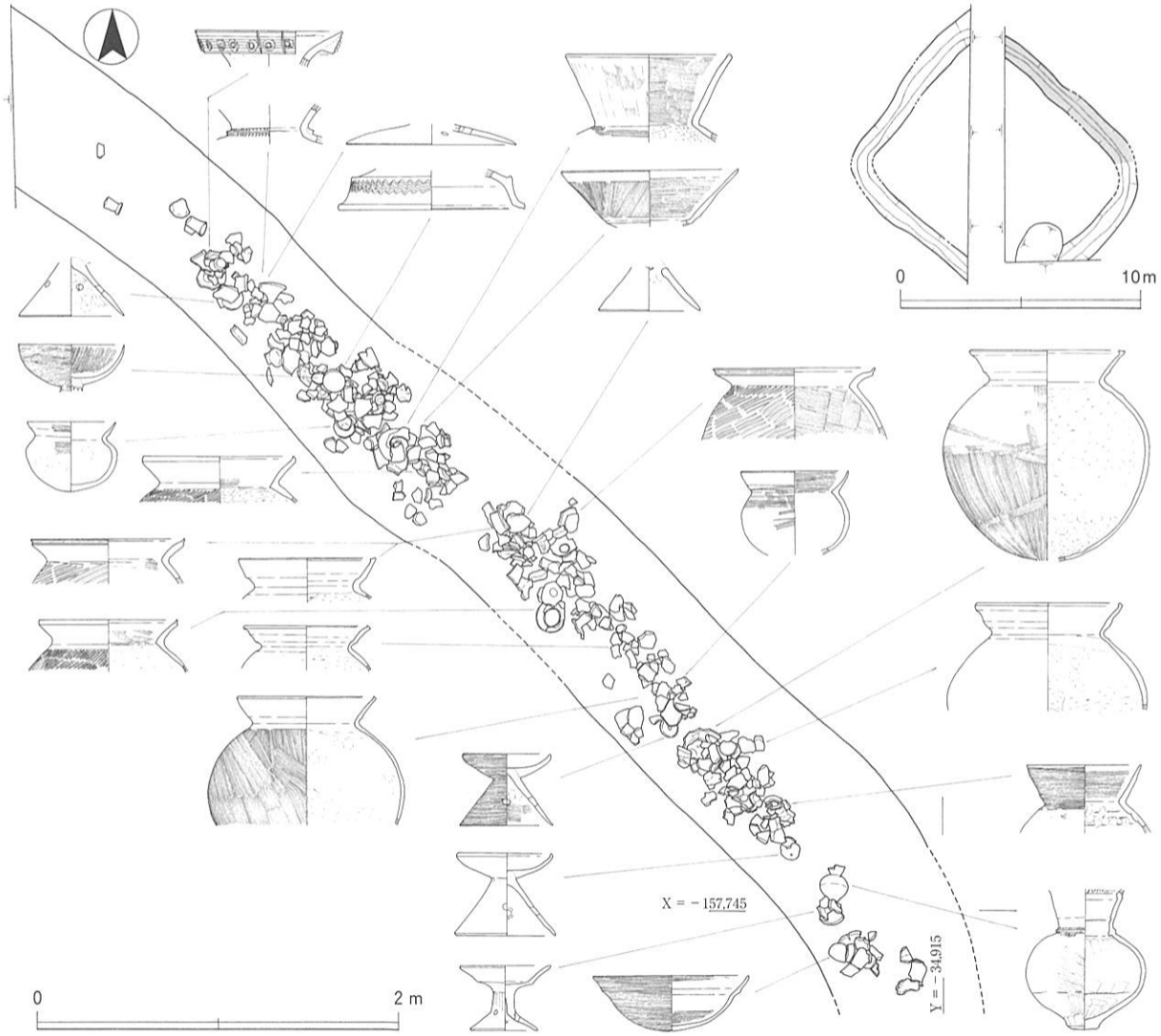



図71　468方形周溝墓　遺物出土状態図（１）

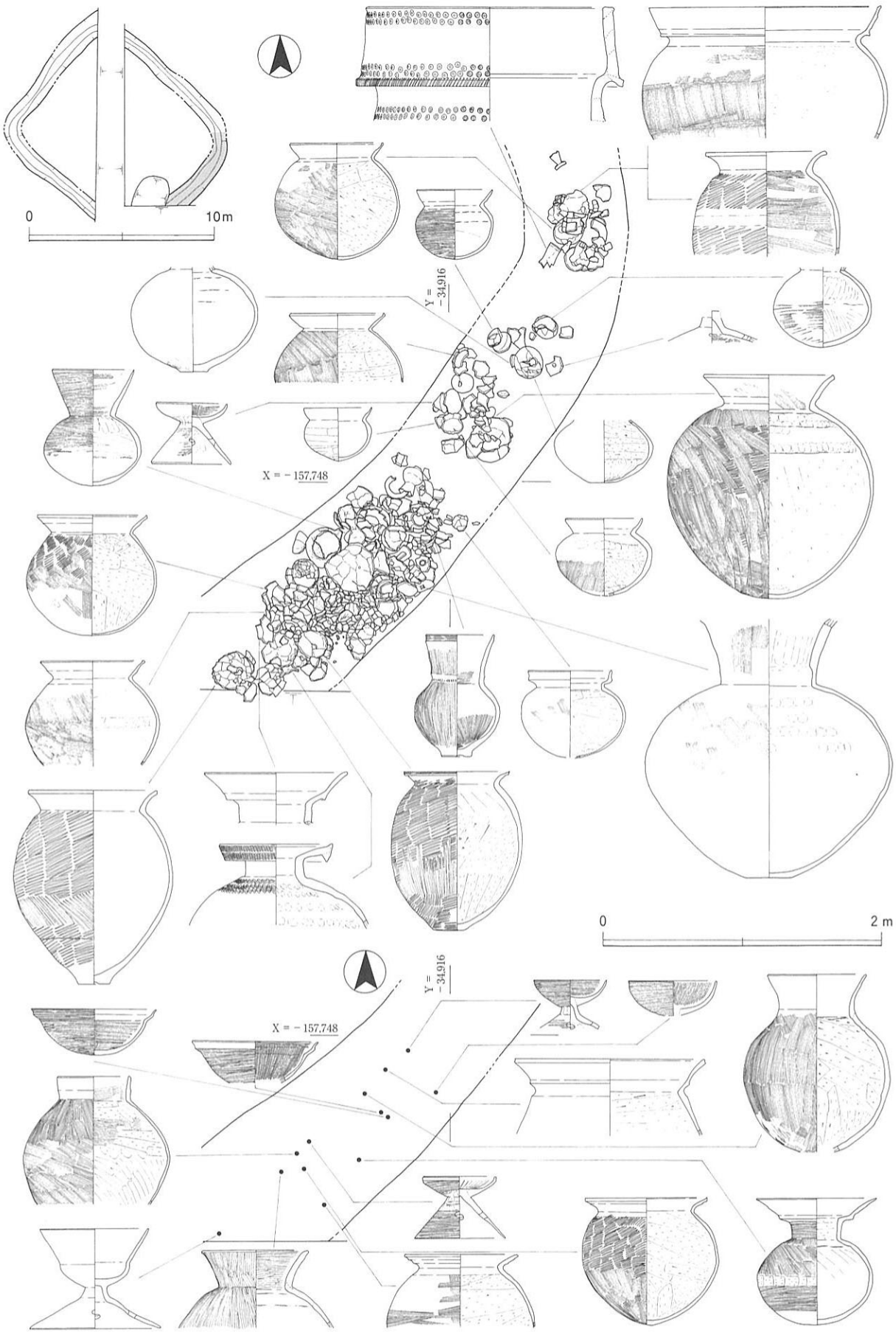



図72　468方形周溝墓　遺物出土状態図（２）

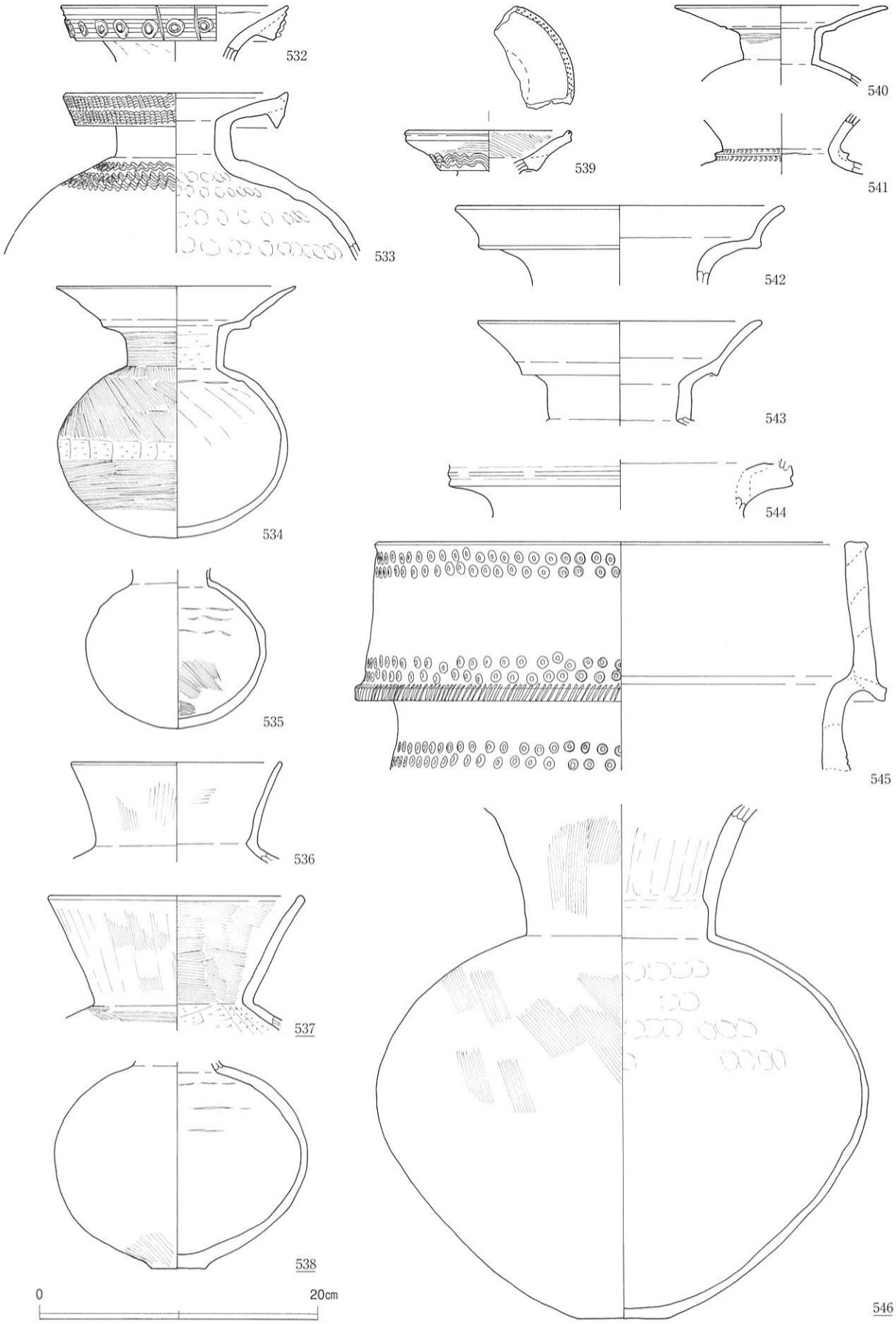



図73　468方形周溝墓　出土遺物（1）

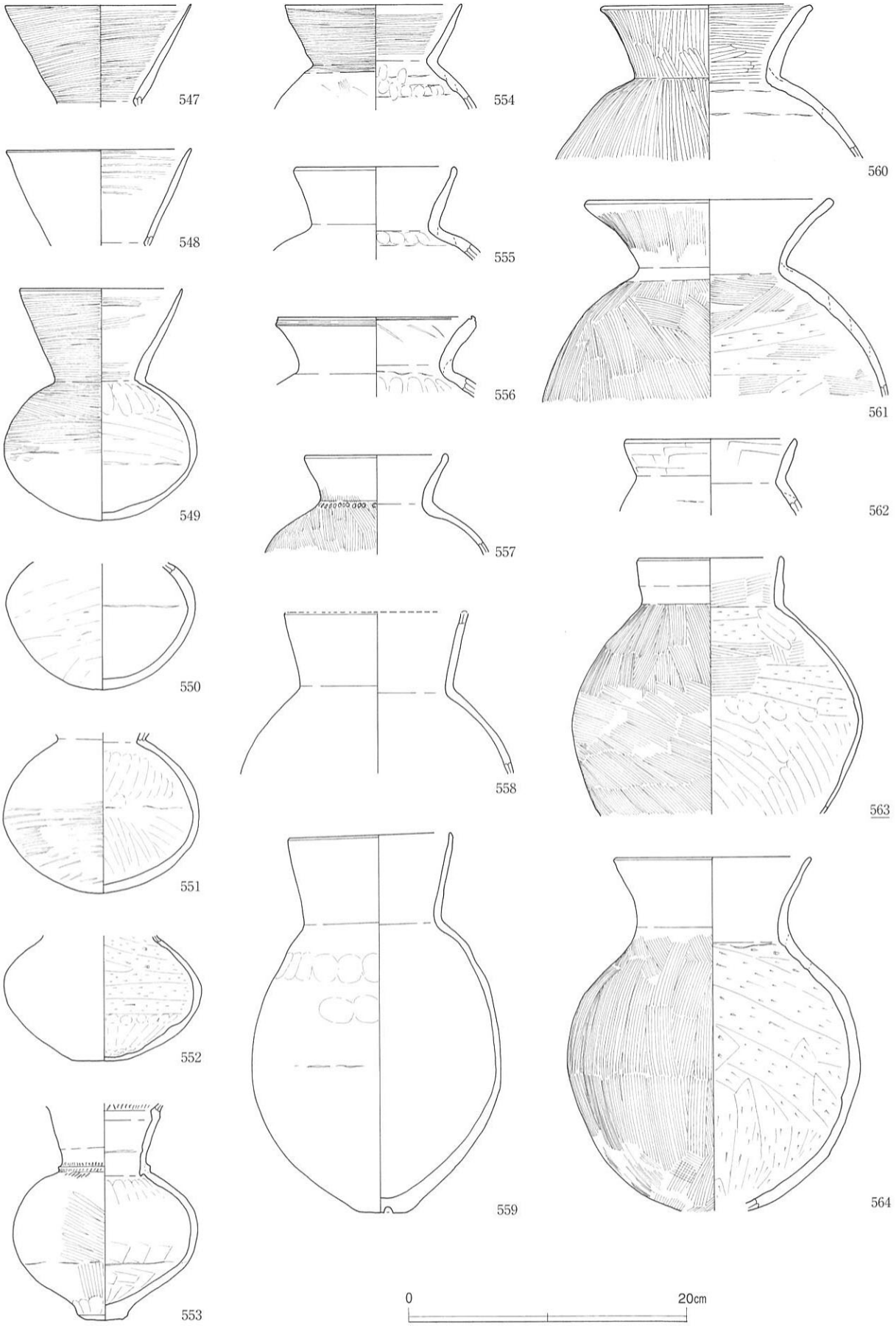



図74　468方形周溝墓　出土遺物（２）

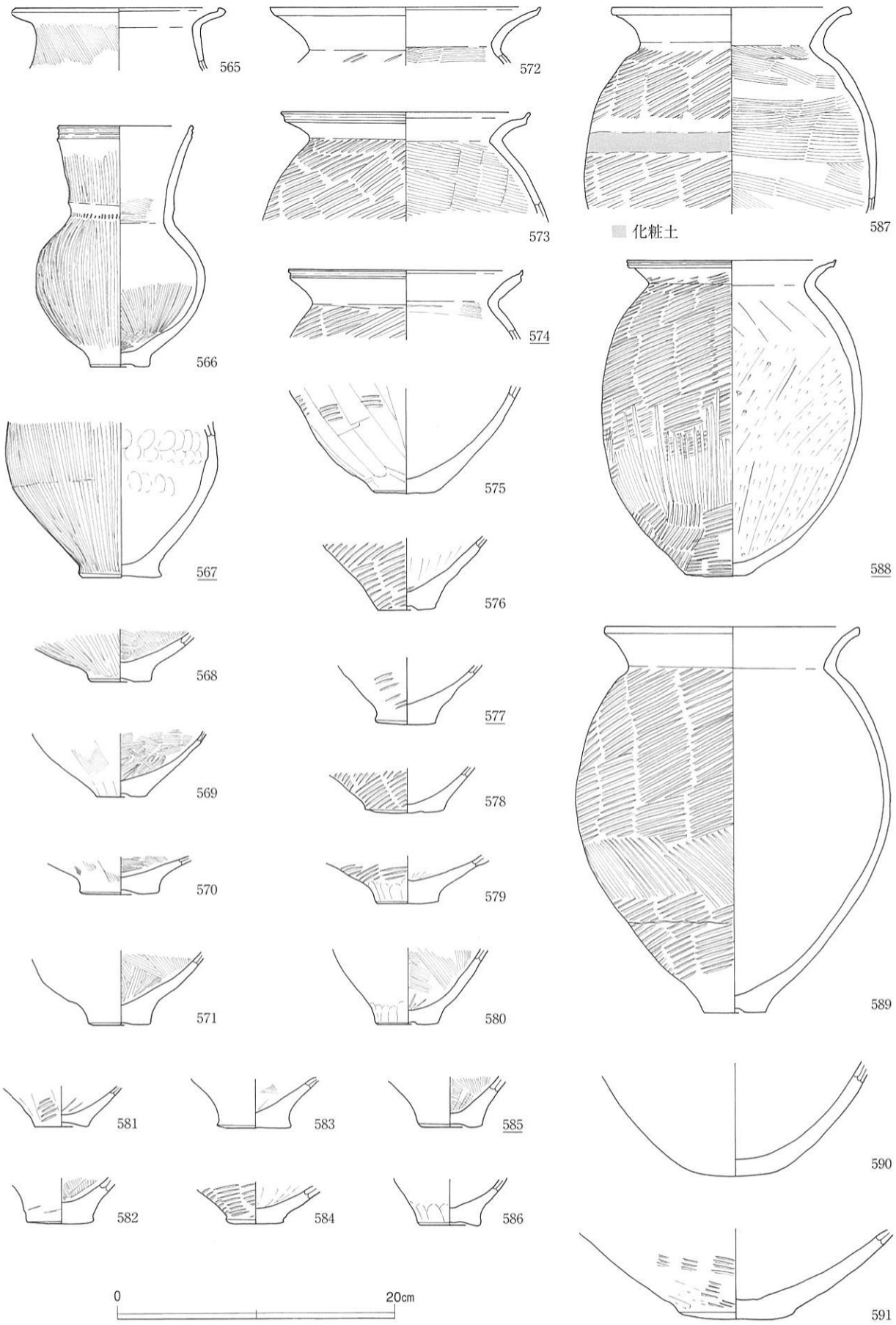



図75　468方形周溝墓　出土遺物（3）

上げられている。二重口縁壺（534・535・539・540・542・543）は、直立もしくは外傾して立ち上がった頸部から口縁部が屈曲して外反するもので、口縁部外面に波状文を持つ539以外は無飾である。また、545は瀬戸内東部に多く見られる大型の二重口縁壺で、口縁部は頸部から直立気味に立ち上がっている。その境は突帯状に突出し、上面と端面には板状具による刻みが加えられ、口縁部の上・下端と頸部には竹管文が施されている。直口壺には、器高30cmを超える大型品（537・546）と20cmに満たない小型品（547～549）とがある。前者がハケあるいはナデ調整により仕上げられているのに対し、後者には内外面とも緻密なヘラミガキ調整が施されている。なお、口縁部を欠損しているが、550～552は小型直口壺の体部であろう。長頸壺（566）は、球形の体部から口縁部が外傾して長く立ち上がるもので、器高15cm強の小型品である。口縁部には２条の凹線、頸部には刻みを施している。弥生時代後期後半に多く認められ、本例も当該期に帰属する可能性が高い。短頸壺は、前述の広口壺より概して小型で口径の小さいものであるが、器形全体が判明する資料が乏しく、分類には曖昧さが残る。口縁部は、直線的に外傾するもの（536・554・555・558・562）、外反するもの（556・557）、直立するもの（563）がある。細頸壺（553）は、扁球形の体部から口縁部が直線的に外傾して立ち上がるもので、長頸壺と比べて頸部の締まりが強い。平底で頸部の細い538は、二重口縁壺あるいはこの形式の体部であろう。この他に壺としては、頸部から口縁部が短く外反し、口縁端部を上方に摘み上げた外面ハケ調整のもの（565）、平底もしくは中央が凹んだドーナツ状の底部（567～571）がある。なお、ナデ調整を施した長胴の体部を持つ559は、製塩土器と考えられる。

甕については、系譜を異にする数種類が認められる。まず１つは弥生時代後期の甕の系譜を引くもので、長胴な体部に粗いタタキ成形を施し、底部は完全に平坦面を持つ平底か、もしくは中央が凹んだドーナツ底である（572～579・581・584・587～589・591）。体部外面のタタキ成形は右上がりを基本とするが、589のように主軸の異なるタタキを部分成形として施している個体もある。内面はナデ調整で仕上げたもの（589）の他、ハケ調整（572～574・587）・ケズリ調整（588）のものがあり、口縁部は端部を丸くおさめたもの、端部をわずかに上方へ摘み上げたもの、鈍い端面を持つものが認められる。次に、尖底もしくは丸底の底部を持ち、体部外面には右上がりの細筋のタタキ成形を施した後にハケ調整を加え、内面をケズリ調整で仕上げた一群がある（592～601・606～610）。口縁部が直線的に外傾するものが多く、口縁端部は上方に摘み上げられており、庄内式に通有の甕である。なお、タタキ成形後のハケ調整には、体部最大径付近までのもの（608・610）と頸部近くまで及ぶもの（597・599・600・606・607・609）がある。さらに、同様の球形の体部を有し、体部外面をハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げた一群も存在する（603・605・611・614・615・617・619～621）。これらは、口縁端部内側を小さく肥厚させ、内面のヘラケズリを頸部よりやや下方まで施しているが、体部上半に横方向のハケを加えた定型的な布留式甕は621のみであり、布留式甕の特徴を具備しつつも体部外面をナデで仕上げたもの（612・616）や調整手法は守りながらも口縁端部を丸くおさめたもの（620）などが見られる。なお、613・621は、強いナデによって口縁端部内側に端面が作られており、布留式期前半の時間幅の中でも後出の資料と考えられる。これらとは別に、体部外面を庄内式甕と同様の成形・調整方法で仕上げているが、器壁がやや厚く、底部が小さな平底を呈するものが存在している（618・622）。618は口縁端部に鈍い端面を有し、622の体部内面はハケ調整で仕上げられている。以上の他、他地域に系譜が求められるものも見られる。623・624は、いずれも口縁部が直立気味に立ち上がって受口状となる器形で、624の口縁部には櫛描直線文が加えられている。体部は外面がハケ、内面がヘラケズリ調整で仕上げら

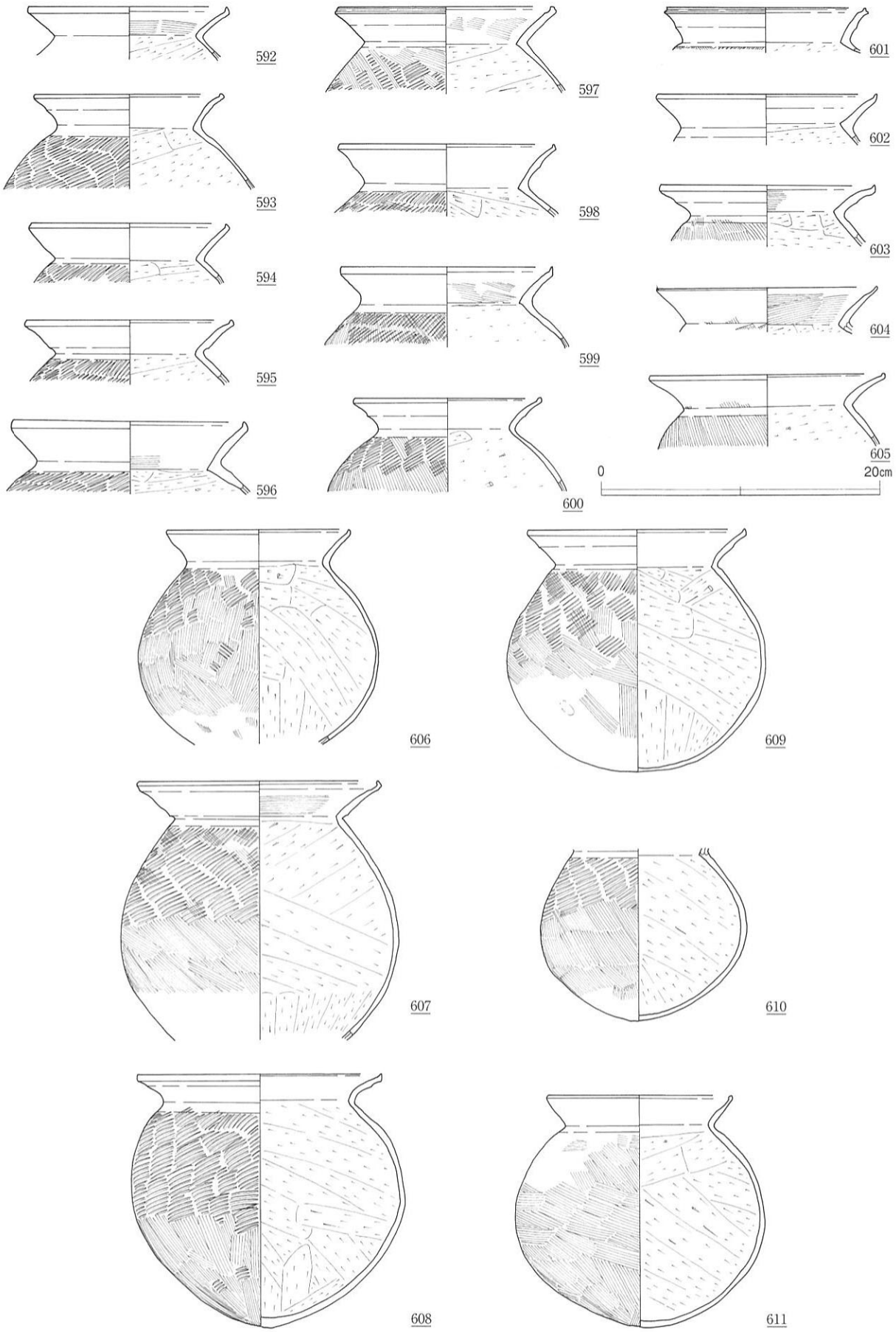



図76　468方形周溝墓　出土遺物（4）

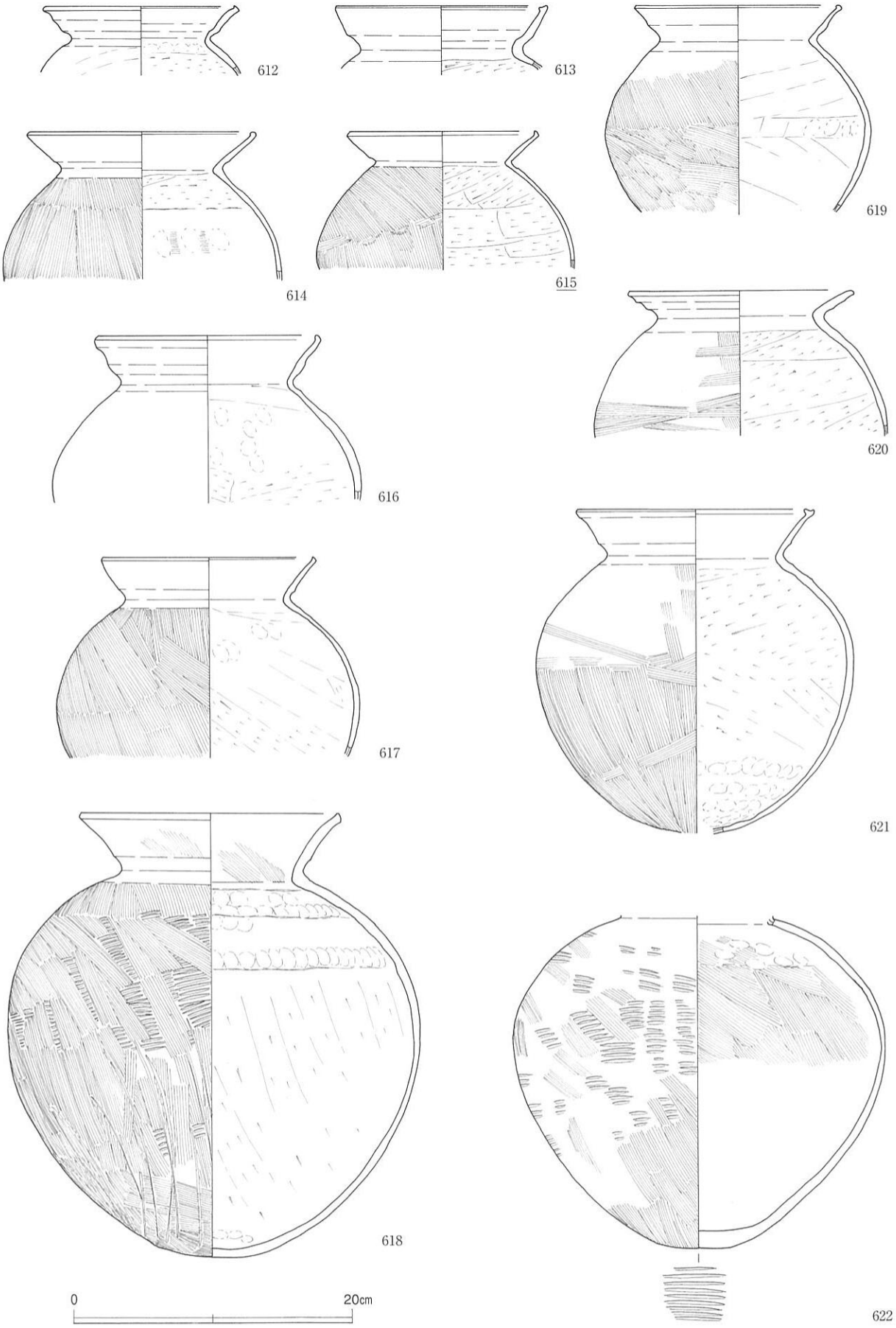



図77　468方形周溝墓　出土遺物（５）

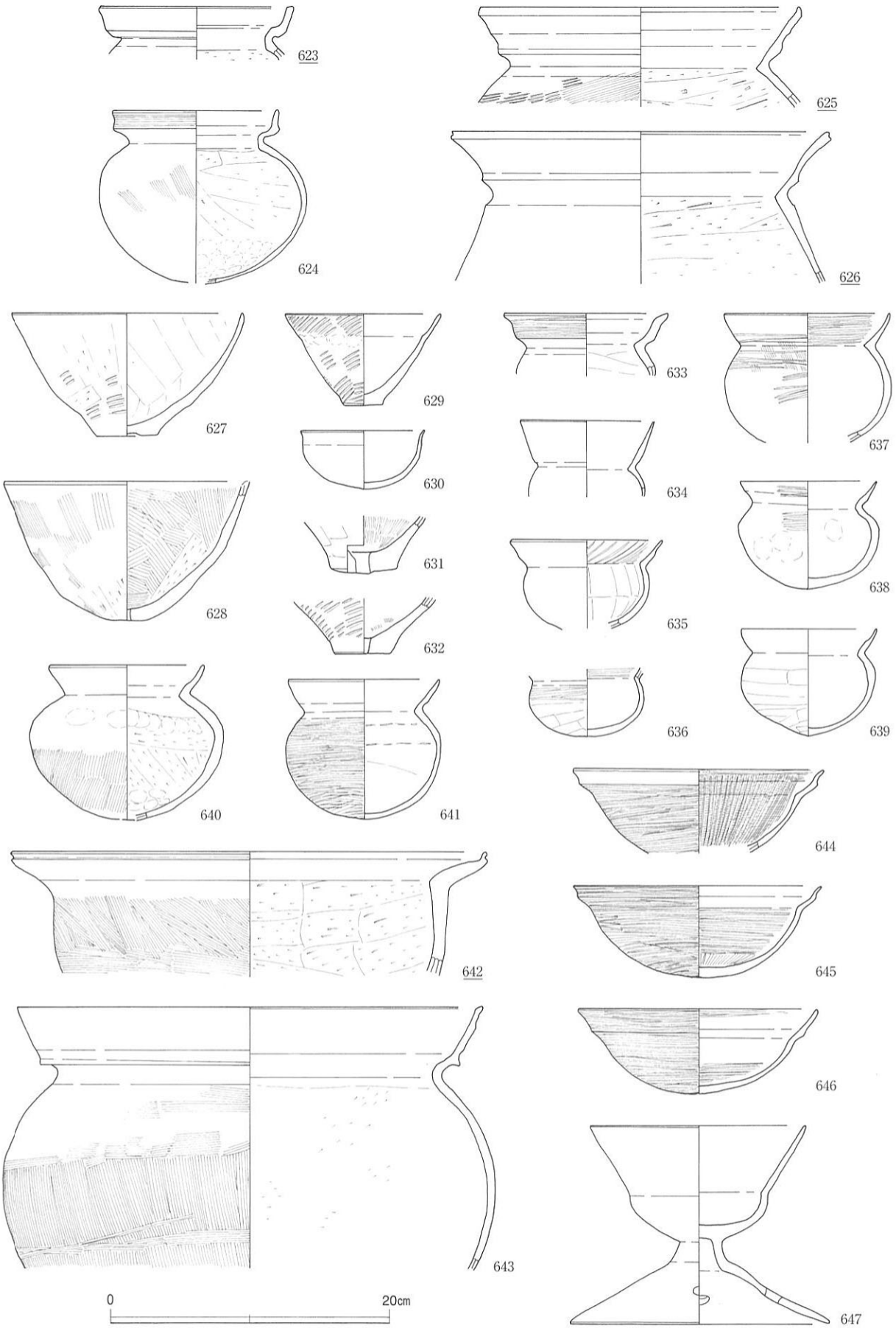



図78　468方形周溝墓　出土遺物（6）

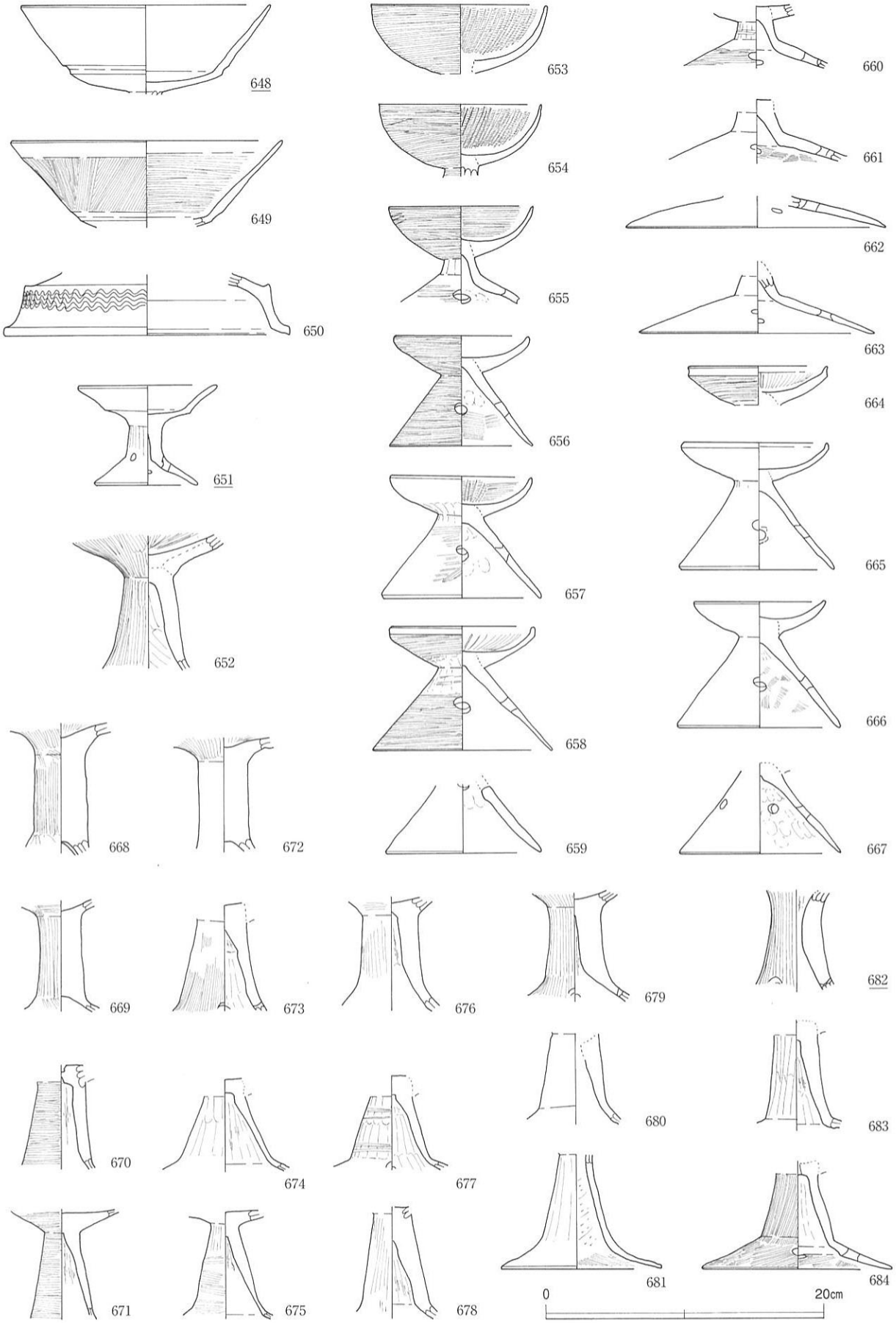



図79　468方形周溝墓　出土遺物（７）

れており、岡山平野に特徴的な甕である。625・626は口縁部が屈曲して開くもので、山陰地方の甕の形態的影響を受けて製作されたものであろう。

鉢についても、形態・法量によって数種類に分かれる。627・628は体部が内湾しながら立ち上がるもので、底部のみの631・632もこの類に含まれる可能性がある。627の底部は中央が凹むドーナツ底、628は丸底、631・632は平底で、628・631・632は焼成前に底部へ穿孔を施した有孔鉢と称されるものである。629は口縁部・体部が直線的に外傾する口径11.2cm、器高6.6cmの小型品で、外面には右上がりのタタキ成形が施されている。630は器高が口径の２分の１に満たない浅鉢状を呈する小型品で、口縁部はわずかに外反している。一方、口径30cmを超える大型品も存在している。642は半球状のやや深めの体部から口縁部が外傾するもので、体部外面をハケ、内面をヘラケズリで調整し、口縁部はヨコナデ調整で仕上げつつ、端部を上方に摘み出している。643は口縁部が段を持って立ち上がる山陰系の鉢で、体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整で仕上げている。

小型丸底土器は、扁球形の体部から口縁部が内湾気味に立ち上がる小型の土器で、いずれも口径もしくは体部最大径が器高を凌駕するものである（633～641）。口縁部の長さは、体部高に対し２分の１以下の短いものが大半であるが、体部高と同程度の長さを持つ資料（634）も見られる。なお、口縁部が長く延びた小型丸底土器に椀形高坏と同様の脚部が付された台付小型丸底土器（647）も存在している。

有段口縁鉢は、丸底の皿状の体部から口縁部が段を有して立ち上がるもので、庄内式期後半～布留式期前半に特徴的に見られる器種である（644～646）。いずれも口径17～18cmとやや大振りで、口縁部の屈曲は比較的弱い。内外面には緻密な横方向のヘラミガキ調整を施し、644・645の内面には放射状のヘラミガキが暗文風に加えられている。

高坏は器形全体を窺える資料に乏しいが、坏部に関しては、口縁部が直線的に広がる有稜のもの（648・649）と椀形を呈するもの（653～655）が存在する。このうち、椀形高坏の坏部内外面には、いずれも横方向の緻密なヘラミガキ調整が施され、653・654の内面には放射状のヘラミガキが暗文風に加えられている。一方、脚部は脚柱部が円錐状に広がって裾部が開く形状のものが多いが、櫛描波状文で飾られた有段高坏のものと考えられる脚裾部（650）、椀形高坏に伴う太く短い中空の脚柱部から裾部が大きく開くもの（660～663）、細長い中実の脚柱部から裾部が開くもの（668・669・672）、脚柱部が太く中膨らみ気味のもの（674・677）、ナデ調整された脚柱部から裾部がなだらかに広がる布留系高坏とされるもの（681）も存在する。その他、器高７cmほどの小型高坏が１点（651）出土している。

器台は、庄内式に特徴的な皿状の受部に円錐状の台部が付く形式のみが見られる（656～659・664～667）。受部の口縁端部は丸く仕上げたものと上方に短く摘み上げたものとがあり、最終器面調整が判明する個体では横方向の細かいヘラミガキで仕上げたものが多く、657・658・664の受部内面には放射状のヘラミガキが暗文風に施されている。

以上から明らかなように、468方形周溝墓から出土した土器群には、弥生時代後期後半～布留式期前半という時期幅を認めることができる。しかも、これらは平面的かつ垂直的に渾然一体となって出土しており、本遺構に直接関連する資料を抽出し、周溝墓の築造時期を特定することは困難である。前述した出土状況を勘案すれば、むしろ周溝墓築造後に他から持ち込まれた可能性が高く、周溝が完全に埋没していない凹みを土器捨て場として利用していたと考えられる。その際、使用不能となった土器のみならず、遺構掘削に伴って掘り当てた時期的に遡る遺構の土器を含めて廃棄した結果、数時期に及ぶ土器群となったものと推定される。

〔477方形周溝墓〕（図80～82，図版28－１～４）

Ｃ10－ｄ１・２区において検出した長方形の周溝墓である。440方形周溝墓の東側に存在し、位置関係から西側の周溝が440周溝墓の東側周溝と重複していたと考えられるが、北側周溝を含む北半部が第３面345土坑により切られているため、重複状況については不明である。検出面の標高は14.45～14.5mを測り、削平によって墳丘上・周溝外ともほぼ平坦となっている。

墳丘はＮ５°Ｅ方向に長軸を置き、長辺長6.3m以上、短辺長5.2～5.3mの規模を擁する。周溝は検出し得た部分では途切れることなく巡り、幅0.9～1.25m、深さ0.25～0.4mを測る。溝の断面は椀形を呈し、粗砂～極粗砂を含む灰オリーブ色極細砂を埋土としているが、西側周溝では溝底に灰オリーブ色砂質シルトの堆積が認められた。

削平によって墳丘の盛土は一切残存していなかったが、南側周溝の内肩より北約1.8mのところで墳丘長軸に直交する舟形の土坑が検出された（図81）。土坑の規模は長さ約2.0m、幅約0.5m、検出面からの深さ0.15m前後を測り、上下２層からなる灰オリーブ色シルト質極細砂～極細砂を埋土としている。遺物は認められず、木棺などの痕跡は確認できなかったものの、埋葬施設の痕跡である可能性が考えられ、その場合、土坑の位置が墳丘の中心から南側へ寄っていることから、本来は複数埋葬であったと考えられる。

周溝の内外からは量的には少ないものの土器が出土しており、図82にはこのうちの17点を示した。周溝の内肩底面よりわずかに浮いて出土した697を除き、他は周溝検出面とほぼ同レベルで出土しており、やはり周溝の埋没が一定程度進行した段階で溝内に入れられたものと考えられる。

685は小型直口壺の口縁部で、内外面とも端部付近は横、以下は縦方向の細いヘラミガキ調整を施している。686は尖底のやや胴長の体部から口縁部が短く立ち上がった短頸壺で、胎土には赤色のチャートを含んでいる。口縁部には内外ともハケを施し、体部外面は右上がりのタタキ成形後にハケ調整を加えている。687は小型丸底土器の体部片で、外面上半には横方向のヘラミガキ調整を施している。688・689は壺もしくは甕の体部下半であるが、いずれも磨耗が著しく、器面調整は部分的に判るのみである。690は山陰系とされる鼓形器台で、受部と台部外面はナデ、台部内面はヘラケズリ後にナデ調整を加えて仕上げている。693は短い中実の脚柱部から脚裾部がラッパ状に広がり、小さな受部を持つ小型器台で、受部を欠損しているが694も同一と考えられる。691は東側周溝の外側で出土した有稜高坏である。器面調整は磨耗のため判然としないが、口縁部が内湾気味に立ち上がり、直線的な脚柱部から裾部が明瞭に屈折している。庄内式期末～布留式期初頭の所産であろう。一方、692は長い脚柱部から裾が緩やかに開く布留系高坏の脚部で、布留式期前半に位置付けられる。695～701は甕で、695は体部外面を粗いタタキ成形で仕上げたドーナツ底の小型品である。696・697は体部外面にタタキ成形、内面にヘラケズリ調整を施し、口縁端部を上方に摘み上げた庄内式甕で、内面のヘラケズリはいずれも頸部まで及んでいる。一方、698～701は体部外面をハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げ、やや内湾気味に立ち上がった口縁端部内側を小さく肥厚させたもので、体部上半にヨコハケを加えた定型的な布留式甕（698～700）とヨコハケが見られないもの（701）の二者が存在している。

以上の477方形周溝墓出土土器を通観すると、弥生時代後期の系譜を引く小型甕や庄内式甕を含みつつも、定型的な布留式甕が多く存在し、高坏に布留系高杯も見られることから、布留式期前半でも古い段階に位置付けられる。遺物の出土状況から周溝墓の築造時期はこれを遡る可能性が高く、さらに本周溝墓に先行して存在していた522竪穴住居の時期を勘案すれば、布留式期初頭前後と捉えられよう。

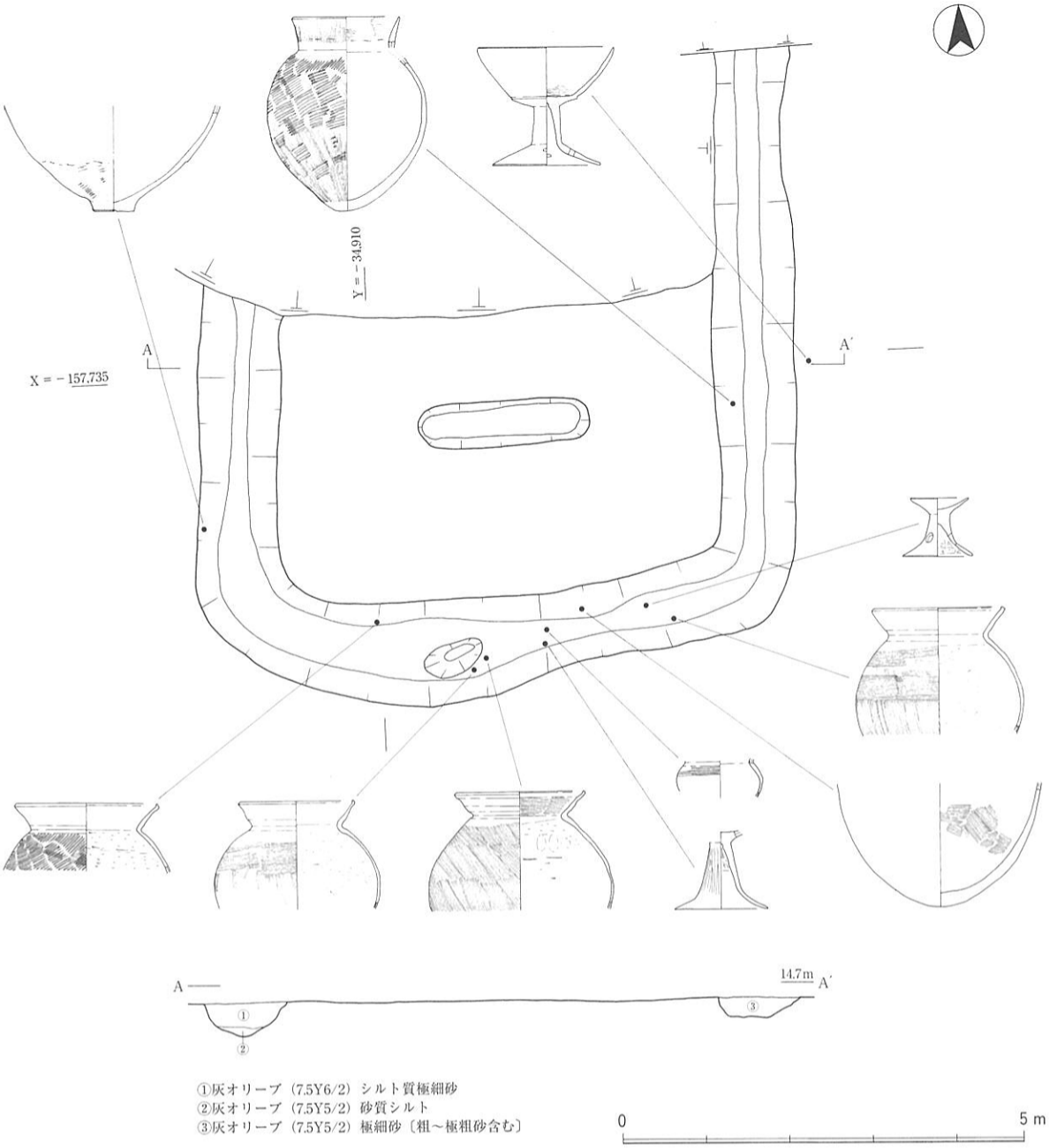



図80　477方形周溝墓　平・断面図

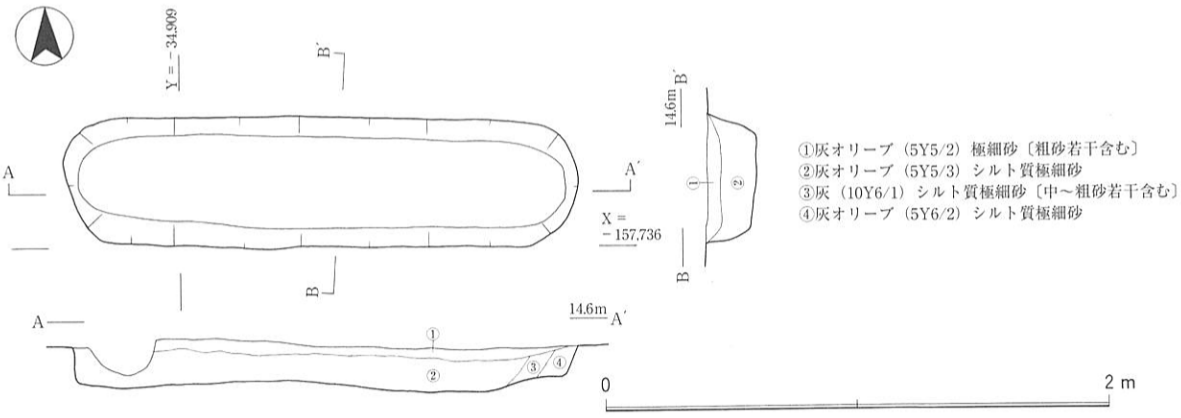



図81　477方形周溝墓　主体部　平・断面図

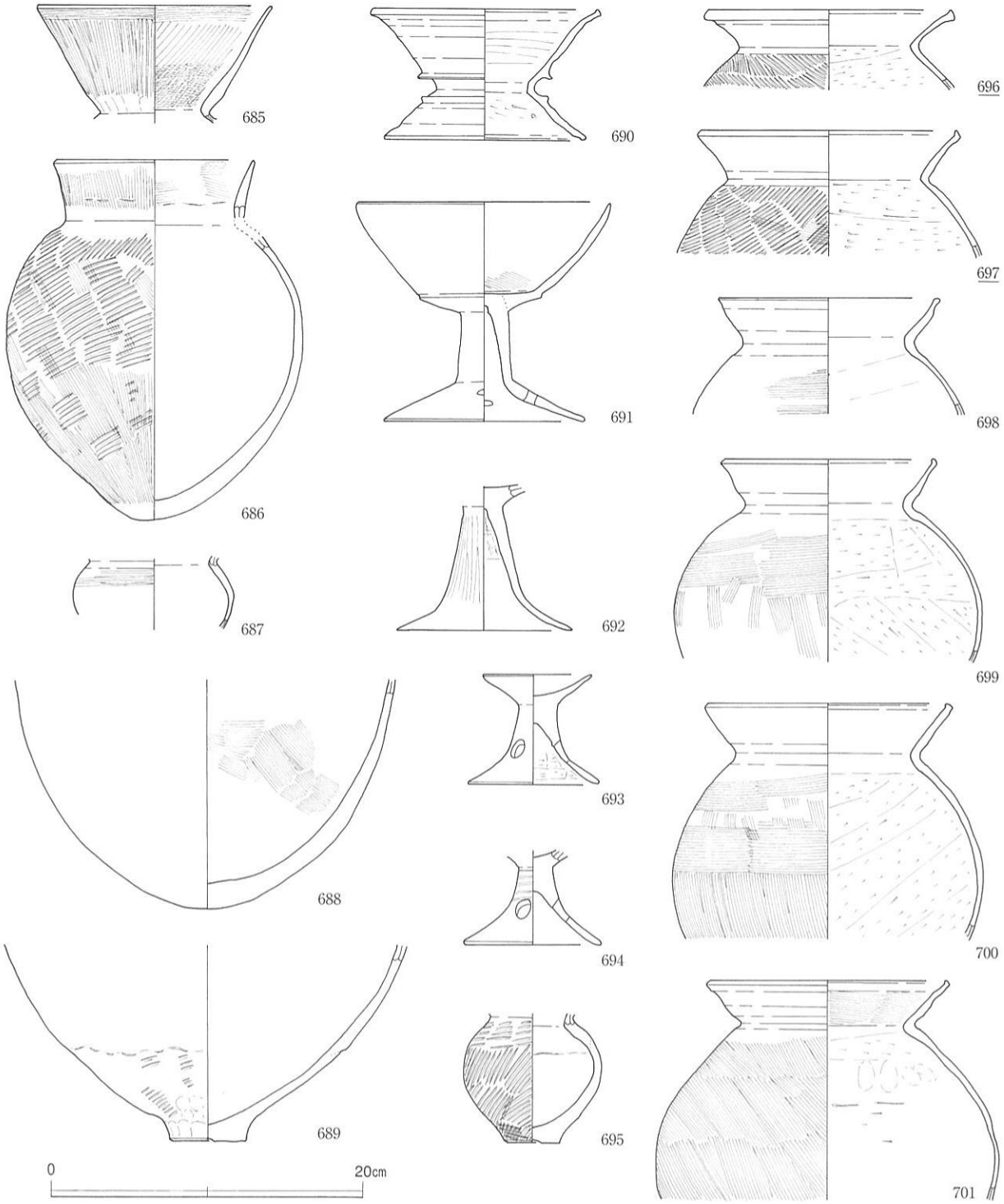
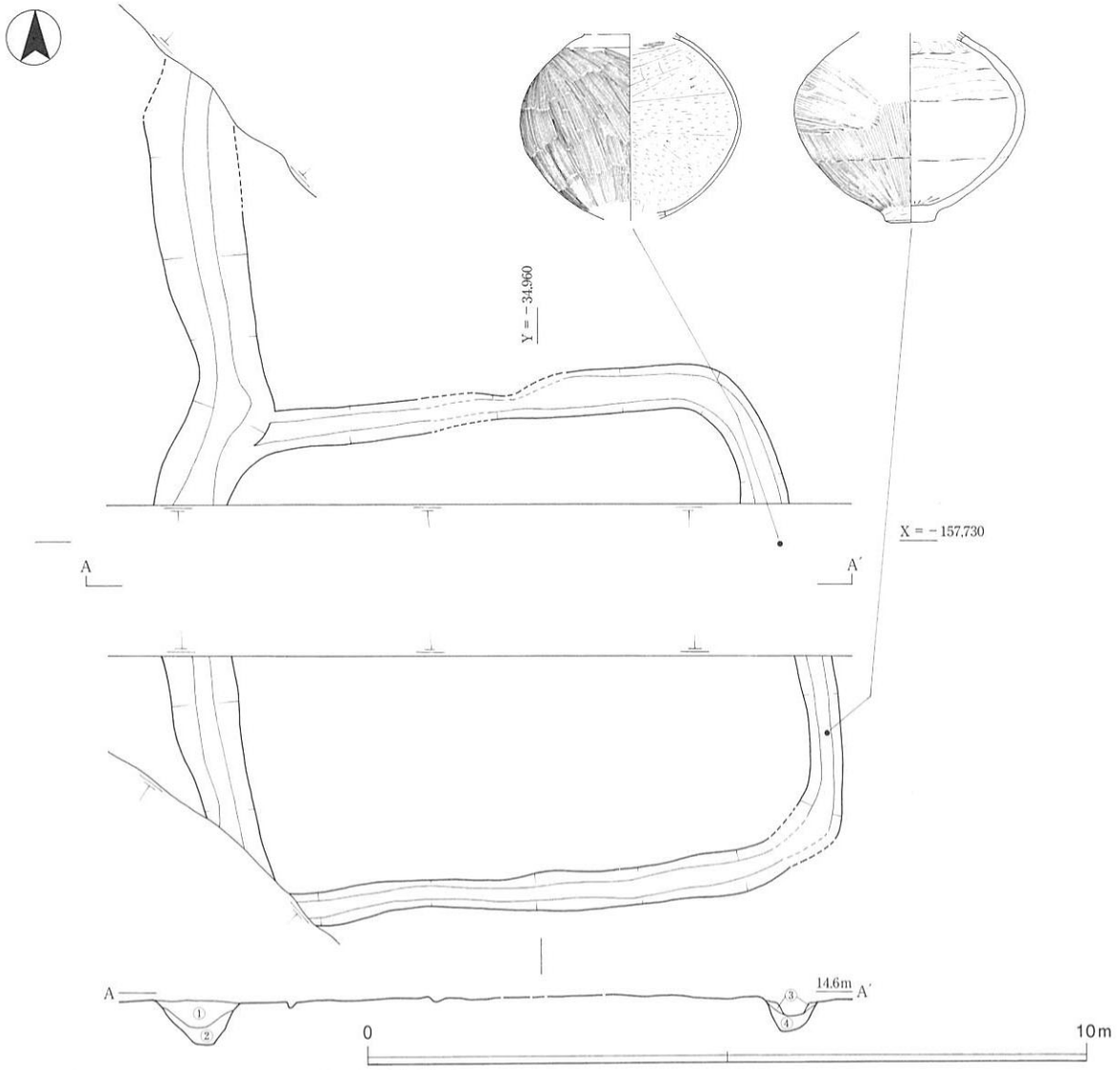



図82　477方形周溝墓　出土遺物

〔472方形周溝墓，469・473溝〕（図83～86，図版28－５）

調査区西端のＣ10－ｃ～ｄ６・７区において検出した周溝墓で、他の４基の周溝墓とは10m以上の距離を置いて単独で存在している。遺構面を検出した当初は、第３・４面検出の溝状遺構の痕跡が多数遺存し、西側周溝と重複して469溝が再掘削されていたため、平面プランを明確に認識し得なかったが、５層をわずかに下げた時点で「コ」字形に巡る周溝を確認できたことから、方形周溝墓と認識した。したがって、検出面の標高は他の周溝墓よりやや低く、14.4m前後となっている。

墳丘はＮ86°Ｅ方向に長軸を置く東西方向に長い長方形を呈し、長辺長は7.8m前後、短辺長は6.2m




①灰（7.5Y5/1）シルト〔極粗砂～細礫・炭化物多く含む〕
②オリーブ灰（2.5GY5/1）砂質シルト〔粗砂多く含む，炭化物含む〕
③黄灰（2.5Y5/1）シルト〔粗砂～細礫多く含む，灰オリーブ（5Y6/2）シルト質極細砂のブロック入る〕
④オリーブ灰（2.5GY5/1）砂質シルト〔粗砂多く含む〕

図83　472方形周溝墓・469溝　平・断面図

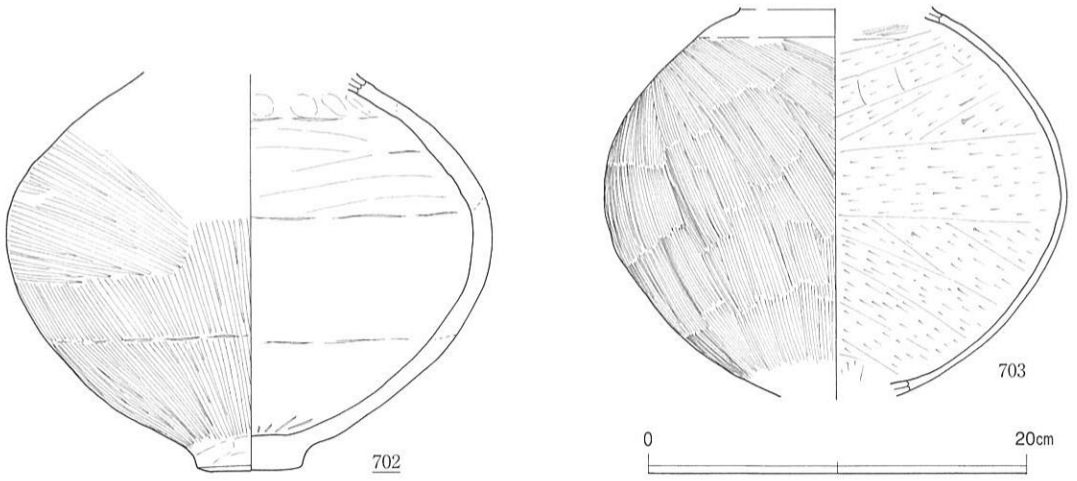



図84　472方形周溝墓　出土遺物

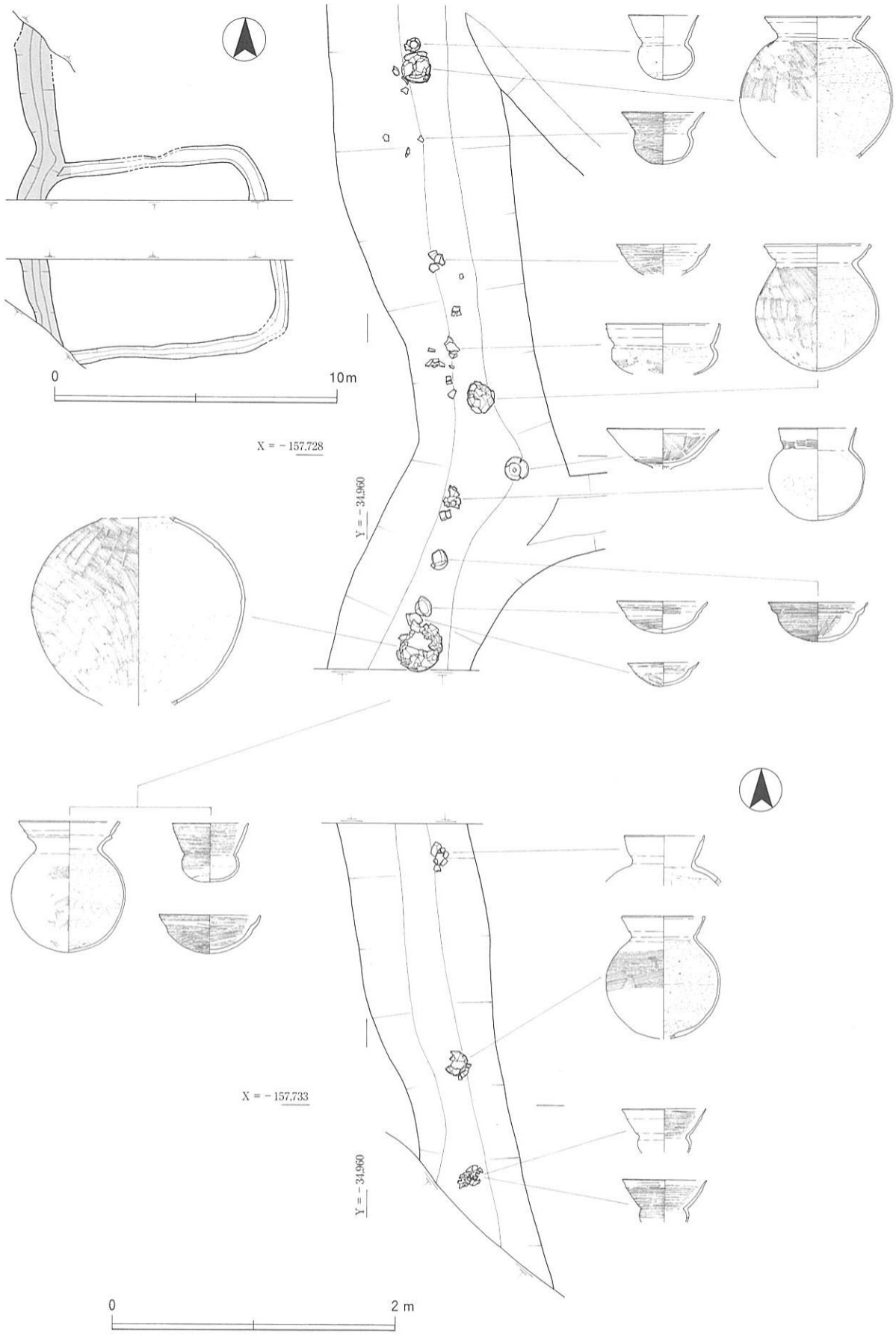



図85　469溝　遺物出土状態図

前後の規模を擁する。周溝は東西両周溝の中央が筋堀によって失われているが、検出した範囲では掘り残されることなく巡り、西側周溝を除く各周溝の幅は0.4～0.6m、検出面からの深さは0.1～0.25mを測る。埋土は上下２層に分かれ、上層は粗砂～細礫を多く含んだ黄灰色シルト、下層は粗砂を多く含んだオリーブ灰色砂質シルトからなる。これに対し、西側周溝は溝底のレベルが他と比べて0.1m前後深く、遺物も周溝墓の範囲に留まらず、北側へ延びる溝を含めて連続して出土していることから、この周溝を利用する形で469溝と呼称した溝が再度掘削されている可能性が高い。

周溝に伴う遺物は少なく、２点の土器を図示し得たのみである（図84）。702は東側周溝から出土したもので、周溝検出面とほぼ同レベルの水平位置で出土した。口縁部を欠損した胴の張る平底の壺で、広口壺の体部であろう。外面下半には斜方向のヘラミガキ調整が施されている。703は断面観察用のアゼ内から出土した東側周溝に伴う甕で、体部外面は縦・斜方向のハケ調整、内面は頸部よりやや下方までをヘラケズリ調整で仕上げている。わずか２点ではあるが、いずれも庄内式期末～布留式期初頭の所産と考えられ、遺物の出土状況を勘案すると、472方形周溝墓の築造は、当該期もしくはこれより若干遡る時期と捉えることができよう。

前述したように、472周溝墓の西には西側周溝と一部重複して469溝が南北に延びている。南北両端が第３面343流路・339土坑によって切られているため、検出し得た長さは11mほどであるが、流路を挟んで南側に存在する473溝が位置関係から同一の溝である可能性があり、その場合の総延長は31mとなる。各溝の規模は、469溝が幅0.7m、検出面からの深さ0.2～0.4m、473溝が幅約0.9m、深さ0.6～0.9mを測り、溝の断面形はともに逆台形を呈するものの、南側の473溝の方が著しく深くなっている。ただし、断面観察では473溝には埋土最上部からの掘り返しが認められ、再掘削された溝は幅約0.8m、深さ0.3m強と、469溝とほぼ同規模となっている。埋土に関しては、469溝が極粗砂～細礫を多く含む灰色シルトと粗砂を多く含むオリーブ灰色砂質シルトの上下２層に分けられるのに対し、473溝は粗砂を多く含む緑灰色シルト・砂質シルトと灰色シルトの３層から構成されており、さらに再掘削された溝は粗砂～細礫を多く含む灰色シルトで埋没している。

両溝から出土した遺物のうち、図示し得たものは469溝から出土した土器に限られており、図85にはその出土状況を示した。大部分が溝底から0.1～0.3mほど浮いた位置で出土しており、溝の埋没が一定進行した段階で入れられたものと考えられる。器種としては壺・甕・高坏・鉢・小型丸底土器・有段口縁鉢があり（図86）、小型精製器種である小型丸底土器・有段口縁鉢が半数の10点を数える。

壺には、短頸壺（704）・二重口縁壺（705）・小型壺（706）と、口縁部・底部を欠損した体部片（723）がある。このうち、二重口縁壺は体部から口頸部が外反して開く形態のもので、口縁端部内側を肥厚させ、体部外面をハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げるなど、布留式甕と同様の調整手法を採っている。小型壺は扁球形を呈する丸底の体部に直立気味に立ち上がる短い口縁部を付したもので、口縁部と体部の境を板状具で撫で付け、体部内外面はナデ調整で仕上げている。球形を呈する体部片は、外面をハケ調整で仕上げた後、上半部にヘラミガキを暗文風に加え、内面は上半に指ナデ・指押え、下半にヘラケズリ調整を施している。

甕は４個体を図示し得た（719～722）。いずれも体部外面をハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げたもので、口縁部は外傾もしくは内湾して立ち上がり、口縁端部内側は丸く肥厚させている。このうち、720は体部外面の上半に横方向のハケ調整を加え、内面下半に指押え痕を顕著に留めた定型的な布留式甕である。

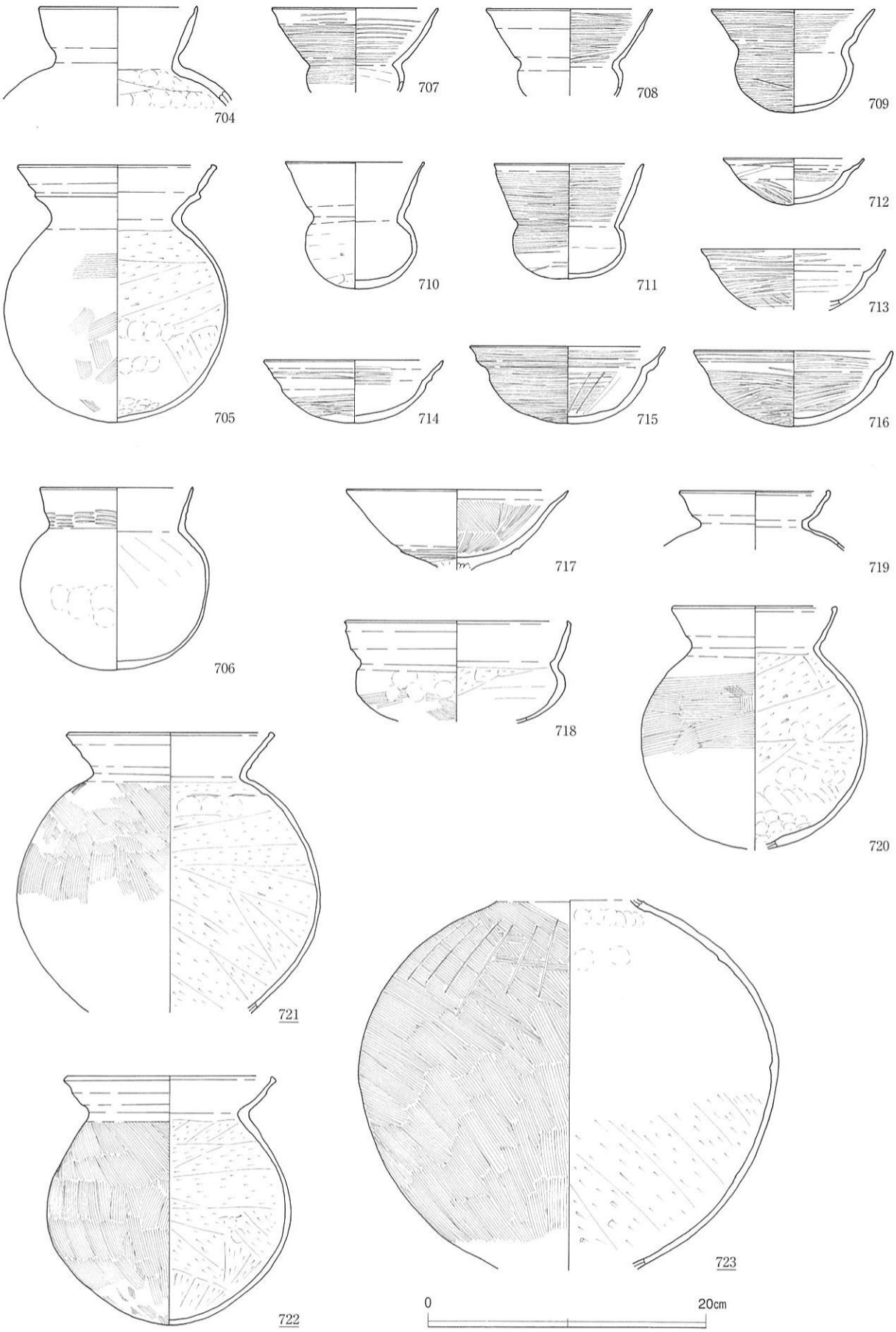



図86　469溝　出土遺物

高坏・鉢に関しては、それぞれ１個体が存在するのみである。このうち高坏坏部（717）は、やや丸味を帯びた屈曲部から口縁部が外反気味に立ち上がるもので、内面はハケ調整で仕上げている。鉢（718）は浅めの体部から口縁部が内湾気味に立ち上がる形態で、おそらく丸底であろう。

小型丸底土器（707～711）は、口縁部が直線的もしくは内湾気味に長く立ち上がり、口径が体部径を大きく凌駕するもので、器面調整が判明する資料には、いずれも外面及び口縁部内面に横方向の細かいヘラミガキ調整が認められる。また、有段口縁鉢（712～716）についても、小型丸底土器と同様に内外面を細かいヘラミガキで仕上げているが、調整がやや粗雑なもの（712・714）や口縁部の屈曲が鈍くなったもの（716）も見られる。

469溝から出土した土器群には、以上に述べたように定型的な布留式甕や口縁部が大きく発達した小型丸底土器が含まれ、有段口縁鉢についても形態の鈍化や調整の簡略化が窺われることから、布留式期前半でも新段階に位置付けられる。溝内の土器出土状況や先行して築造された472方形周溝墓との関係を勘案すれば、469溝は布留式期前半の古い段階に掘削されたものと捉えられよう。

〔466溝〕（図87，図版29－１）

調査区北端中央のＣ10－ｂ２・３～ｃ２・３区において検出したＬ字状の溝状遺構である。溝の平面形や規模、遺物の出土状況から、方形周溝墓の西及び南側周溝の一部である可能性が考えられるが、北端が調査区外へ延び、東端が440方形周溝墓に切られているため、遺構全体の状況を把握することはできない。

埋土は粗砂～細礫を多量に含む灰オリーブ色シルトで、規模は北端付近で幅3.5m、検出面からの深さ0.35m、東へ曲がるコーナー付近で幅1.6m、深さ0.2m、東端で幅2.75m、深さ0.1m強をそれぞれ測り、相対的に南北方向が幅広で深い。溝底は全体的にほぼ平坦であるが、北端では炭化物・焼土粒を多量に含む径1.75m、深さ0.35mを測る円形の土坑状凹み（470土坑）が検出された。

両遺構から出土した遺物は少なく、６点の土器を図示し得たのみである。726～729は466溝出土土器で、このうち726・727は、南北方向の溝の北端と中央付近の溝底から横倒しの状態で出土した。いずれも体部から口頸部が外傾して立ち上がるほぼ完形の長頸壺であるが、前者が口頸部と球形を呈する体部との括れが明瞭で、器面全体をヘラミガキ調整で仕上げているのに対し、後者は体部中位がやや張り出し、括れもやや甘く、体部調整も上半がハケ、下半がタタキ成形後ナデとなっている。なお、726は頸部と体部の境に赤彩を帯状に施し、727の体部上半には刺突によって記号文が描かれている。728は壺、729は甕の底部で、後者の内面には粗いヘラケズリ調整が認められる。一方、470土坑からは724・725が出土している。724は体部上半が強く張り、口縁端部に面を持つ甕で、体部外面にはタタキ成形を施した後、頸部直下のみハケ調整を加えている。725は壺の底部で、体部下半には土器焼成後に器面外側より穿たれた円孔が認められる。

466溝・470土坑から出土した以上の土器は、いずれも弥生時代後期前半の所産と捉えられ、両遺構の時期も当該期に求められよう。

〔467溝〕（図88～91）

方形周溝墓441・472の間には、調査区南端のＹ＝－34,920ライン付近から北西方向へ延びる幅12～14ｍほどの帯状の凹み（421落ち込み）が存在する。この凹みは、次の第６面で検出された弥生時代中期の流路（486流路）の痕跡で、本面検出時には３層と同様の中砂～細礫を多く含んだ灰色系のシルト～シルト質極細砂が落ち込んで堆積していた。

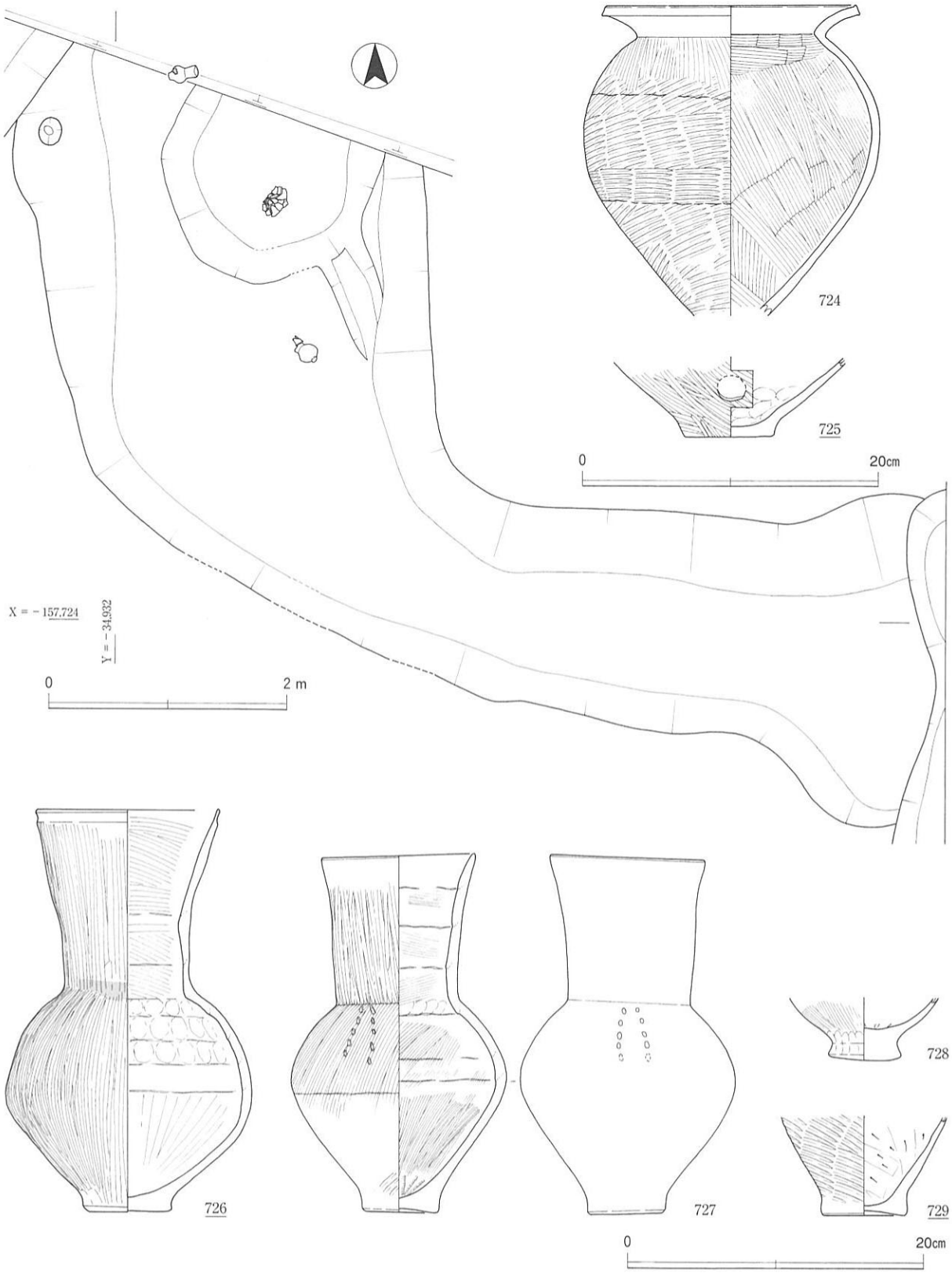


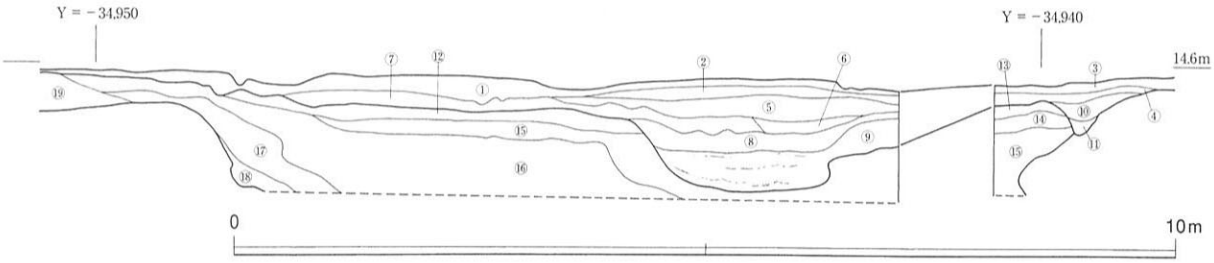

図87　466溝　平面図，出土遺物

467溝は421落ち込みを完掘した段階で検出した溝状遺構で、規模や位置関係から96－１調査区１・３トレンチで第５面遺構114と呼称された溝と同一遺構である可能性が高い。延長約30mにわたって検出されたこの溝は、北端がやや東側へ湾曲しつつも基本的に南南東から北北西方向へ延びているが、今回の

調査区内では同方向へ10mほど延びた後に西方向へ向かい、X＝－157,750・Y＝－34,947地点付近で急激に北北東方向へ折れ曲がり、「く」字を描きながら調査区外へと続いている。ただし、北北東方向へ折れる付近は第３面343流路で失われており、屈折の状況については不明である。なお、96－１調査区の調査所見では、５トレンチの第５－２面で検出された遺構207も同一の溝と捉えており、その場合の総延長は140m以上に及ぶ。467溝は幅2.3～3.5mと遺構114とほぼ同規模を有しているが、深さは0.65～0.9mと遺構114と比較して浅く、遺構207から北へ向かうにしたがい深度を減じている。断面形状はほぼ台形で、埋土は上部が極細砂～細砂や有機物の薄層を挟む灰色シルト、下部が腐植物を多量に含む灰黄褐～淡黄色のシルト質極細砂～中砂である。

遺構114・207からは庄内式期末～布留式期初頭の古式土師器を主体に多量の土器が出土しているが、467溝からも図89・90に示した多くの土器・土製品が出土した。

730は外反する頸部から口縁部が直線的に立ち上がる小型壺で、山陰地方の小型丸底壺や小型甕の口縁部形態に類似している。体部外面は粗いハケ調整を施した後、下半をヘラケズリ調整で仕上げている。731も丸底の小型壺で、体部外面は板状具によるナデ調整を施している。732～734は甕である。いずれも口縁部が頸部から鋭く屈折して外傾もしくは弱く外反し、体部内面は頸部直下までヘラケズリ調整を施している。732が体部外面を細筋のタタキ成形後斜方向ハケで仕上げた典型的な庄内式甕であるのに対し、後二者は斜方向のハケ調整のみで仕上げている。736も甕で、体部外面は右上がりの粗いタタキ成形、内面はナデ調整によって仕上げた弥生時代後期の甕の系譜を引くものである。735は手焙形土器の蔽部と考えられる破片資料。737・739は二重口縁壺であるが、737はごく短い頸部から口縁部が屈曲して斜め上方に立ち上がっているのに対し、739は筒状の頸部から口縁部が屈曲して外反する所謂「茶臼山型」二重口縁壺である。口頸部はいずれもナデ調整で仕上げているが、前者は口縁端部内側を丸く肥厚させ、体部内面では頸部よりやや下方までヘラケズリ調整を施すなど、布留式甕と同様の手法が採られている。738・745は直口壺である。738は口縁部が頸部から直線的に外傾する器形で、口縁部内外面は横方向後縦方向のヘラミガキ、体部外面は斜方向ハケ、内面はヘラケズリ調整をそれぞれ施している。一方、745は口縁部が緩やかに外反して立ち上がる大型品で、外面をハケ、内面をナデ調整で仕上げている。740は体部が強く横方向に張り出した算盤玉形を呈し、内傾気味に直立する頸部から口縁部が短く外反する短頸壺で、口縁端部は欠損している。庄内式期前半の所産であろう。741は口縁部が直




①灰（10Y6/1）シルト〔粗砂～細礫多く含む〕
②オリーブ灰（5GY5/1）シルト質極細砂〔粗砂～細礫多く含む〕
③灰（5Y5/1）シルト〔粗砂～細礫多く含む〕
④灰（7.5Y5/1）極細砂〔粗砂～細礫含む〕
⑤暗オリーブ灰（2.5GY4/1）極細砂〔中砂～細礫非常に多く含む〕
⑥灰（10Y4/1）シルト〔粗～極粗砂非常に多く含む〕
⑦暗オリーブ灰（2.5GY4/1）シルト〔中砂～細礫多く含む〕
⑧灰（5Y5/1）シルト〔極細～細砂・有機物の薄層が数枚挟在〕
⑨灰黄褐（2.5Y6/2）シルト質極細砂・淡黄（5Y8/3）中砂の互層〔腐植物多く含む〕
⑩灰（7.5Y4/1）シルト〔粗砂～細礫・炭化物多く含む．439溝埋土〕
⑪オリーブ灰（2.5GY5/1）シルト〔粗砂～細礫多く含む．439溝埋土〕
⑫緑灰（10GY6/1）シルト〔粗～極粗砂多く含む〕
⑬灰（7.5Y5/1）極細砂〔粗砂～細礫多く含む〕
⑭灰（10Y4/1）シルト〔極粗砂～細礫・炭化物多く含む〕
⑮青灰（10BG6/1）シルト質極細砂〔粗砂～細礫多く含む〕
⑯青灰（5BG6/1）シルト質極細砂〔粗砂～細礫多く含む〕
⑰青灰（5BG6/1）極細～細砂〔粗砂～細礫多く含む〕
⑱青灰（5B6/1）極細～細砂〔中砂若干含む〕
⑲オリーブ灰（5GY6/1）シルト質極細砂〔酸化顕著．極粗砂若干含む〕

図88　467溝・468流路　断面図（X＝157，730ライン）

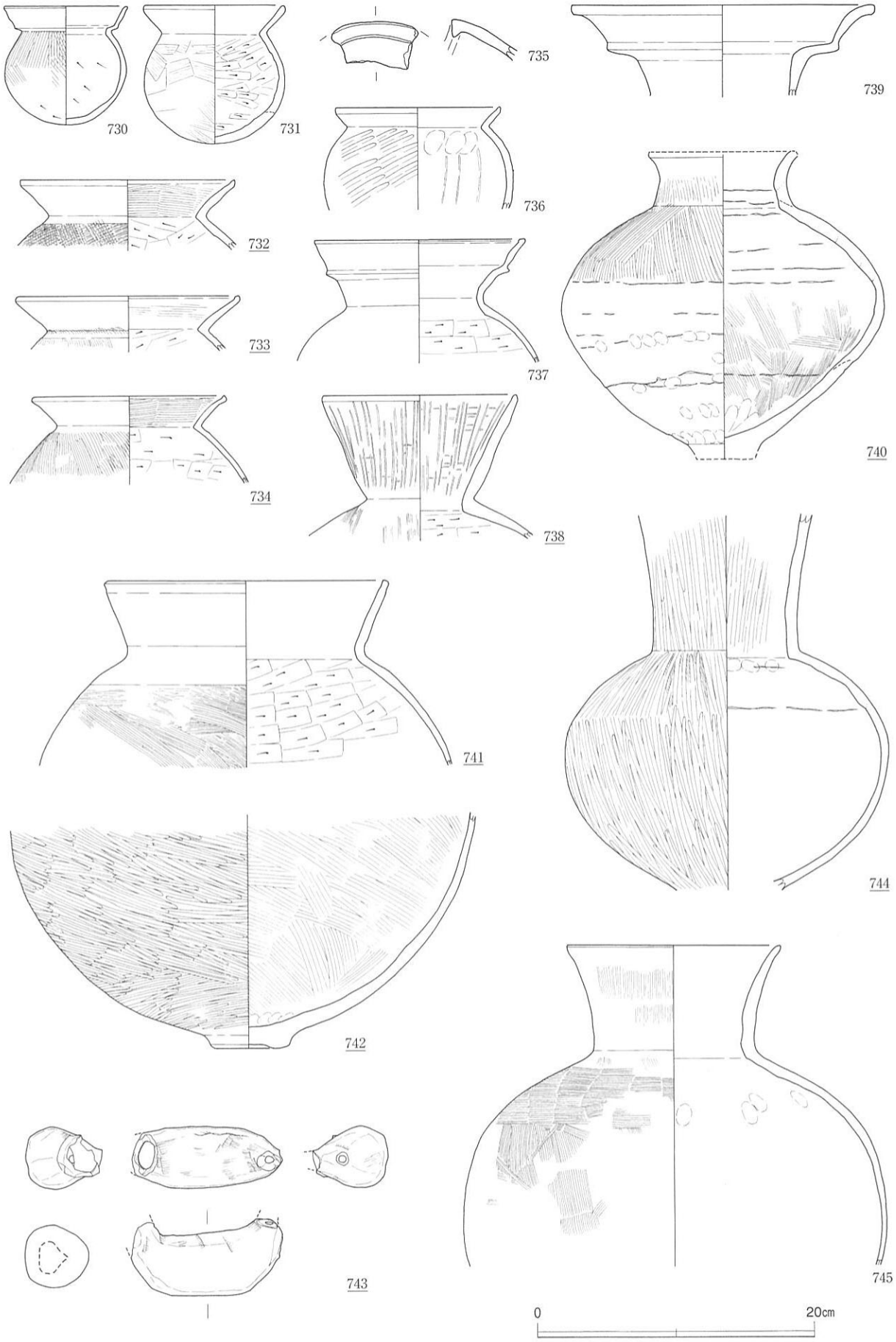



図89　467溝　出土遺物（１）

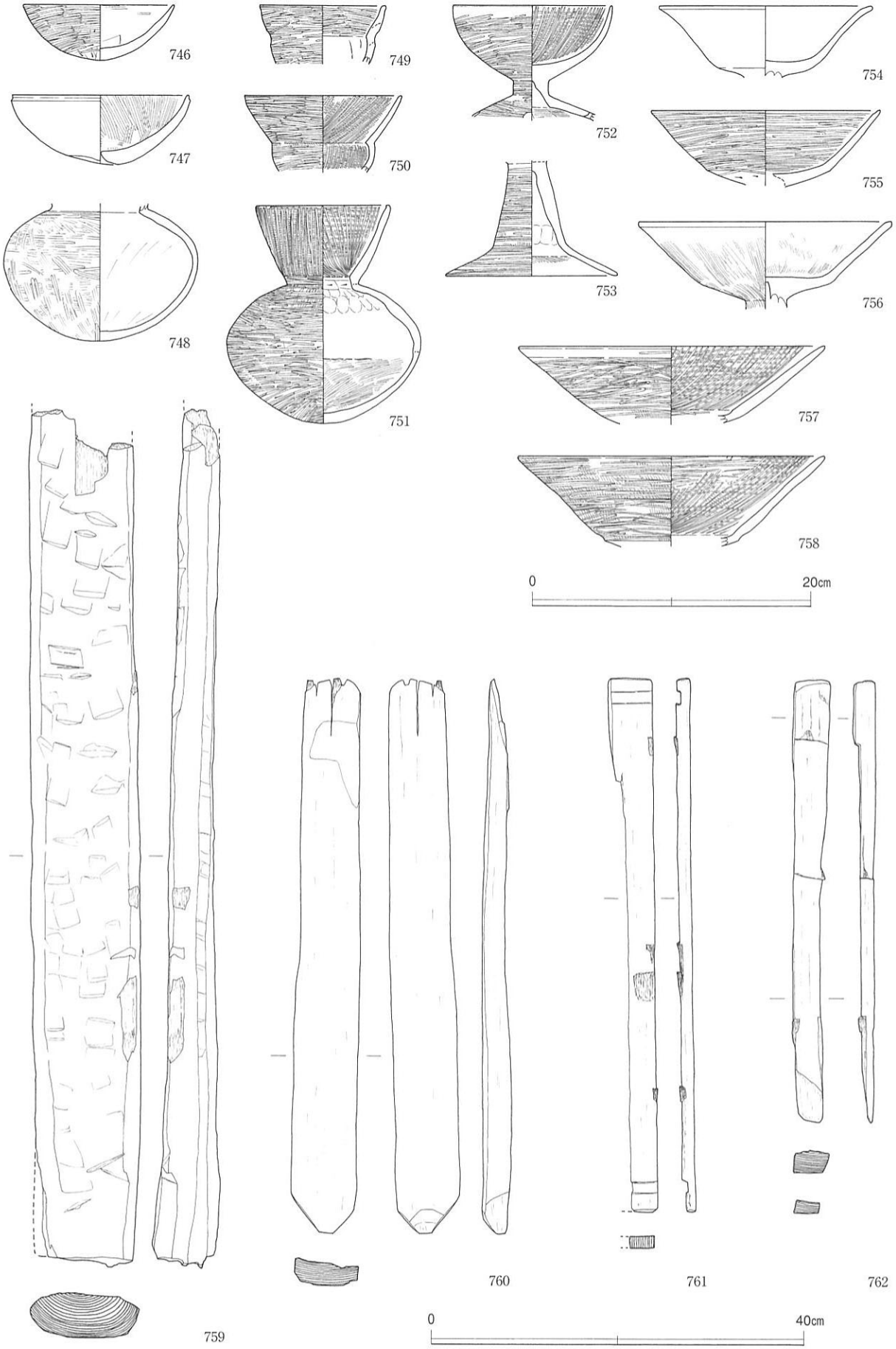



図90　467溝　出土遺物（2）

線的に外傾する短頸の直口壺で、体部外面をハケ、内面をヘラケズリ調整で仕上げ、口縁端部及び頸部の内外面には強いヨコナデ調整を施している。布留式期初頭の所産と考えられる。742は壺の底部。744は球形の体部に体部高と同程度の長い口縁部が付された弥生時代後期の長頸壺で、外面全体を縦方向のヘラミガキ調整で仕上げている。743は外面をハケ後ナデ調整で仕上げた中空の土製品。鳥形土製品と考えられるが、頭部と尾部は欠損している。746・747は丸底の椀形の鉢。前者が外面をヘラケズリ後横方向のヘラミガキで仕上げているのに対し、後者はナデ調整を施している。749・750は精製の小型丸底土器である。いずれも外面を細かい横方向のヘラミガキ調整で仕上げ、口縁部が内湾気味に長く延びた後者では、さらに内面に斜方向のヘラミガキを加えている。布留式期初頭の所産。751は器高20cmに満たない小型の直口壺で、748もその体部であろう。器面にはやはり細かいヘラミガキ調整が施されており、庄内式期末～布留式期初頭の所産と考えられる。752～758は高坏である。752は半球形を呈するやや深めの坏部を持つ低脚の椀形高坏で、器面には細かい横方向のヘラミガキを施し、坏部内面にはさらに斜方向のミガキを暗文風に加えている。754は内外面をナデで仕上げた坏部で、口縁部がわずかに外

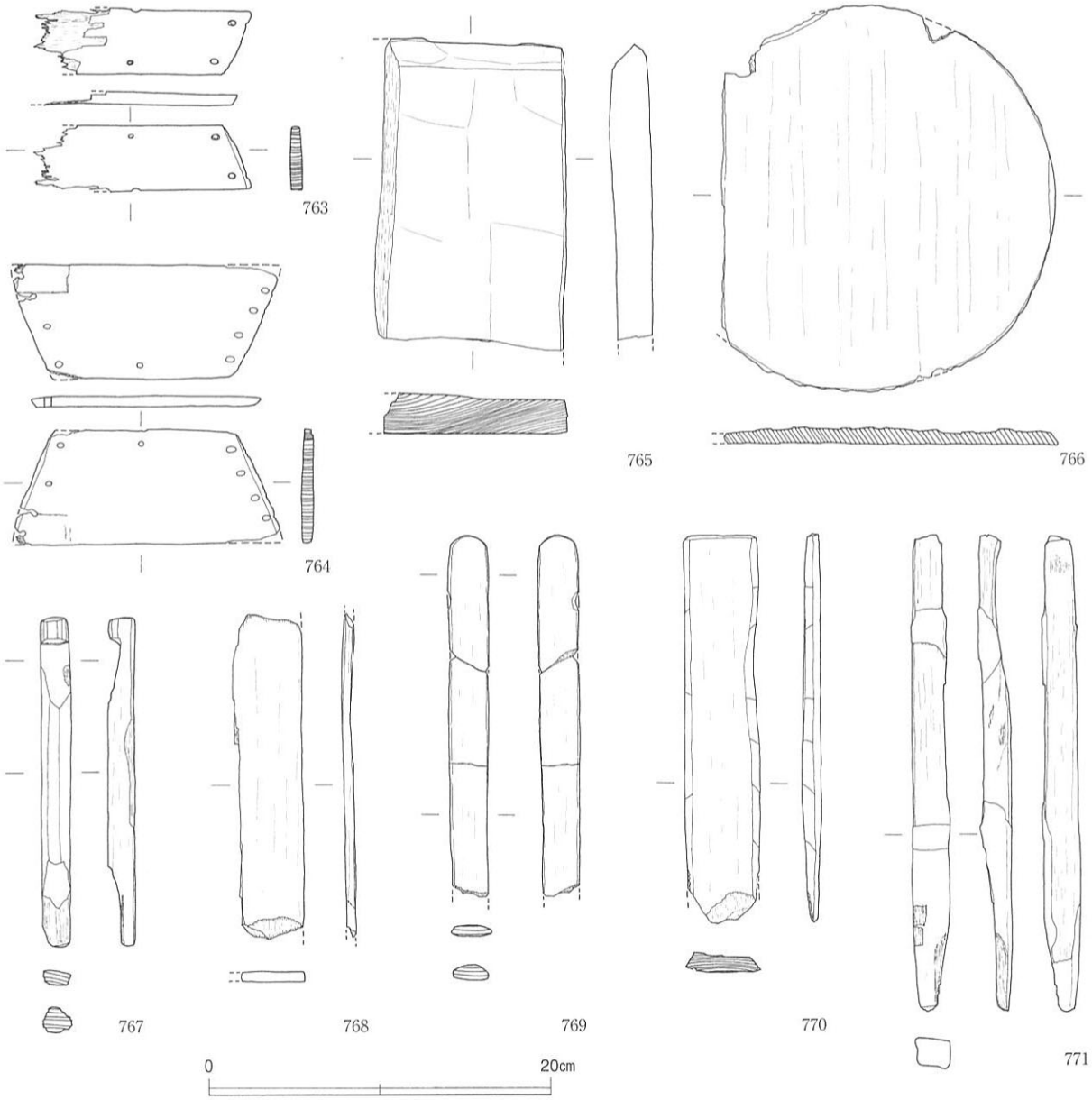



図91　467溝　出土遺物（３）

反している。布留式期前半でもやや後出する資料であろう。755～758は口縁部が直線的に上方へ開く坏部である。756がハケ後ナデ調整で器面を仕上げているのに対し、他は細かい横方向のヘラミガキを施し、757・758にはさらに内面に斜方向ミガキを暗文風に加えている。なお、この２点は胎土の特徴も共通しており、同一個体の可能性がある。753は長めの脚柱部から裾部が大きく広がるもので、外面の器面調整はハケ後横方向のヘラミガキである。

467溝から出土した以上の土器を通観すると、弥生時代後期～庄内式期前半に位置付けられるものが少数含まれるものの、庄内式期末～布留式期初頭の土器群を主体としている点では既往の所見と一致している。ただし、754の高坏坏部のように布留式期前半でも後出する資料も含まれており、溝の埋没には一定の時間幅を考慮する必要があろう。

なお、467溝からは木質遺物も比較的多く出土しており、そのうち人為的な加工が明らかに認められる資料を図示した。

759は残存長91cm、幅11.5cm前後、厚さ4.5cmを測る加工材で、建築部材の可能性が考えられる。表面及び側面には加工痕が明瞭に残っている。760は長さ約60cmの板状の加工材である。下部に向かってやや幅広となり、先端を剣先状に尖らせている。上部には一部焦げ跡が見られる。761は長さ57cm、幅4.5cmの板状の加工材で、上下端にはそれぞれ幅1.2cmの溝が切られている。762は長さ47cm、幅３～４cmの棒状の加工材で、上部には段が削り出されている。763・764は台形の小型板材４枚の斜辺同士を組み合わせて作る「四方転びの箱」と呼ばれる箱状製品の部材で、周囲には紐で緊縛するための小孔が穿たれている。764は頂辺約10.5cm、底辺約16cmを測り、頂部中央に1個、斜辺両側に各4個の小孔が見られる。765は板状の加工材。破損した側がやや厚くなっており、鍬などの素材の断片であろうか。766は容器の蓋あるいは底板と考えられる円盤状の製品で、直径22.5cm、厚さ約１cmを測る。767～771は長さ30cm未満の棒状あるいは板状の加工材である。

〔439・475・478溝〕（図92）

第５面ではこれまで述べてきた以外にも数条の溝状遺構を検出しているが、439・475・478の各溝を除けば、検出面からの深さが0.1mに満たず、遺構の性格も特定できない小規模なものが多い。

439溝は、467溝の東側で検出した北～北東方向に延びる溝状遺構で、466溝と重複関係を有しこれを切っている。北端が調査区外へ延び、南側が東西・南北両方向の筋堀と重なってしまったため、本来の長さは不明であるが、検出長約29m、幅0.25～0.95m、検出面からの深さ0.1～0.3mを測り、断面Ｖ字形の

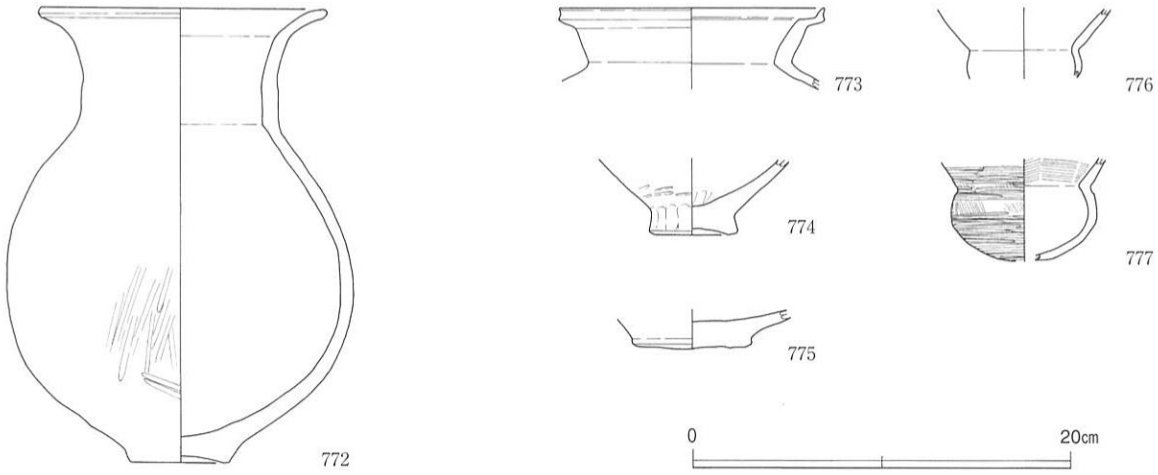



図92　439・475溝　出土遺物

溝底は北から南に向かって緩やかに傾斜している。埋土は粗砂～細礫を多く含む灰色シルト、粗砂～極粗砂を多く含むオリーブ灰色砂質シルトの上下２層に分かれ、上層には炭化物粒が多く含まれていた。溝内から出土した土器は非常に少なく、772を図示し得たのみである。卵形の体部から頸部が外傾気味に直立し、心持ち外反する口縁部を有した広口壺で、口縁端部は丸く仕上げている。弥生時代後期後半の所産と考えられる。

475溝は、Ｃ９－ｄ10区において検出した溝状遺構である。調査区北東端に位置するため検出し得た長さは3.8mほどで、規模は幅0.5～0.7m、検出面からの深さ0.1～0.15mを測り、断面形は皿形を呈する。溝内から出土した土器は少なく、埋設土器と捉えた後述する２個体の土器以外はすべて破片資料である。773は頸部から口縁部が直線的に外傾する広口壺で、口縁端部は強いヨコナデ調整によって小さな立ち上がりが作り出されている。774は上げ底の甕、775は平底の壺の底部である。776・777は小型丸底土器で、後者の体部外面には、横方向のヘラミガキ調整の下地に施された斜方向のハケ調整が認められる。

478溝は、調査区東端のＣ９－ｅ～ｇ10区において検出した溝状遺構で、位置関係から96－１調査区１トレンチの第５面で検出された遺構121と同一遺構である可能性が高い。同トレンチの南東角から北北西方向に向かっていたこの溝は、479竪穴住居の西側で「く」字に屈折して北北東方向へ延びており、検出し得た総延長は約55mとなる。溝の規模は幅0.55～1.15m、検出面からの深さ0.3～0.45mで、今回検出した範囲においては、溝底のレベルはほぼ平坦である。埋土は上下２層に分かれ、いずれも炭化物粒を含んだオリーブ灰色シルトを主体としている。埋土中からはほとんど土器が出土せず、溝の時期に関しては明らかにし得ないが、布留式期前半でも新しい段階に位置付けた479竪穴住居を切っていることから、布留式期後半以降に掘削されたものである可能性が高い。

〔474土坑（木棺墓）〕（図93，図版29－２・３）

Ｃ10－ｃ４区において検出した土坑で、方形周溝墓の周溝の可能性を指摘した466溝の南西コーナーから南西1.5mのところに位置する。

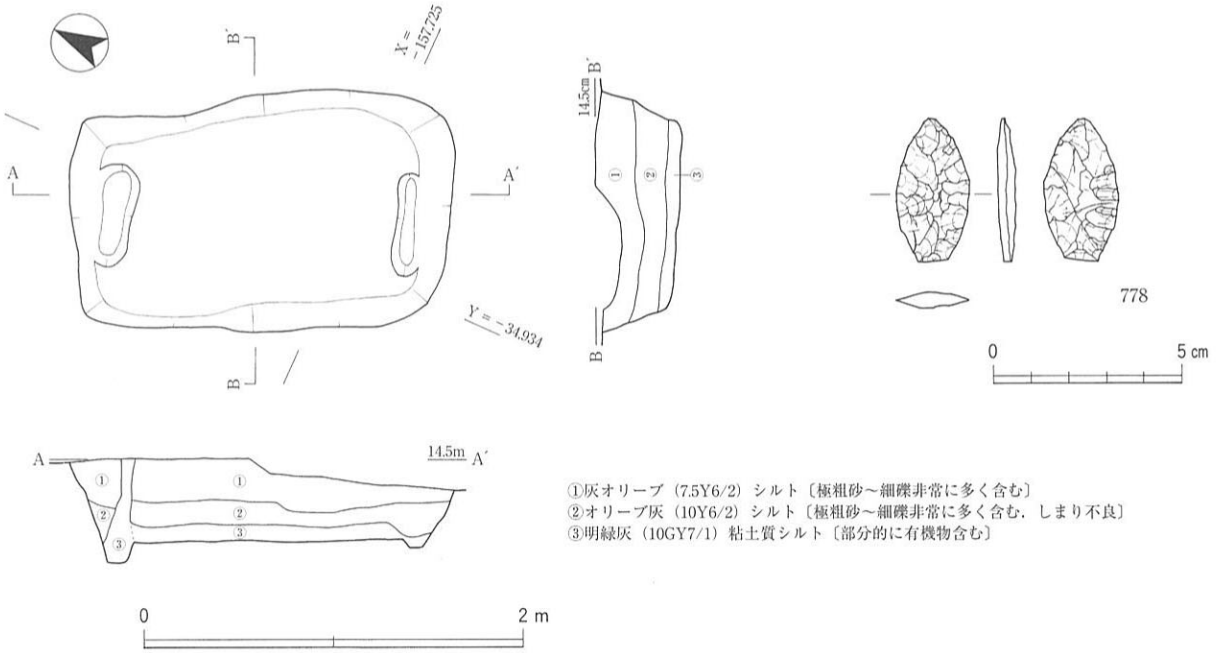



図93　474土坑　平・断面図，出土遺物

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸はN23°W方向を指す。規模は検出面で長さ2.05m、幅1.15～1.25m、底面で長さ1.7m、幅0.9～1.05m、検出面からの深さ0.45mをそれぞれ測る。埋土は大きく3層に分かれ、上・中層は極粗砂～細礫を多く含む灰オリーブ～オリーブ灰色シルト、下層は層厚10cm前後の明緑灰色粘土質シルトである。この粘土質シルトは、南壁際において下層上面から85°の角度で帯状に立ち上がっていたことから、それぞれ木棺の底板・小口板の痕跡である可能性が高く、事実、下層を除去して底面を精査したところ、土坑の短辺である南北両壁際において、木棺の小口板を打ち込んだ痕跡と推定される、同じ粘土質シルトを埋土とする長さ0.55m、幅0.15m、底面からの深さ0.05～0.1mの小溝が検出された。小溝間の距離と溝底面の長さから、納められた木棺は内法長約1.4m、幅約0.45mの大きさに復元できる。

土坑内からは、埋土中層よりサヌカイト製打製石鏃が1点（778）出土している。最大幅が中位にある側辺が大きく膨らむ形態の平基無茎式で、断面形は扁平な菱形を呈する。出土状況を正確に把握することができなかったため、埋葬に伴うものであるのか、木棺の腐朽過程で混入したものであるのかは判断できないが、仮に前者であるとするならば、この木棺墓の時期は、弥生時代中期～後期前半の時期幅の中に求めることができよう。

〔484土坑〕（図94，図版30－1）

C10－e1区において検出した円形の土坑である。東半部がY＝－34,900ラインの南北筋堀と重なってしまったため、本来の平面形態・規模を明らかにし得ないが、検出し得た部分で直径約1.6m、検出面からの深さは最深部で1.25mと大きく、井戸であった可能性が考えられる。

底面が南側に片寄っているため、坑底からの壁面の立ち上がり方は北～西側と南側で異なり、前者が途中段を有しながらも全体としては25°前後で緩やかに立ち上がっているのに対し、後者は垂直に近い急角度で立ち上がっている。埋土は大きく3分され、下層である緑灰色極細砂・暗オリーブ灰色砂質シルト・明オリーブ灰色中～粗砂のブロック混合土の上を、中層の灰色砂質シルト～シルト質極細砂と上層のオリーブ灰色砂質シルト～シルト質極細砂が覆っている。

埋土の各層からは比較的多くの土器が出土し、そのうちの8点を図示した。779・780は底面から10cm前後浮いた状態で重なって出土した下層資料で、前者はほぼ完形品である。いずれも丸底球形の体部外面に細筋のタタキ成形後斜方向のハケ調整を施し、内面は頸部までヘラケズリ調整で仕上げた庄内式甕で、体部外面の下半にはさらにナデ調整を加えている。779の口縁部は頸部から「く」字に強く屈曲し、口縁端部を内折気味に小さく摘み上げている。782～786は中層下位から出土した土器群で、いずれも破片資料である。782は高坏で、坏部上半と脚裾部を欠く。坏部の内面下半は直線的で、これに上端が中実となった短い脚柱部が接合している。783・785・786は大型の直口壺で、口縁端部は内側を小さく肥厚させたもの（783・786）と丸く仕上げたもの（785）の二者が見られる。784は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部内側を小さく肥厚させた布留式甕の口縁部である。わずかに残存する体部外面にはハケが見られ、内面は頸部直下までヘラケズリが加えられている。781は上層から出土した小型丸底土器で、ほぼ完形の資料である。口縁部は体部最大径を凌駕して大きく開き、口縁部内外面および体部外面には横方向の緻密なヘラミガキ調整が施されている。

484土坑から出土した以上の土器を通観すると、下層出土の庄内式甕は球形化が進行し、口縁端部の摘み上げも小さくなっているものの、体部外面のハケ調整は最大径付近までに留まっており、庄内式期末の所産と考えられる。対して上・中層から出土した土器群は、布留式甕やこれと同様の口縁端部を有

する直口壺、口縁部が大きく開く小型丸底土器を含む一方で、高坏は短い脚柱部形態を採っており、布留式期初頭あるいはその直後に位置付けられよう。したがって、本遺構の廃絶から埋没までには若干の時間幅が認められる。

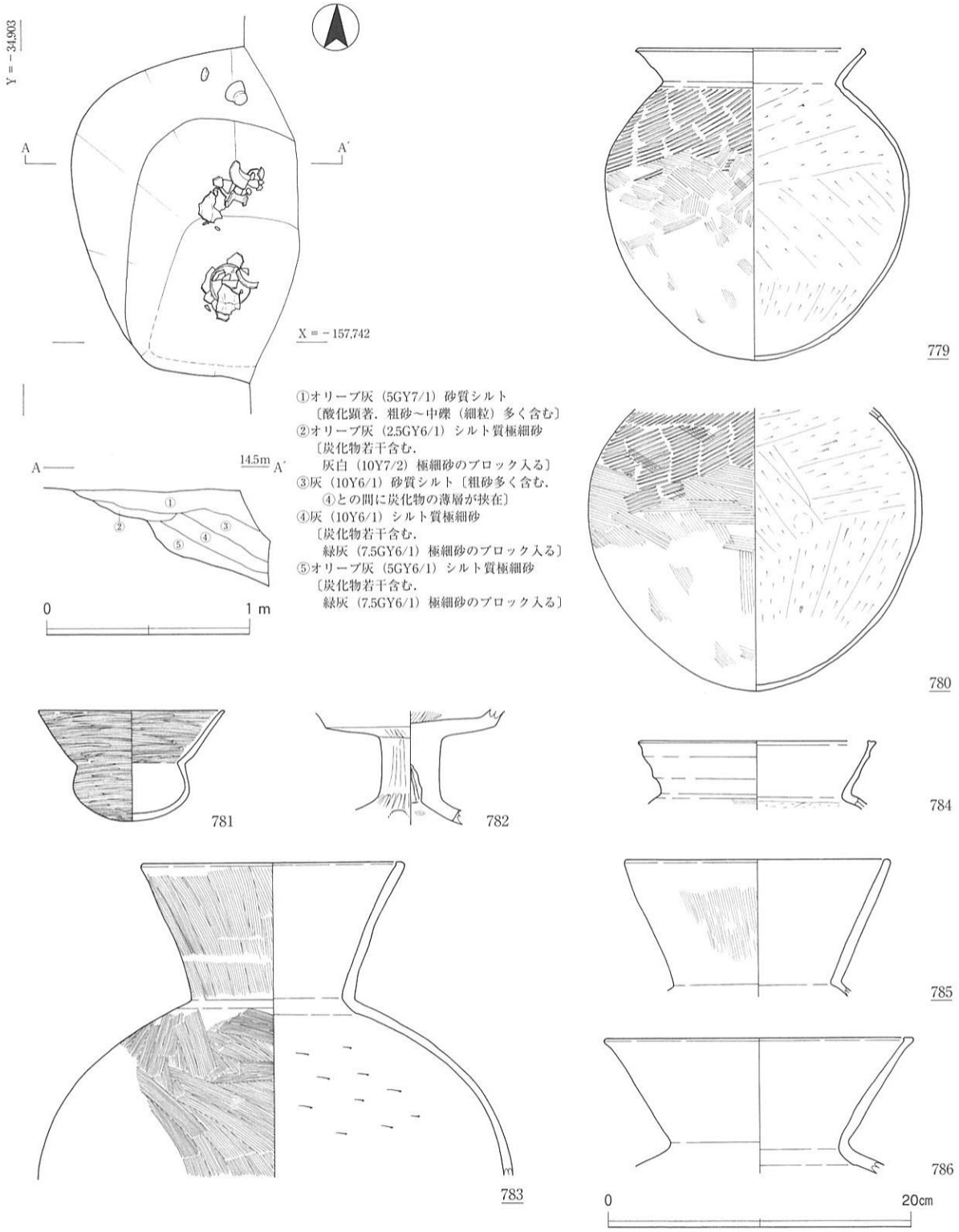



図94　484土坑　平・断面図，出土遺物

〔569土坑〕（図95）

調査区南東隅のＣ９－ｇ10区において検出した土坑で、479竪穴住居の２ｍ南側に位置する。平面形は東西方向に長軸を置く不整な瓢形を呈し、規模は東西約2.4ｍ、南北の最も広がった部分で約1.9ｍ、検出面からの深さ0.45ｍをそれぞれ測る。埋土の中心は炭化物・焼土粒を多く含むオリーブ黒色シルトで、この上を10cmほどの灰オリーブ色シルトが覆っている。

遺物の多くは下層内、特にその中位から出土し、そのうちの４点を図示した。787は有段高坏である。坏部は口縁部が段を有して外上方に延び、脚部は脚柱部が中膨らみ気味に広がり、裾部は屈曲して平たく開いている。器面調整は外面及び坏部内面がハケ後横方向のヘラミガキ、裾部内面はハケが施されている。庄内式に特徴的な形式であるが、本例は坏部内面の稜線がやや鈍くなっており、後半の所産と考えられる。788は器高3.4cmのミニチュアの鉢で、外面はナデ、内面はクモの巣状のハケ調整で仕上げている。789は円錐形を呈する小型器台の脚台部で、庄内式期後半～布留式期前葉に特徴的に見られる器種である。外面には緻密な横方向のヘラミガキ、内面には細かいハケ調整が施されている。790は長さ9.2cmを測るサヌカイト製の打製石槍である。

以上のように、569土坑からは有段高坏や無孔の小型器台といった庄内式期後半に通有の器種が出土しており、土坑の時期も当該期に求められよう。

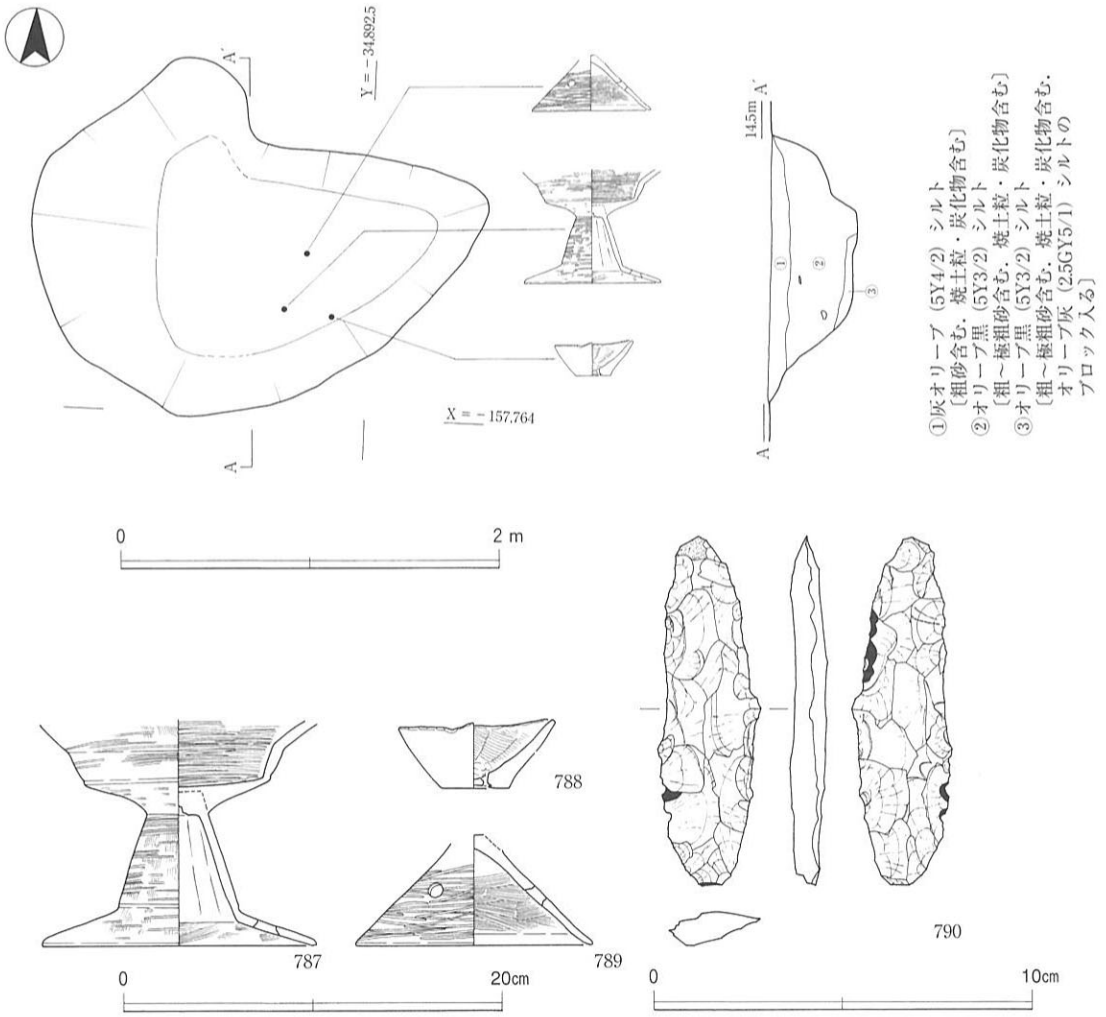



図95　569土坑　平・断面図，出土遺物

〔土坑・ピット〕（図96・97）

第５面においては、これまで述べてきた以外に約40基の土坑・ピットが検出されており、ここでは遺物が出土した遺構を中心に触れておきたい。

483土坑は、Ｃ10－ｆ・ｇ２区において検出した土坑である。平面形は西壁中央が括れた不整な長楕円形を呈し、長径1.7m、短径0.8m、検出面からの深さ0.45mを測る。遺構埋土は灰～灰オリーブ色シルトとオリーブ灰色シルトの上下２層に分かれ、このうち上層からは数点の土器（791～793）が出土した。791は弥生時代中期後半の大型甕で、おそらく混入品であろう。口縁部は体部に密着して段状を呈し、体部は口径をやや上回る程度に丸味を帯びている。体部外面は縦方向のヘラミガキ調整、内面は頸部よりやや下がった位置に横方向のヘラミガキ調整を帯状に施している。792は椀形の高坏坏部である。磨耗のため外面の器面調整は判然としないが、内面はナデ調整で仕上げている。793は脚柱部が長く延びて裾部が緩やかに広がる高坏脚部で、布留式期前半でも新段階の所産と考えられる。外面はナデ、内面は脚柱部をヘラケズリ、裾部をハケ調整で仕上げ、裾部内面にはヘラ記号が加えられている。

Ｃ10－ｅ４区では、第６面486流路の掘削途中に土器が纏まって出土し、土器周辺を精査した結果、３基の土坑の痕跡（490・491・493土坑）が確認された。

このうち、490土坑は483土坑と同様の形状を呈し、検出長は長径1.4m、短径0.8mを測る。出土土器のうち、794は口縁部上半が「く」字に内傾する二重口縁壺の口縁部で、瀬戸内東部に多く見られる器種である。ハケを施した内面下半以外は、ナデ調整で仕上げている。一方、795は弥生時代前期の壺で、おそらく流路埋土に含まれていたものが混入したのであろう。口縁端部に１条、頸部に２条のヘラ描沈線を施し、器面は内外面とも横方向のヘラミガキ調整で仕上げている。

491土坑は、490土坑から西3.5mのところに位置する。Ｙ＝－34,940ラインの南北筋堀と重複してしまったため本来の形状・規模を明らかにすることはできないが、おそらくは長径0.4mほどの楕円形を呈していたものと考えられる。坑内からは小型丸底土器（799）が出土した。

493土坑は、長径1.3m、短径0.4mを測る長楕円形土坑で、坑底に接して完形あるいは完形に近い状態の土器が４個体（796～798・806）出土した。796は完形の小型直口壺で、806の体部内から入れ子となって出土した。口縁部内外面はハケ後ヨコナデ、体部外面はヘラケズリ調整で仕上げている。797・798は体部外面を細筋のタタキ成形後ハケ、内面をヘラケズリ調整で仕上げた庄内式甕で、口縁部はいずれも頸部から強く屈曲し、口縁端部を上方に小さく摘み上げている。タタキ後のハケ調整は、797では体部上半、798では頸部付近まで及んでいる。806は器高30cmを超える大型の直口壺で、口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸く仕上げられている。口縁部外面を斜方向、内面を横方向のハケ調整後、口縁端部付近と頸部外面にヨコナデを加え、体部は外面全体をヘラケズリ後、頸部付近のみ斜方向のハケ調整を施している。なお、体部外面には編み籠の跡が残されている。

Ｃ９－ｄ～ｅ９・10区に位置する521竪穴住居周辺では、調査区全体の中で特に土坑・ピットが集中して分布している。

525土坑は、521竪穴住居の北西隅から北2.5mに位置する南北に長い長楕円形土坑で、長径1.3m、短径0.45m、検出面からの深さ0.2mを測る。埋土は粗砂を含む灰オリーブ色シルトで、中からは椀形高坏（800）が出土した。磨耗により器面調整が判然としないが、庄内式期後半の所産であろう。

529土坑は、521竪穴住居の北東隅から南南東0.6mに位置する楕円形の土坑である。長径約1.0m、短径0.65m、検出面からの深さ0.2m強を測り、灰オリーブ色粘土質シルト・暗オリーブ灰色シルトの上下

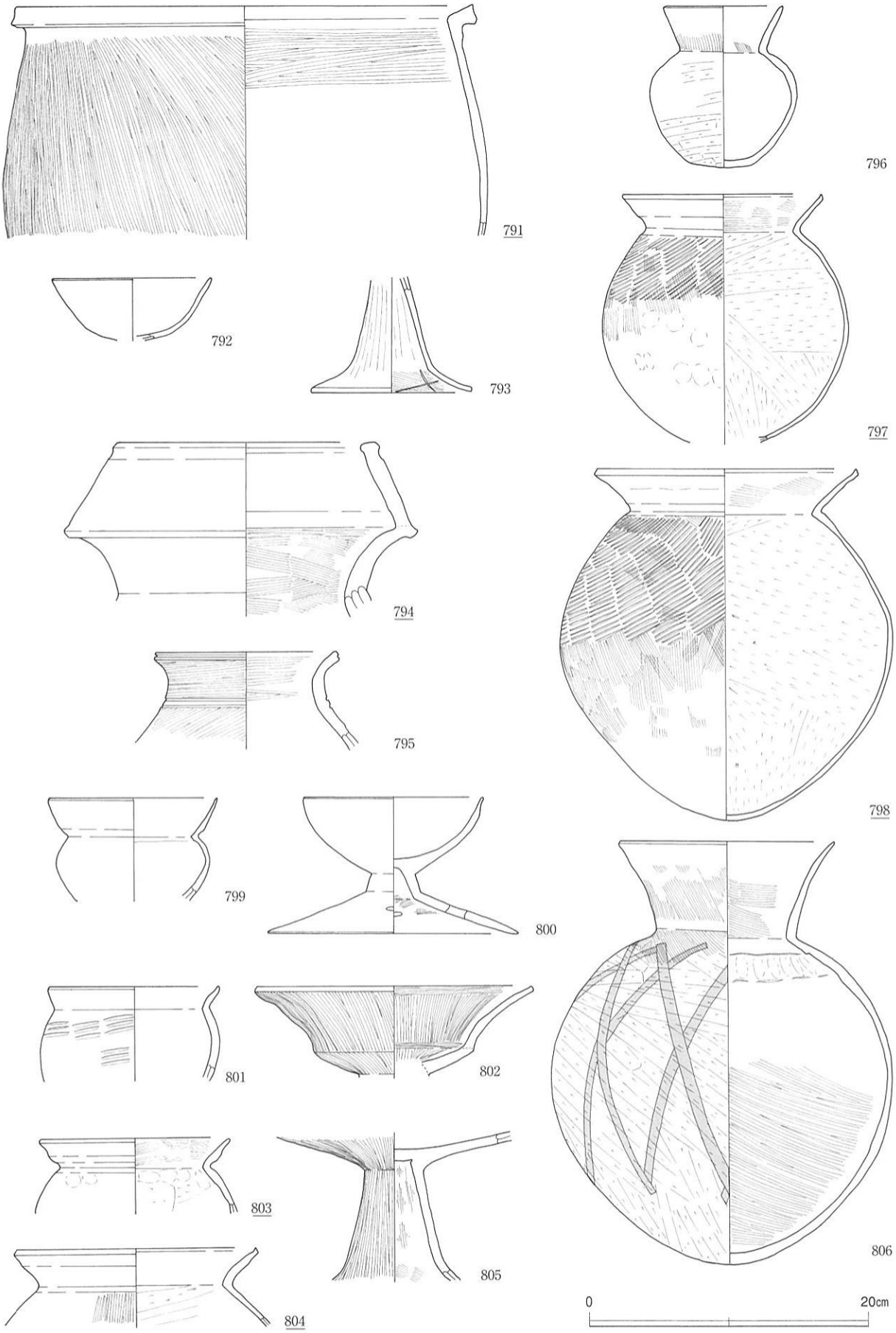



図96　土坑・ピット　出土遺物（1）

２層からなる埋土のうち、下層からは高坏坏部（802）が出土した。上半部が長めに外反して広がり、器面には縦方向を主体とするヘラミガキ調整が施されている。弥生時代後期末の所産と考えられる。

529土坑のすぐ南東側には、瓢形を呈する565土坑が存在する。東端が調査区外へ続くため全体の規模は不明であるが、南北長は1.85m、東西は検出長1.1m、検出面からの深さ0.2m強を測る。埋土である炭化物粒や焼土ブロックを多く含む灰オリーブ色シルト層からは、小型甕（801）の破片が出土した。

566土坑は、521竪穴住居の南東隅から南0.3mに位置する。北北西－南南東方向に長い不整な長楕円形を呈し、長径2.05m、短径0.5～0.7m、検出面からの深さ0.3mを測る。埋土は灰オリーブ色シルトとオリーブ黒色砂質シルトの上下２層に分かれ、上層からは手焙形土器の蔽部破片（807）が出土した。

568土坑は、566土坑のすぐ南側に存在し、566と直交する方向に長軸を置く楕円形土坑である。東端を478溝で切られているため本来の規模は不明であるが、長径1.5m以上、短径0.7m、検出面からの深さ0.3m強を測る。埋土は566土坑と同様であり、上層からは広口壺の口縁部片（808）が出土した。

618ピットは、５層を掘削中に確認した小型の楕円形土坑で、521竪穴住居の南壁際の西寄りに位置する。規模は長径0.55m、短径0.4m、検出面からの深さ0.25mを測り、埋土である暗オリーブ灰色砂質シルト層内からは有段口縁鉢（811）が出土した。口縁部と体部との境がややなだらかで、体部外面のヘラミガキが省略されており、布留式期前半でも後出の資料であろう。

621ピットは、572竪穴住居の北西隅西側に位置する小穴である。規模は長径0.35m、短径0.25m、検出面からの深さ0.2m強を測り、618ピットと同じ暗オリーブ灰色砂質シルトを埋土としていた。埋土中

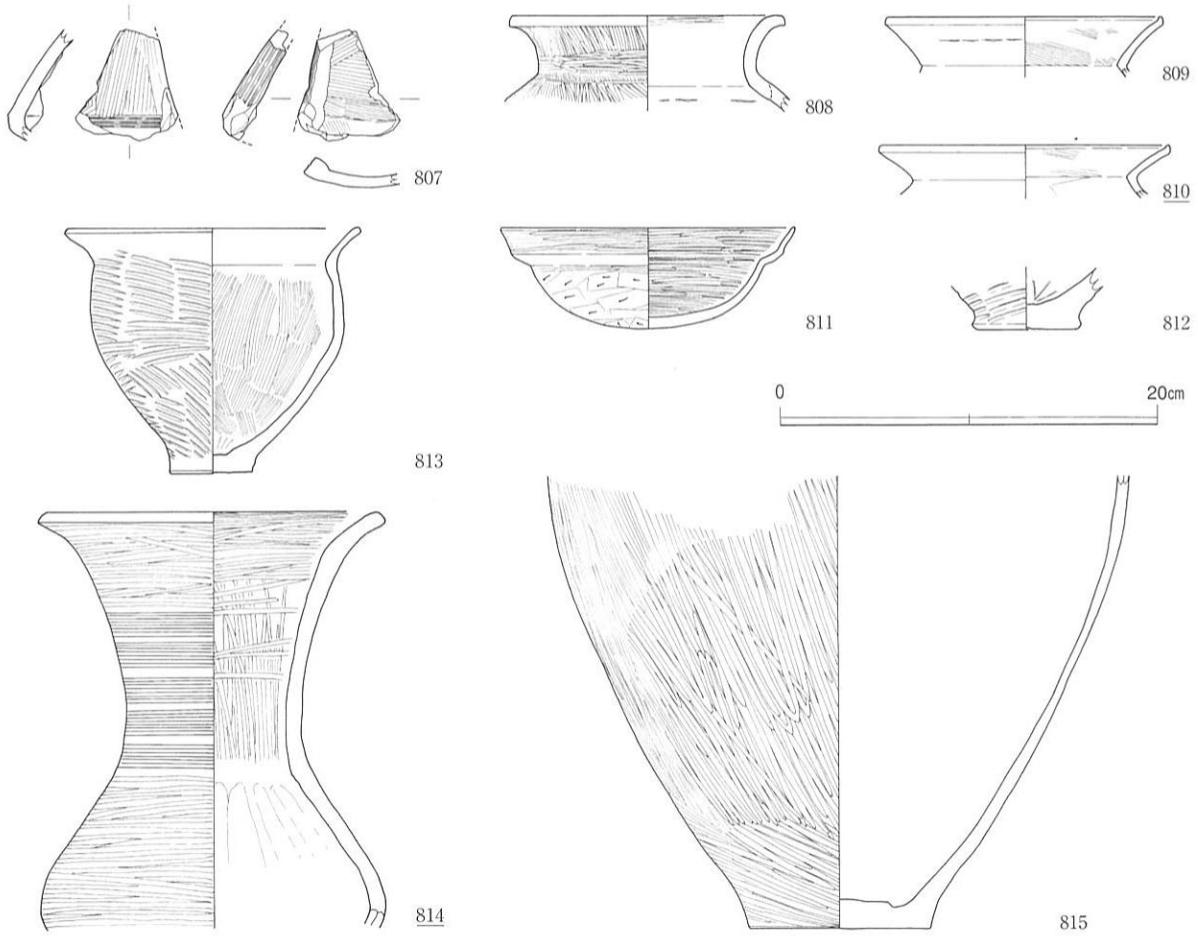



図97　土坑・ピット　出土遺物（２）

からは、庄内式甕の口縁部片（809）が出土した。

570土坑は、前述した569土坑に接してその南側に存在する。調査区南東端に位置したため全体を検出し得ず、形状・規模に関しては不明な点が多いが、検出した範囲では一辺2.5m以上の不整方形を呈し、検出面からの深さは0.25m前後を測る。坑内からは、時期の異なる２点の土器（813・814）が出土した。813は器高13cmほどの平底の小型甕で、体部外面下半を斜方向、上半を横方向にタタキ成形を施し、内面は縦方向のハケ調整で仕上げている。肩の張りは弱く、口径が最大径となっており、弥生時代後期末～庄内式期前半の所産であろう。814は長頸の広口壺で、外傾しながら筒状に延びた頸部から口縁部が緩やかに外反し、頸部には櫛描直線文を５帯巡らしている。弥生時代中期前葉の所産と考えられ、土坑の位置が第６・７面の流路上に当たっていることから、流路内の遺物が混入した可能性が高い。

576土坑は、479・573竪穴住居の西1.0mに位置する。隅丸方形と長楕円形の２基の土坑が重複したような平面形を呈し、底面も長楕円形の部分が0.1mほど深くなっているが、埋土は極細砂～粗砂を多く含む灰オリーブ色シルトの単層であり、両者の間に明瞭な切り合い関係は認められなかった。規模は南北長2.4m、東西長1.9m、検出面からの深さは0.2mを測る。坑内からはコンテナ半箱弱の土器片が出土し、このうち３点（803～805）を図示した。803・804は甕で、庄内式甕と同様に口縁部が頸部から強く屈曲し、体部内面は頸部までヘラケズリを施している。ただし、体部外面の調整は斜方向のハケもしくはナデ調整によっており、803は器壁も比較的厚く、口縁端部も丸く仕上げられている。805は大きな坏部下半から中空の脚柱部が円錐状に広がる高坏で、外面は坏部下半・脚柱部とも縦方向のヘラミガキ調整を施している。弥生時代後期前半の所産と考えられ、混入品と理解しておきたい。

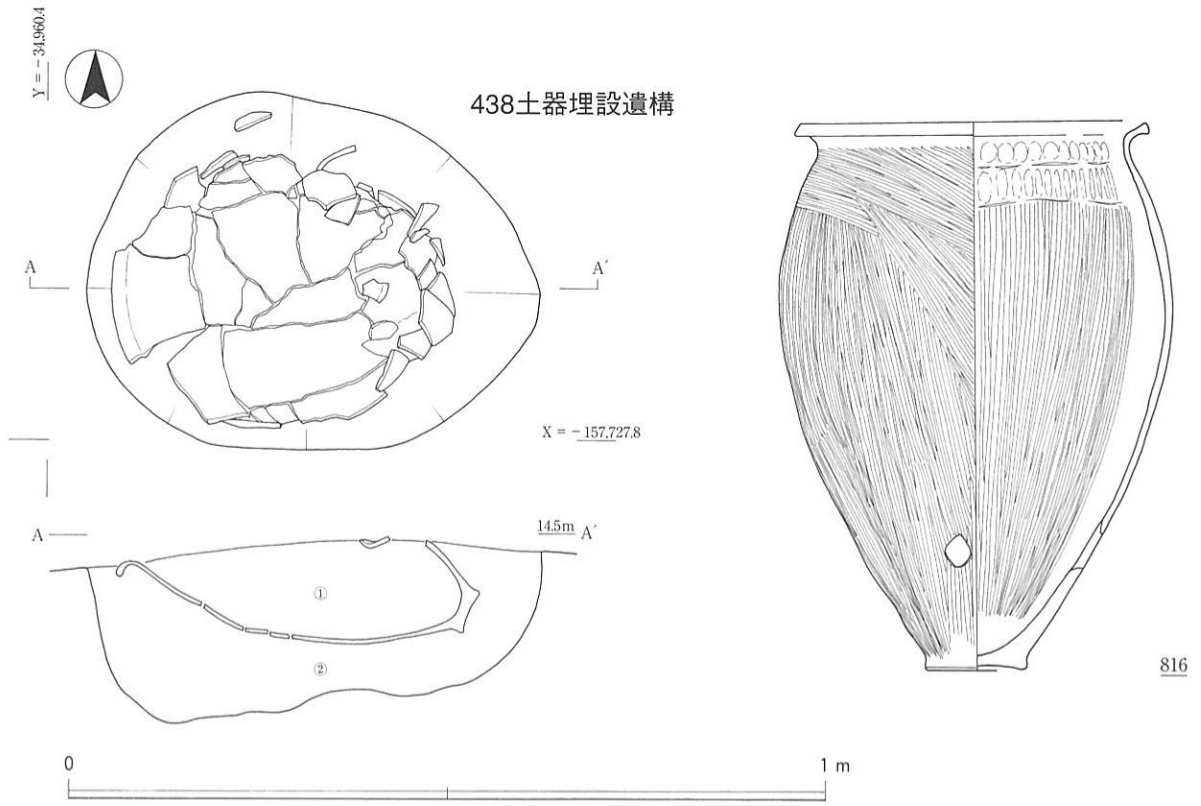
599土坑は、522竪穴住居東壁際で検出した土坑である。西半を522竪穴住居、北側を477方形周溝墓の南側周溝に切られているため、南半部を検出し得たに過ぎないが、検出面から深さ５cmほどの坑底に接して、甕の体部下半部が内面を上に向けて出土した。出土状況から土器棺墓など土器埋設遺構であった可能性が考えられ、その場合、口縁部を北側に向けて斜位に埋設されたものであろう。出土した815は、外面底部付近に斜方向、それより上位に縦方向のヘラミガキを施し、内面をナデ調整で仕上げたもので、弥生時代中期中葉前半の所産と考えられる。

６ａ層掘削中に確認した645・667ピットは、出土土器の時期から本来第５面で検出すべき遺構を見落としてしまったものと判断し、合わせてここで触れておく。645ピットは、513竪穴住居の南西隅西側で検出した円形の小穴で、径0.3m、検出面からの深さ0.15mを測る。埋土の観察では中心部分で柱痕が認められ、掘り方埋土である灰オリーブ色シルト層内からは、平底の甕の底部（812）が出土した。一方、477方形周溝墓の東側周溝の東で検出した667ピットは、上面や断面では確認できなかったものの、平面形や底面の状況から大小２基のピットが重複していた可能性がある。埋土は６層のブロックを若干含む灰オリーブ色シルトで、中からは庄内式甕の口縁部片（810）が出土した。

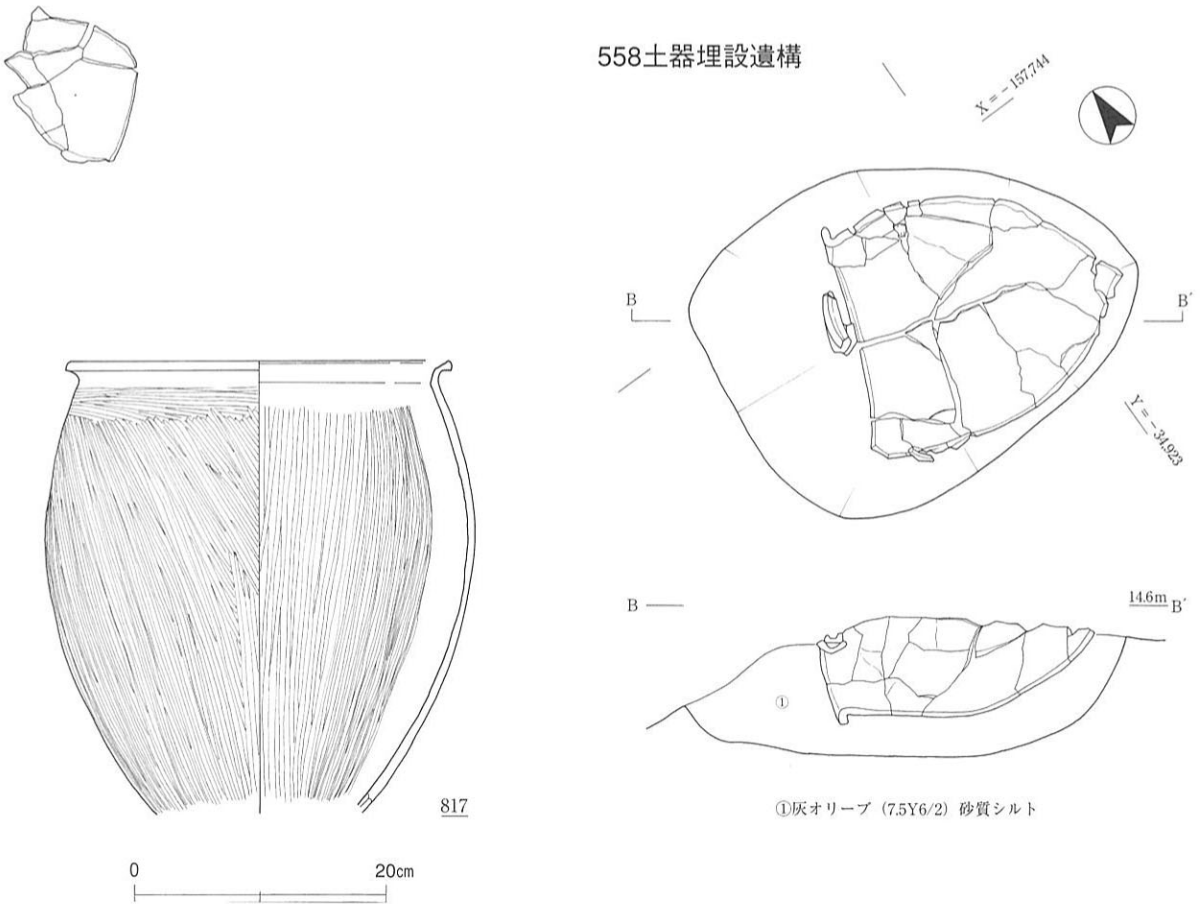
〔438土器埋設遺構〕（図98上段，図版30－２）

調査区西端のＣ10－ｃ７区において検出した遺構で、土坑内に甕１個体が置かれたような状態で出土したため、土器埋設遺構と認識した。検出面の標高は14.49mである。

土器が埋設された土坑は、東端が尖り気味となった東西方向に長い楕円形を呈し、長径0.6m、短径0.47mの規模を有する。坑底は西側に向かって傾斜し、検出面からの深さは最深部で0.22mを測る。埋設土器は、坑底から６cmほど浮いた位置に約35°傾けた斜方向の状態で置かれ、口縁部を西に向けていた。そのため、土器の片面は底部付近を除く大半が削平によって失われていたが、復元された土器の法




①にぶい黄褐（10YR5/4）極細砂〔中砂含む．黄褐（10YR5/6）シルトのブロック入る〕
②灰オリーブ（7.5Y6/2）極細砂〔微量の粗砂含む〕
①灰オリーブ（7.5Y6/2）砂質シルト




①灰オリーブ（7.5Y6/2）砂質シルト

図98　438・558土器埋設遺構　平・断・立面図，出土遺物

量から、本来の掘削面は検出面より少なくとも0.2m以上は上位であったものと推定される。土坑は灰オリーブ色極細砂によって埋められ、土器の内部には鈍い黄褐色極細砂が詰まっていた。

816は土坑内に埋設されていた甕である。体部上半が丸味を帯びてやや強く張り、体部最大径は口径を上回る。口縁部の内外面はヨコナデ、体部は内外面とも縦あるいは斜方向のヘラミガキ調整で仕上げられており、弥生時代中期中葉前半の所産と考えられる。なお、土器内からは内容物を明らかにする資料は一切得られなかったが、体部下半には焼成後穿孔が認められることから、本遺構は土器棺墓であった可能性が高いと考えられる。

〔558土器埋設遺構〕（図98下段，図版30－３）

448方形周溝墓の墳丘上において検出した遺構で、Ｃ10－ｅ３区に位置する。内面を上に向けた１個体の甕が出土し、土器の周囲を精査した結果、土坑の存在が確認されたことから土器埋設遺構と認識した。検出面の標高は14.56mである。

土器が埋設された土坑は、直線的な西壁側に対し東側が尖り気味となったドングリ形を呈し、長径0.56m、短径0.44mの規模を有する。検出面から坑底までの深さは0.18mを測り、周囲の地層よりも砂質の強い灰オリーブ色シルトによって埋められていた。埋設土器は、底面から５cmほど浮いた位置に底部を東壁に寄せて横位で置かれ、口縁部をＮ70°Ｗ方向に向けていた。そのため、土器の片面は底部を含め削平によって失われていたが、復元された土器の法量から、本来の掘削面は検出面より少なくとも0.3m前後上位であったものと推定される。

817は土坑内に埋設されていた甕である。体部最大径は口径を上回るが、上半が直線的に内傾しているため、816よりも体部の張りは弱い。口縁部の内外面はヨコナデを施し、体部外面は最上部を横方向、それより下位は縦あるいは斜方向のヘラミガキ調整で仕上げており、弥生時代中期中葉前半の所産と考えられる。

本遺構の性格については、土坑内における土器の埋設状態が異なるものの、土坑の平面形や使用器種の共通性から、438土器埋設遺構と同様に土器棺墓であったと考えられる。なお、著しい削平のため土坑は検出できなかったが、本遺構の北西0.8mの位置でも同様の状態で埋設されていたと推定される土器片が出土しており、これについても土器棺墓の痕跡である可能性を考えておきたい。

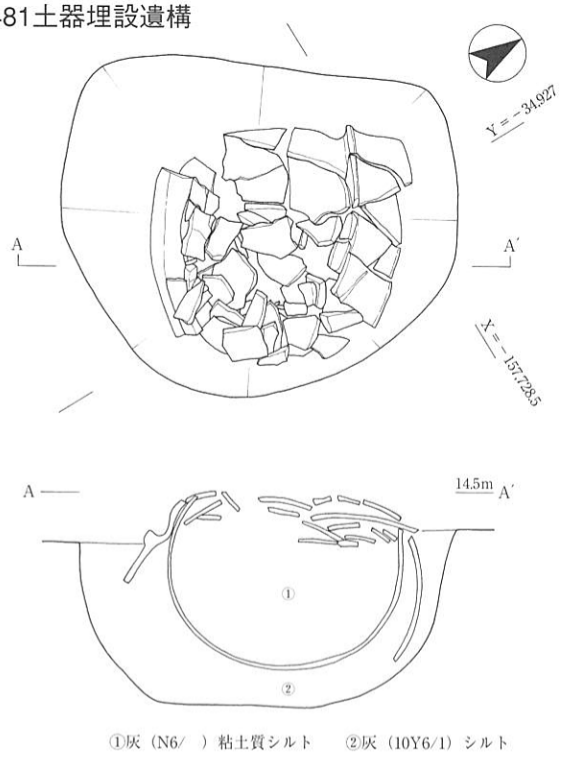
〔481土器埋設遺構〕（図99上段，図版31－１）

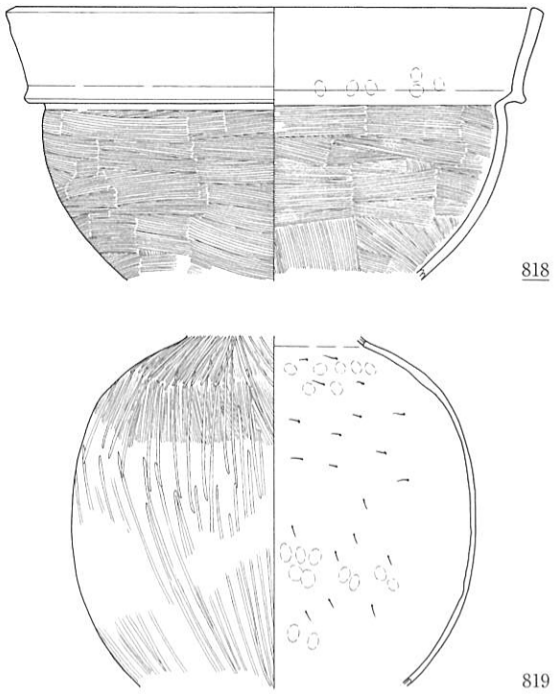
Ｃ10－ｃ３区において検出した遺構で、440方形周溝墓の西側周溝と441方形周溝墓東側周溝との間に存在する逆三角形の空白部分のほぼ中央に位置する。周溝の輪郭を確認中に土器片が敷き並べたような状態で出土したため、精査を実施したところ、灰色シルトを埋土とする土坑の存在が明らかとなったことから土器埋設遺構と認識した。土坑を確認した面の標高は14.45mであるが、埋設土器の上端はそれよりも５cmほど高く、本来の掘削面は少なくとも0.1m以上上位であったものと推定される。

土器が埋設された土坑は、西壁が直線的となった不整楕円形を呈し、長径0.53m、短径0.44m、土坑検出面から坑底までの深さは0.2mを測る。埋設土器は２個体からなり、全周の３分の１強の壺体部を坑底から５cmほど浮いた位置に置き、その上に口縁部を下向きにした大型鉢の破片が覆っていた。壺体部内に詰まった灰色粘土質シルト層からは、内容物を明らかにする資料は得られなかったが、検出状況から壺を棺身、鉢を棺蓋として組み合わせた土器棺の可能性が高く、本遺構は土器棺墓であったと考えられる。

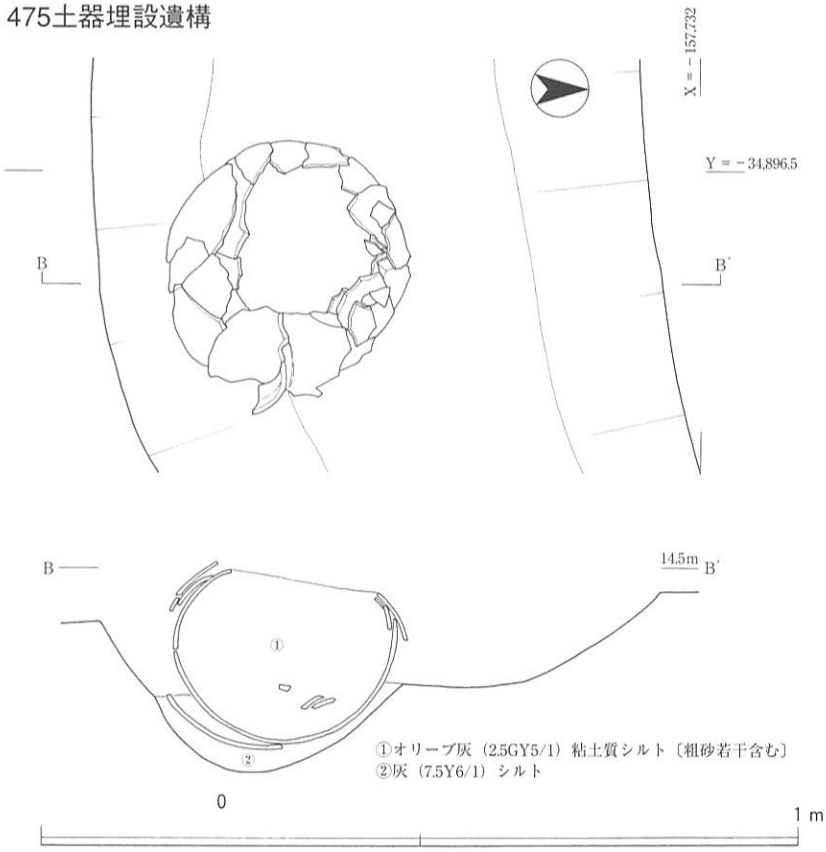
棺蓋として用いられた818は口縁部が段を持って立ち上がる大型鉢で、山陰地方で特徴的に見られる

481土器埋設遺構




475土器埋設遺構



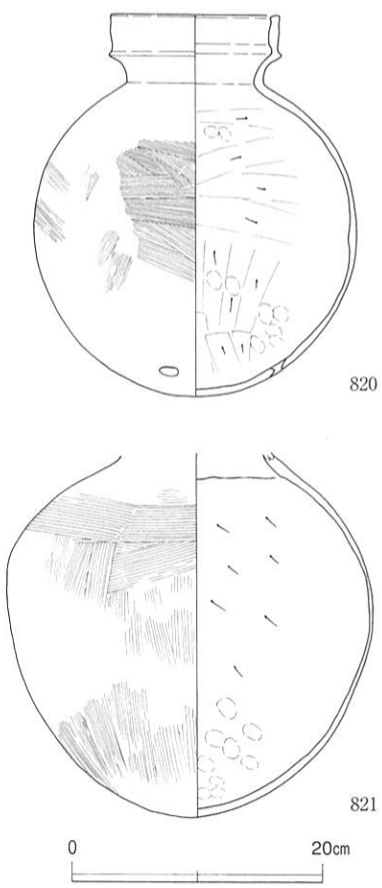




図99　481・475土器埋設遺構　平・断面図，出土遺物

器種である。口縁部はヨコナデ、体部は内外面ともハケ調整で仕上げられている。一方、819は棺身となった壺である。口縁部及び底部を打ち欠いているため、形式は不明であるが、卵形を呈する体部外面は縦方向のハケ後同方向のヘラミガキ調整、内面はヘラケズリ調整で仕上げている。

〔475土器埋設遺構〕（図99下段，図版31－２）

Ｃ９－ｄ10区において検出した475溝内から出土した土器であるが、481土器埋設遺構と同様に２個体の土器を組み合わせていること、土器が存在した下部だけが擂鉢状に凹んでいたことから、溝の埋没後に埋設された土器棺であった可能性が高いと考え、土器埋設遺構と認識した。ちなみに溝の検出面の標高は14.47mであるが、埋設土器の上端はそれより８cmほど高く、坑底までの深さは0.28mを測る。

溝の埋土との違いを認識し得なかったため、土器棺を埋設した土坑の形状・規模は不明であるが、擂鉢状の凹みは灰色シルトを埋土とし、棺内にはオリーブ灰色粘土質シルトが詰まっていた。棺身は口縁部を打ち欠いた壺を坑底からわずかに浮いた位置に立位で置き、別個体の壺の大型破片でこの上を覆って蓋をしていた。

820は棺蓋に利用された二重口縁壺である。丸底球形の体部から短い一次口縁が外反し、その上に直立する二次口縁が続くもので、接合部の境は三角形に突出し明瞭である。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げ、体部外面は斜あるいは横方向のハケ調整、内面は頸部よりやや下がった位置までヘラケズリ調整を施している。なお、底部に近い体部下半には、焼成後に穿たれた長径３cmの楕円形の円孔が認められる。821は棺身に用いられた壺の体部で、卵形に近い球形を呈する。外面は縦方向のハケ調整後上半に横方向のハケを施し、内面は頸部よりやや下がった位置までヘラケズリ調整を行い、下半に指押え痕を顕著に残すなど、布留式甕と同様の器面調整が行われている。

〔482土器溜り〕（図100・101，図版32－３）

514竪穴住居のすぐ北側には、南北2.4m、東西2.5m以上、検出面からの深さ0.2m前後の不定形な凹地が存在し、その中から多量の土器が出土した。土器は底面から浮いた状態で出土したものが多く、いずれも破片資料であることから、埋没途上の凹地に廃棄されたものと考えられる。

壺には、広口壺・短頸壺・直口壺・二重口縁壺がある。広口壺のうち、器形全体が判る833は、横に大きく張り出した算盤玉形の体部に強く外反する口縁部が付されたもので、底部は中央が凹むドーナツ底である。口縁部のみの資料では、粘土紐を付加して肥厚させた口縁端部に８条の擬凹線を施した822や列点を加えた823、１条の擬凹線を入れた824のように、加飾したものが目立つ。この加飾性は他の形式でも窺うことができ、短頸壺の825は口縁部内外面と肩部に櫛描波状文、口縁端部に同一原体による列点文を施し、体部のみの826も肩部を櫛描直線文と波状文により飾っている。さらに二重口縁壺の中にも、二次口縁部に円形浮文を付した829、二次口縁部に竹管文、口縁端部に刻みを施した830が存在している。反面、直口壺である827・832はいずれも無飾で、器面調整が判る後者は、口縁部・体部とも外面は縦方向のヘラミガキ、口縁部内面はヨコナデ、体部内面は斜方向のハケ調整で仕上げている。加飾壺の多くは庄内式期前半の所産と捉えられるが、筒状の頸部から口縁部が屈曲して直線的に延び、内外面に緻密なヘラミガキ調整を施した828の二重口縁壺のように、庄内式期末～布留式期初頭に位置付けられる個体も含まれており、一定の時間幅が認められる。

鉢にも形態・大きさの異なる数形式が存在する。834はやや扁平な半球形の体部から口縁部が外反する中型鉢で、器面は内外面ともナデ調整で仕上げている。842は椀形を呈する小型鉢で、口縁部には打ち欠きが加えられている。853は体部が直線的に外傾する平底の小型鉢で、外面には粗い右上がりのタ

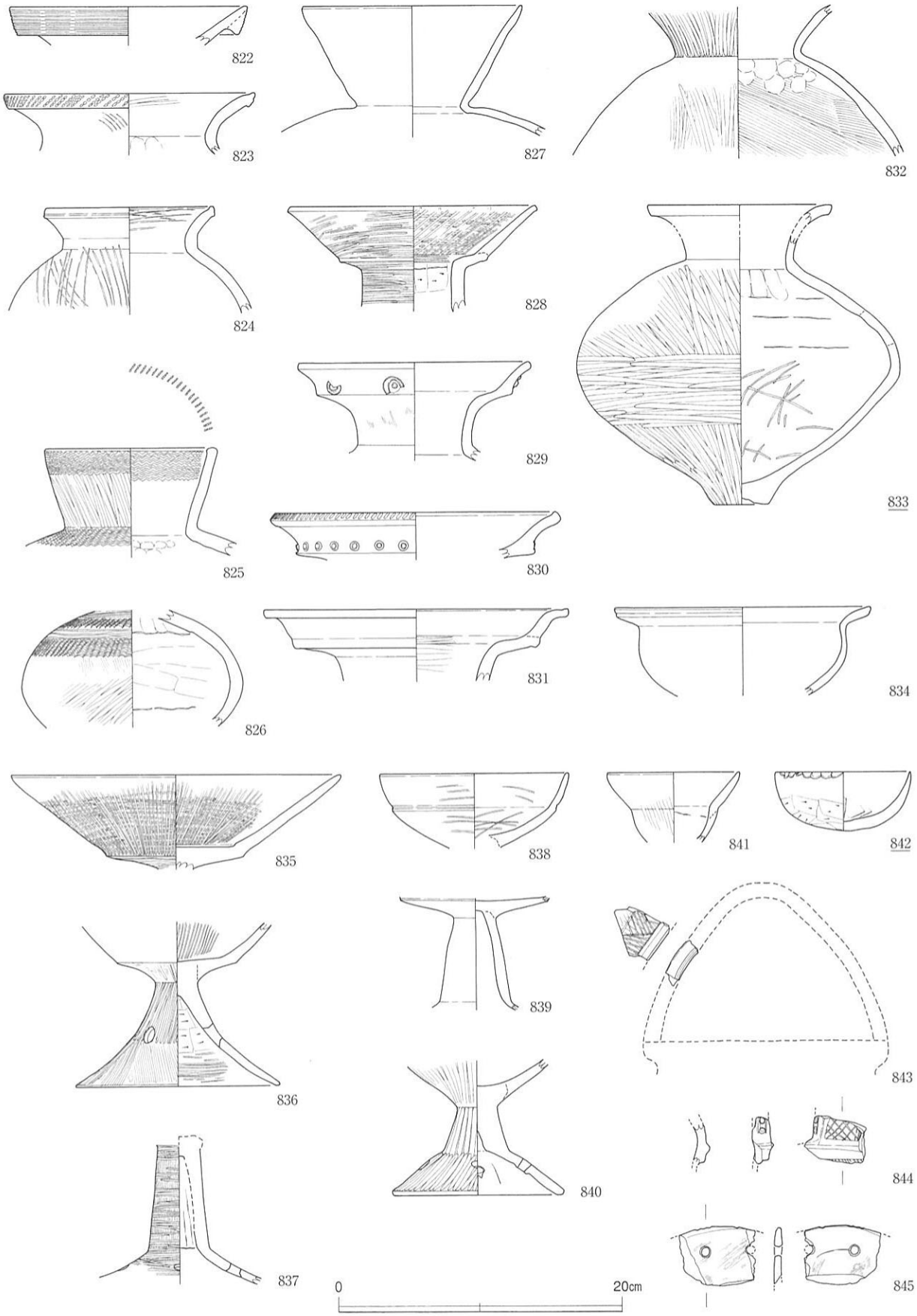



図100　482土器溜り　出土遺物（１）

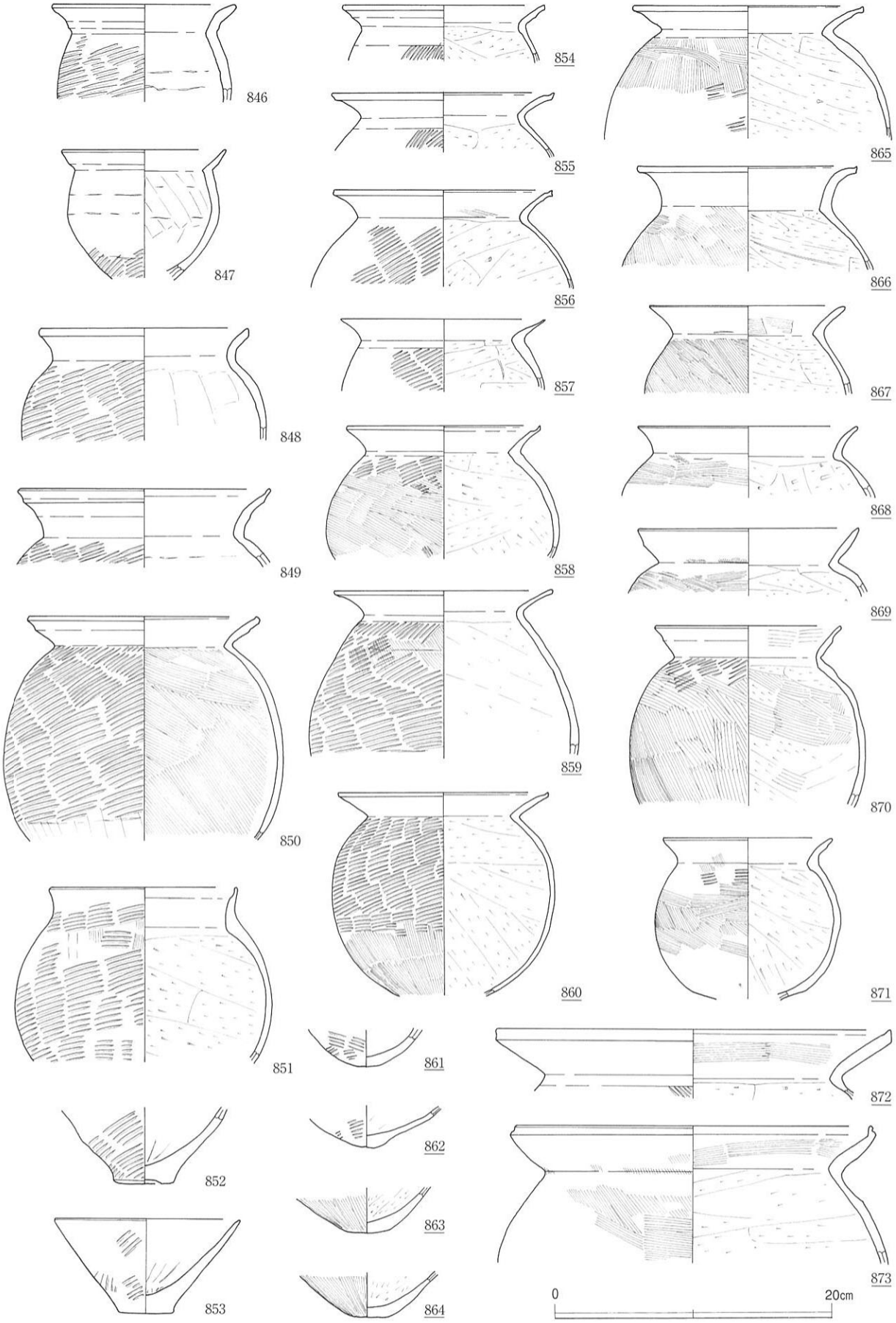



図101　482土器溜り　出土遺物（2）

タキ痕を残している。なお、形態的に小型丸底土器と似た841も、小型鉢とすべきかもしれない。

高坏は、器形全体を窺える資料を欠く。835は内面が平坦となった坏部下半から上半部が明確に屈曲して直線的に延びる坏部で、内外面とも細かなヘラミガキを横方向後放射状に加えている。庄内式期末～布留式期初頭の所産と考えられる。838は椀形を呈する坏部で、上半と下半の間には段が見られる。脚部についても、脚部全体がラッパ状に開く836や長細い脚柱部から裾部が屈折して開く837、中膨らみの脚柱部から裾部が屈折する839、上部が中実で裾部が内湾気味に広がる840など数形式が存在する。837・839は布留式期初頭、840は庄内式期前半の所産であろう。

この他、843・844は手焙形土器の破片で、いずれも沈線による文様が施されている。また、845は緑泥片岩製の磨製石包丁の破片で、混入品の可能性が高い。

甕についても細片が大半を占め、器形全体が判る資料は存在しない。器面調整に着目して見ると、体部内面にナデもしくはハケ調整を施したものとヘラケズリ調整で仕上げたものに分けることができる。前者は、846～850のようにいずれも体部外面に粗い右上がりのタタキ痕を残しており、弥生時代後期の甕の系譜を引く一群と言えよう。口縁部は外傾もしくは外反し、口縁端部を丸くおさめたものが多いが、ナデ調整による小さな立ち上がりを持つもの（849）や鈍い端面を持つもの（850）も存在している。底部は１個体（852）のみで、中央部が凹むドーナツ底である。一方、後者の体部外面は、タタキ成形あるいはその後にハケ調整を加えたものとハケ調整のみで仕上げたものとが認められる。タタキ痕は854～860・870・871に見られるように右上がりの細筋のものが目立つが、典型的な庄内式甕に見られる口縁部が頸部から鋭く外傾あるいは外反し、口縁端部を上方に小さく摘み上げたものは少なく（858・860・865）、むしろ口縁端部の摘み上げが行われずに端面を持つに留まっているもの（854）や丸く仕上げているもの（857・859・870・871）が多い。また、内面のヘラケズリ調整が頸部のやや下方に留まり、頸部の括れ自体やや鈍いもの（854～856・859・870・871）が多く存在している。なお、球形の体部から口縁部が短く直立気味に立ち上がる851は、体部内面をヘラケズリ調整で仕上げているものの、外面は粗いタタキ成形を施している。ハケ調整で仕上げたものについては、口縁部が外反し、口縁端部を上方に小さく摘み上げたもの（866）、同形態で端部を丸く仕上げたもの（867～869）、口縁部が外傾し、上方に小さく拡張された口縁端部に擬凹線を施した大型のもの（872・873）が見られるが、口縁部が内湾気味に立ち上がって端部を肥厚させた定型的な布留式甕は存在しない。

以上に述べたように、482土器溜りから出土した土器群には、庄内式期前半～布留式期初頭の時期幅が認められる。凹地全体に集められたように渾然一体となって出土した状況を踏まえれば、一定期間継続的に行われた廃棄行為の結果と捉えるよりも、むしろ前述の468方形周溝墓の北東・南東側周溝出土土器群と同様に、遺構掘削に伴って掘り当てた先行する時期の土器を含めて一度に廃棄した結果、数時期にわたる土器群となったものと考えられる。

## 第6面

5層を除去して検出される面で、96－1調査区の第6面に対応する。第1節でも述べたように、第7面段階に存在する流路及び低地を埋積する堆積物である5～6ｂ層のうち、上下の地層と比して暗色を呈するシルト～シルト質極細砂層を6ａ層と認識し、その上面を第6面とした。ただし、土壌化の度合いは全体的に弱く、場所によっては捉えることができなかったところもあり、厳密に同一面を検出し得ていない可能性もある。検出した面の標高は14.0～14.4mで、調査区の南東から北西方向へ向かって緩やかに傾斜している。

本面において検出した各遺構の説明を行う前に、5～6ｂ層内に包含されていた土器について触れておきたい（図102・103）。

875・876・879は、第6面検出中、すなわち5層から出土した土器である。875は上げ底気味の厚い底部を持つコップ形の鉢である。外面は底部からの立ち上がり付近を横方向、それより上位を縦方向のヘラミガキで仕上げている。876は長頸の広口壺である。口縁部を欠くため全体の器形は明らかではないが、体部はやや細長い算盤玉形を呈し、そこから筒状に延びた頸部には櫛描直線文が施されている。弥生時代中期前葉の所産と考えられる。879は甕である。口縁部は「く」字に外反し、丸みを帯びた体部最大径は口径を上回っている。体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整が施されている。弥生時代中期中葉前半の所産であろう。

874・877・878・880・881は、6ａ層から出土した土器である。863は無頸壺である。体部は横方向に強く張り、口縁部はごく短く直立している。口縁部直下から体部の最大径付近にかけて、櫛描直線文が連続的に施文されている。877は小型の甕である。丸味を持った体部外面にはヘラミガキ調整を施し、上げ底の底部は突出気味に横に張り出している。878も甕で、張りの弱い体部から口縁部が斜め上方に延びている。体部外面は、ハケ後左上がりのヘラミガキ調整で仕上げている。880は長頸の広口壺である。外傾気味に立ち上がった筒状の頸部から口縁部が緩やかに外反し、口縁端部をやや肥厚させている。口縁部の直下から体部上半にかけては、櫛描直線文が連続的に施文されている。881は広口壺である。算盤玉状にやや張りを持った体部から口頸部が緩やかに外反し、頸部から体部上半にかけては、中間に櫛描波状文を挟んで櫛描直線文が上下3帯施文されている。以上の6ａ層出土土器は、いずれも弥生時代中期前葉の所産と考えられる。

882～886は、第7面検出中に6ｂ層から出土した土器である。882は甕である。口縁部内面に横方向、体部外面に縦方向の粗いハケ調整を施し、体部内面をナデ調整で仕上げた大和型と呼ばれるもので、口縁端部には浅い刻みが加えられ、体部外面には全体にわたって煤が付着している。外反する口縁部は短く、体部に張りが認められることから、弥生時代中期中葉前半の所産と考えられる。883は無文の広口壺で、Ｃ9－ｄ10区の第7面直上において出土した。太く直立気味の頸部から口縁部が斜め上方に短く延びるもので、口縁端部には面を有している。器面は、内外面とも斜もしくは横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。弥生時代中期前葉の所産。884と885は、Ｃ10－ｃ6・7区において断面観察用のアゼを除去した際に出土した。884は広口壺である。太い頸部に短く外反した口縁部を持ち、その境には段が作られている。弥生時代前期前半の所産と考えられるが、出土位置が486流路と重なっており、本来下層に伴っていたものが混入したのであろう。885は広口壺で、頸部から体部上半にかけては櫛描直線文が施文されている。弥生時代中期前葉の所産と考えられる。886は器高50cm弱に復元される大型の甕である。全体に磨耗が著しいため器面調整は判然としないが、口縁部内面と体部外面の底部付近に

はヘラミガキが認められ、口縁部外面と体部内面の上部には指押え痕が明瞭に残っている。弥生時代中期前葉の所産と考えられる。

このように５～６ｂ各層から出土した土器は、混入と捉えた弥生時代前期前半の資料を除けば、いずれも中期前葉～中葉前半に位置付けられる。したがって、第５面の微地形の形成時期は、前述したとおり弥生時代中期前半に求められ、同面の検出遺構の中で最も時期が遡る遺構（438・558土器埋設遺構）が弥生時代中期中葉前半であることも、この所見を裏付けている。ところが、以下に述べる第６面検出遺構の中には、時期的に後続するものも存在しており、検出面と遺構の帰属時期が必ずしも整合してい

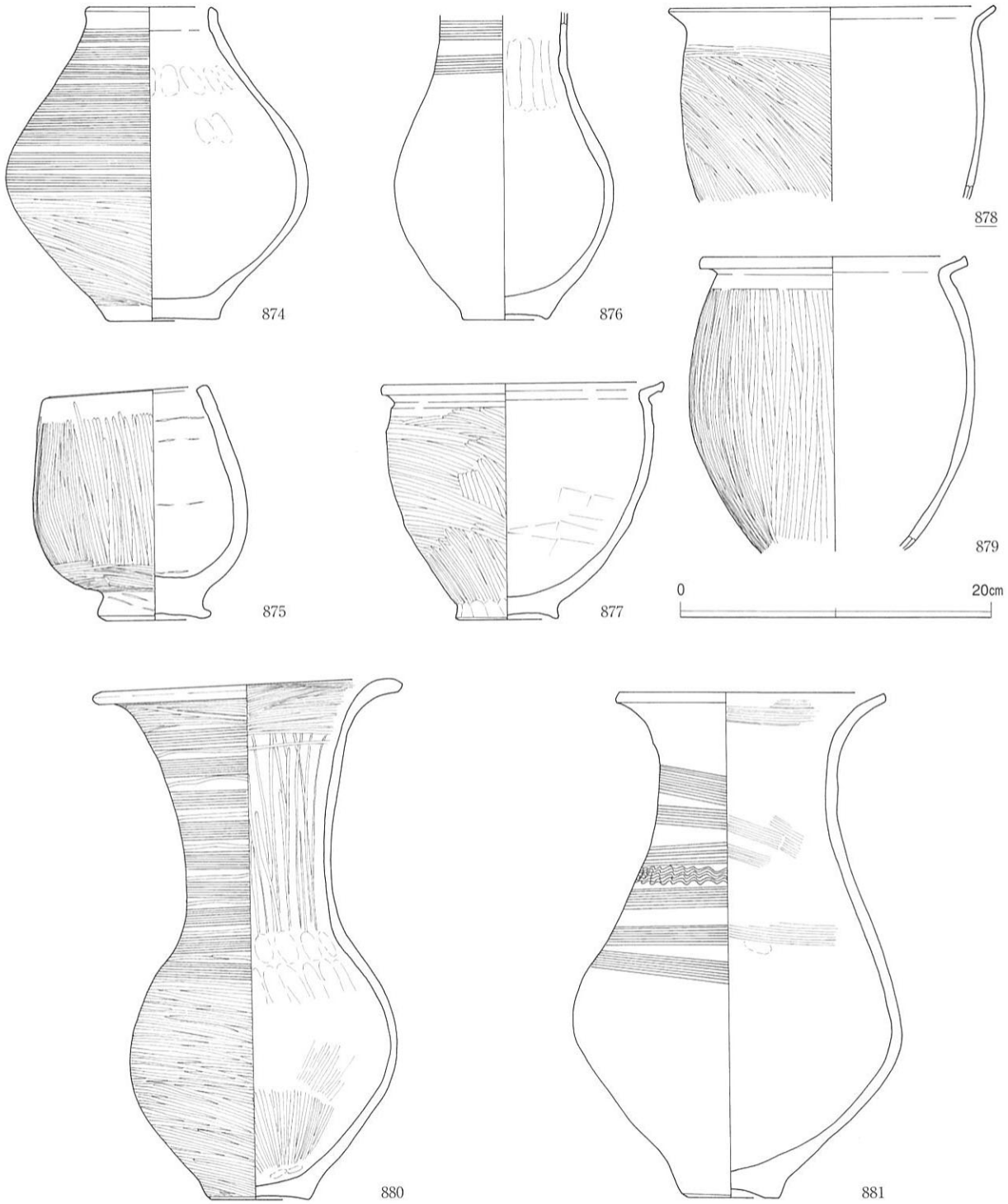



図102　５・６ａ層　出土遺物

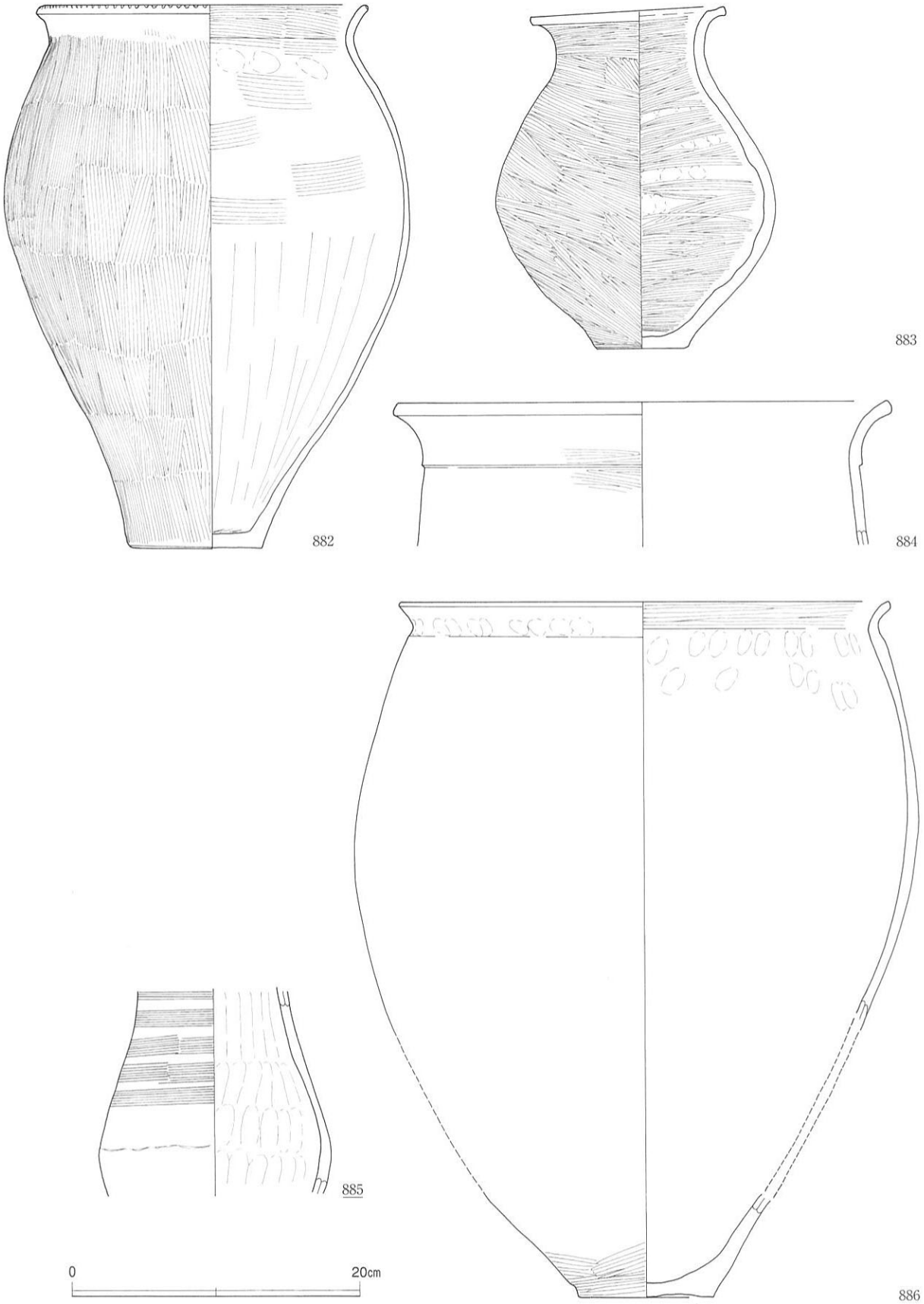



図103　6ｂ層　出土遺物

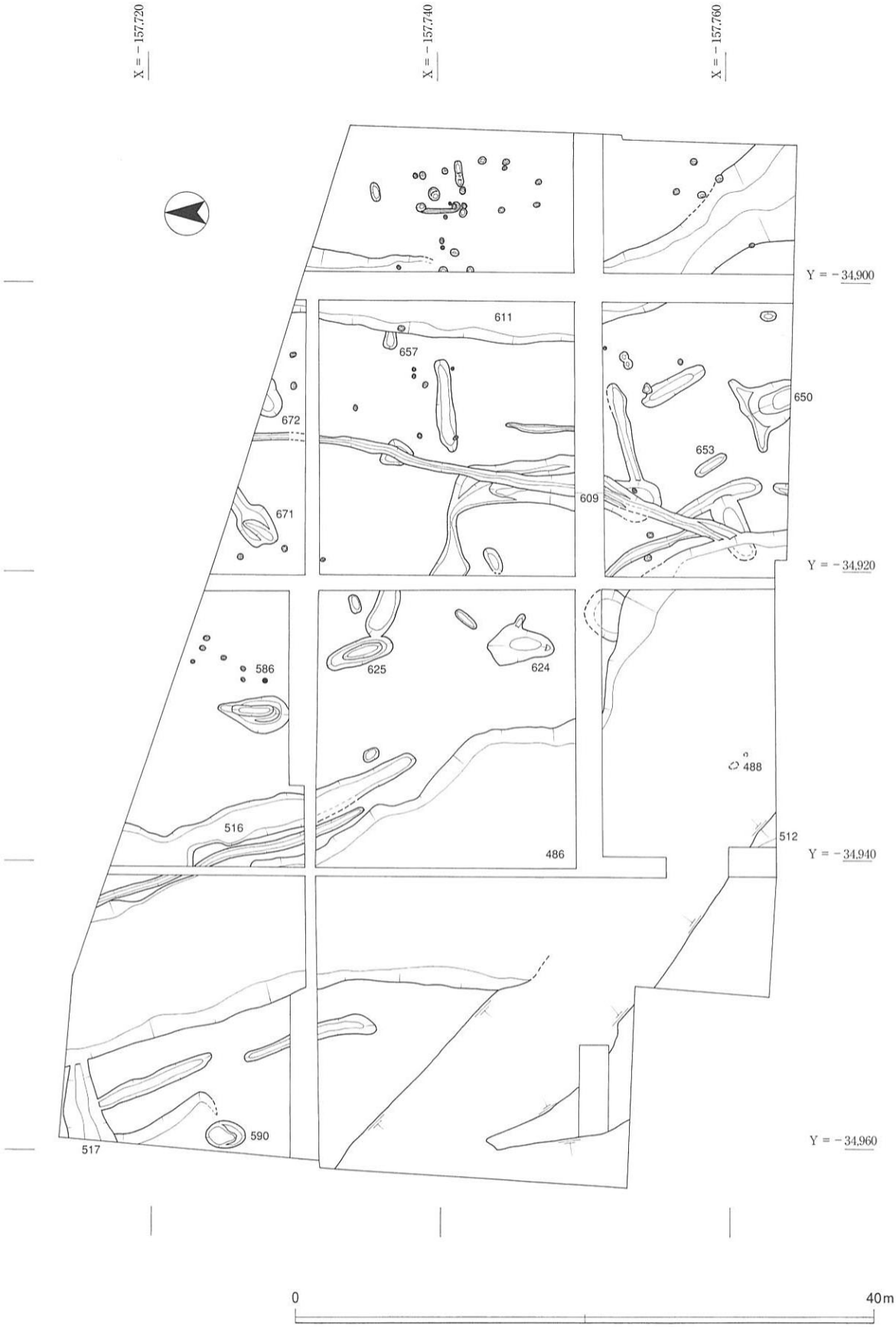

X = − 157.720
X = − 157.740
X = − 157.760
Y = − 34.900
Y = − 34.920
Y = − 34.940
Y = − 34.960
611
657
650
653
672
671
609
586
625
624
488
516
512
486
590
517
0
40m

図104　第６面　全体図

ない。これは5層が場所ごとに層相を異にし、堆積状況を十分に把握し切れなかったこと、5層自体が土壌化し、かつ上部が著しく酸化して橙色を帯びていたこと、第4面（3層下面）段階の耕作の影響を強く受けていることなどの要因により、本来は第5面で検出されるべきであった遺構を確認できなかったためと考えられる。

さて、第6面では2条の流路（486・611流路）のほか、土器埋設遺構や溝状遺構・土坑・ピットを検出した（図104）。このうち弥生時代中期の土器を伴う不定形な土坑は、いずれも6ｂ層を掘削中に確認したものであるが、断面観察により少なくとも6ａ層上面からの掘削が認められたことから、本面に帰属させることとした。ただし、本来の掘削面がより上位であった可能性があることは、前述のとおりである。また、流路のうち486流路に関しては、第5面検出遺構の帰属時期を通じて埋積していったものであることが出土土器の年代から窺われ、第5面で示した景観はその最終段階のものであることを付け加えておく必要がある。さらに、ピットを中心とする調査区東端で検出した遺構の多くは、5層下面遺構と捉えられるものであり、出土した土器も古墳時代前期の土師器片を中心としている。

〔486流路・488土器〕（図105～107，図版32－1）

第5面で帯状の凹みとして残存していた流路である。96－1調査区では、第3面段階の流路が重なっていたために認識されていないが、本調査区内では第3面343流路の深度が比較的浅かったこと、北西方向へ向かって延びる343流路に対し、486流路はその途中から北北西へと走行方向を違えていたことから、検出することが可能であった。

流路の規模は、343流路との分岐点付近で幅15m、調査区北端で10mを測り、北へ向かうにしたがって細くなっている。深さについては、掘削深度の関係から完掘し得なかったため不明であるが、最も深いところで1.5m近くに達する。流路埋土はシルト～細砂といった細粒の堆積物が主体であるが、上部では粗砂～細礫を多く含んでいる。

南側が343流路あるいは第5面467溝と重複していた関係で、流路埋土内からの出土遺物はコンテナ1箱程度と比較的少ない。このうちＣ10－ｇ4区では、今回掘削した範囲の中では最も低い位置から、図105に示したように弥生時代中期の土器が意図的に据え置かれたような状態で検出された（488土器）。土器は0.7mほどの間隔を置いて2か所に分かれ、東側では甕2個体が横倒しに重なり、西側では器高50cmを超す大型甕が同じく横倒しで出土した。

887は東側の2個体うち下に存在していた甕である。口縁部が「く」字状に外反し、体部は丸みを帯び、最大径が口径を上回っている。口縁端部には面を有し、体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は斜方向ハケ後横方向のヘラミガキ調整で仕上げている。一方、888は887を覆うように上に重なっていた甕で、やはり体部は丸みを帯びている。ただし、口縁部は端部に面を有するものの外反の度合いは緩やかで、器面調整も体部外面が斜方向のヘラミガキ、内面が斜方向ハケ後縦方向のヘラミガキといった具合に異なっている。889は西側で出土した大型の甕で、口縁部は未発達ながら下方に垂下させ、下端に小さな刻みを有する。体部の器面は、内外面ともハケ調整後に横あるいは斜方向のヘラミガキ調整で仕上げているが、外面の底部付近では横方向のヘラミガキを帯状に施している。なお、底部に近い体部側面には、外側から3回にわたって施された焼成後穿孔が存在している。いずれの土器も弥生時代中期中葉前半の所産と考えられる。

東大阪市西ノ辻遺跡では、流路（旧河道）内に埋設された弥生時代中期の土器棺墓が複数例検出され、土器棺墓の立地に関する河内地域の地理的な特性の1つとしても指摘されている［藤井2001］。本例に

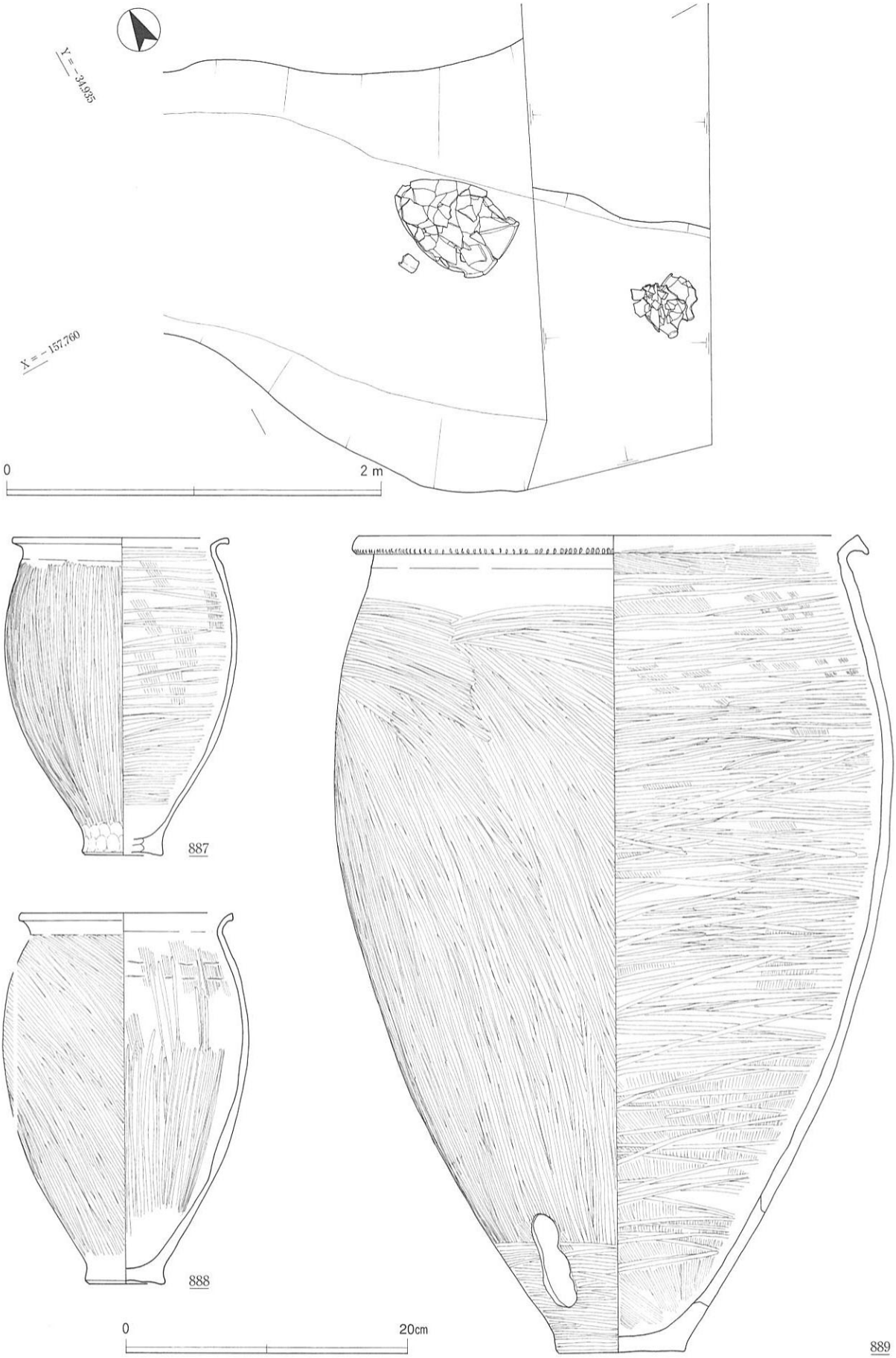



図105　488土器　遺物出土状態図，出土土器

ついても、西側の大型甕の体部に焼成後穿孔が認められたこともあって、検出当初は同じように流路内に埋設された土器棺墓の可能性を想定していたが、埋設を行った土坑を確認することはできず、人骨などの内容物も未検出であったことから、結論は保留せざるを得ない。

この他、486流路からは、図106・107に示した石器・土器が上部の肩際を中心に出土している。

石器は、890・891の２点が出土した。一端を厚く反対側を薄く仕上げた不定形刃器と考えられるサヌカイト製の打製石器で、いずれも背面の一部には自然面が残されている。

一方、土器については、弥生時代中期～古墳時代初頭の各時期のものが認められる。892～894は弥生時代後期前半の長頸壺である。892・893は口頸部が体部高と同程度に長く立ち上がるもので、器面調整は外面にハケ後ヘラミガキ、内面にナデを施し、口縁端部は尖り気味に仕上げている。一方、894は口頸部がやや短く開き、器面もハケ調整で仕上げており、前二者よりは後出の資料の可能性がある。なお、892の頸部外面には、ヘラ記号が認められる。895は加飾の広口壺で、口縁端部を上下に拡張させ、口縁部内面と口縁端部に櫛描波状文を施している。弥生時代後期末～庄内式期前半の所産と考えられる。896も広口壺で、おそらく庄内式期前半の所産であろう。口縁部は外反し、体部との間の括れは明瞭である。外面は口縁部・体部ともハケ後に斜方向のヘラミガキ、内面は口縁部上半を横、下半を縦方向のヘラミガキ、体部をナデ調整でそれぞれ仕上げている。898は平底で体部が椀形を呈する小型鉢である。外面はタタキ成形後ハケを施し、口縁部はナデ調整で仕上げている。897・899～904は甕である。897は上方に拡張した口縁部に２条の擬凹線を施した小型品で、古墳時代初頭の吉備地域に見られる甕に類似している。体部は粘土紐を螺旋状に積み上げて作られている。899は張りの弱い体部から口縁部が斜め上方に延びるもので、外面には縦方向のハケ調整を行った後、下半のみ同方向のヘラミガキを施している。弥生時代中期前半の所産。900・901・904は体部外面に右上がりの太いタタキ痕を残すもので、内面はハケもしくはナデ調整が施されているが、900の下半にはミガキ状のヘラ状工具の撫で付けが認められる。902は直線的に外傾した口縁部の上端を小さく上方に摘み上げ、体部外面に細筋のタタキ成形後ハケ調整、内面にヘラケズリ調整を施した庄内式甕、903は口縁端部の摘み上げ、体部内面のヘラケズリ調整といった同様の特徴を具備しつつも、体部外面をナデ調整で仕上げたものである。905・906は高坏である。906は内面が平坦となった坏部下半から上半部が直線的に開き、内外面とも緻密な横方向

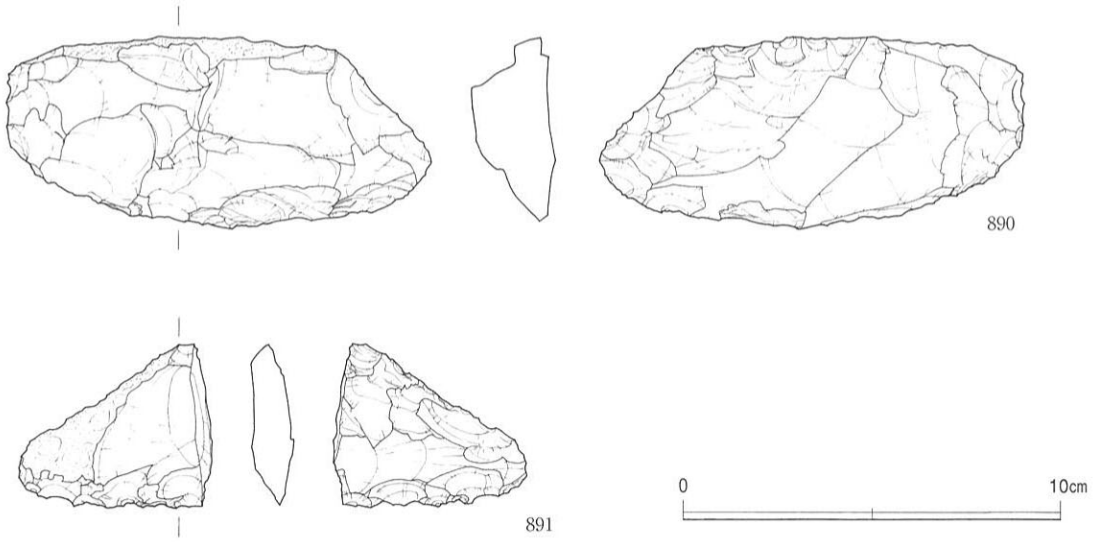



図106　486流路　出土遺物（１）

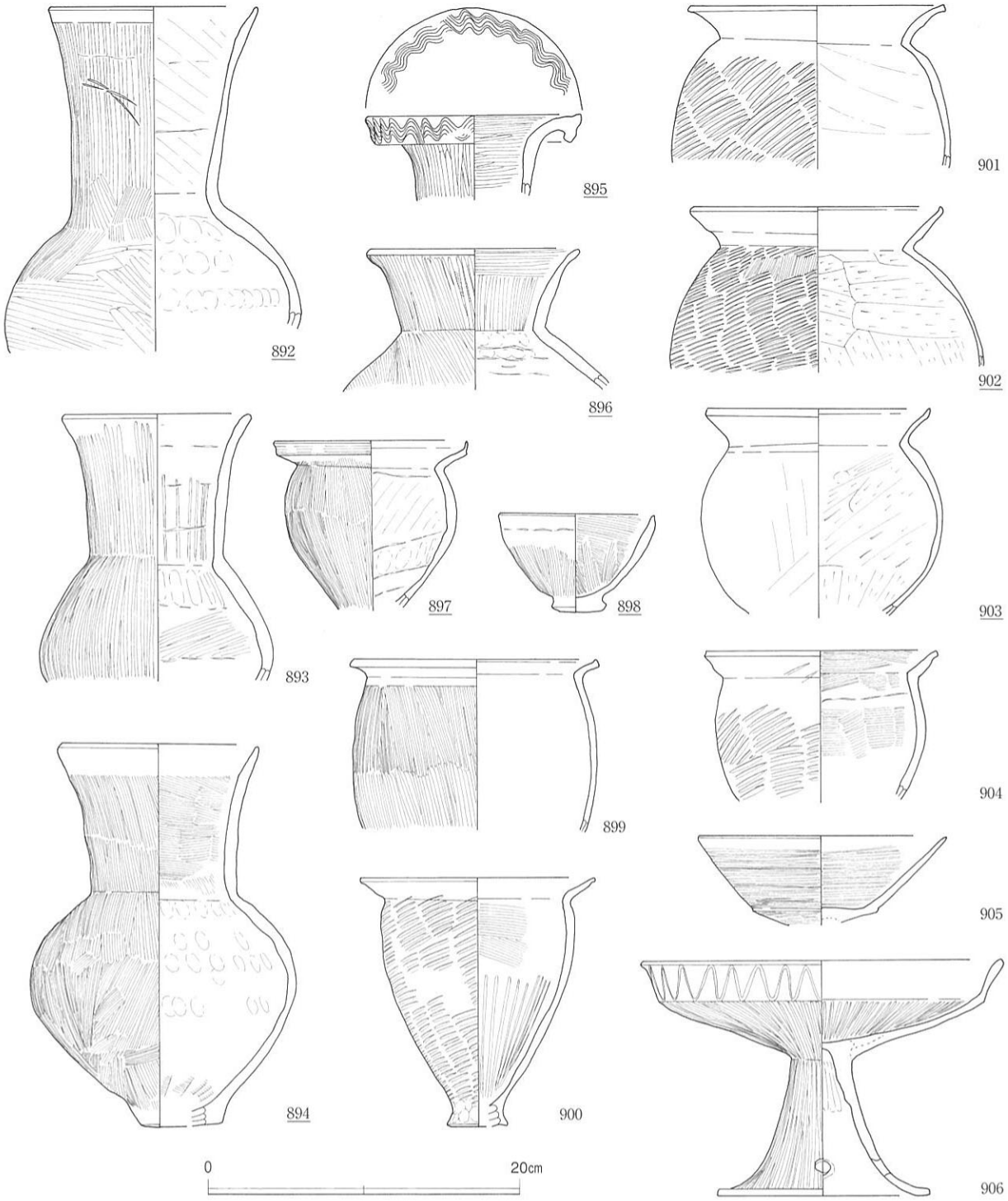



図107　486流路　出土遺物（２）

のヘラミガキで仕上げた高坏坏部で、庄内式期後半の所産と考えられる。535は坏部上半がやや外反して立ち上がり、脚部がラッパ状に開くもので、坏部下半の内外面と脚部外面には縦方向のヘラミガキを施し、ヨコナデ調整された口縁部上半の外面にはヘラ状工具による波状文が加えられている。弥生時代後期中葉の所産であろう。

〔586土器埋設遺構〕（図108，図版32－７）

５層を掘削中に検出した遺構で、Ｃ10－ｃ３区に位置する。層内から弥生土器の壺・甕２個体が出土したため、断ち割り及び平面精査を実施したところ、壺の周囲で土坑の存在が判明したことから土器埋

設遺構と認識した。土坑を確認した標高は14.35mであるが、埋設土器の最上端は土器の法量から0.2m以上上位であったと推定され、本来の掘削面は第５面であったものと考えられる。

土器の出土を確認した時点ですでに東半部を掘り下げていたため、正確な形状・規模は不明であるが、遺存した西半の状況から推測すると、土器が埋設された土坑は、長径0.4m、短径0.35m弱の北東－南西方向に長い楕円形を呈していたものと考えられる。検出面から坑底までの深さは0.19mを測り、坑底からの壁の立ち上がりは、南西側が垂直に近い急角度であるのに対し、北東側は50°前後と比較的緩くなっている。埋設された壺は、口縁部を傾斜の緩い北東方向に向けて約50°の角度で斜位に置かれ、上側の体部上半には焼成後の穿孔が施されていた。土坑は周囲の地層に比べて極細砂を多く含んだ灰オリーブ色シルトによって埋められ、土器内にはそれよりも暗色を呈するシルトが詰まっていた。土器の埋設状況や穿孔の存在から土器棺墓の可能性が高いと考えられるが、土器内からは内容物を明らかにする資料は一切得られなかった。なお、土坑のすぐ西側では片面を削平によって失った甕が横位の状態で出土

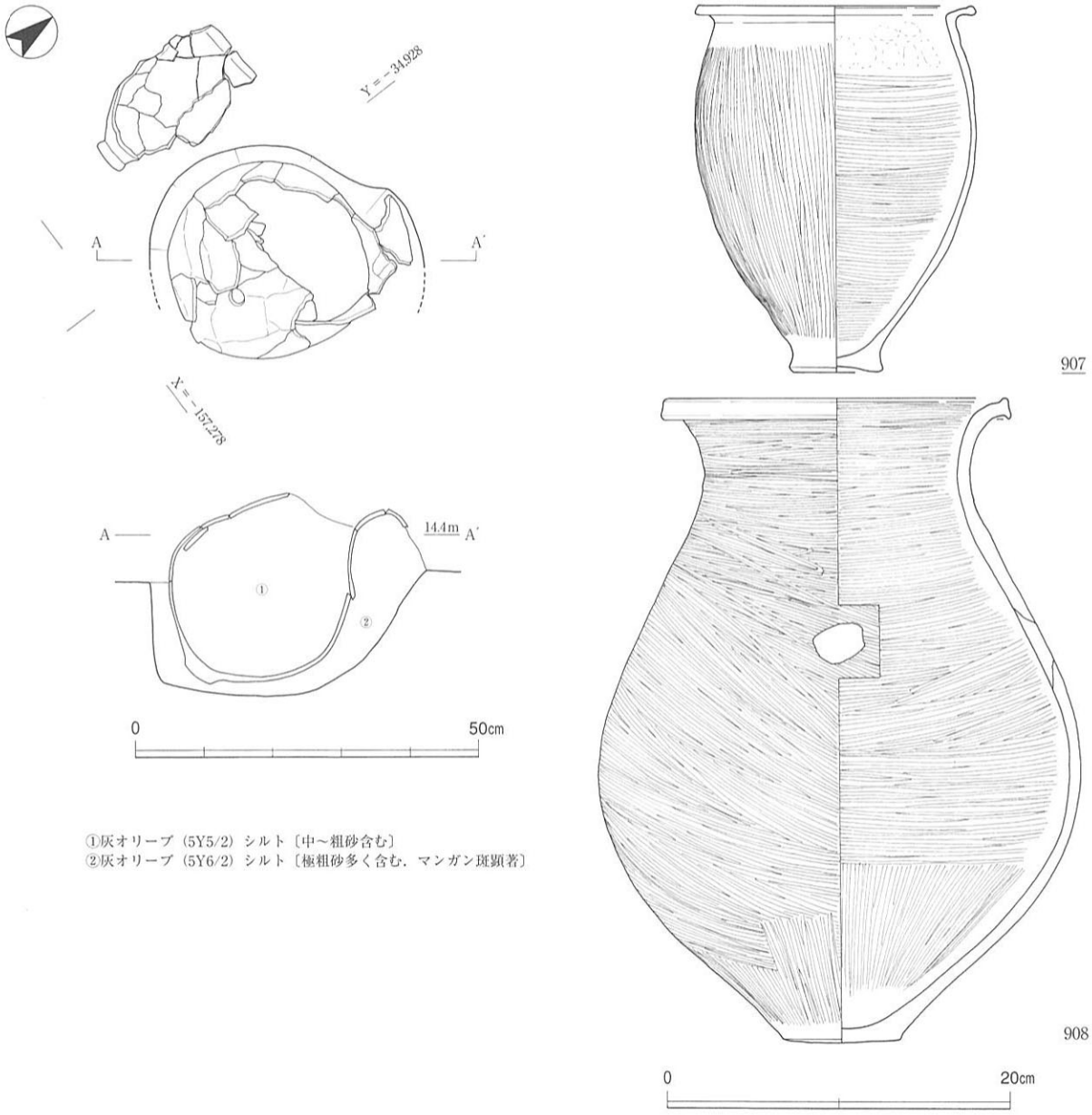



図108　586土器埋設遺構　平・断面図，出土遺物

したが、土坑の存在は確認できず、両者の関係は不明である。

908は埋設されていた太頸の広口壺である。体部から口頸部は緩やかなカーブを描いて移行し、ヨコナデによって面を有した口縁端部は、上下端ともわずかに拡張されている。文様は施されず、口縁端部とナデで調整された底部付近以外の器面は、斜あるいは横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。中期前葉の所産であろう。

907は埋設土坑に近接して出土した甕である。口縁部は水平気味に外反し、丸みを持った体部は最大径が口径と同程度となっている。体部外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。やはり中期前葉の所産と考えられる。

〔590土坑〕（図109・110，図版32－３）

調査区西端のＣ10－ｃ６区において検出した土坑である。平面形は南北方向に長い長楕円形を呈し、長径2.8m、短径1.75m、検出面から坑底までの深さは最深部で約0.4mを測る。埋土は上下２層に分かれ、緑灰色極細砂やオリーブ黒色粘土質シルトのブロックを多く含んだ層厚10～20cmの暗オリーブ灰色シルトの上を、自然堆積と考えられる比較的均質な暗緑灰色砂質シルトが覆っていた。坑内からは両層の境付近より複数個体の弥生土器が出土しており、埋土の状況を勘案すれば、土坑を意図的に埋めた後にこれらの土器が捨てられたものと考えられる。

909は土坑中央の西壁寄りで出土した広口壺である。丸味を帯びた体部は中位からやや下がった位置

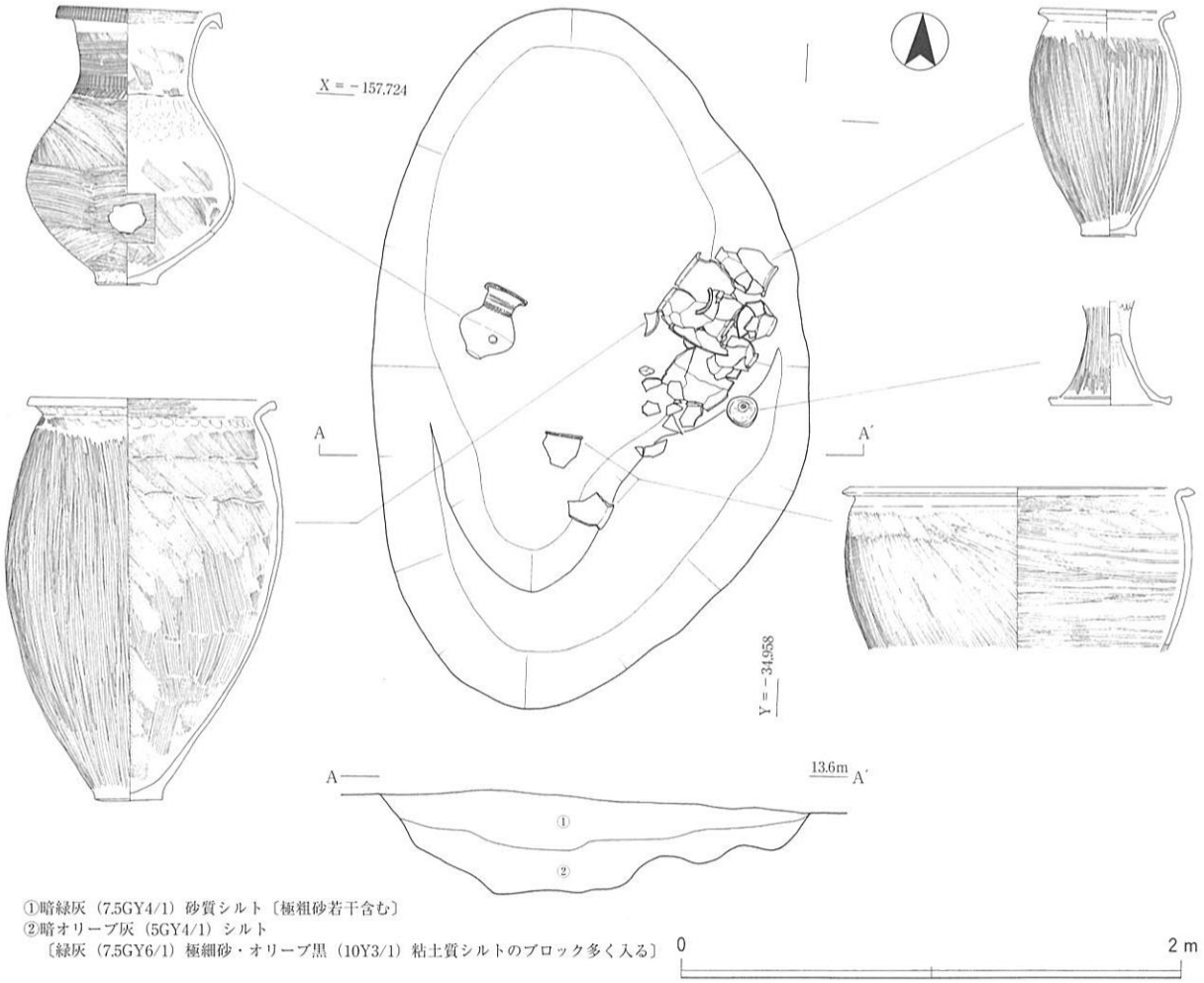



図109　590土坑　平・断面図

に最大径を持ち、頸部は体部最大径の２分の１以上と太い。口縁部には端部下端を大きく垂下させて幅広の端面が作られ、断面形状は逆三角形を呈する。口縁部から頸部にかけての外面は櫛状具による文様で飾られ、口縁端面には簾状文、頸部には直線文２帯と簾状文、最下段には列点が施されている。外面は頸部を斜方向ハケ、体部上半を斜方向のヘラミガキ、下半を分割ヘラミガキ、内面は口縁部を横方向のヘラミガキ、頸部上半をナデ、頸部下半を斜方向ハケ、体部上半を指押え、以下を斜方向ハケの各調整によってそれぞれ仕上げている。なお、体部下半には、焼成後の穿孔が存在している。910・911・913は、909と向かい合うように土坑中央の東壁際で出土した土器である。910は高坏の脚部で、脚裾部を下にして立った状態で出土した。上部は中実で、外傾する面を持つ裾端部の上端はヨコナデ調整によ

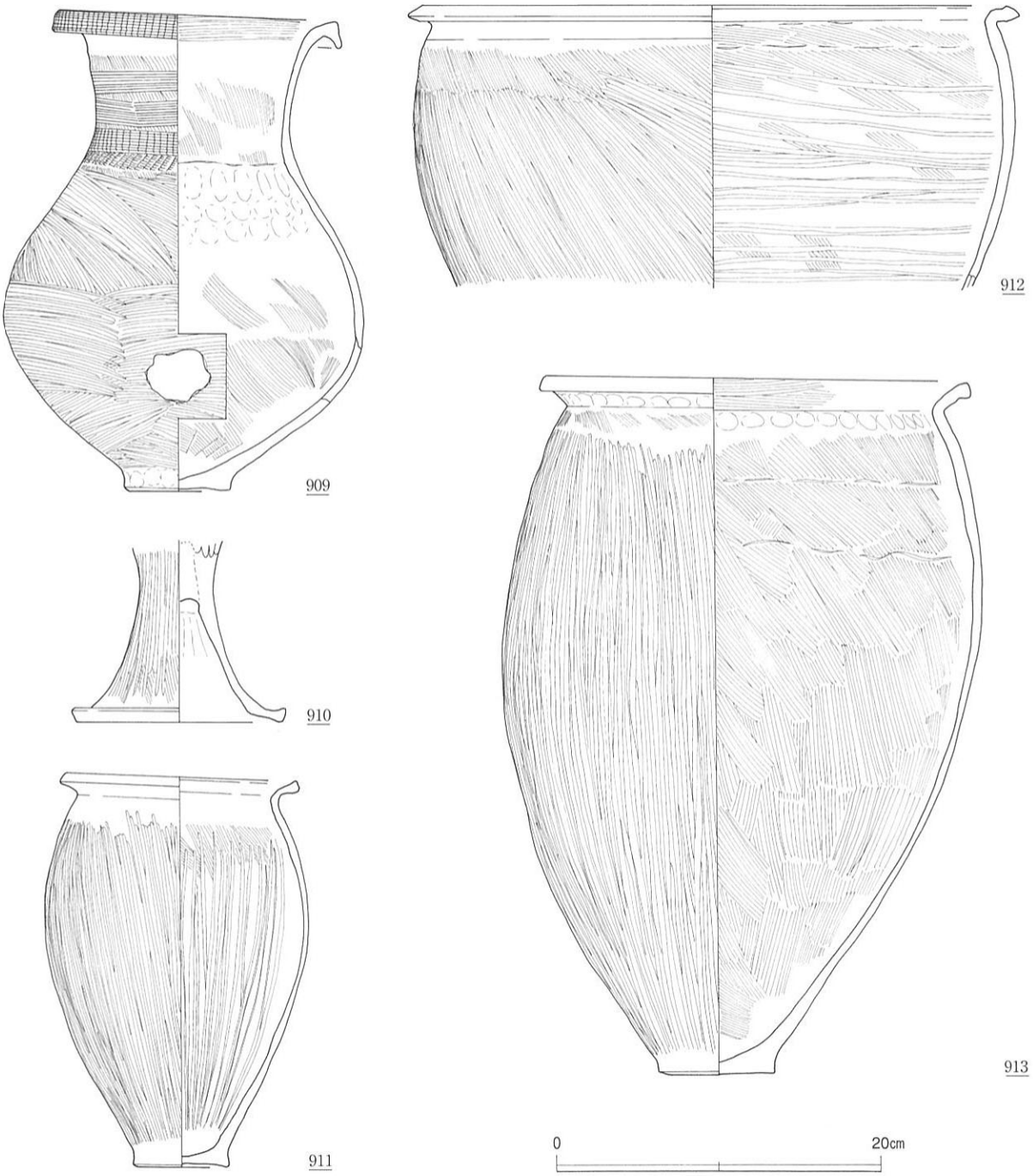



図110　590土坑　出土遺物

り上方に摘み上げられている。911・913は甕。いずれも体部は丸味を帯び、上半の最大径は口径を上回る。口縁部は「く」字に外反し、端部は下方に肥厚するか、わずかに垂下させている。体部の最終的な器面調整は、911が内外面とも縦方向のヘラミガキであるのに対し、913の内面はハケ調整で仕上げられている。912は土坑の中央部からやや南側で出土した甕である。丸味の強い体部から口縁部が短く屈折し、口縁端部は斜め下方に垂下させている。体部内外面は先行して施された斜方向ハケ調整の上に、外面に斜方向、内面に粗い横方向のヘラミガキがそれぞれ加えられている。以上の土器群は中期中葉前半の所産と考えられ、広口壺の様相からその新相に位置付けられよう。

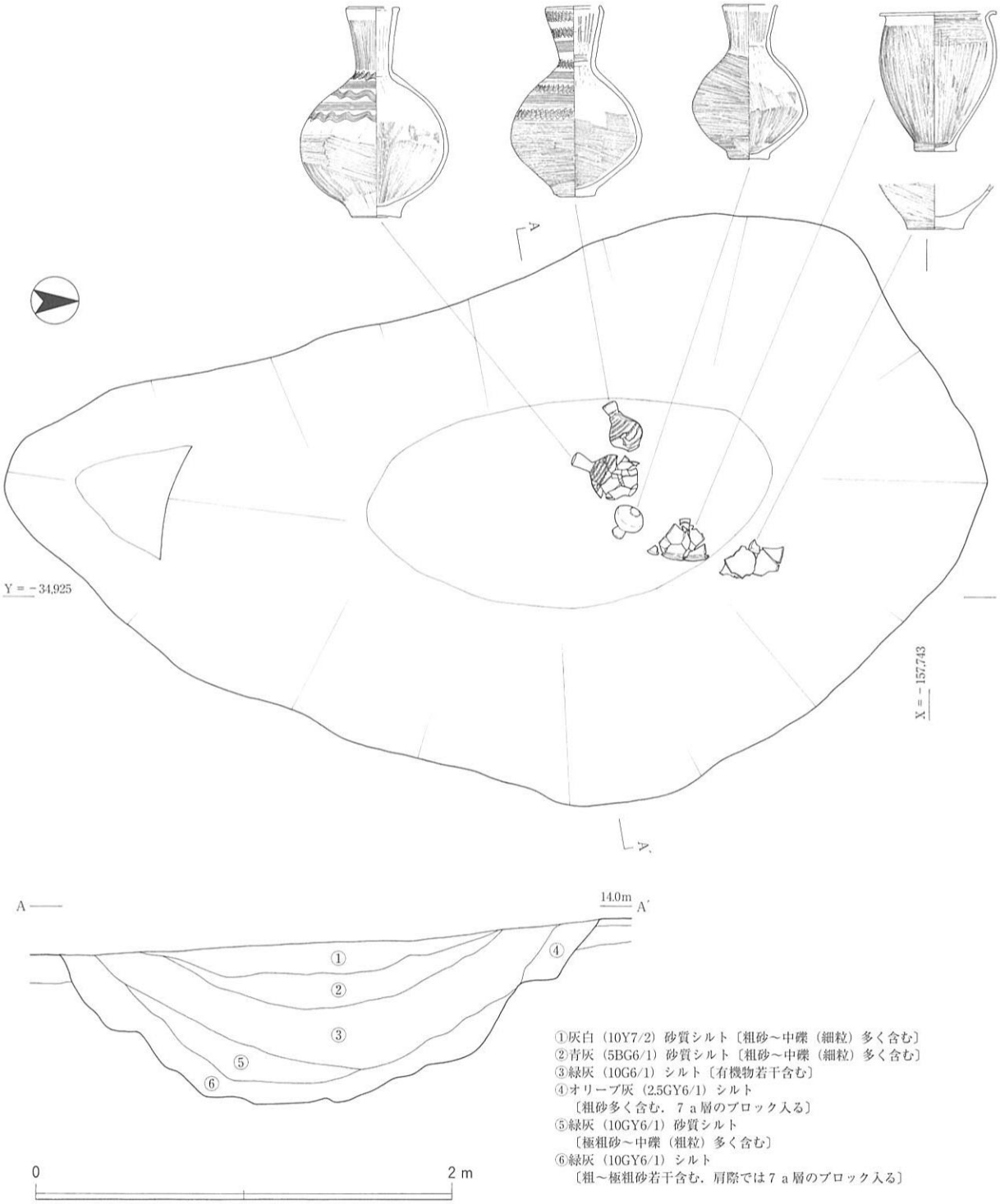



図111　624土坑　平・断面図

〔624土坑〕（図111・112，図版33－１・２）

Ｃ10－ｅ3区において検出した南北に長い不整長楕円形の土坑である。土坑の規模は、南北長4.7m、東西長は最も幅広の部分で2.8m、検出面から坑底までの深さは最深部で0.8mをそれぞれ測るが、南側のおにぎり形に突出した部分はテラス状に１段高くなっており、検出面からの深さは約0.4mである。埋土は大きく３分され、自然堆積層と考えられる中層の緑灰色シルトを挟み、粗砂～中礫を多く含む灰白～青灰色砂質シルト、極粗砂～粗粒の中礫を多く含む緑灰色シルト～砂質シルトが上下に堆積している。遺物は下層から甕２個体、中層上面で細頸壺３個体と壺底部が出土したが、細頸壺はいずれも口縁部を南東～南西の南方向に向けて並べたような状態で出土しており、水溜りのような状況下で中層が堆積した後、何らかの理由により意図的に置かれたものと推定される。

914～916は中層の上面から出土した細頸壺である。914は口縁部が斜め上方へ外反気味に立ち上がるもので、口縁端部はわずかに肥厚している。磨耗のため器面調整は不明瞭であるが、口縁部外面には縦方向、体部外面には横・斜方向のヘラミガキ調整が認められる。915は口縁部が細い筒状を呈するもので、口縁端部は内側へわずかに肥厚し、上端面を有する。ヨコナデ調整された口縁端部付近を除き、外面はヘラミガキ、体部内面はハケ調整で仕上げられ、外面の体部上半には櫛描直線文と波長の長い櫛描波状文が交互に配されている。916は細く締まった頸部から口縁部が直立気味に斜め上方へ開き、先端が短く内傾するもので、外面の口縁部から体部上半にかけては櫛描直線文・波状文が施されている。内傾する口縁部先端付近はヨコナデ、体部外面は横方向のヘラミガキを施し、内面は口縁部がナデ後粗いヘラミガキ、体部上半はナデ、下半はハケ調整でそれぞれ仕上げている。これら３点の細頸壺は、中期中葉前半の所産と考えられる。918はやはり中層上面から出土した壺の底部で、外面は底部付近を横、それより上位を斜方向のヘラミガキ調整で仕上げている。917・919は下層出土の甕で、917は土坑の北

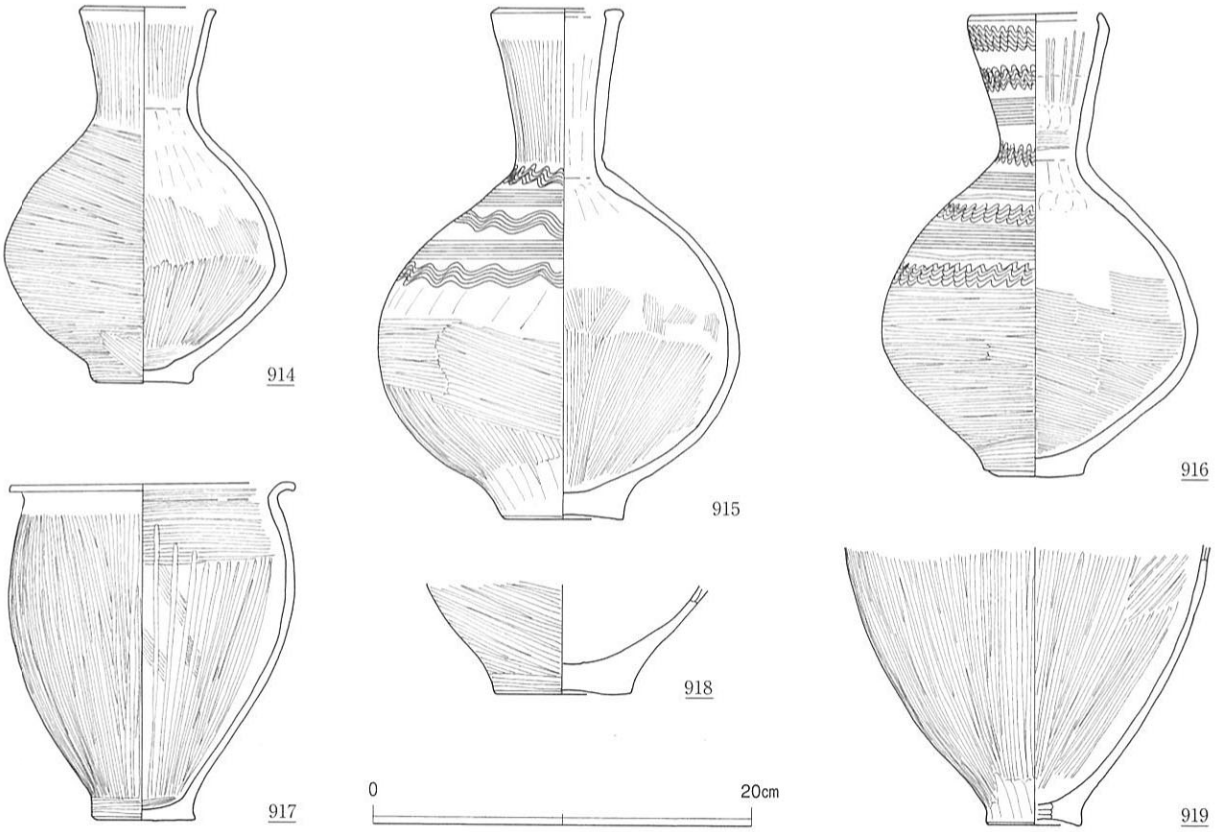



図112　624土坑　出土遺物

東部において坑底からわずかに浮いた位置で横倒しの状態で出土した。口縁部は水平気味に屈曲し、体部は丸味を帯びているが、最大径は口径を若干下回る。体部外面はヘラケズリ、内面は斜方向ハケを施した後にそれぞれ縦方向のヘラミガキ調整で仕上げられ、内外面の底部付近と内面の頸部から体部上半にかけては、横方向のヘラミガキが帯状に施されている。体部の張りが弱く、内外面を縦方向のヘラミガキ調整で仕上げた919とともに、弥生時代中期前葉の所産と考えられる。

〔625土坑〕（図113，図版33－３）

Ｃ10－ｄ３区において検出した土坑で、平面形はＮ17°Ｗ方向に長軸を置く船底形を呈する。掘方は検出面から0.2～0.25ｍほど掘削したところでテラス状の平坦面を設け、そこから65～70°の角度で再度掘り下げている。土坑の規模は、長軸長4.6ｍ、短軸長1.6ｍ、内側の段落ち部分の長軸長2.8ｍ、同短軸長0.8ｍ強をそれぞれ測り、検出面から坑底までの深さは最深部で0.75ｍである。埋土は３層に大別され、いずれも緑灰色を呈するシルト～シルト質極細砂といった細粒の堆積物で構成されている。土坑のほぼ中央の上層上面において、弥生土器の壺（920）が横倒しになって出土した。

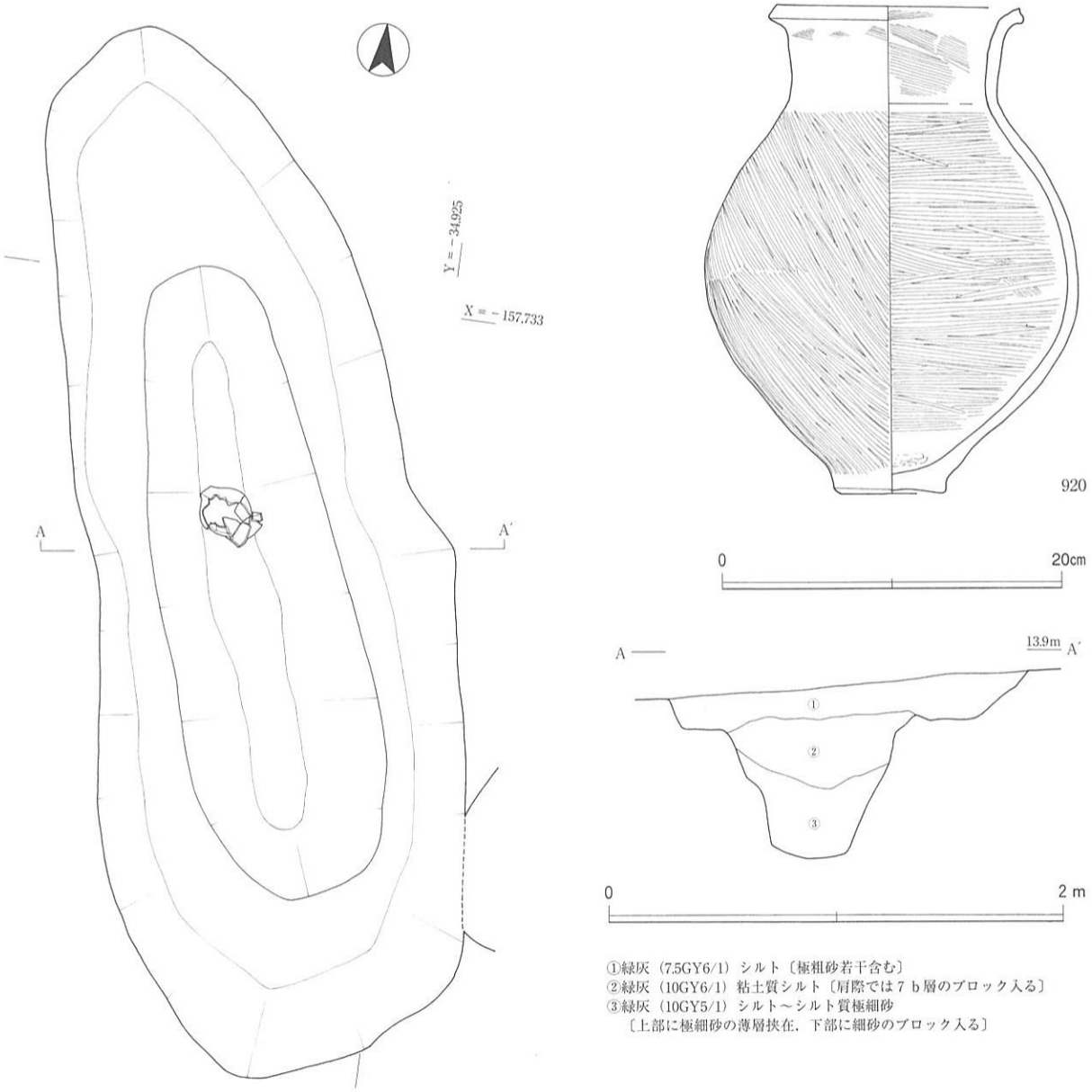



図113　625土坑　平・断面図，出土遺物

920は無文の広口壺で、無花果形の体部から頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が短く外反している。頸部内面はハケ、体部外面は斜方向のヘラミガキ、内面は斜方向ハケ後横方向のヘラミガキ調整でそれぞれ仕上げている。中期前葉の所産であろう。

〔650土坑〕（図114）

Ｃ10－ｇ１区において検出した土坑である。南側が調査区外となったため土坑全体の平面形は不明であるが、楕円形の土坑に２つの角を付けたような形状を呈する。楕円形部分の規模は南北長3.5m以上、東西長3.1mで、角状の突出部の長さは1.8～1.95mを測る。検出面から坑底までの深さは最深部で0.8mを測るが、突出部は0.1～0.2mと浅くテラス状となっている。埋土は大きく４層に分かれ、砂質シルト～

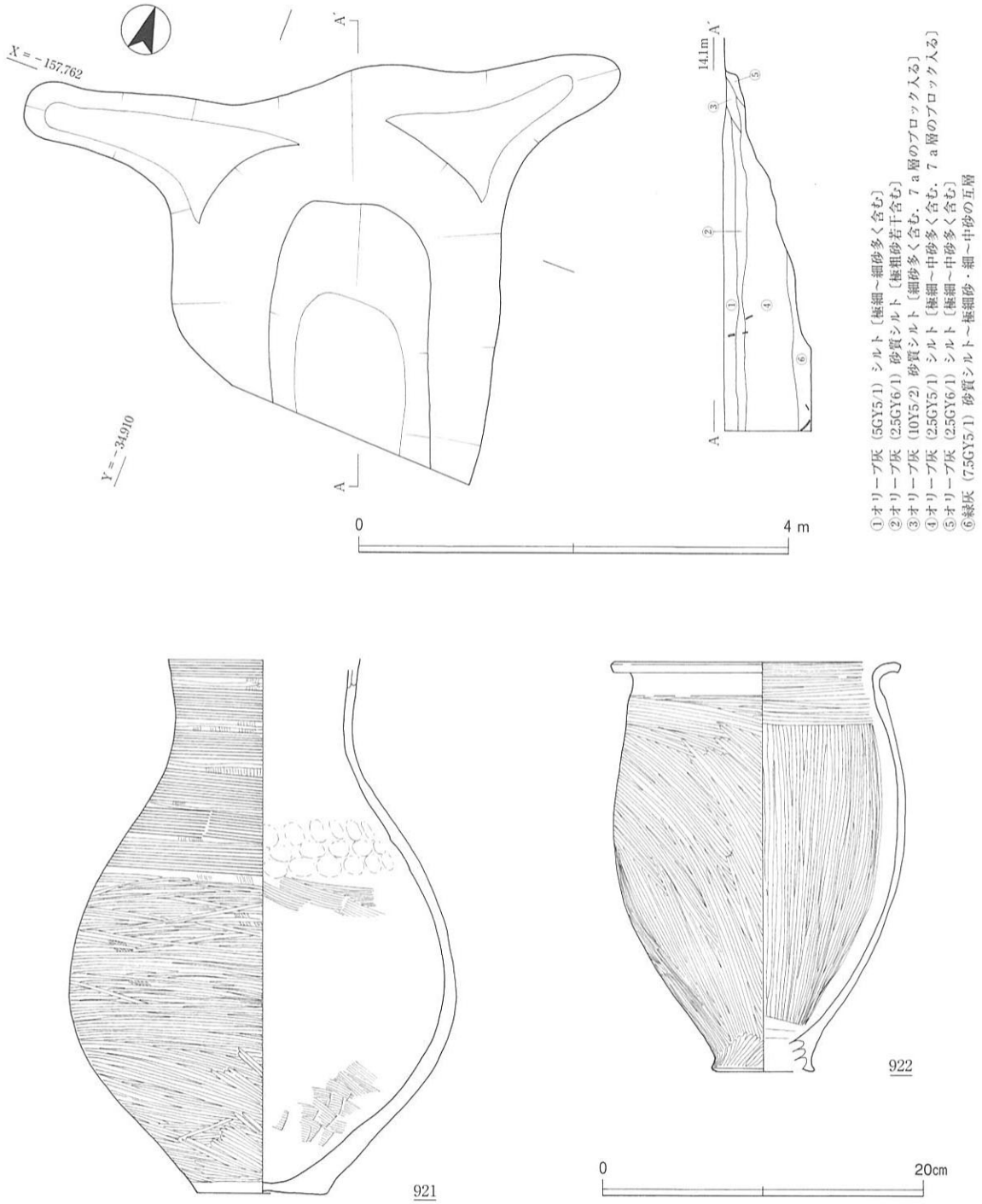



図114　650土坑　平・断面図，出土遺物

極細砂と細～中砂の互層である最下層以外は、いずれも砂粒を含んだオリーブ灰色シルトで構成されている。このうち、調査区境の最下層からは、図示した２点の弥生土器が出土した。

921は長頸の広口壺である。口縁部を欠損しているが、丈高の体部は最大径をほぼ中位に持ち、口頸部は体部上半から緩やかなカーブを描いて斜め上方に延びている。外面全体に縦もしくは斜方向のハケを施した後、横・斜方向のヘラミガキを加え、頸部から体部上半までを櫛描直線文で飾っている。体部内面はハケ調整を行っているが、上半には指押えの痕跡が顕著に認められる。922は甕で、丸みを帯びた体部から口縁部が水平気味に屈曲している。体部最大径は口径と同程度であるが、底部付近が絞られているために膨らみが目立つ。外面は斜方向のヘラミガキ調整後、頸部にヨコナデを加え、内面は縦方向のヘラミガキの後、口縁部から体部上半にかけて横方向のヘラミガキ調整を帯状に施している。以上の土器は、中期前葉の所産と考えられる。

〔653土坑〕（図115，図版34－１）

Ｃ10－ｆ２区において検出した隅丸長方形の土坑である。長辺2.4m、短辺0.6～0.7m、検出面から坑底までの深さ0.2m強を測り、横断面の形状は椀形を呈する。埋土は４層に分かれ、いずれも極粗砂までの砂粒を含むオリーブ灰色シルト～シルト質極細砂で構成されている。出土遺物は少ないが、土坑の中心からやや北に寄ったところで、坑底より５cmほど浮いた状態で弥生土器の壺１個体が出土した。

923は長頸の広口壺である。口縁部を欠損しているが、体部は最大径が中位よりやや下方にあって下膨れ気味で、口頸部は体部上半から緩やかなカーブを描いて斜め上方に延びている。外面の頸部から体部上半にかけて櫛描直線文が施され、文様帯以下の体部外面には横方向のヘラミガキ、内面の体部上半は横方向のヘラミガキ、下半は横もしくは斜方向のハケで仕上げている。中期前葉の所産と考えられる。

〔657土坑〕（図116，図版34－３）

６層掘削中、Ｃ10－ｄ１区の611流路西肩際で検出された土器溜りの下部で確認された土坑である。周囲の掘削が進行していたため、本来の掘削面や流路との関係は不明とせざるを得ないが、出土した弥生土器の年代から、他の土坑とともに本面で説明することとした。

確認できた土坑掘方の平面形は、東西長1.15m、東辺長0.65 m、西辺長0.85mを測る東西に長いやや

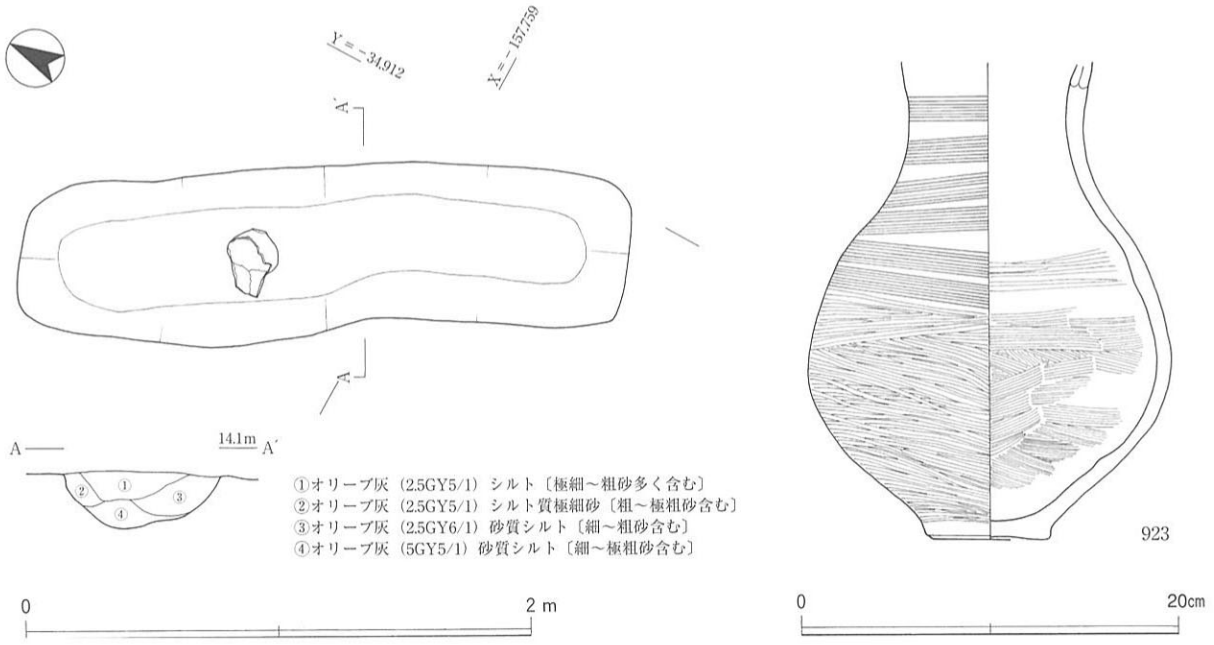



図115　653土坑　平・断面図，出土遺物

歪な台形を呈する。ただし、上部の土器溜りは東外側に0.65mほど続いていることから、検出した掘方はおそらく段掘りされた土坑の基底部に過ぎず、実際の土坑は東西長1.8m以上の規模を有していたも

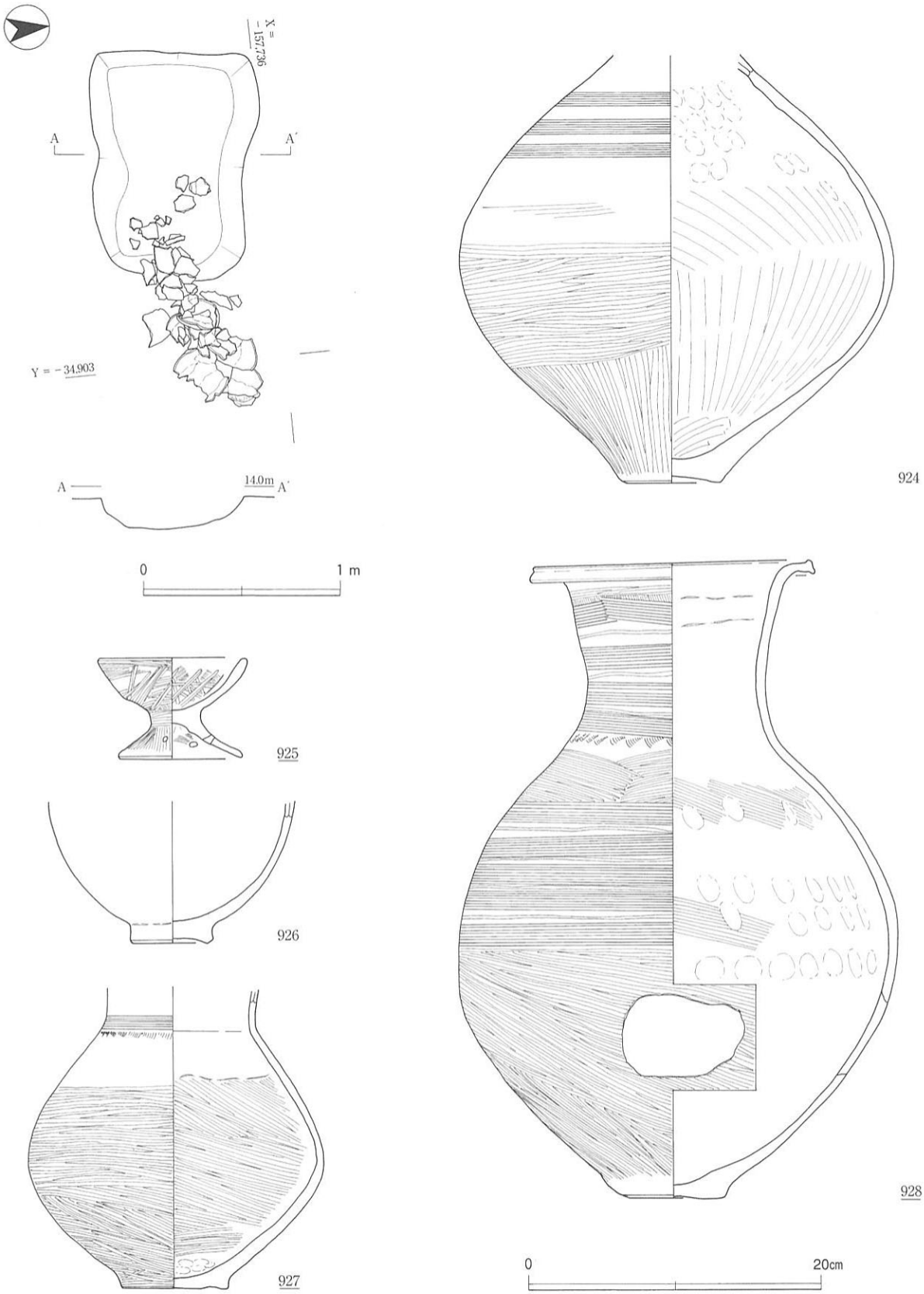



図116　657土坑　平・断面図，出土遺物

のと考えられる。確認面から坑底までの深さは0.16mで、掘方の横断面形は皿型を呈し、７層の小ブロックを含む灰白色シルト～極細砂を埋土としていた。土器は土坑東半から東外側にかけて集中し、掘方内に位置するものは、坑底から10～30cm浮いた状態で出土した。

925は小型の台付鉢である。作りそのものはやや粗雑であるが、鉢部には内外面ともハケ調整後ヘラミガキを加えている。924・926～928は壺である。924は強く横に張り出した算盤玉形を呈する体部であるが、頸部下端の括れは細い。外面上半は数帯の櫛描直線文で飾り、下半は底部付近を斜方向、それより上を横方向の太いヘラミガキ調整で仕上げている。また、内面下半には指によるナデ上げの痕跡が顕著に見られる。926は体部下半の資料で、器面は最終的にナデ調整で仕上げている。927は算盤玉形を呈する体部から頸部が直立気味に立ち上がる広口壺である。器面の磨耗が著しいため文様・調整とも判然としないが、頸部下端には櫛描直線文と扇形文が認められ、体部には横・斜方向のヘラミガキ調整が施されている。928も高さと最大径がほぼ等しい体部から頸部が外反しながら立ち上がる広口壺で、口縁端部は上下に小さく拡張させている。外面は体部上半を横方向のヘラミガキ、体部下半を斜方向のヘラミガキ調整で仕上げ、頸部にはナデ調整後に４帯の櫛描直線文と扇形文、体部上半には５帯の櫛描直線文を巡らしている。直線文帯の間にもヘラ状工具で撫でた跡が見られ、最上段の直線文帯より上にはナデ以前に施された縦方向のハケメが認められる。また、中位よりやや下がった位置には、長径８cm、短径5.5cmを測る焼成後穿孔が存在している。以上の土器群は、いずれも中期前葉の所産と考えられる。

〔671土坑〕（図117）

調査区中央北端のＣ10－ｃ２区において検出した土坑である。北側が調査区外へと延びているため全

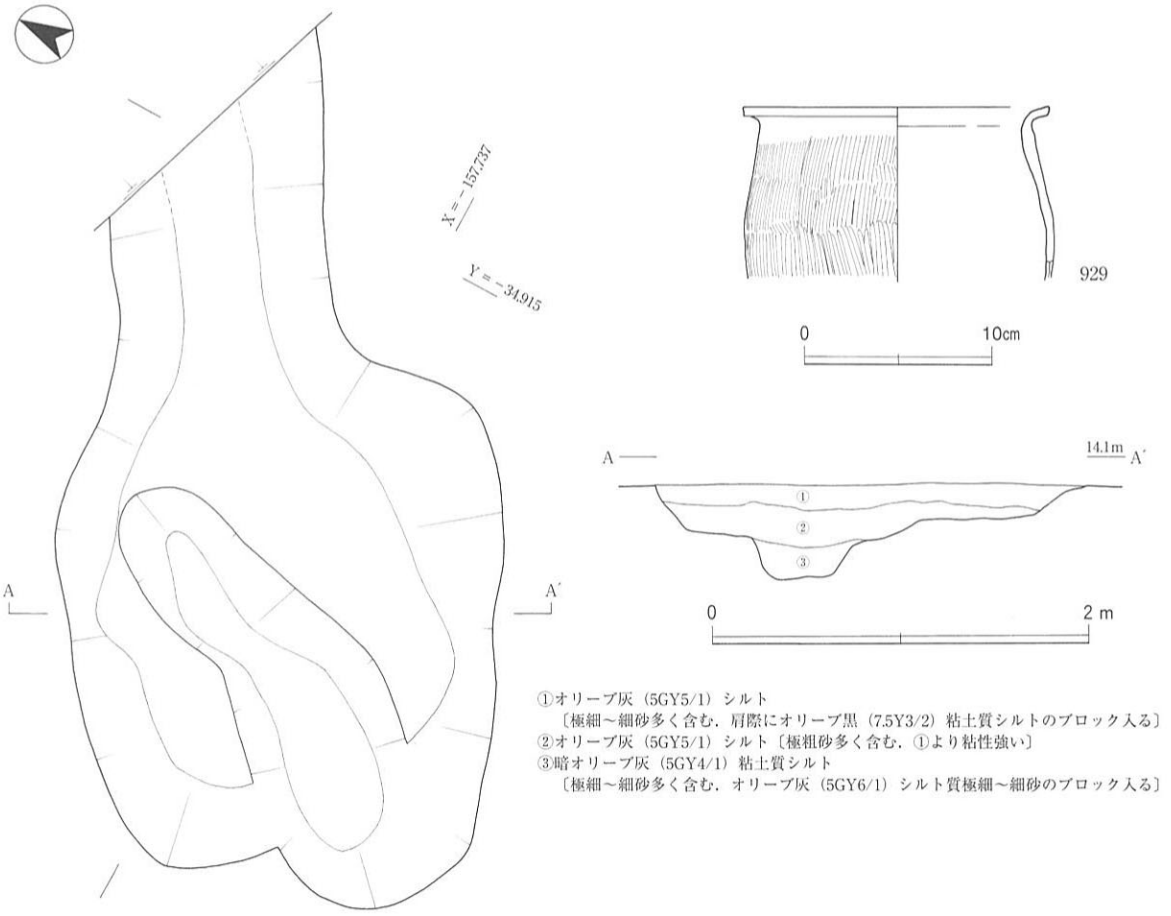



図117　671土坑　平・断面図，出土遺物

体の平面形は明らかではないが、検出し得た範囲では北東－南西に長い長辺2.6m、短辺2.3mのやや歪な隅丸長方形の土坑に、北東方向に延びる幅1.15mの溝が接続したような形状を呈する。検出面から坑底までの深さは0.2～0.3mであるが、土坑状の部分は中央が0.2mほど溝状に落ちており、中には上部埋土のオリーブ灰色シルトとは異なる暗オリーブ灰色粘土質シルトが堆積していた。

出土遺物は僅少で、929に示した弥生土器が１点出土したのみである。張りの弱い体部から口縁部が短く外反する甕で、体部外面には粗い縦方向のハケ後ヘラミガキ、内面にはナデ調整を施している。

〔672土坑〕（図118）

Ｃ10－ｃ１区において検出した土坑で、671土坑から７ｍ東の調査区北端に位置する。北半部が調査区外となってしまったため全体の形状は不明であるが、おそらく長径2.6m前後、短径1.7mほどの楕円形を呈していたものと推定される。検出面から坑底までの深さは0.55mを測り、下部では暗緑灰色シルト、その上にはオリーブ灰色シルトが２層に分かれて堆積していた。

出土遺物はやはり少なく、930に示した細頸壺の体部と考えられる弥生土器が１点出土したのみである。横に強く張った算盤玉形を呈するもので、外面上半は10帯以上の櫛描直線文と扇形文で飾り、下半は横方向のヘラミガキ、内面は斜・縦方向のハケ調整で仕上げている。中期中葉前半の所産であろう。

〔512・516・517・609溝〕（図119）

以上の遺構のほか、第６面では数条の溝状遺構が検出され、うち４条の溝で遺物が出土している。

512溝はＣ10－ｇ４区において第３面343流路左岸際で部分的に確認されたもので、あるいは土坑の可能性もある。検出長約２ｍ、検出面から底面までの深さは0.3mほどで、有機物を多く含んだ灰色砂質シルトを埋土としていた。溝内からは、北東方向へ上がる肩に接して933に示した細頸壺が出土している。口縁端部が内側に肥厚しており、弥生時代中期中葉前半の所産と考えられる。

516溝はＣ10－ｂ～ｄ４区において検出した溝で、486流路と並行して南南東から北北西方向へ向かって延びている。検出し得た長さは22.5mで、幅1.1～3.0m、検出面からの深さ0.15～0.35mを測る。溝内には上部に灰オリーブ～オリーブ灰色極細砂、下部に緑灰色シルトが堆積し、中からは932・936～938に示した弥生土器が出土した。937は前期で、他はすべて中期前葉の所産と考えられる。

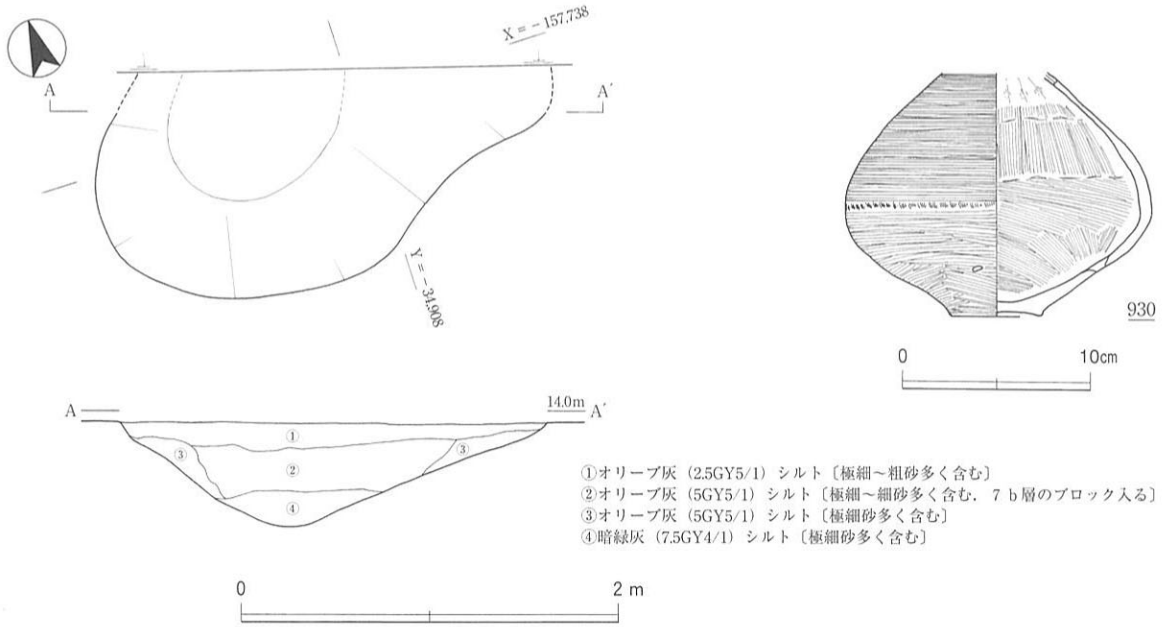



図118　672土坑　平・断面図，出土遺物

517溝は調査区北西隅のＣ10－ｂ６区において検出した溝で、西北西から東北東方向に向かって延び、東端は486流路と合流している。幅1.6～2.5m、検出面からの深さ0.4m前後を測り、灰色シルト質極細砂を埋土としていた。埋土内からは、刃器と考えられる939のサヌカイト製打製石器が出土している。

609溝は、486流路の右岸南端付近から分岐して北北東方向へ延びる溝で、流路との位置関係や延長30m以上に及ぶ規模から水路の可能性も考えられる。断面形は逆台形を呈し、幅0.5～1.6m、検出面からの深さ0.65～0.75mを測る。シルトを主体とする埋土は大きく２層に分かれるが、場所によって層相が異なり、北へ向かうほど粗粒となっている。溝内からは弥生時代中期前葉～中葉前半の所産と考えられる931・934・935の壺・甕が出土しており、溝の埋没も当該期に求められる。

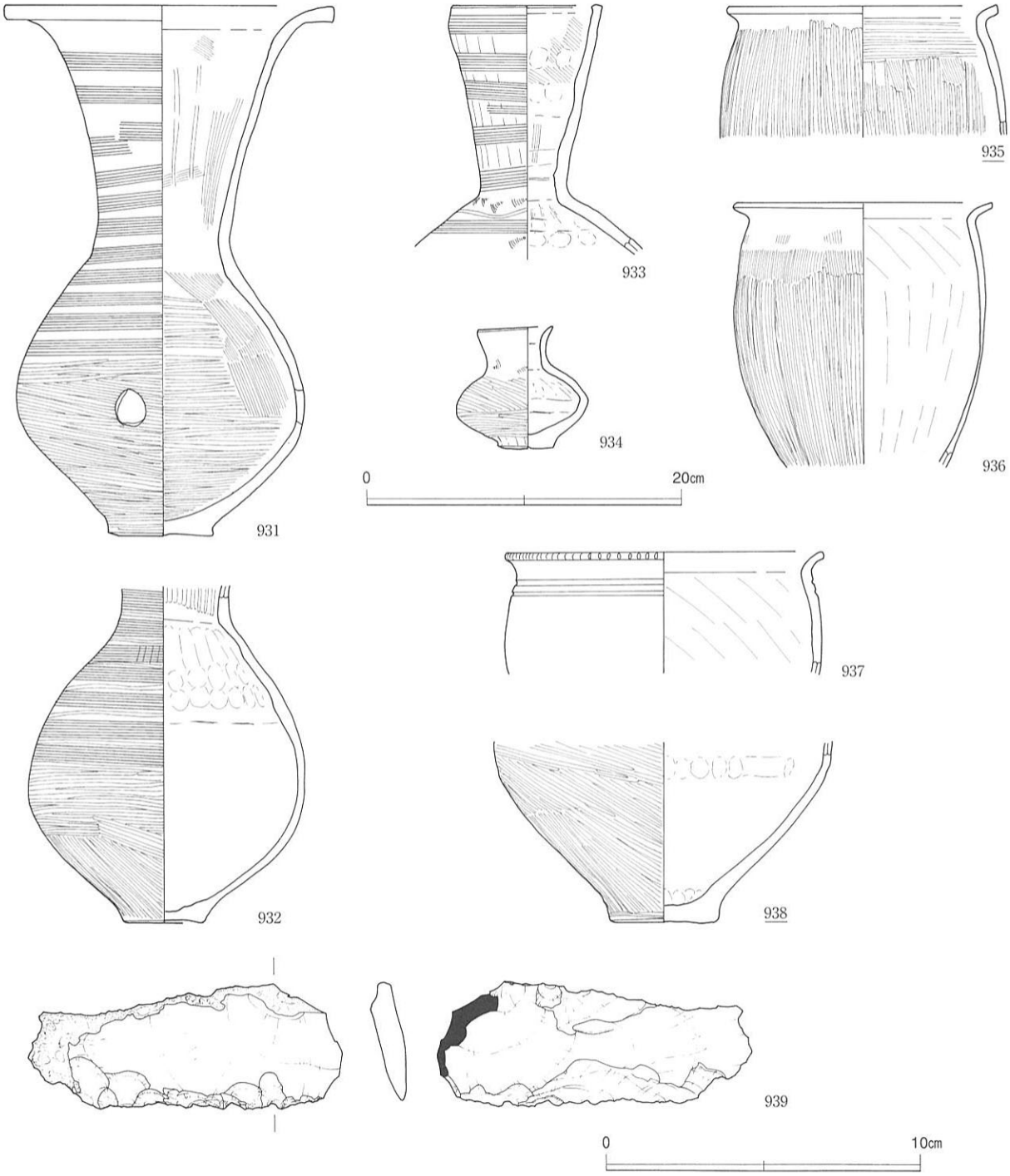



図119　512・516・517・609溝　出土遺物

## 第７面（図120，図版35・36）

６ｂ層を除去して検出される遺構面であり、７ａ層と呼称した有機物や炭化物粒を多く含んだ灰色粘土質シルト層からなる古土壌の上面である。96－１調査区の第７面に対応し、上下の地層に含まれていた土器の年代から弥生時代前期～中期初頭の遺構面と想定される。

これまで説明を行ってきた各遺構面の微地形は、ほぼ平坦もしくは南東から北西方向へ緩やかに傾斜していたが、本面ではＹ＝－34,905ライン付近から－34,930ライン付近の間が標高13.8～14.0ｍを測るのに対し、－34,905ライン以東が13.2～13.7ｍ、－34,930ライン以西が13.5～13.75ｍと低くなっており、比高差もこれまでと比べてより拡大している。

第７面では東側の低地で流路1条、西側の低地でやはり小規模な流れの痕跡と考えられる数条の溝が検出されたほか、両低地に挟まれた微高地では水田畦畔が確認された。

〔611流路〕

東側低地の西寄りを走行する流路で、調査区の南東隅から北西方向へ延び、Ｘ＝－157,750ライン付近で北へ向きを変えて調査区外へと続いている。掘削深度の関係から、今回の調査では両岸肩部のみの検出に留まったが、灰白色極細砂に覆われた肩部の７ａ層は流路底に向かって傾斜しており、この流路が第７面段階に存在していたことは確実である。流路の規模は幅3.5～4.5ｍ、深さは同一流路のものと推定される96－１調査区１トレンチの北壁断面から１ｍ近くに達するものと考えられる。

さらに下位まで調査を行った96－１調査区では、第８面とした古土壌の上面においても南東から北西方向へ走行する流路の左岸部が確認されている。検出された流路は幅22ｍ以上、深さ1.5ｍを測り、時期的には遺構面を被覆する７ｂ層内出土土器の年代から縄紋晩期後半以前のものと想定される。今回、第７・６面で検出した611流路は、この大規模な流路を位置的に踏襲しており、下面の流路が埋積していく過程で規模を漸次縮小しつつ残存したものと捉えられる。

〔水田遺構〕

東西２つの低地に挟まれた微高地上において水田畦畔が検出され、弥生時代の比較的早い段階で水稲耕作が行われていたことが明らかとなった。

開田に当たって選地された微高地は、南端を要として北西側に開いた片開きの扇状を呈し、標高14.0ｍ強を測る南端を最高所として北あるいは西へ緩やかに傾斜している。Ｘ＝－157,750ライン以北では東側低地との境に裾幅0.6～1.0ｍの大畦畔が配され、北西側も部分的に水田面より0.1ｍ余り高くなっており、一部上面の遺構によって失われてはいるものの、水田域の東西方向の広がりは今回確認された範囲にほぼ収まるものと考えられる。

水田の造成に当たっては、地形に沿って幹線となる小畦畔を数条並行に配し、その間を支線となる畦畔により区切って方形あるいは長方形の小区画水田を作り出している。ただし、水田面の遺存状況はやや不良であり、特に支線畦畔については部分的に検出し得たのみである。灌漑に関しては、南方から導水し、各水田を順次潤した後に北側へ排水していたことが地形の状況から想定されるが、今回の調査では水利施設を確認することはできなかった。

以上のような水田の造成方法は、東大阪市池島・福万寺遺跡池島Ⅰ期地区の弥生時代前期Ⅱ水田面[岡本2002]のほか、近畿地方の弥生時代前期～中期初頭の初期弥生水田において窺われる特徴であり、本例についても当該期に位置付けられよう。このことは、出土遺物から想定した前述の遺構面の時期とも合致している。

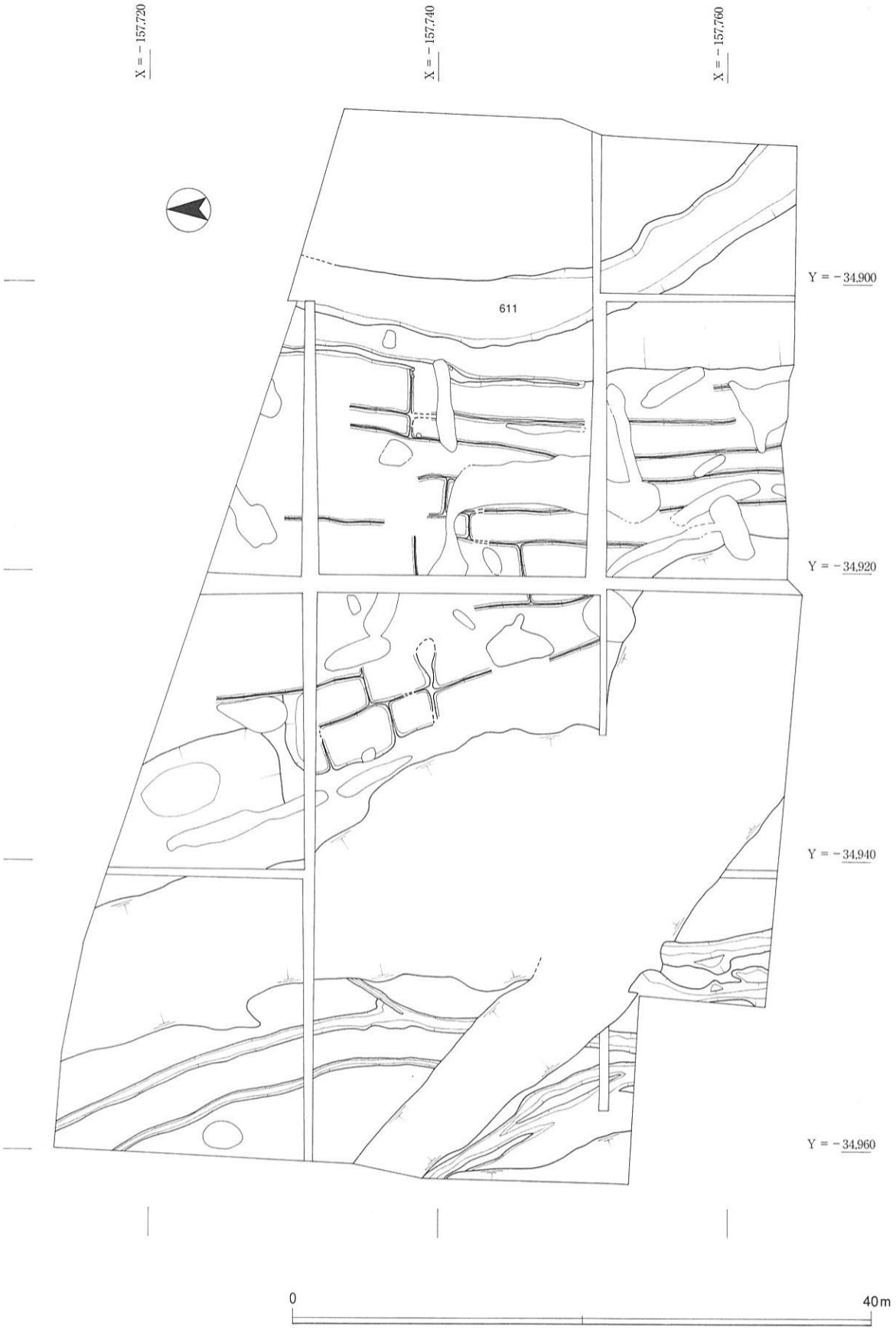

X = −157,720
X = −157,740
X = −157,760
Y = −34,900
Y = −34,920
Y = −34,940
Y = −34,960
611
0
40m

図120　第７面　全体図

# 第Ⅳ章　01－1調査区の調査成果

## 第１節　基本層序と遺構面の認識

01－１調査区の発掘調査においても、層序の把握と遺構面の認識に当たっては、基本的に第Ⅲ章第１節で記した観点と方法に基づいている。以下、調査区南東側の断面図をもとに説明を行っていきたい(図121，図版60)。

０層　近世末あるいは近代の河川氾濫によって供給されたと考えられる粗砂～細礫を主体とする灰白色の洪水砂層で、00－１調査区と同様に第１面全体を被覆している。

１層　０層と次の２ａ層の間を１層として把握し、洪水砂層を除去した土壌化層上面を**第１面**と認識した。１層は緑灰色を呈する粗粒シルト～シルト質極細砂で、極粗砂～細粒の中礫を多く含む。粒度や含有物の粒径・含有量の多寡により上下２層に分かれ、下層は鉄斑を多く含み、酸化により黄色味を帯びる。

２層　第３面の河川を埋積する洪水堆積物である２ｂ層とその上部に形成された土壌化層である２ａ層からなり、２ａ層上面を**第２面**、２ｂ層上面を**第２ｂ面**と認識した。２ａ層は極粗砂～粗粒の中礫を非常に多く含むオリーブ灰色の砂質シルト～シルト質極細砂であるが、次の第２ｂ面で凹地が存在する調査区南西端では、この上に緑灰～オリーブ灰色シルトが２層に分かれて堆積している。各層とも有機物を多く含み、全体的に暗色を呈する。一方、２ｂ層は厚いところで３ｍ以上の層厚を有する砂礫層で、流心もしくはそれに近いと考えられる調査区南西半では極粗粒の中礫以細の礫を多量に含む細砂～粗砂、北東半では細礫を含む極細砂～中砂を主体としている。

３層　２ｂ層と土壌化層である４ａ層との間に堆積する地層で、色調・粒度から５層に分けることが可能である。このうち、緑灰色粘土質シルトもしくは極細砂から構成される下位の４層が自然堆積層と捉えられるのに対し、最上部の暗青灰色シルト質極細砂は、褐灰色粘土質シルトの小ブロックを少量含み、全体的に暗い色調を呈していることから土壌化している可能性がある。なお、調査では２ｂ層を除去した河床面を**第３面**と認識したが、３層各層の堆積は２ｂ層による浸食を免れた調査区北東端でのみ確認し得た。

４層　４ａ層とその母材である４ｂ層からなり、古土壌である４ａ層の上面を**第４面**と認識した。４ａ層はやはり調査区北東端のみに認められる灰色粘土～粘土質シルトで、有機物を多く含み、微量の炭化物粒を含む。一方、４ｂ層は有機物や横位となったヨシの茎を多く含む緑灰～オリーブ灰色の粘土質シルト～シルト質極細砂で、層相から６層に細分することができる。

５層　５ａ層とその母材である５ｂ層からなり、古土壌である５ａ層の上面を**第５面**と認識した。５ａ層は細砂～中砂を多く含む灰色粘土質シルトで、炭化物粒を少量含み、南西方向へ向かうにしたがって粗粒となる。５ｂ層は細砂～中砂を多く含む緑灰色粘土質シルトで、上部を中心に５ａ層のブロックが含まれ、層中には横位となったヨシの茎が多く挟まれていた。

なお、今回の調査では、４ａ・５ａ層と呼称した古土壌の形成年代を把握するためにＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施しており、図121には試料の採取位置を併せて示している。

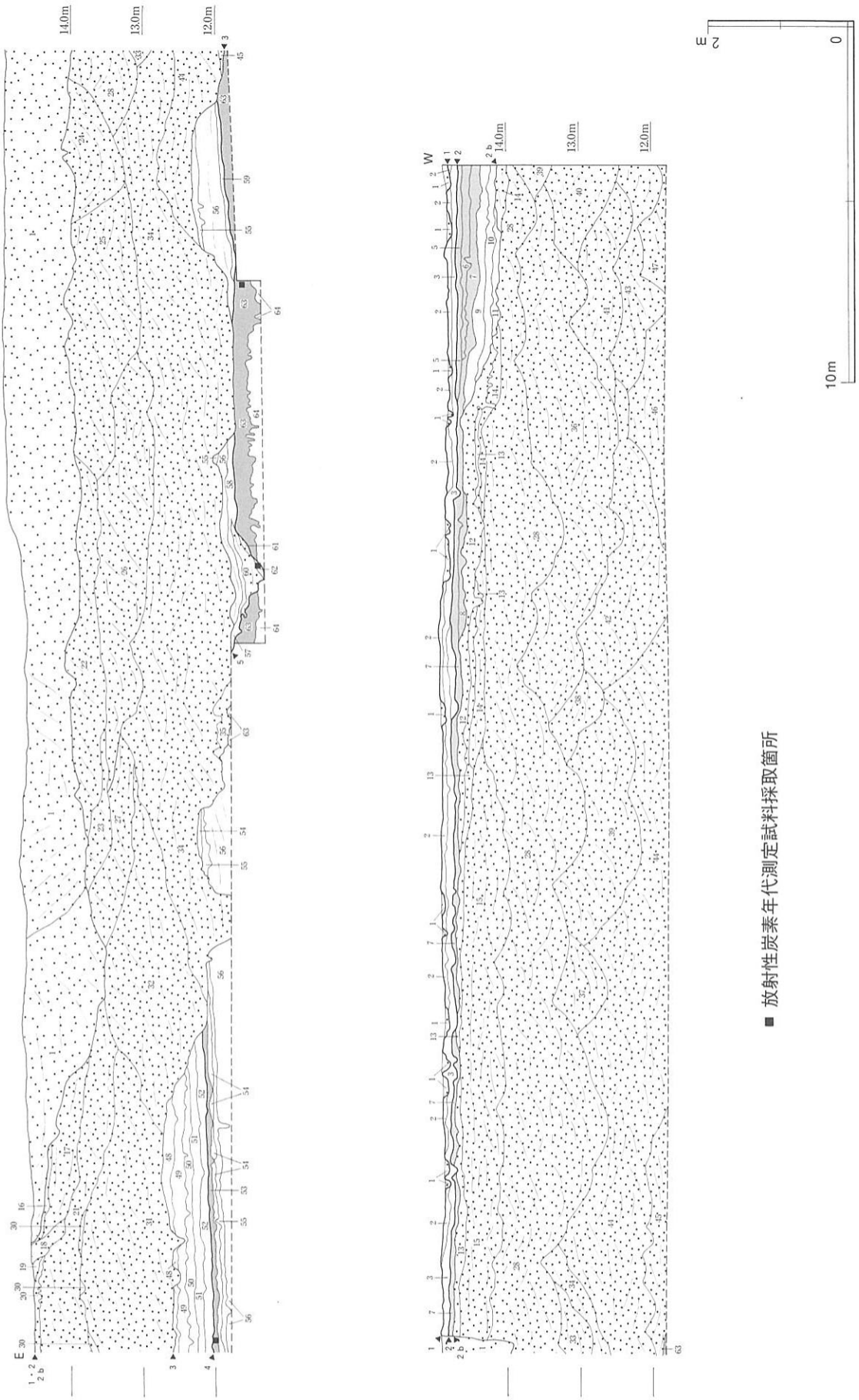



図121　01－１調査区　土層断面模式図

## 図121　断面注記

| 番号 | 色 | 調 | 粒度 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 灰白 | 2.5Y7/1 | 粗砂～細礫 | 中礫（粗粒）～大礫（粒径100㎜前後）非常に多く含む．部分的にラミナあり．偽礫として暗灰黄色砂質シルトのブロック入る〔0層〕 |
| 2 | 緑灰 | 10G6/1 | シルト質極細砂 | 細礫～中礫（細粒）多く含む〔1層〕 |
| 3 | 緑灰 | 10G5/1 | シルト（粗粒） | 極粗砂～細礫多く含む．微量の炭化物含む．酸化により黄色味を帯びる〔1層〕 |
| 4 | 灰オリーブ | 7.5Y6/2 | シルト質極細砂 | 第2面の凹みに局所的に存在．細礫～中礫（細粒）多く含む〔1層〕 |
| 5 | 緑灰 | 7.5GY6/1 | シルト | 細礫～中礫（細粒）多く含む．有機物多く含む〔2a層〕 |
| 6 | オリーブ灰 | 5GY5/1 | 砂質シルト | 細礫～中礫（細粒）含む．炭化物粒・有機物少量含む〔2a層〕 |
| 7 | オリーブ灰 | 2.5GY5/1 | 砂質シルト～シルト質極細砂 | 極粗砂～中礫（粗粒）非常に多く含む．有機物含む．斑鉄顕著〔2a層〕 |
| 8 | オリーブ灰 | 2.5GY5/1 | 極細～極粗砂 | 細礫多く含む〔第2b面4溝埋土〕 |
| 9 | にぶい黄～緑灰 | 2.5Y6/3～10GY5/1 | 粗砂～中礫（中粒） | シルトブロック多く入る〔第2b面3凹地埋土〕 |
| 10 | オリーブ灰 | 2.5GY5/1 | シルト（粗粒） | 極粗砂～中礫（中粒）多く含む〔第2b面3凹地埋土〕 |
| 11 | 灰オリーブ | 7.5Y6/2 | 極細～細砂 | 極粗砂～細礫含む．14のブロック入る〔第2b面3凹地埋土〕 |
| 12 | 灰白～浅黄 | 5Y8/1～7/3 | 細砂 | 細礫～中礫（中粒）多く含む．14の小ブロック入る．土壌化の影響あり〔2b層〕 |
| 13 | 灰オリーブ | 5GY6/1 | シルト質細砂～粗砂 | 極粗砂～細礫多く含み、中礫（粗粒）少量含む．土壌化の影響あり〔2b層〕 |
| 14 | 黄橙～灰白<br>明黄褐～灰白 | 10YR8/6～5Y8/1<br>2.5Y7/6～7.5Y7/1 | 極細～細砂（上部）<br>シルト質極細砂（下部） | 中礫（中粒）少量含む．上方粗粒化〔2b層〕 |
| 15 | にぶい黄～灰白 | 10YR7/3～2.5Y8/2 | 細～中砂 | 粗砂～中礫（粗粒）多く含む．ラミナあり〔2b層〕 |
| 16 | 灰黄～灰オリーブ | 2.5Y6/2～7.5Y6/2 | 粘土質シルト・極細砂の互層 | 〔2b層〕 |
| 17 | 明黄褐～灰黄 | 10YR7/6～2.5Y6/2 | 中砂～細礫 | 下部中～粗砂、上部粗砂～細礫主体．上部には中礫（細～極粗粒）多く含む〔2b層〕 |
| 18 | 青灰～浅黄 | 5BG6/1～5Y7/3 | シルト～極細砂 | ラミナ認められず、シルトと極細砂が混在．地層変形の影響か〔2b層〕 |
| 19 | にぶい黄橙～灰黄 | 10YR7/4～2.5Y7/2 | 粗～極粗砂 | ラミナ不明瞭〔2b層〕 |
| 20 | 灰黄～灰オリーブ | 2.5Y6/2～7.5Y6/2 | 粘土質シルト・極細砂の互層 | 下面は変形して、下の21が所々巻き上がっている〔2b層〕 |
| 21 | 灰白 | 7.5Y8/2 | 細～中砂 | 黄灰色シルトの小ブロック入る．部分的に極細砂～細礫の薄層が挟在〔2b層〕 |
| 22 | 黄橙～明黄褐 | 7.5YR8/8～10YR7/6 | 粗砂～細礫 | 鉄分の沈着顕著．下部には中礫（粗粒）多く含む〔2b層〕 |
| 23 | 黄 | 2.5Y8/6 | 細砂 | 〔2b層〕 |
| 24 | 赤褐 | 5YR4/8 | 粗砂～細礫 | 鉄分の沈着顕著．中礫（中粒）～大礫（70㎜大）多く含む〔2b層〕 |
| 25 | 橙～明黄褐 | 7.5YR6/8～2.5Y7/6 | 細～粗砂 | 鉄分の沈着顕著．細礫～大礫（70㎜前後）多く含む〔2b層〕 |
| 26 | 灰白～浅黄 | 10YR8/1～8/3 | 細～粗砂 | 細礫～中礫（粗粒）の薄層が挟在．上層との境にも同大の礫を挟む〔2b層〕 |
| 27 | 灰白～浅黄 | 2.5Y8/2～8/4 | 細～中砂 | 細礫～中礫（粗粒）多く含む〔2b層〕 |
| 28 | 明褐～灰白 | 7.5YR5/8～2.5Y8/1 | 細～粗砂 | 細礫～中礫（極粗粒）多く含み、場所によっては細礫が主体のところあり〔2b層〕 |
| 29 | にぶい黄橙 | 10YR7/2 | 細礫 | 中礫（細～粗粒）多く含む〔2b層〕 |
| 30 | 暗灰黄 | 2.5Y5/2 | 粘土質シルト | 〔2b層〕 |
| 31 | 浅黄～灰白 | 2.5Y7/4～N8/ | 極細～中砂 | シルト～極細砂、細礫～中礫（中粒）の薄層が挟在．上層との層界には中礫（細～粗粒）を挟む〔2b層〕 |
| 32 | 黄橙～黄 | 7.5YR7/8～5Y8/6 | 細～中砂 | 細礫～中礫（粗粒）の薄層が挟在．細礫が主体となるところあり〔2b層〕 |
| 33 | 黄橙 | 10YR6/8 | 細砂 | 細礫～中礫（粗粒）の薄層が挟在〔2b層〕 |
| 34 | 暗赤褐～明黄褐 | 5YR3/6～2.5Y7/6 | 細～中砂 | 細礫～中礫（極粗粒）を非常に多く含むため礫がちで、場所によっては細礫が主体となるところあり〔2b層〕 |
| 35 | 緑灰 | 10GY6/1 | 極細砂 | 灰（5Y4/1）・暗緑灰（10GY4/1）シルトのブロック入る．河床部の二次堆積物か〔2b層〕 |
| 36 | 黄橙～灰白 | 10YR7/8～2.5Y8/1 | 細～粗砂 | 細礫～中礫（極粗粒）を非常に多く含むため礫がちで、場所によっては細礫が主体となるところあり〔2b層〕 |
| 37 | 明黄褐 | 10YR6/8 | 中～粗砂 | 細礫～中礫（粗粒）多く含む〔2b層〕 |
| 38 | 褐 | 10YR4/6 | 細砂 | 細礫非常に多く含む〔2b層〕 |
| 39 | 明黄褐～黄 | 10YR7/6～2.5Y8/6 | 細～中砂 | 細礫～中礫（極粗粒）多く含む〔2b層〕 |
| 40 | 明黄褐 | 10YR6/6 | 中砂 | 中礫（細～極粗粒）多く含み、上部は細礫が主体となるところあり〔2b層〕 |
| 41 | 黄橙～明黄褐 | 10YR7/8～2.5Y7/6 | 細～粗砂 | 粗砂主体．細礫～中礫（中粒）含む〔2b層〕 |
| 42 | 橙～明黄褐 | 7.5YR6/8～10YR7/6 | 細～中砂 | 細礫～中礫（極粗粒）多く含み、中礫が密集して入るところあり〔2b層〕 |
| 43 | 明黄褐～淡黄 | 10YR7/6～2.5Y8/4 | 細砂 | 細礫～中礫（中粒）多く含む．細礫～中礫（極粗粒）の薄層が挟在〔2b層〕 |
| 44 | 浅黄橙～明黄褐 | 10YR8/4～2.5Y6/8 | 細～粗砂 | 細礫～中礫（極粗粒）多く含み、特に下部には中礫が密集するように入る〔2b層〕 |
| 45 | 明黄褐～黄 | 2.5Y7/6～7/8 | 細～中砂 | 細礫多く含み、中礫（中粒）も若干含む〔2b層〕 |
| 46 | 黄 | 2.5Y8/6 | 細～粗砂 | 中礫（粗粒）多く含む．黄灰（2.5Y5/1）シルトの小ブロック入る〔2b層〕 |
| 47 | 黄 | 2.5Y8/8 | 中～粗砂 | 細礫～中礫（粗粒）多く含む〔2b層〕 |
| 48 | 暗青灰 | 5BG5/1 | シルト質極細砂 | 褐灰（7.5YR5/1）粘土質シルトの小ブロック少量入る．土壌化の可能性大〔3a層〕 |
| 49 | 緑灰 | 10G6/1 | 極細砂 | 灰白（10Y8/1）極細砂含む．褐灰（7.5YR5/1）粘土質シルトの小ブロック少量入る〔3b層〕 |
| 50 | 緑灰 | 5G5/1 | 粘土質シルト | 〔3b層〕 |
| 51 | 緑灰 | 10GY6/1 | 粘土質シルト | 有機物多く含み、薄層が挟在するところもあり〔3b層〕 |
| 52 | 緑灰 | 10G6/1 | 極細砂 | 〔3b層〕 |
| 53 | 灰 | 10Y4/1 | 粘土～粘土質シルト | 有機物多く含む．微量の炭化物粒含む〔4a層〕 |
| 54 | 緑灰 | 10GY6/1 | 粘土質シルト | 有機物比較的多く含む〔4b層〕 |
| 55 | 緑灰 | 10GY5/1 | 砂質シルト | 有機物比較的多く含む〔4b層〕 |
| 56 | 緑灰 | 10GY6/1～10G5/1 | 砂質シルト～シルト質極細砂 | 灰白（7.5Y8/1）極細砂～細砂や有機物の薄層が挟在〔4b層〕 |
| 57 | 緑灰 | 10GY5/1 | シルト（粗粒） | 有機物若干含む〔4b層〕 |
| 58 | 緑灰 | 10GY6/1 | シルト | 灰白（7.5Y8/1）極細砂の薄層が挟在．有機物含み、植物遺体（ヨシ）挟む〔4b層〕 |
| 59 | オリーブ灰 | 5GY6/1 | シルト質極細砂 | 色調はやや暗色を呈する．有機物・炭化物含む〔4b層〕 |
| 60 | 灰白～浅黄 | 5Y7/2～7/3 | 粗砂～細礫 | ラミナあり〔第5面6溝埋土〕 |
| 61 | オリーブ灰 | 2.5GY5/1 | シルト質極細砂 | 有機物含む〔第5面6溝埋土〕 |
| 62 | 63・64のブロック混合土 | | | 炭化した木片含む．二次堆積物か〔第5面6溝埋土〕 |
| 63 | 灰 | 10Y4/1 | 粘土質シルト | 細～中砂多く含む．炭化物粒少量含む．縦方向の植物根茎あり．西に向かうにしたがい粗粒となる〔5a層〕 |
| 64 | 緑灰 | 10GY5/1 | 粘土質シルト | 細～中砂多く含む．63との層界は凸凹が激しく、上部を中心に63のブロックが入る．植物遺体（ヨシ）を挟む〔5b層〕 |

## 第２節　検出された遺構と遺物

### 第１面（図122，図版54・55）

機械掘削によって府営住宅建設時の盛土と現代作土、及び０層とした近世末～近代の洪水砂層を除去して検出される遺構面で、96－１・２調査区ならびに00－１調査区の第１面に対応する。近世の耕作面と推定されるが、調査区北東半は流路（１流路）によって浸食され、南西半では土取りを目的としたと考えられる土坑群が掘削されていたことから、耕作に伴う遺構については検出できなかった。遺構面の標高は14.8～14.9mを測り、わずかではあるが南東から北西方向へ傾斜している。

１流路は、遺構面を被覆する０層と同一の洪水砂層を埋土とするもので、粒径100㎜前後までの中～大礫を多量に含む粗砂～細礫を主体とし、検出面から深さ0.5m前後の底面付近では、偽礫として径５～30㎝大の暗灰黄色砂質シルトのブロックを多く含む。流路の流向は、砂層中に見られる覆瓦構造から南西から北東方向と推定される。

南西半で検出した土坑は25基前後を数え、平面形は東西方向に長軸を持つ幅1.4m前後の長方形を呈する。この長軸方向は、前章第２節でＤ群と呼称した00－１調査区の南西側に分布する土坑群と共通するが、Ｄ群を構成する各土坑が検出面から0.2～0.3mの深度を有しているのに対し、本調査区で検出した土坑は最も遺存良好のものでも0.1m前後と浅く、坑底に残る工具痕から方形の小ブロックで土を採取したと考えられるなど、土坑自体の掘削方法も異なっている。土坑群は東西２群に分けられるが、間に存在する南北の隙間は帯状にやや高まり、これを境に各群で工具痕の向きが異なっていることから、土坑群間には筆境などの土地区画の境界が存在していた可能性が高い。土坑群の掘削時期については不明な点が多いが、東群の分布が１流路の西肩際までに収まり、流路上には土坑が存在していなかったことから、０層堆積後あるいは堆積中のある段階に掘削されたものと考えられ、第１面の時期より後の遺構であることは確実である。

なお、０層及び１流路内からは、図123－940～951に示した18世紀後半を中心とする陶磁器が出土している。肥前系の染付磁器が中心で、948・949には見込に五弁花文が描かれ、943・944には見込に蛇目釉剥ぎが見られる。また、951は蛇目凹形高台を有している。その他には、942の唐津焼碗、947の信楽焼鉢などの陶器片がある。

### 第２面（図122，図版56－１）

１層を除去して検出される面であり、０層による浸食を免れた調査区南西半にのみ遺存する。96－１調査区第３面、96－２調査区・00－１調査区の第２面に対応し、00－１調査区の調査所見から中世の遺構面と推定される。遺構面の標高は14.7～14.8m前後であるが、調査区の南西端は下面の状況を反映してわずかに低くなっている。

第２面の検出遺構には溝群がある。いずれの溝も幅0.3m前後、深さ0.05～0.1mと小規模で、南北方向を中心に一部東西方向のものも存在する。１層を埋土としていることから１層下面遺構と捉えられ、第１面段階の耕作に関わる近世の遺構と推定される。

遺構面検出に際して除去した１層からは、図123－952・953に示した青・白磁が出土している。952は龍泉窯系青磁碗の口縁部片、953は白磁小皿の底部片で、14世紀後半～15世紀の所産であろう。また、上面を検出した２ａ層からは、954の龍泉窯系青磁碗の底部片が出土している。器壁の分厚い底部に断面四角形の高台が付されたもので、釉色は青味を帯びた淡い緑色を呈する。13世紀の所産と考えられる。

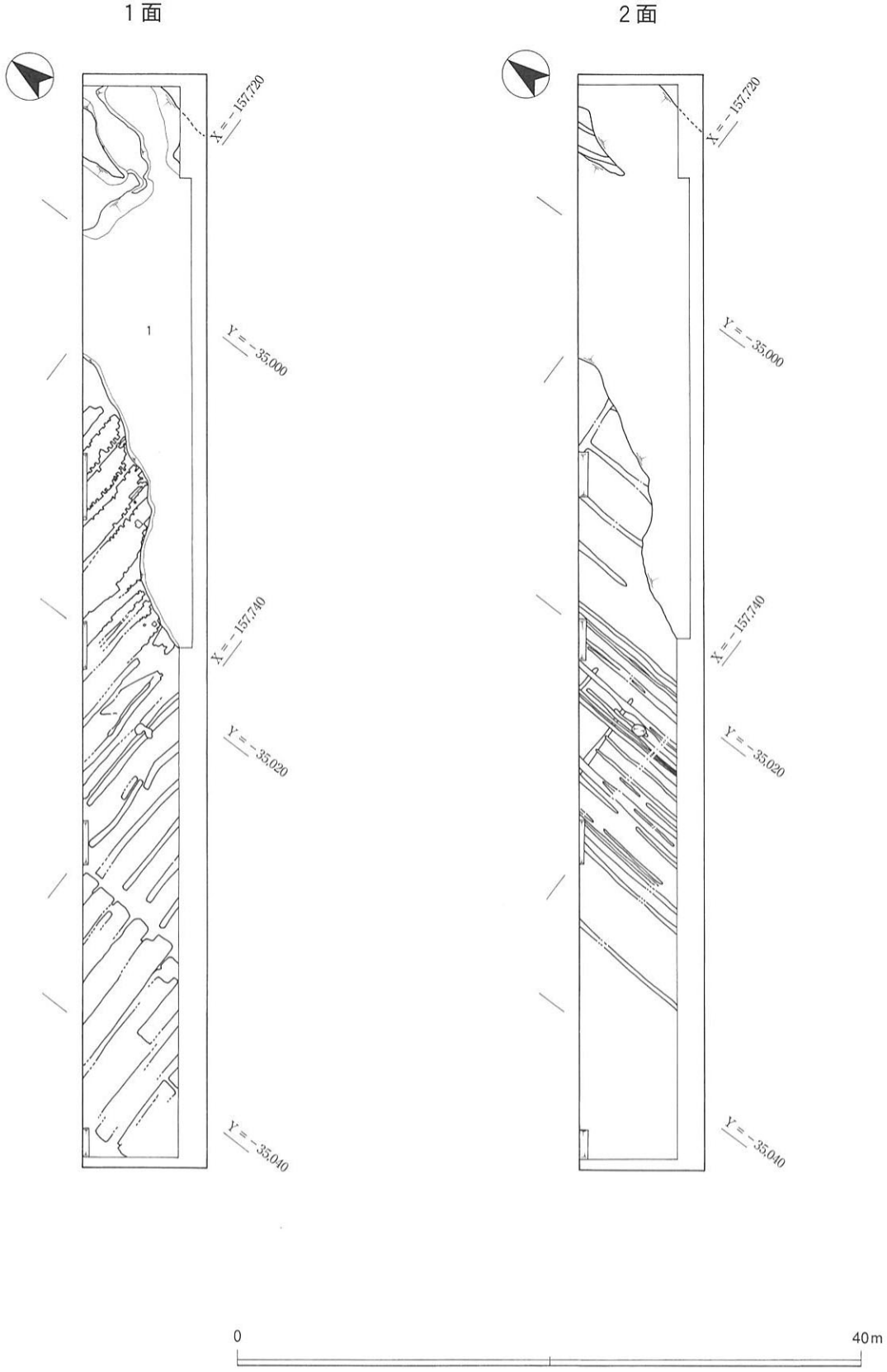



図122　第1面・第2面　全体図

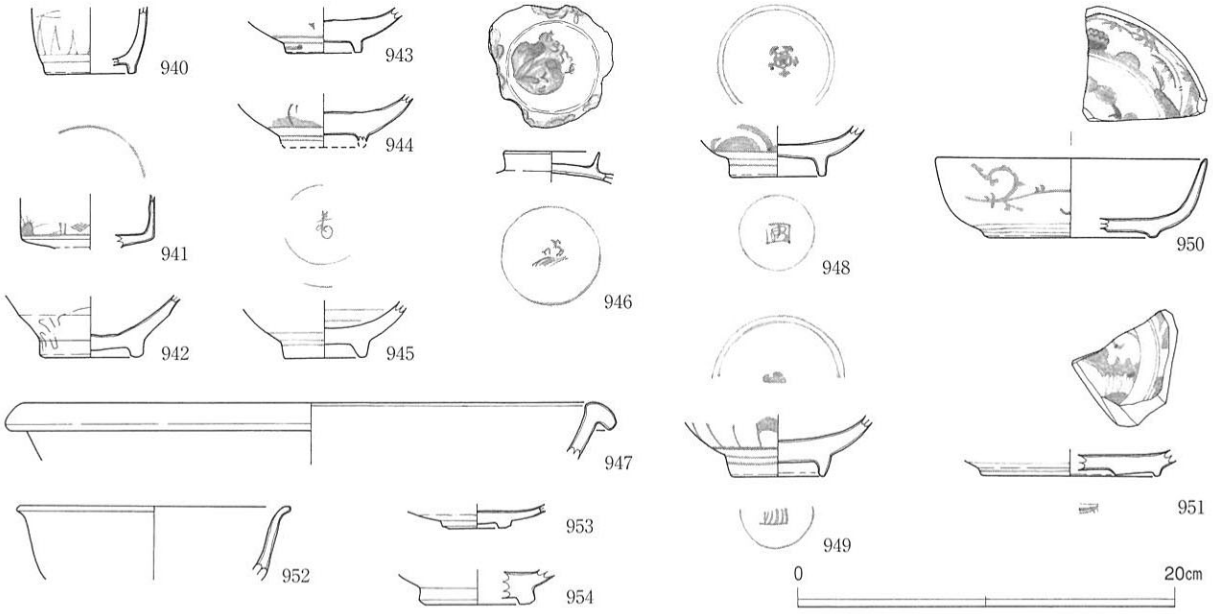



図123　０～２ａ層　出土遺物

## 第２ｂ面（図124，図版56－２）

２ａ層を除去して検出される面であり、96－２調査区の第６面、00－１調査区の第２ｂ面に対応する。２ｂ層とした第３面検出の河川を埋積する洪水堆積物の上面であるが、細砂～粗砂を主体とする最上部は弱いながらも土壌化が認められ、少量ながら下層の小ブロックを含んでいる。

第２ｂ面では凹地・溝・井戸を検出したほか、１流路の西肩北端では２ａ層を埋土とする小土坑（２土坑）を確認した。

〔３凹地〕（図版57－１）

調査区南西端で検出した南北方向の溝状の凹地で、幅10m以上、検出面からの深さ約0.5mを測る。埋土はシルトブロックを多く含んだ粗砂～中礫と粘性の強いオリーブ灰色の粗粒シルトを主体とするが、最下部には部分的に灰オリーブ色極細砂～細砂が堆積していた。同様の遺構は96－２調査区２・３トレンチにおいても検出されており、同一の遺構とすれば50m以上にわたって南北に延びていることになる。

〔４溝〕

３落ち込みの東側肩部から1.4～1.7mの間を置いて南北方向に並走する溝で、幅3.0～3.9m、検出面からの深さ0.1mを測る。細礫を多く含んだオリーブ灰色極細砂～極粗砂を埋土としている。

〔５井戸〕（図125，図版57－２）

４溝の東肩と重複して検出した楕円形を呈する素掘りの井戸で、長径約2.9m、短径約2.6m、検出面からの深さ0.65mをそれぞれ測る。第２面の検出時には不明瞭であったが、検出時の断面観察から２ａ層を切って掘削されていることが確認され、埋土中に１層のブロックが多く含まれていることから、第１面に関わる近世の遺構と考えられる。

## 第３面（図124・126～128，図版58）

96－１調査区の第４面、96－２調査区の第８面、00－１調査区の第３面にそれぞれ対応する。96－１・00－１両調査区の所見から本来は平安時代終り頃の耕作面であったと推定されるが、今回は調査区全体が河川の中に収まってしまったことから、北東半の河床を検出するのみに留まった。

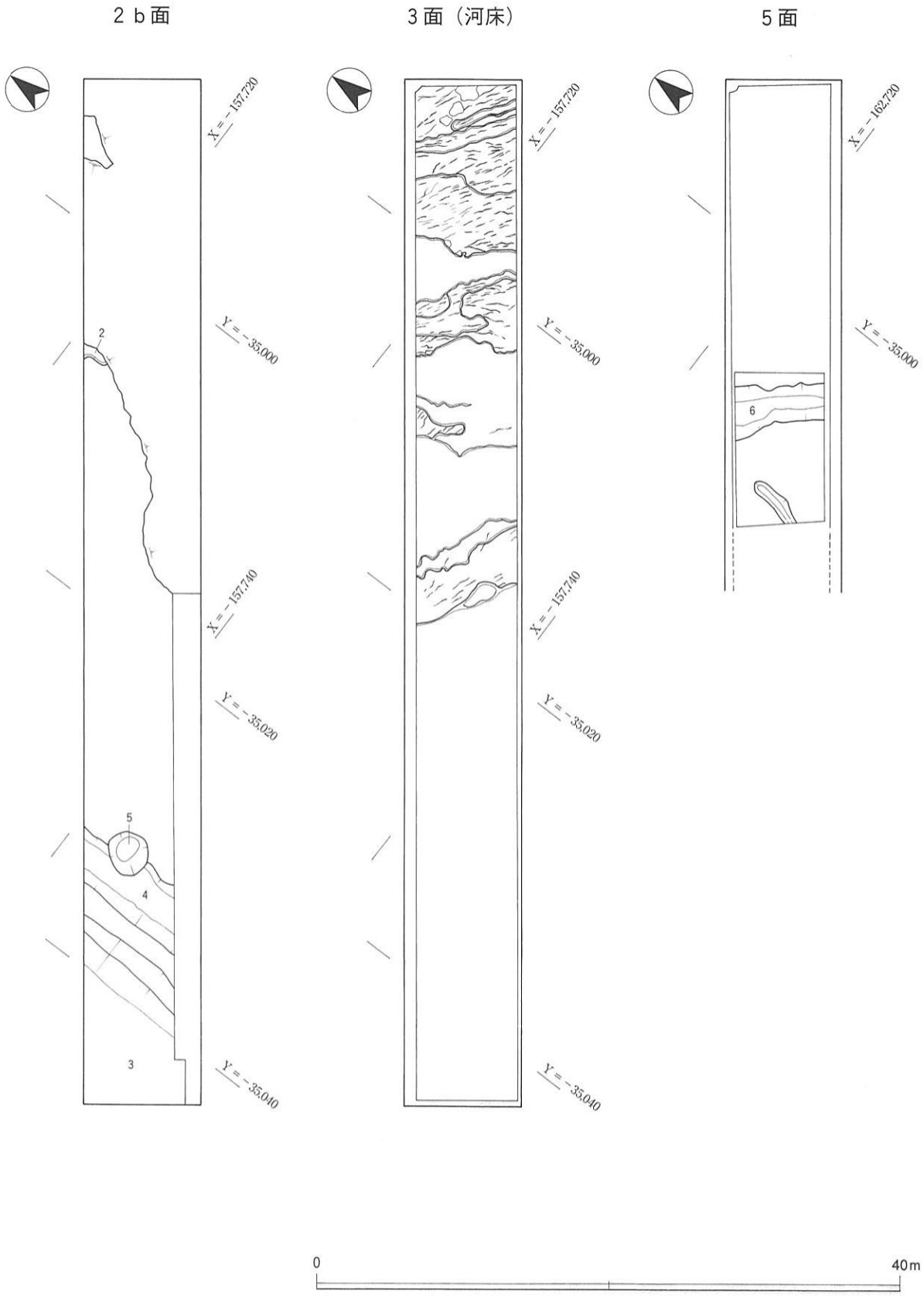



図124　第２ｂ面・第３面・第５面　全体図

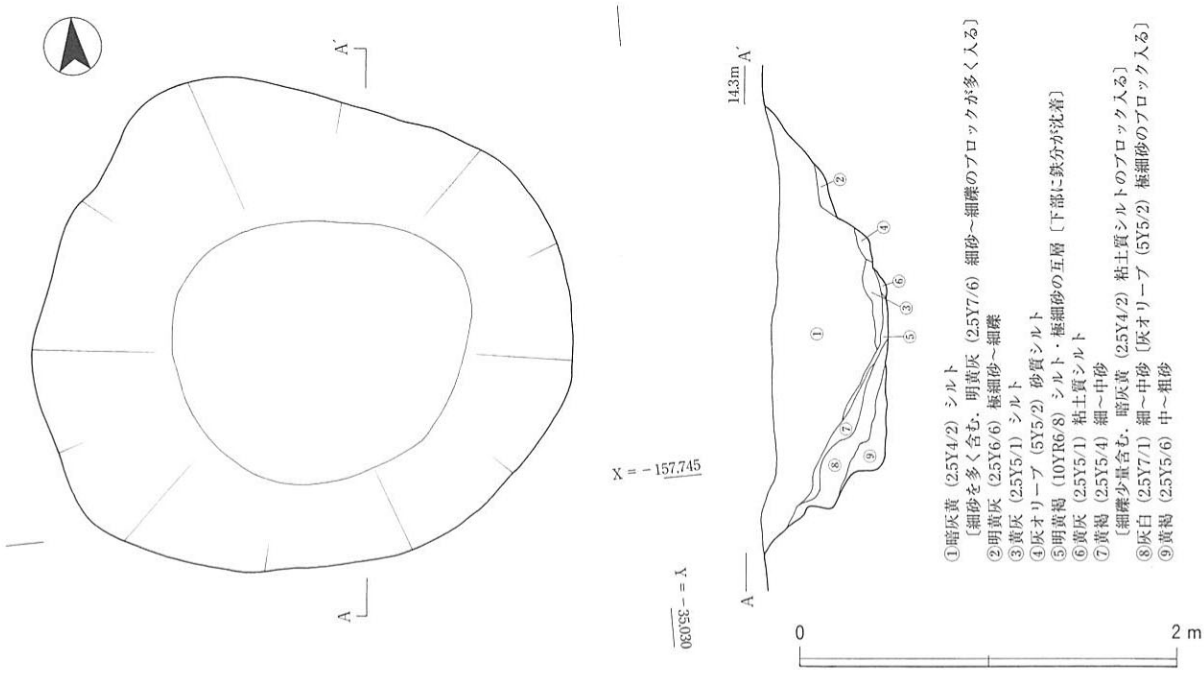



図125　５井戸　平・断面図

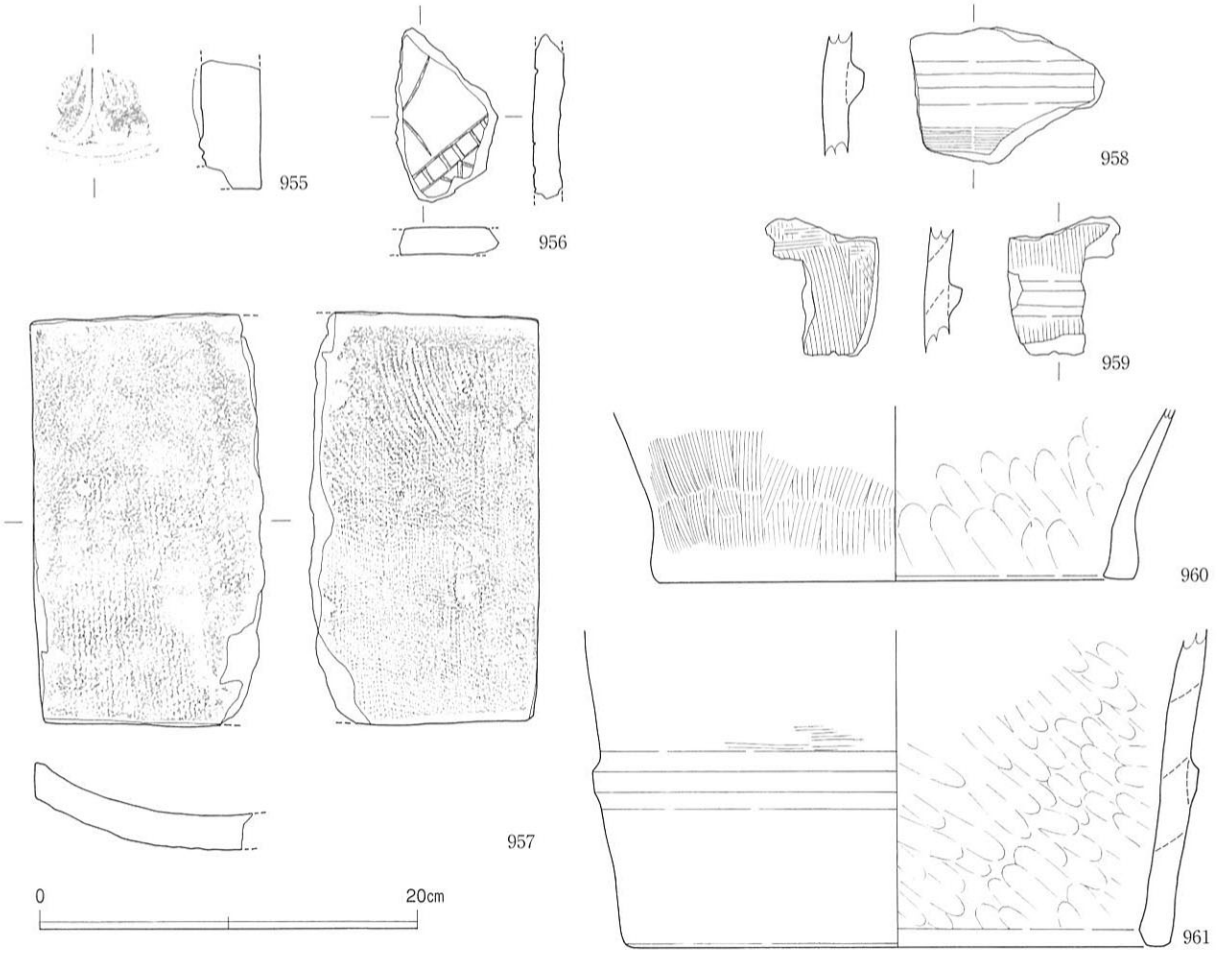



図126　２ｂ層（河川内砂礫層）　出土遺物（１）

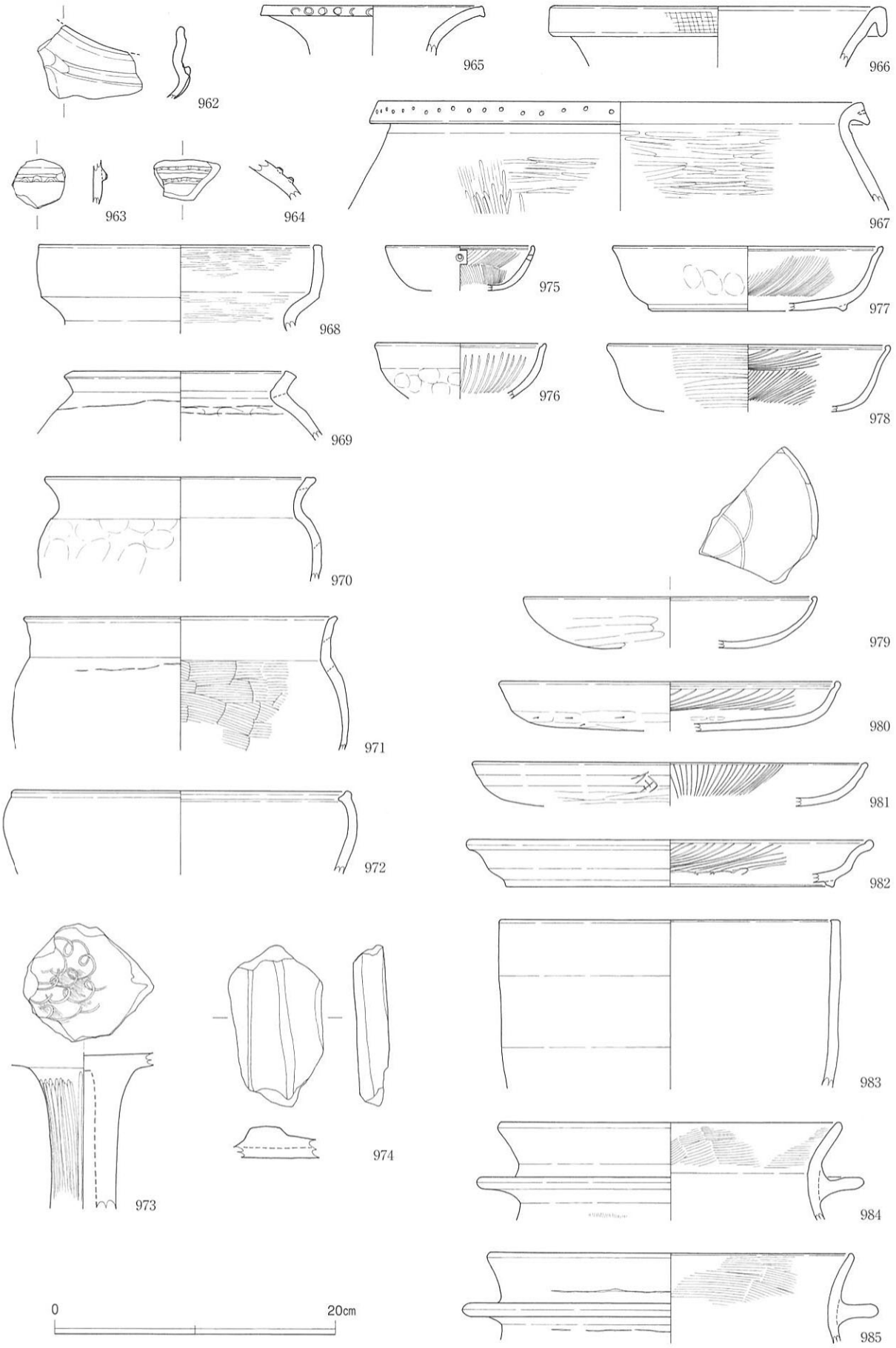



図127　２ｂ層（河川内砂礫層）　出土遺物（２）

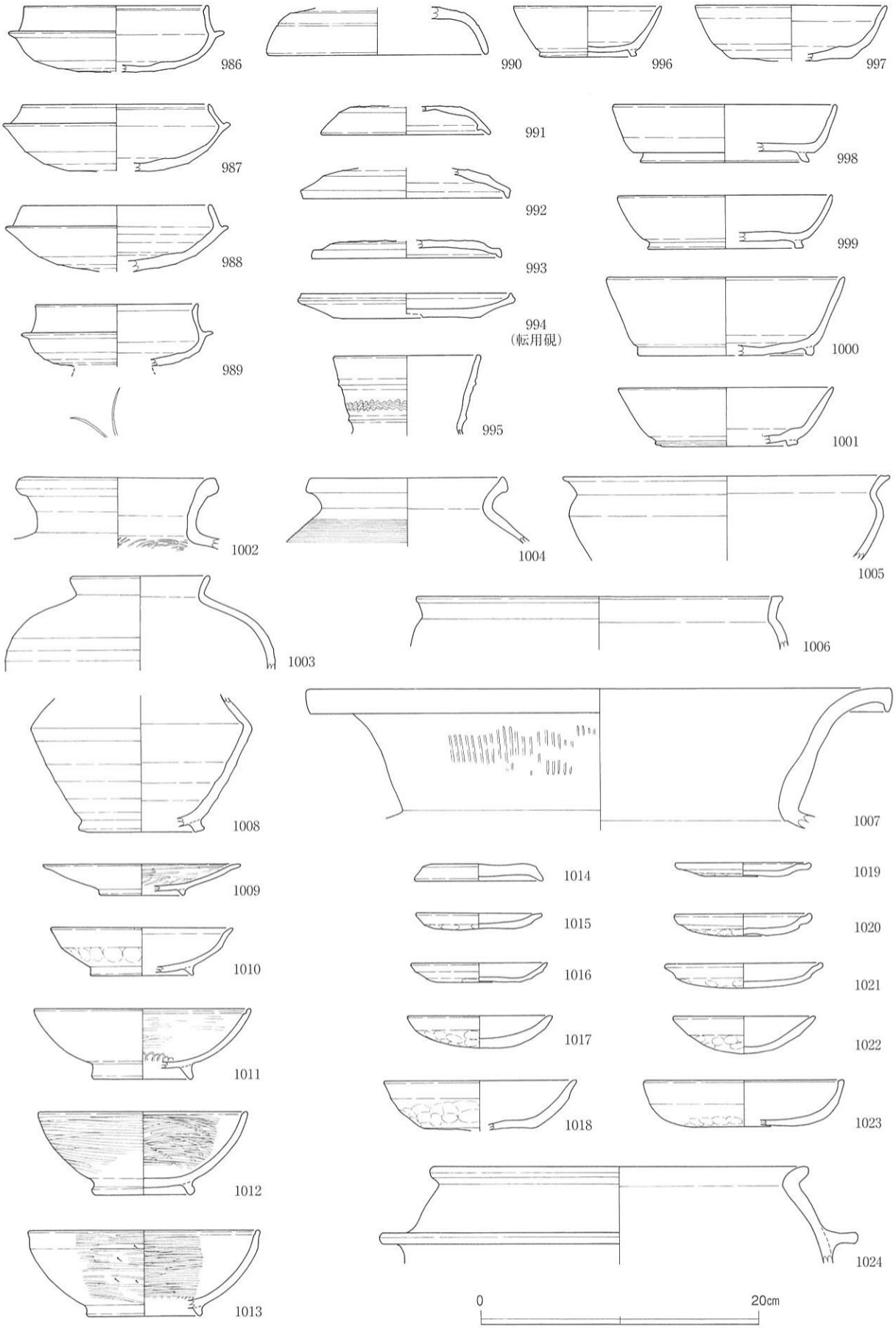



図128　２ｂ層（河川内砂礫層）　出土遺物（３）

検出し得た河床の標高は11.8～12.7mを測り、河川を埋積した洪水砂層の堆積は厚いところで３m以上に及ぶ。この砂層の堆積は、96－１調査区の西半から96－２調査区西端まで100m以上にわたって認められることから、時間差を有した河川堆積物の累重であると考えられるが、本調査区内の堆積層中には時間差を示唆する明瞭な間隙は認められなかった。河床面には水流により浸食された筋状の抉れが多数残されており、これらの抉れの向きから、河川は南東から北西方向に流れていたものと推定される。

なお、砂層中からは縄紋時代後期～中世にかけての土器・瓦類がコンテナ25箱分出土しており、そのうちの一部を図126～128に示した。96－１・２調査区においては、同一砂層中から多量の土器・瓦類とともに、土馬や子持勾玉、石製巡方・銅製責金具など一般の集落遺跡では見られない遺物が出土しているが、今回の出土遺物の中にも、既往の調査では遺構が未検出、あるいは希薄である古墳時代中期～奈良時代の遺物が多数含まれており、同時期の遺構・遺物が確認されている林遺跡や国府遺跡など南接する周辺遺跡との関連が想定される。

## 第４面（図版59－１）

前節でも述べたように、２ｂ層による浸食を免れた調査区北東端のみで確認された面で、３層を除去して検出される有機物を多く含んだ灰色粘土～粘土質シルトからなる古土壌の上面である。面上にヒトの足跡が比較的多く印されていたことから、人間活動が行われていたことは確実であるが、遺構・遺物は確認できなかった。

なお、検出した面の標高は12.1m前後で、00－１調査区において最終遺構面とした第７面（弥生時代前期～中期初頭）とは1.4mほどの比高差を有して低くなっていることから、時期的にはそれより遡る縄紋時代の地表面であったと推定される。今回、土壌（４ａ層）を試料としてＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施したところ、1,440－1,370cal B.C.（69.0%）という縄紋時代後期後葉の年代に相当する較正年代値が得られた。ただし、この数値は第５面検出の６溝出土の木片から得られた年代値とは逆転しており、何らかの理由により実際の年代より古い値が測定された可能性がある。

## 第５面（図124，図版59－２・３）

掘削深度の関係から10m幅で実施した下層確認調査で確認した面であり、４ｂ層を除去して検出される細砂～中砂を多く含んだ灰色粘土質シルトからなる古土壌の上面である。検出した面の標高は11.6～11.7mを測る。

この面では２条の溝状遺構を検出した。このうち北東側に位置する６溝は、幅2.5～3.6m、深さ約0.2mを測り、南東から北西方向へ走行している。埋土の主体が灰白～浅黄色の粗砂～細礫であることから、自然流路であった可能性が高い。前述したようにこの溝の埋土から出土した木片、及び土壌（５ａ層）の放射性炭素年代をＡＭＳ法により測定したところ、それぞれ1,130－1,000cal B.C.（90.1%）、1,740－1,610cal B.C.（100%）という較正年代値が得られた。したがって、この数値を根拠とするならば、５ａ層の形成は縄紋時代後期中葉頃と捉えることができる。

なお、今回図示していないが、５ａ層の最上部からは20点以上の縄紋土器が出土した。すべて粗製土器の体部片であるため詳細な時期は特定しがたいが、外面には巻貝条痕や刷毛目状の細密条痕などの調整痕が認められ、年代測定で示された縄紋時代後期中葉頃の所産と見なして大過ないと考えられる。

# 第Ⅴ章　ま　と　め

## 第１節　土地利用の変遷

### １．はじめに

本書では、2000・2001年度に藤井寺市大井地区で実施した船橋遺跡の調査成果を説明してきた。第Ⅱ章において述べたように、1948年に山本博氏によって発見されて以来、当遺跡は大和川河床遺跡として府下はもとより全国的にも著名となり、その後の発掘調査を通じて柏原・藤井寺両市にまたがる縄紋時代～近世の複合遺跡として位置付けられてきた。しかしながら、遺跡中央部が早くに現大和川の河床と化してしまったために実態に関しては不明な点が多く、特に藤井寺市域である左岸側では、これまで行われてきた既往の調査が比較的小規模で、かつ上部に堆積した分厚い洪水砂層や湧水によって調査不能となった箇所も多いことから、極めて限定されたデータしか得られていない。そうした中、1995・1996年度に府営住宅建て替え及び大和川河川事業進入路建設に先立って当センターが実施した調査（96－１・２調査区）では、弥生時代～近世の各時代の遺構面が良好に遺存することが確認され、その北側で行った今回の調査では、同様の所見を得るとともに、さらに下位に縄紋時代に遡る２面の旧地表面が存在することが確かめられた。遺跡全体の消長や時期ごとの景観を復元していくためには、まず調査地点ごとに得られたこうした成果を地形環境との関係を含めて整理し、そのうえで各遺構面の広がりや変化を空間的に捉えていく必要があると考えられる。そこで以下では、00－１調査区の調査所見を中心に土地利用のあり方と変遷について述べておきたい。

### ２．各時期の土地利用

縄紋時代　01－１調査区では、河川による浸食を免れた部分で上下２層の古土壌の存在が確認され、２面の旧地表が存在していることが明らかとなった。この古土壌は96－１調査区において８・９層と捉えられた地層に対応すると想定され、今回の放射性炭素年代測定によって後期中葉～晩期に形成された可能性が高いことが示された。各面とも人為による明確な遺構は存在しなかったが、下面では土壌中から粗製の縄紋土器片が出土し、上面ではヒトの足跡が多数認められたことから、調査地周辺において当時何らかの人間活動が行われていたことは確実であり、それが縄紋時代後期まで遡り得ることが明らかとなったことは、当遺跡の形成を考えるうえで重要な成果と言えよう。調査範囲が極めて限られるため土地利用の実態については不明な点が多いが、南側に隣接して広がる林遺跡では、今回の調査区から南西600ｍに位置する国府台地北西端の低位段丘面において、竪穴住居や屋外土器埋設遺構といった居住域の存在を裏付ける北白川上層式期の遺構が検出されており［藤永ほか編1981］、調査地を含む北側の沖積低地一帯が当時の人々の生業活動領域内に組み込まれていた可能性が考えられる。

また、96－１調査区の７ｂ層中からは、大和川遺跡調査会のⅤ区出土資料［佐原1962］を基準に型式設定された晩期後葉の船橋式土器が出土している。当該期から晩期末の長原式期にかけては、これまでにも河床内で多数の土器が採集され、2001年度に当センターが調査を実施した柏原市大正２丁目の01－２調査区においては包含層が確認されるなど、遺跡内の広い範囲で人間活動の証左を窺うことができ、次の弥生時代に繋がる動向として注目しておく必要があろう。

弥生時代前期（図129）　00－１調査区の第７面では、東西２つの低地に挟まれた微高地上で水田が確認され、前後の地層から出土した土器の年代から、弥生時代前期～中期初頭に営まれたものと捉えた。

水田域の両側に広がる低地のうち、流路（611流路）を伴う東側の低地に関しては、第８面の段階に前身となる大規模な流路が存在していたことが、96－１調査区１トレンチの調査で確かめられている。水田が開かれた微高地は、この流路を一定程度埋積した７ｂ層の堆積作用が流路外側にも及んだ結果、左岸側に形成されたものであり、土砂の供給が比較的少なかったその西側には後背湿地が広がることと

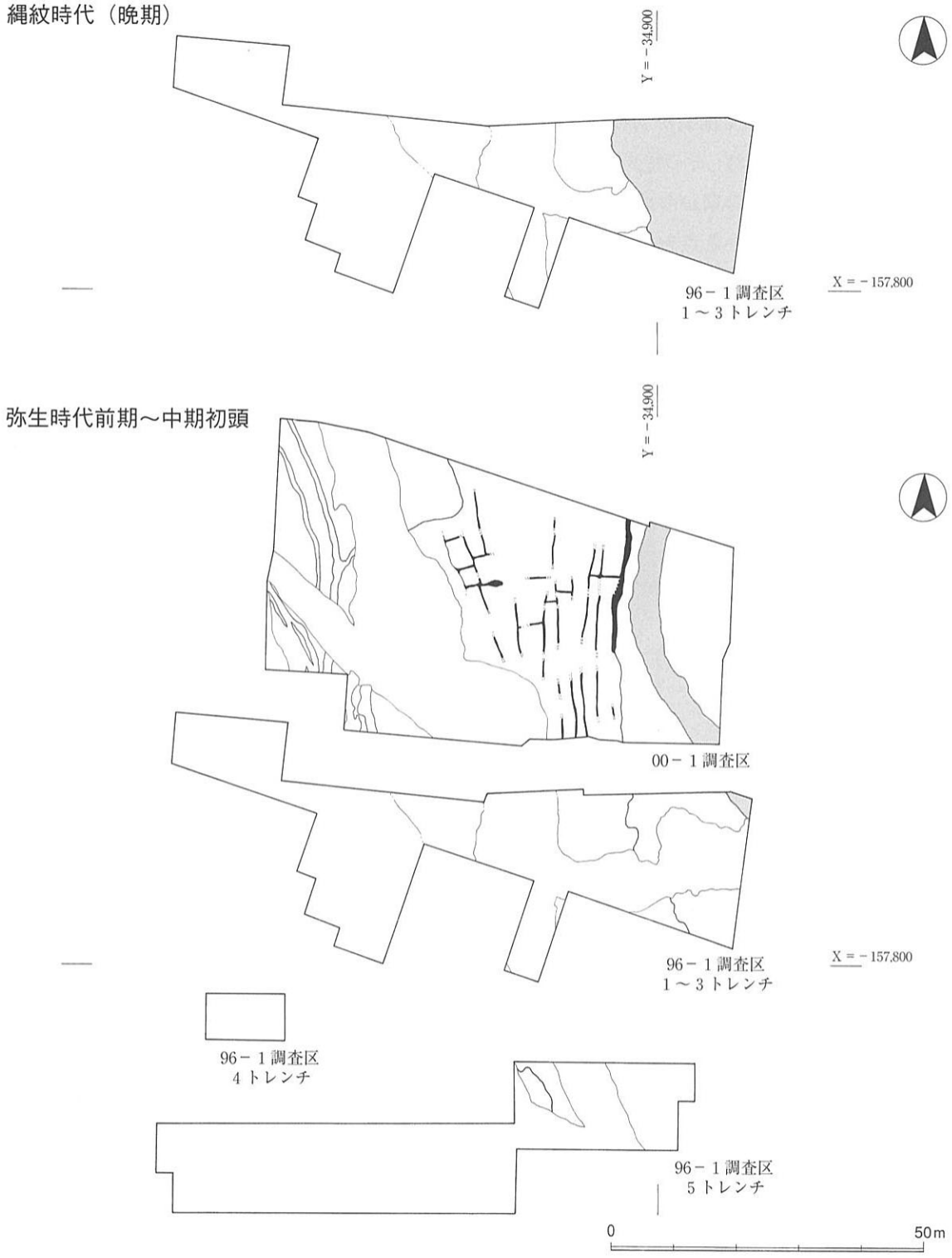



図129　縄紋時代晩期・弥生時代前期～中期初頭　遺構分布図

なった。その後、調査地周辺では、土壌（７ａ層）が形成されるような地形環境の安定した時期を迎え、微高地上においては水田開発が着手された。

今回の調査で判明した水田域は、東西幅30mほどの狭小なもので、おそらく微高地末端の起伏の少ない緩斜面が開田地として選定されたものと考えられる。水田造成に当たっては、東西両側の低地との境に設けた大畦畔もしくは高まりとの間に、幹線となる小畦畔を1.5～4.5m間隔で並行に配し、その間を支線となる小畦畔で区切って水田区画を作り出している。立地や水田区画方法に窺われる以上の特徴は、すでに述べたように近畿地方における初期弥生水田と共通するものであり、部分的であるとは言え、これまで遺物の出土のみで判然としなかった当該期の土地利用が明らかとなったことは大きな成果である。

**弥生時代中期**（図130）　弥生時代中期前葉になると一旦土砂供給が活発となり、途中短期間の安定した時期（第６面）を挟んで堆積が進行する。その結果、西側へ流れを変えた流路（486流路）を除いてほぼ平坦な地形が形成され、その後再び土砂供給の少ない安定した地形環境が継続する。その期間は、第５面で検出された遺構の時期から弥生時代中期中葉～古墳時代前期前半と考えられるが、５層内から中期前葉の遺物が出土している点を重視すれば、第６面で確認した中期前葉の遺構に関しても、本来の掘削面はより上位であった可能性がある。そのため図130には、96－１・00－１両調査区で検出した中期の遺構を検出面に関わらず合わせて示した。

図130　弥生時代中期　遺構分布図

検出された弥生時代中期の遺構としては、土坑・土器埋設遺構・溝状遺構がある。時期的には前葉～中葉前半のものが大半を占めるが、96－1調査区では中葉後半に下る遺構も存在している。

検出遺構の主体は土坑で、平面形は楕円もしくは不整楕円形のもの、同様の形状に坑底より1段高い突出部状のものが付されたもの、船形のもの、溝状を呈するものなどがある。こうした平面形の差異に関わらず、完形あるいは残存率の高い土器を伴っているものが多く、これらの土器はいずれも埋没途上の遺構に投棄もしくは据え置かれたような状態で出土している。各土坑の機能・性格については、本来の掘削面を明確にし得なかったことも手伝って現時点では特定しがたいが、590・624・650土坑や遺構209など大型で一定の深さを有するものに関しては井戸の可能性が考えられ、その場合、今回の調査地は居住域の一画に当たっている蓋然性が高い。一方で、土坑とともに確認された3基以上の土器埋設遺構を土器棺墓と捉えることが許されるならば、近畿地方の弥生時代土器棺墓の大半が墓域に伴うとされる近年の研究成果［藤井2001］から、墓域内に設けられた葬送や祭祀に関連する遺構であった可能性も想定される。その場合、体部穿孔土器を伴った590土坑や遺構129・141、坑底付近から10点のサヌカイト製打製石器が出土した遺構126に対する解釈が課題となろう。

以上から明らかなように、当該期の様相については未だ不明瞭な点が多く、土地利用のあり方に関しては、周辺域の調査の進展を待って判断せざるを得ない状況にある。

なお、溝状遺構のうち、486流路から分岐して北北東方向へ延びる609溝については、流路との位置関係や地形の状況から灌漑水路と考えられ、調査地北側には導水先である水稲耕地が存在している可能性が高い。

弥生時代後期～古墳時代前期（図131）　前述のように安定した地形環境が継続する時期であり、古墳時代初頭の庄内式期にかけて埋積が進行する流路部分を除けば、全体的に土砂の供給量は少ない。環境の安定化は、沖積低地への積極的な進出と土地利用の多様化を促し、その結果として多くの遺構・遺物が残されることとなった。この動きは古墳時代初頭から前期前半にかけて特に顕著である。

弥生時代後期の遺構としては、00－1調査区で確認された466溝が挙げられる。調査区中央の北端に位置し、東側が440方形周溝墓と重複していたため、遺構全体の状況を把握するには至らなかったが、報告の中でも述べたように方形周溝墓の西・南側周溝の一部である可能性があり、その場合、溝に囲まれた墳丘の規模は一辺5m前後に復元できる。また、南西コーナーのすぐ外側には、木棺墓である474土坑が存在する。伴出した遺物が打製石鏃1点のみであったために時期の特定は困難であるが、466溝との位置関係から周溝墓に付随した墓と捉えることも可能と思われる。したがって、以上の仮説に立てば、466溝の時期である後期前半の段階には、調査地の一部が墓域の一画に組み込まれていたものと推定される。なお、続く後期後半段階に帰属する遺構は、これまでの調査では検出されておらず、土地利用のあり方は不明とせざるを得ない。

古墳時代に入ると、竪穴住居や井戸などの居住関連、方形周溝墓・土器棺墓といった葬制関連の各遺構が調査地全体にわたって見られるようになり、居住域・墓域からなる集落の存在が明確化する。

竪穴住居は計8棟確認され、いずれも00－1調査区の東半に位置している。庄内式期前半の521住居を嚆矢として布留式期前半まで各時期2～3棟が構築され、これに1～2基の井戸が付随する構成と考えられる。しかしながら、住居の分布状況を見る限り、居住域の中心はおそらくより東方にあり、今回検出した住居群はその西縁に位置している可能性が高い。したがって、居住域全体の規模に関しては、現時点では明らかにすることができない。

一方、方形周溝墓は00－１調査区で５基確認され、調査担当者によって周溝墓の可能性が示唆された96－１調査区の遺構122と185・186を加えれば計７基となる。分布状況からは、00－１調査区中央部に存在する440・441・468・477周溝墓、467溝を挟んで西端に位置する472周溝墓、そして遺構122と185・186の３群に大別されるが、全体としては竪穴住居群を取り巻くようにその西～南西側に位置しており、居住域の外縁に沿って墓域が設定されていたものと推定される。これらは、周溝内における土器の出土状況や他の遺構との位置関係から、庄内式期後半から布留式期前半にかけて相次いで築造されたものと考えているが、440周溝墓を除けば確実に葬送に伴うと考えられる土器を抽出することが困難なため、築造順や竪穴住居との併存関係といった詳細に関しては不明な点が多い。ただし、方形周溝墓という同一の墓形態を採りながらも、布留式期前半新段階の築造と捉えた440周溝墓は、墳丘を囲繞する周溝規模が大きく、底部穿孔の茶臼山型二重口縁壺や小型直口壺を用いた葬送儀礼が執り行われているなど、他の墓とは異なった要素を備えており、葬制上の大きな画期と捉えることが可能であろう。

なお、布留式期前半以降については、遺構・遺物とも大幅に減少し、明確な遺構としてはＴＫ47型式の須恵器坏身２点が出土した土器埋納土坑１基（96－１調査区遺構206）のみとなるなど、集落中心域の移動を予測せざるを得ない状況となる。周辺域の調査が進んでいない現段階では、集落移動の是非はもちろんのこと、その要因を明らかにすることは困難であるが、今後への課題として指摘しておきたい。

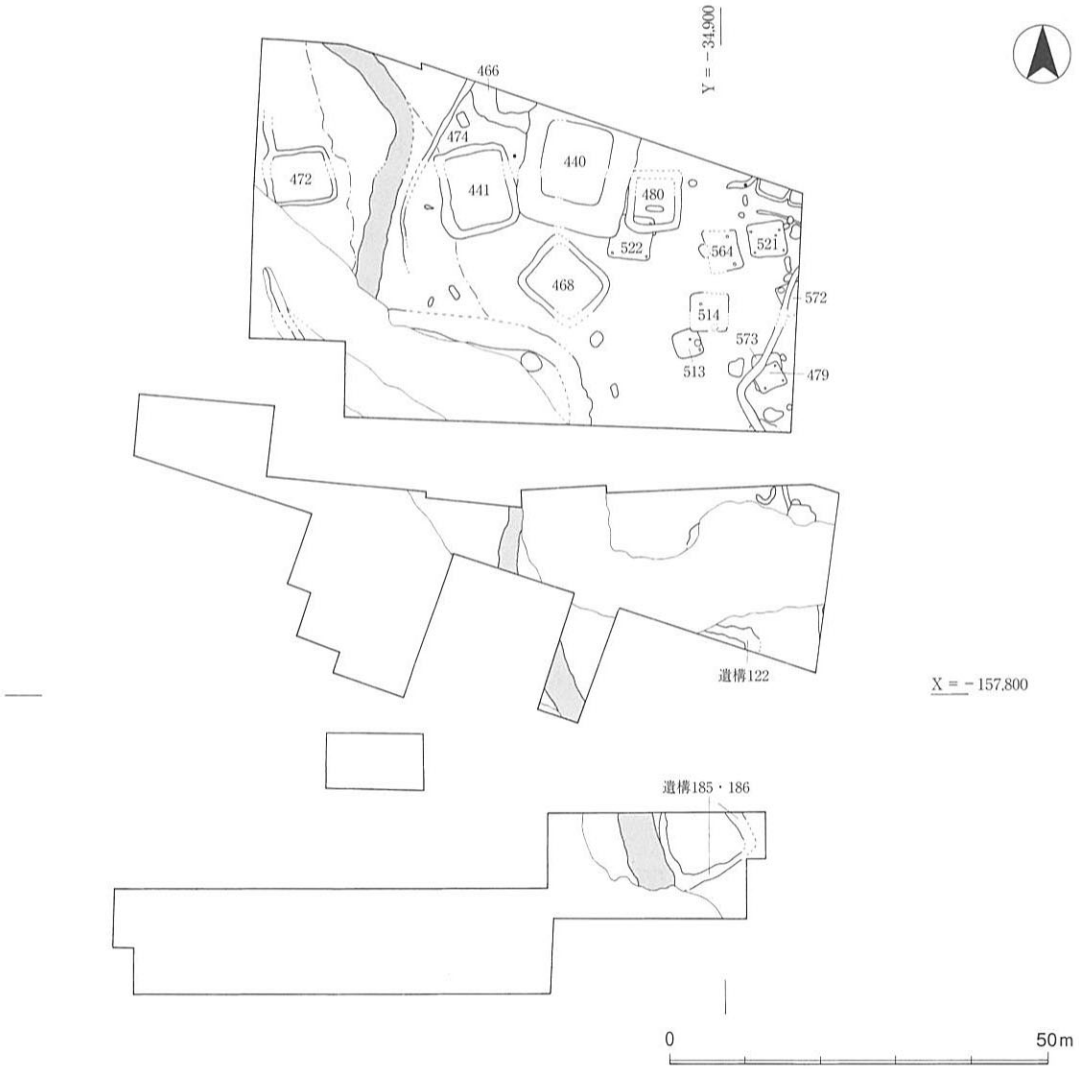



図131　弥生時代後期～古墳時代前期　遺構分布図

古　代（図132）　8・9世紀代の遺構は少数散見されるものの、土地利用の不明瞭な状況はその後も継続し、再び人間活動が明確となるのは平安時代中期以降である。この間、調査地一帯は層厚0.1～0.2mの3層によって覆われ、前段階には残存していた流路の痕跡である凹地も完全に埋没し、全域の平坦化が達成される。3層は前述のように数層に細分可能であるが、基本的にはシルトを中心とした細粒の土壌化層が連続して堆積しており、弥生時代中期以来の高燥地化した状況から、一転して後背湿地的な地形環境下に置かれていたものと推定される。したがって、布留式期前半以降に窺われる人間活動の一時的な停滞は、こうした地形環境の変化に起因している可能性も考えられる。

さて、96－1調査区で第4面ベース、00－1調査区で第4面と呼称された面では、東西・南北両方向の溝群、及び掘立柱建物・井戸・ピットなどから構成される景観が確認された。検出された遺構は、いずれも3層形成途上のある段階に掘削されたと考えられる3層下面遺構で、主に井戸から出土した遺物を手がかりとするならば、10世紀後半～11世紀初頭頃を中心とする遺構面と捉えられる。00－1調査区の調査所見を踏まえて両調査区分を合わせた遺構分布図を眺めると、調査地は幅広もしくは深度の深い溝によっていくつかの区画に分けられ、その中に溝群とそれ以外の遺構が比較的明瞭に分布を違えて存在している。第Ⅲ章でも指摘したように、各々は耕作域・居住域として土地利用を異にしていたと想定され、溝群は畠の耕作に関わる耕作痕跡と考えられる。なお、溝群・建物ともにほぼ正方位を採ってい

図132　古代　遺構分布図

ることから条里型地割に規制されている可能性が高く、調査地周辺では遅くとも10世紀後半には正方位地割に基づく土地開発が行われていたと考えられる。

第４面で示された景観は、調査地一帯が一時的ながら乾燥化していたことを物語っているが、最終的には再度湿地環境へと転じ、第３面を迎えることとなる。遺構伴出遺物の年代から11世紀前葉～後葉と捉えられたこの遺構面では、再び流路が調査地内を走行し、その北東側では条里型水田が営まれていた。

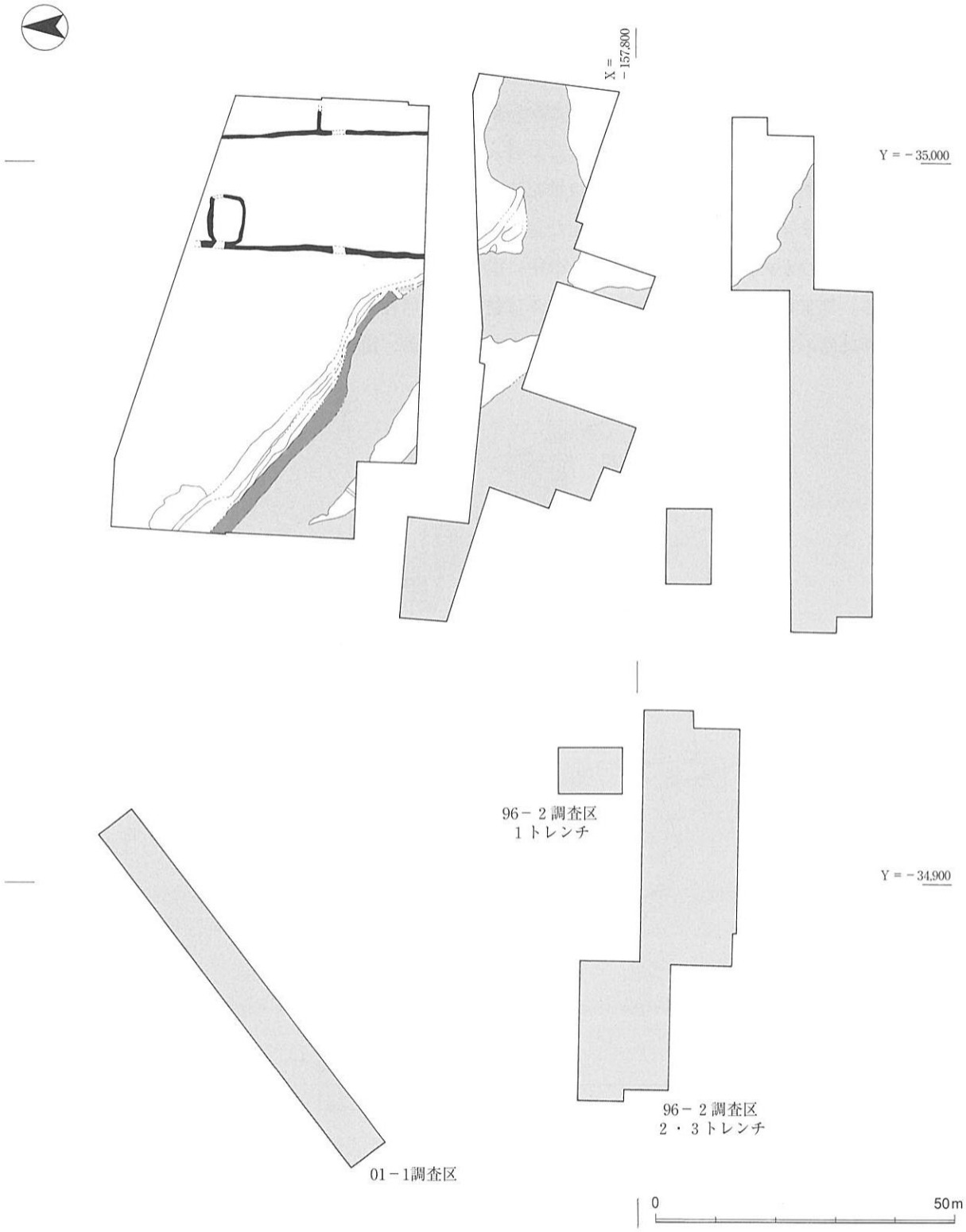



図133　古代末～中世前期　遺構分布図

流路は２条確認され、いずれも基本的には南東から北西方向へと流れている。このうち、北東側の流路は両岸に堤を備え、途中で水路を分岐させて調査地の北西域へと導水していることから、人為的に固定化されたものであったと考えられる。一方、南西側の流路は、96－２・01－１調査区においても左岸が確認できておらず、すべてが同一の流路であったと仮定すれば、幅130m以上の大規模な流れであったことになる。図５に引用した別所秀高氏作成の八尾市志紀遺跡周辺の地形分類図では、排水河川と捉えられた石川から大阪市平野区長吉出戸にかけて延びる流路跡が示されており［別所2002］、今回の調査で確認した流路がこれに一致する可能性がある。

中　世　11世紀後葉頃に起こった大規模な洪水は第３面を廃絶させ、調査地全域は流路を埋積した厚い氾濫堆積物によって被覆される。調査地ではこの土砂供給によって南東から北西方向へ傾斜する新たな地形が形成され、程なく人間活動が再開された。

00－１調査区の第２・２ｂ面では、掘立柱建物や塀もしくは柵と考えられるピット列、井戸・溝・土坑・落ち込み・土器溜りといった遺構が確認され、これらに伴って11世紀後葉～13世紀初頭の遺物が多量に出土した。検出遺構の大半は相対的に標高の高い調査区東半に分布しており、氾濫堆積物の堆積によって形成された微高地を利用して居住域が設けられていたことが判る。居住域の範囲に関しては、96－１調査区で氾濫堆積物上面の調査が行われていないために不明な点が多いが、第２面と同一の遺構面である第３面の調査では同時期の遺物が出土しており、さらに南側まで広がっていた可能性が高い。

なお、出土した土器の年代が示すように、今回検出された中世前期の遺構群は１世紀以上にわたって遺されたものであり、細分された各時期の景観とその変遷の復元が不可欠であることは言うまでもない。そこで次節では、出土土器の観察を通じて各々の諸特徴を明らかにし、再度帰属時期の検討を行ったうえで、当該期における土地利用の変遷に言及することとしたい。

## ３．おわりに

以上、今回の調査結果に基づき、縄紋時代～中世前期の土地利用の変遷について述べてきた。限定された調査区域のデータに拠っているため、多くの推論を交えての粗描の域を出ないが、現段階での基本的な変遷過程と問題点については提示し得たと考えられる。

その結果、沖積低地に立地する遺跡としては当然のことではあるが、河道の移動とそれに連動して生じた地形環境の変化に伴って土地利用のあり方が変遷していった状況を具体的に跡付けることができた点は、大きな成果と言えるであろう。しかしながら、弥生時代前期～中期初頭とした小区画水田の経営主体、弥生時代後期の墓域や古墳時代初頭～前期の集落の規模、あるいは、右岸側において多くのデータが蓄積されつつある飛鳥～奈良時代の土地利用の実態など、文中で記した以外の検討課題も多く存在している。特に弥生時代に関しては、これまでの部分的な調査や採集遺物の質量から、南側の段丘上に立地する国府遺跡とともに当地域有数の継続型集落との評価がなされてきたが、1995・96年度に続く今回の調査においても、その具体相に迫ることはできなかった。近年では、この両遺跡を単一集団による数10年単位での移動の繰り返しの結果として残されたものとする重要な仮説［天野1997］も示されており、今後は当遺跡のみならず、国府・林・西大井・本郷・川北といった周辺遺跡の動態も十分考慮しながら、検討を重ねていかなければならないであろう。

# 第２節　船橋遺跡出土中世土器の概観と景観変遷

## １．はじめに

当遺跡からは、11世紀後葉～13世紀初頭に帰属する第２面・第２ｂ面、10世紀～11世紀後葉に属する第３面の２つの遺構面から、古代末～中世前期に帰属する遺構及び遺物を多数検出した。各遺構から出土した土器群は、型式的に見て比較的長期にわたって連続しており、第３面と第２・２ｂ面との間に厚い洪水堆積物が堆積していることもあって、当該期の土地利用のあり方を考察する上で、非常に興味深い側面を有している。また、従来の周辺域の調査では断片的な情報しか得られなかったために、その様相が不明瞭であった中世前期の集落の資料を得たという点においても、今回行った調査の意義は大きい。これらの遺構・遺物は、間に洪水砂層を挟んで遺構面を違えているものの、出土した土器は前述のように型式的に連続しており、時期比定に関連して若干の問題が介入する。また、第２ｂ面で検出された各遺構には、遺構間に時期差が認められるようである。そこで本節では、瓦器椀・土師器皿を中心にこれらの資料の持つ属性を各々の基礎的な観察を通じて概観し、その後に各遺構面における景観変遷の概略を見ることで、まとめに代えたい。

## ２．出土遺物の概要

**瓦器椀**（図134）　当遺跡から出土する瓦器椀は、大和型が稀に含まれているのを除いて、基本的に和泉型である。しかしながら、当遺跡より出土した瓦器椀は、個体間の差が大きい瓦器椀初現期後のものを主体とすることもあり、一個体から得られる法量・調整などの属性のみでは、時期比定を行うことが困難である。ここでは、その個体間の振れ幅が各属性においてどのように表れ、その中で型式としての纏まりを有するものが何であるのかという点について検討を加えたい。

当遺跡から出土する瓦器椀には、大きくみて３つの型式差が看取できる。これを仮にａ～ｃ期の３期に区分すると、ａ期は黒色土器から瓦器椀への移行期に相当し、第３面に帰属する各遺構、及び第２・２ｂ面検出の５・６４落ち込みと９土坑出土資料が該当する。これらの資料には、見込みにジグザグ状の平行ミガキもしくは不定方向のミガキを施している大和型瓦器椀が少量ながら共伴する。以上の資料群は、口径・器高ともに安定感のあるしっかりした作りを採っており、器表面に直径１～２㎜前後を測る円形の剥落が認められることが多い。外面には丁寧なケズリを施し、ヘラミガキも原体幅の細い精緻な５分割の分割ヘラミガキを施している。以上の諸特徴から、これらａ期の一群は尾上編年でいうⅠ－２～３期に相当する。なお、５落ち込み出土資料では、体部上半の器壁が厚さを増すものと、体部下半にかけて厚さを増すもの、さらに口縁端部が強く外方に摘み出され、口縁部直下に強い屈曲を作り出すものと、若干の摘みナデによって弱く外反する明瞭な屈曲を有さないものの二者が混在している。なお、見込みには前者が斜格子ミガキ、後者にはジグザグ状の平行ミガキが施される傾向がある。

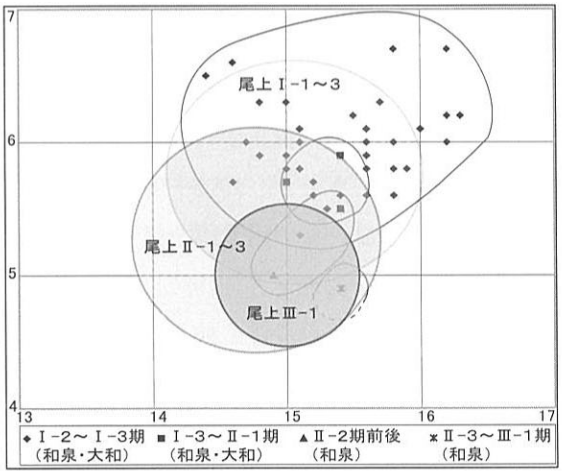



図134　船橋遺跡出土瓦器椀法量分布図

ｂ期は、瓦器椀成立以後、瓦器椀生産の展開する

時期に相当し、第２・２ｂ面で検出した遺構出土資料の多くがこれに該当する。当期の一群は、ａ期と比べると、法量属性の示す纏まりが弱く、個体差が著しいという特徴がある。その中でも、全体の傾向としては、口径が15.4～15.9㎝、器高が5.5～5.7㎝で、やや低平な印象を与え、体部下半の張りが強く、若干重心が下がる特徴を示す。高台は張りがやや弱くなり、ａ期の資料に比べて径も縮小している。調整技法は外面に分割ヘラミガキを、内面に極めて密なヘラミガキを施していることから、ｂ期の一群は尾上編年Ⅱ期の中でも古相に位置付けられ、尾上編年Ⅱ－１～２期に相当する。

また、当期の資料に関しても、先の５落ち込み資料と同様に、器形の特徴から二者が混在し（図134・図138）、これらに見られる器形の特徴の違いは、曽我氏［曽我1986］や勝田氏［勝田1983］が述べているような、系統差として捉え得るという見方もある。今回は出土資料が少なく判断し難いが、ケズリ調整を施すものの割合が多いこと、それらの見込みの暗文はジグザグ状の平行ミガキが崩れたような表現を用いるものが多く認められることなどから、この時期に大和型の影響を強く受ける状況にあったことも想定できる。

ｃ期は、当遺跡において中世前期の営為が収束に向かう時期に相当する。今回の出土資料のうち、最も新相を示すのは、55土坑から出土している65などである。破片資料であるために詳細は検討の余地を残すものの、胎土はその他の瓦器椀と比較して粗雑なものを用い、焼成が甘く外面の色調は灰白色を呈している。調整技法についても、外面ミガキは口縁部直下に幅太のものを数条施すだけと退化しており、成形段階の指頭圧痕も明瞭に認められる。内面のミガキも同様に退化しており、体部下半まで平行ミガキを施す。以上の諸特徴から、当資料は尾上編年Ⅲ－１期前後まで下る可能性を有している。このことは、共伴している土師質羽釜が森島編年Ａ型式３～４に相当するものであることからも矛盾はなく［森島1990］、集落内において55土坑が遺構の密集区域から離れた位置に単独で立地することも、このことの証左となると考えられる。なお、当期は尾上編年Ⅱ－３～Ⅲ－１期に相当する。

以上述べてきたように、当遺跡において出土した瓦器椀のうち、ａ期に相当する一群は、法量・調整手法・器形などの諸属性において若干の振れはあるものの、胎土・焼成を含めて基本的には共通の属性を有しており、尾上編年Ⅰ－２～３期に相当する。実年代は、森島氏の年代観［森島1992］に拠ると11世紀後葉～12世紀初頭が想定される。ｂ期では、ａ期とは対照的に個体差が非常に大きくなる。したがって、帰属年代を示すことは難しいが、共伴する土師器皿やその他の遺物から12世紀前葉～中葉を想定できる。ｃ期は、資料数が少なく詳細は不明であるが、先に述べたように調整・胎土・焼成の点からａ・ｂ両期の資料とは異なる特徴を示し、尾上編年Ⅱ－３～Ⅲ－１期に相当することから、12世紀後葉に属する。

**土師器皿**（図135）　当遺跡より出土した土師器皿は、色調が乳白色ないしは褐色を呈し、器形も京都系の土師器皿を意識した作りのものと、器形・色調ともに在地産と考えられるものの二者が認められる。前者の京都系土師器皿は、後述するように京都の出土遺物と比較して口径や細部表現が異なることから、伊野氏の述べる１次ないしは２次模倣型に属すると考えられる［伊野1998］。河内地域における土師器皿についての検討は、鈴木氏［鈴木1982］・阿部氏［阿部1983］・曽我氏［曽我1986］・瀬川氏［瀬川1986］・森島氏［森島1987］と、多数の検討事例が代表として挙げられるが、模倣系としたものが京都出土のものとどのような差異を有しているのかは、地域単位での属性が抽出されているためか、明示されているとは言い難い。

そのためここでは小森・上村両氏によって纏められた京都の編年［小森・上村1996］をもとに法量と

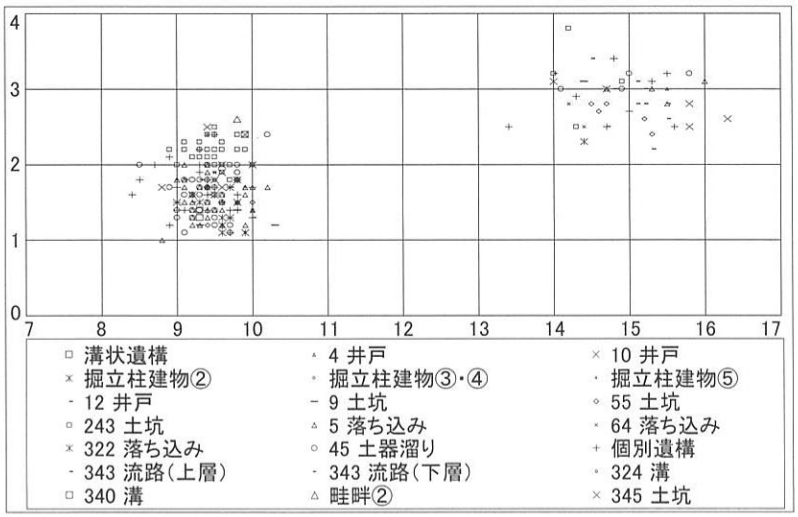



図135　船橋遺跡出土（２・２ｂ・３面）土師器皿法量分布図

器形の違いを京都出土のものと比較し、船橋遺跡出土資料の持つ特徴の把握に努めたい。

〈京都系土師器皿〉　京都系土師器皿は、基本的に大小の２規格が認められ、口縁部形態とそれに伴う調整手法から、「て」の字状を呈する一群、２段ナデを施す一群、１段ナデを施す一群、の大きく三者に分類できる。小皿では、「て」字状口縁を呈するものが大半を占め、次に１段ナデを施すもの、２段ナデを施すものと続く。大皿では、２段ナデを施すものと１段ナデを施すものの二者が認められ、前者が多い。

全般的な傾向としては京都出土のものと同様であるが、第３面、第２・２ｂ面ともに、特に多く出土した「て」字状口縁の小皿では、遺構内一括資料の中にも多様性が認められる点が注意を引く。遺構面ごとにみられるこれの概要を述べておく。

第３面検出遺構から出土した資料は、345土坑出土資料を纏まった一括資料として挙げることができる。ここでみられる「て」字状口縁皿は、369のように口縁端部の屈曲がきつく、底部と口縁部の境界が明瞭で、器壁も薄い精緻な作りのものと、365のように口縁端部の屈曲が弱く、底部と口縁部の境界も緩やかで不明瞭な、器壁の厚い粗雑化した作りのものの二者が認められる。

第２・２ｂ面検出遺構から出土したものについても、上と同様の傾向が認められ、第２ｂ面検出12井戸出土の土師器皿には、38のように器高が低く比較的薄手の作りで、底部と体部の境界に明瞭な稜を有し、口縁端部がより水平に近い角度に屈曲するやや古相を示すもの、37のように体部と底部の境界が不明瞭で、器壁が厚く、口縁端部はわずかに上方に摘み出すのみで「て」字状の器形が崩れたものの二者が存在している。こうした傾向は、その他の第２・２ｂ面検出遺構出土の「て」字状口縁皿においても認められる。

第３面、第２・２ｂ面検出遺構出土資料のいずれにおいても、口径は古相を示すものが10.0cm、新相を示すものは9.2cmを測り、古相を示すものは口径が大きく、新相を示すものは小さい傾向が認められる。

器形の特徴からは、精緻なつくりをとるものは京都編年Ⅳ期（古）～（中）、やや粗雑なつくりをとるものはⅣ期（新）～Ⅴ期（古）に相当するが、口径から京都出土の「て」字状口縁皿と比較を行うと、各々は２小期新しく位置付けられる。第３面と第２・２ｂ面が洪水砂によって隔てられていることから、各々の個体が示す差は、時期差を示すものではない可能性が高い。これについては後述する。

２段～１段ナデを施す小皿には、口縁部を強く外反させる一群と、口縁部を直立気味に立ち上げるものの二者が認められる。「て」字状口縁と口縁部を強く外反させる一群の胎土が精良かつ白色味を帯びるのに対して、口縁部を直立気味に立ち上げる一群は、一部が灰白色精良胎土であるのを除いて、やや褐色味を帯びたものが大半を占め、成形技法は切り込み円盤技法を採用するものが極めて多い。また、１段ナデを施すもののうち、口縁端部の断面形状が三角形を呈するものも見受けられる。これらは京都

の編年観と照らし合わせると、Ⅴ期（新）～Ⅵ期（古）に相当する。また、これらに共伴する土師器大皿は、口径が14.5～15.0cmで、口縁部には粗雑な２段ナデを施す。京都の編年に照合すると、概ねⅤ期（新）～Ⅵ期（古）に相当し、法量分布のピークがⅥ期（古）に位置付けられることから、12世紀末葉～13世紀初頭に帰属する可能性が高い。

瓦器椀と同様に当遺跡出土土師器皿のうち最も新相を呈するものとして、55土坑出土資料が挙げられる。法量は、小皿が口径9.5cm前後、器高1.5cm前後、大皿が口径14.5～15.5cm、器高2.5cm前後と全体的に縮小化の傾向を示す。土師器皿は、いずれも色調が乳白色ないしは灰白色を呈する精緻な胎土である。「て」字状口縁皿と１段ナデを施す皿が共伴して出土しているが、出土比率としては大皿・小皿ともに後者が大半を占め、当遺構の下限時期を示すものであろう。京都の編年を援用した場合、Ⅴ期（新）～Ⅵ期（古）に相当することから、12世紀末葉～13世紀初頭の帰属年代を想定することができる。

〈非京都系土師器皿〉　243土坑出土資料によって代表される。すべて非京都系の土師器皿であるため、時期の比定が困難である。基本的に京都系土師器皿を意識した作りが認められず、緩やかに内湾しながら立ち上がり、指頭圧痕の顕著な体部下半と丁寧なナデを施す体部上半の境に明瞭な稜を作り出す独自の成形及び調整技法を採る。また、胎土・焼成も京都系土師器皿とは異なる様相を示す。遺構の密集域から離れて単独で位置していることから、55土坑と同様の異質な遺構の可能性があり、想像を逞しくすると12世紀末葉の年代が想定されるが、現段階では推測の域を出ず、今後の検討課題としたい。

**出土土器のまとめ**　各々の遺構出土土器群の示す属性は、若干の時間幅を有しているようである。すなわち、場合によっては２型式ほど古相を示す一群が共伴する事象がこれに相当する。この型式的に古相を示す土器群を残存させるという事象が、当該地域の中世土器群における特徴であるのか、あるいは時間差として捉えて良いのかという点は、先に述べたように当該地域の特徴である可能性を指摘した。資料数の制約もあり、詳細な検討を行うには至らなかったが、このように第３面と第２・２ｂ面より出土した土器のあり方は重要な問題であるだけに、今後のさらなる検討課題としたい。

出土する瓦器椀のうち、11世紀後葉～末に次いで12世紀前半においても、大和型が少量ながら認められることは注意を引く。

これに関連して、森島氏は河内地域における地域型別の瓦器椀出土比率を求め、それから求められた類型を元に、瓦器椀からみた中世前期における流通の様子を明らかにした［森島2004］。森島氏の類型に準拠すると、当遺跡出土資料では大和型瓦器椀の出土比率は出土総量の中で４％程度の比率を示し、森島氏の述べる「定量的分布」に相当する。こうしたことも踏まえると、前述のように、和泉型瓦器椀の１次調整及び２次調整に大和型の影響が認められることは、中河内と南河内の境界に位置する当遺跡の性格上、極めて興味深い。

土師器皿については、京都で出土する土師器皿を意識した模倣系土師器皿と、その範疇からは大幅に逸脱した作りを有する非京都系土師器皿の二者に大別してその特徴の概観を行ってきた。
模倣型土師器皿のうち、胎土の色調の白色から褐色系への明瞭な変化は12世紀前葉以降、第２ｂ面資料の中にその端緒が認められるようである。それと相前後して法量と器形において京都出土のものとのズレがより明らかとなる。これに先立つ第３面から出土する一群は、器形は京都で用いられる表現手法への意識が汲み取れる。しかしながら、その細部の特徴や法量は京都出土のものとズレを生じている。

各々の資料の示す年代観については、白色で精良な胎土を用いるものについてのみ、口縁部形態の変化に着目して積極的に京都における編年観を準拠・援用したが、先にも述べたように、法量上は京都に

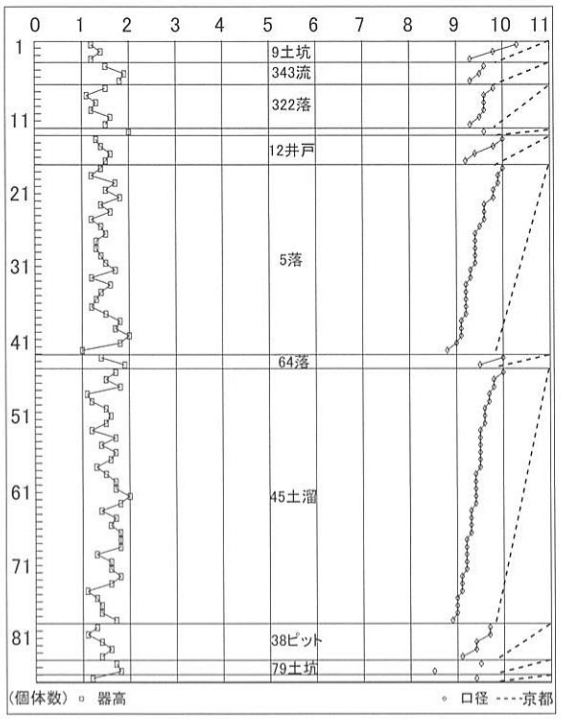



図136　船橋遺跡出土「て」字状口縁皿法量グラフ

おける編年とは、正確には合致しないことが明らかとなった。

遺構別の「て」字状口縁皿の口径・器高グラフ（図136）からも、法量上は京都の編年では２段ナデもしくは１段ナデの表現を採ると予想されるものについてもなお、器壁が３～４㎜と厚く、「て」字状の表現を崩していないという点が認められる。

これに関連して、12世紀～14世紀前葉にかけての資料が豊富に出土している西ノ辻・鬼虎川遺跡出土例をもとにした瀬川氏の検討では［瀬川1986］、平安京出土のものと西ノ辻出土のものは14世紀前葉の所謂「へそ皿」の示す口径８cm台へ向かって、口径を約0.5cm前後ずらしながら減じていくことが確認されており、当遺跡出土資料も、器形の表現手法と口径の関係は平安京内出土のものとはずれている可能性が非常に高い。

これを例として京外での京都系土師器皿の法量規格のあり方を考えると、器形及び口縁端部の細部表現における要素を積極的に評価して、当遺跡出土資料についての年代観を付与するべきと考え、上に述べた時期比定を行った。そうした場合、瓦器椀から与えた年代観とおよそ30年前後の微妙なズレが生じてくることとなる。先にも述べたように、瓦器椀の示す諸特徴については個体間の格差が極めて大きい時期であるということと、それを再検討するに足る点数を得られていないことから、報文中ではこれらを総合的に判断した上で年代観を付与した。

以上、積み残した検討課題は多いが、中世遺構面における時間軸の基準となる瓦器椀及び土師器皿についての概観を行った。次に、先に検討した土器の時期比定に基づき、各遺構面における遺構の消長と性格の把握を行い、その上で中世前期の景観変遷の概観を試みたい。

## ３．景観変遷の概要（図137）

〈11世紀後葉（Ａ期）〉　第３面に帰属する各遺構によって構成される。生産域として利用されており、調査区の西側を南東－北西方向に流れる流路とそれに併走する溝、畦畔がこれに相当する。

〈11世紀後葉～末葉（Ｂ期）〉　氾濫堆積物によって第３面が被覆された後、再度営為が認められる時期である。各遺構は、出土遺物から第３面に帰属するものと時期差は認められず、罹災後すぐに復旧への糸口がつかまれつつあった様子が窺われる。具体的な遺構としては、第２ｂ面の調査区南東隅の９土坑、西半に位置する322落ち込みなどがこの時期に帰属する。さらに、落ち込みというよりはむしろ自然地形の凹みとも思われる５・64落ち込みもこの時期に相当する。第３面344流路の東隣にあたる位置に64落ち込みが認められることから、344流路の埋積に伴って形成された自然堤防状の高まりに伴う、後背湿地に相当することが想定され、周辺が高燥地化していくなかで最後まで完全に離水し得なかった箇所に土器などを廃棄していた可能性が想定できる。この他には、第２面において検出した10・12井戸などがあり、調査区の東端においても活動痕跡が認められる。

〈11世紀末葉～12世紀初頭（Ｃ期）〉　集落の展開期に相当し、掘立柱建物の初現期である。調査区南東に位置する建物５がこれに当たる。前段階には井戸などが営まれていた箇所の近くに位置することから、同時期に並存していた可能性もある。

〈12世紀初頭～前葉（Ｃ期）〉　建物間の距離が近いことから敢えて弁別を図ったが、建物３・４によって代表される。建替えを行っている可能性が高く、建物５と共存していたことも考えられ、その場合には後に述べるように２棟１組の建物構成をなしていた可能性もある。建物３・４の西隣には、45土器溜まりが存在している。建物と距離が近接し過ぎている感があるが、出土遺物の示す時期の下限から、ほぼ同時期に存在していたと想定して良いであろう。

〈12世紀中葉（Ｃ´期）〉　前後の時期と比較して様相が不明瞭となり、調査区中央に位置する79土坑を除き、遺構は認められない。Ｃ期、Ｄ期のどちらかに帰属する可能性もあることからＣ´期とした。

〈12世紀後葉～12世紀末葉（Ｄ期）〉　他に顕著な遺構は認められないが、建物２によって代表される時期である。建物２から出土した瓦器椀は、焼きが甘く、外面調整がほとんど認められず、内面調整が粗雑化しているといった特徴から13世紀初頭にまで下る可能性を有しているが、先に述べたようにその他の出土遺物も含めて帰属時期を判断している。後に述べる建物間の位置関係を念頭に置くと、建物１もこれと並存していた可能性もあるが、詳細は不明である。

〈12世紀末葉～13世紀初頭（Ｅ期）〉　人間活動の痕跡が徐々に減少していく時期に相当する。具体的には、55土坑や243土坑に代表されるように土器を多量に包含する性格の不明な遺構が多くなる。当調査区内以外の箇所に居住域が展開していた可能性もある。

掘立柱建物について　当調査区では建替えを含めて５棟の掘立柱建物が確認され、長軸を東西に揃えるものとして建物５と建物２の２棟、長軸を南北方向に揃えるものとして建物３・４と建物１が存在する。このうち建物１については、遺物が出土しなかったために詳細な時期比定はできなかったが、建物５と建物３・４がほぼ同時期に属すること、建物２が建物３・４・５とは時間的隔たりを有していることから、長軸を直交させる建物を２棟同時並存させる形態を採っていたことも想定できる。

## ４．おわりに

以上の景観変遷から、当調査区で認められた古代末～中世前期の様相は、生産域として利用していたＡ期と、その生産域が氾濫堆積物によって被覆されてできた微高地を居住域として利用するＢ～Ｃ期、集落の衰退・消長を示すＤ～Ｅ期の３時期にわけられる。生産域としての利用を行っていた集団と居住域としての利用を図った集団が同一のものであるか否かという問題についての確証はないが、Ａ期とＢ期の出土資料に大きな時間差が認められないことから、当地に集落を営み始めた集団は、規模の大きな洪水の襲来にもひるむことなくこの地に固執し、継続的な土地の利用を行っていた可能性がある。

遺構の分布状況から、今回検出した居住域は集落の東縁辺部に当たっているものと考えられるが、01－１調査区で検出した流路から出土した12世紀後葉の瓦器椀が示すように、この時期においてもなお、集落が営まれていた西側には流れを変えた流路が存在していたと推定され、微高地上に立地しているとはいえ、集落の立地条件としては不安定な場所を選地していると言える。今回の調査地の東方150m離れた地点で行われた調査では、11世紀末葉～12世紀前葉の遺物を含む溝や土坑が検出されており［佐久間ほか1979］、Ｂ～Ｄ期に営まれた集落がさらに東側に広がっていたことを示唆している。今後の周辺域の調査成果によって、当地域における中世集落の様相がより鮮明となることを期待したい。

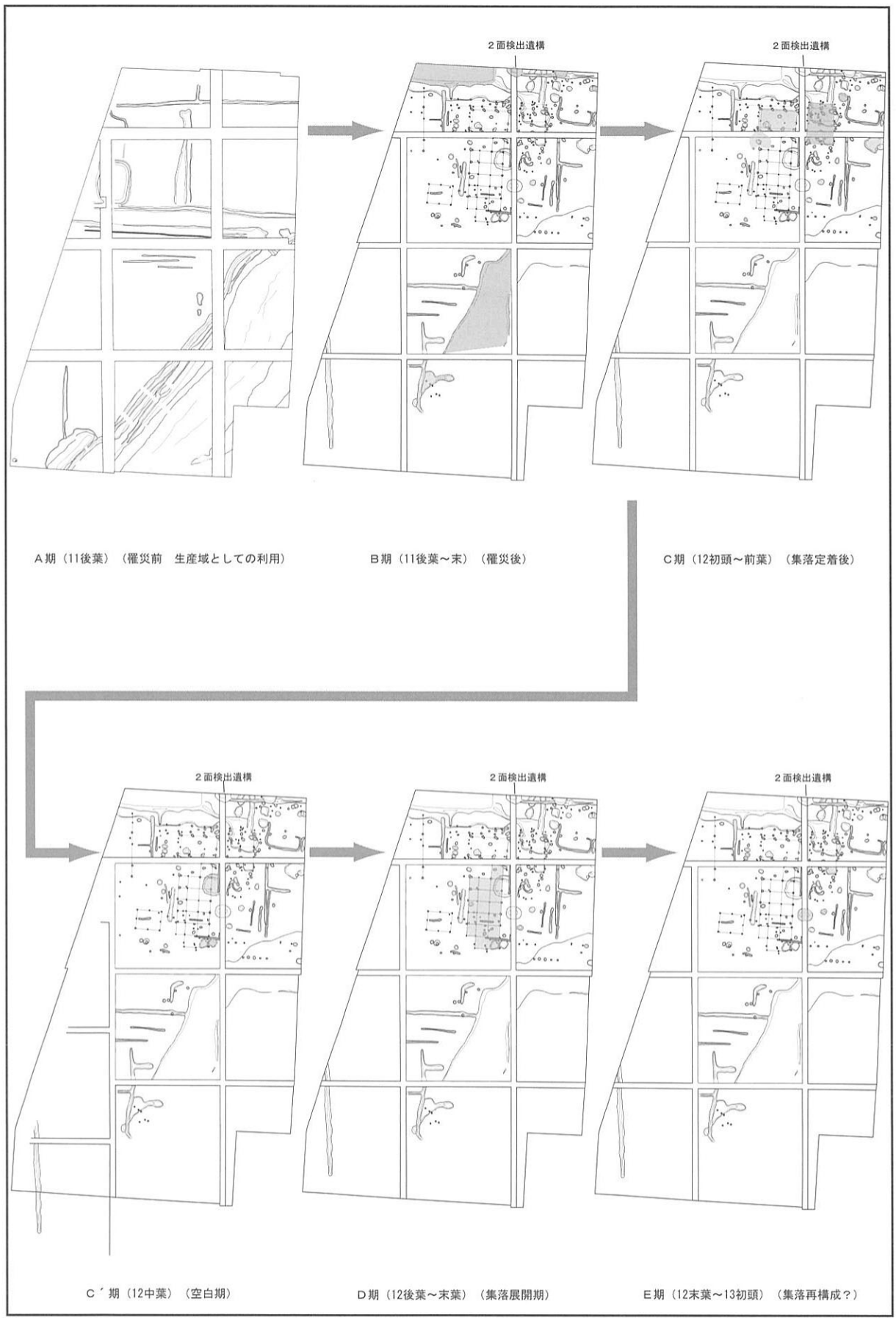



図137　船橋遺跡古代末～中世前期遺構変遷図

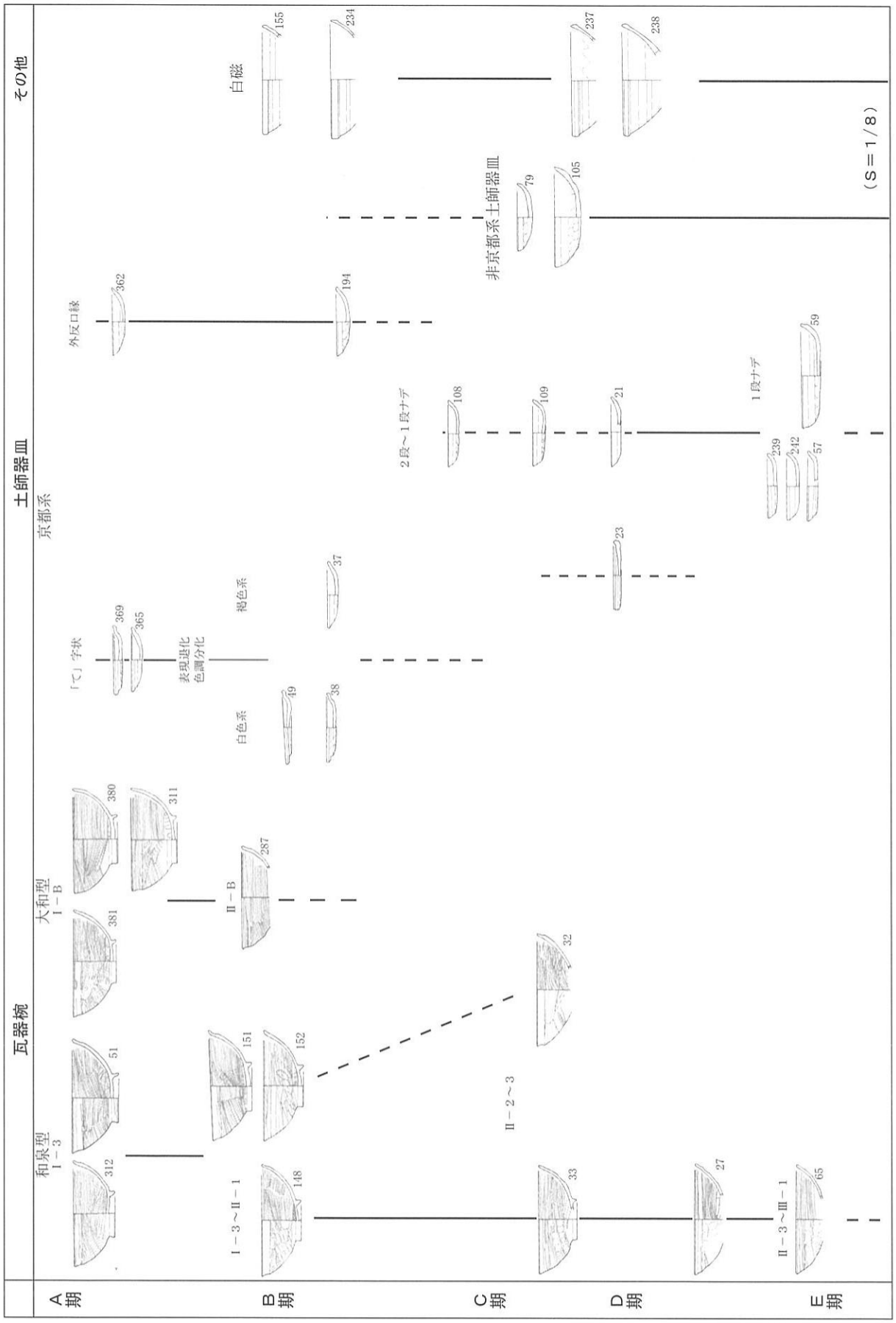



図138　船橋遺跡出土中世土器編年図

## 引用・参考文献


秋山日出雄ほか1997『藤井寺市史　第１巻　通史編１』　藤井寺市史編纂委員会

秋山日出雄ほか1986『藤井寺市史　第３巻　史料編１』　藤井寺市史編纂委員会

阿部幸一編1994『寝屋川南部流域下水道事業に伴う　本郷・船橋・太平寺遺跡発掘調査概要』　大阪府教育委員会

阿部嗣治1983「Ⅵ．土師器をめぐる二、三の問題について」『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ　遺物編』　（財）東大阪市文化財協会

天野末喜ほか1987「船橋遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅱ』藤井寺市文化財報告第２集　藤井寺市教育委員会

天野末喜1997『探検稲作りのはじまり』ふじいでらの歴史シリーズ２　藤井寺市教育委員会

天野末喜1998『国府遺跡』藤井寺市文化財報告第18集　藤井寺市教育委員会

石田成年1995『柏原市遺跡群発掘調査概報　1994年度』柏原市文化財概報1994-Ⅳ　柏原市教育委員会

伊野近富1987「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第１集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

伊野近富1993「洛外産土師器皿の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅸ　日本中世土器研究会

伊野近富1998「中世前期の京都系土師器皿の伝播と受容　－平安後期を中心に－」『中近世土器の基礎研究』ＸⅢ　日本中世土器研究会

今村道雄1994『西大井遺跡発掘調査概要　1992年度－'92-１』　大阪府教育委員会

岩崎二郎編1981『川北遺跡発掘調査概要　－府立藤井寺養護学校用地内埋蔵文化財調査－』　大阪府教育委員会

岩崎二郎1983『西大井遺跡第３次発掘調査概要』　大阪府教育委員会

梅原末治1927『銅鐸の研究』　大岡山書店

江浦　洋・長原　亘1995「近世水田面にみる災害復旧　－池島・福万寺遺跡における近世水災害と水田復旧－」『大阪文化財研究』第８号　（財）大阪府文化財調査研究センター

大野　薫編1995『西大井遺跡　－大和川下流東部流域下水道事業大井処理場建設に伴う発掘調査報告書－』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第1集　（財）大阪府文化財調査研究センター

岡本茂史2002「水稲農耕の始まりと展開　－池島Ⅰ期地区の弥生水田－」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ＸＸⅥ　－97-２調査区（1997～1999年度）の概要－』　（財）大阪府文化財調査研究センター

尾上　実1983「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』　藤沢一夫先生古稀記念論集刊行会

尾上　実1985「大阪南部の中世土器」『中近世土器の基礎研究』　日本中世土器研究会

勝田邦夫1983「瓦器椀について」『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ　遺物編』　（財）東大阪市文化財協会

北野耕平2002「玉手山５・６・９・14号墳の墳丘」『玉手山古墳群の研究Ⅱ　－墳丘編－』　柏原市教育委員会

北野　重1987『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1986年度』柏原市文化財概報1986-Ⅰ　柏原市教育委員会

北野　重1993『本郷遺跡　1991・1992年度』　柏原市教育委員会

桑野一幸1987『安堂遺跡　1986年度』柏原市文化財概報1986-Ⅷ　柏原市教育委員会

後藤　直1986「巴形銅器」『弥生文化の研究　第６巻　道具と技術Ⅱ』　雄山閣出版

小森俊寛・上村憲章1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　（財）京都市埋蔵文化財研究所

酒井泰子1992『西大井遺跡発掘調査概要　1990年度』　大阪府教育委員会

酒井泰子1993『西大井遺跡発掘調査概要　1991年度』　大阪府教育委員会

佐久間貴士ほか1979『国府遺跡発掘調査概要・Ⅸ　－藤井寺市国府・惣社・北条町・大井所在－』　大阪府教育委員会

佐久間貴士ほか1980『国府遺跡発掘調査概要・Ⅹ　－藤井寺市国府・惣社・北条・大井所在－』　大阪府教育委員会

佐原　眞1962「Ⅲ遺物の観察　３縄文式土器」「Ⅳ遺物の考察　３縄文式土器」『河内船橋遺跡の遺物の研究（Ⅱ）』　大阪府教育委員会

鈴木秀典1981「中河内の瓦器椀について」『中世土器研究』10　中世土器研究会

鈴木秀典ほか1982『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』　（財）大阪市文化財協会

瀬川眞美子1986「西ノ辻遺跡出土の中世土器の内容」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅱ　－東大阪市東石切町・西石切町所在－』　大阪府教育委員会

曽我恭子1986「Ⅴ.出土遺物」『神並遺跡Ⅰ』　東大阪市教育委員会

平良泰久・伊野近富ほか1980「平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1980-3』　京都府教育委員会

高橋　学1992「地層のソフトＸ線分析および画像解析」『小阪遺跡　自然科学・考察編』　大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

田中和弘1982『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1981年度』　柏原市教育委員会

辻内義浩ほか1976『大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴なう船橋遺跡試掘調査報告書Ⅱ』大阪文化財センター調査報告ＸＸⅡ　（財）大阪文化財センター

坪井清足1962「船橋遺跡の調査」『大阪府の文化財』　大阪府教育委員会

寺川史郎ほか1998『船橋遺跡　－建設省河川事業進入路建設及び府営美陵住宅建替に伴う調査報告書－』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第29集　（財）大阪府文化財調査研究センター

中井淳史1998「〈京都らしさ〉のある風景　－「京都系土師器Ⅲ」概念の再検討－」『中近世土器の基礎研究』ＸⅢ　日本中世土器研究会

中西靖人・國乗和雄1976『大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴なう船橋遺跡試掘調査報告書』大阪文化財センター調査報告ＸＸ　（財）大阪文化財センター

仲原知之1998「位置と環境」『船橋遺跡　－建設省河川事業進入路建設及び府営美陵住宅建替に伴う報告書－』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第29集　（財）大阪府文化財調査研究センター

楢崎彰一1982「日本古代の陶硯　－とくに分類について－」『考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集』　平凡社

難波洋三1986「銅鐸」『弥生文化の研究　第６巻　道具と技術Ⅱ』　雄山閣出版

西口陽一1980『船橋遺跡発掘調査概要　－藤井寺市船橋、柏原市古町所在－』大阪府文化財調査概要1979　大阪府教育委員会

西口陽一1982「「河内国餌香市跡即船橋遺跡説」－ある地方「市」の歴史」『大阪文化誌』第14号　（財）大阪文化財センター

橋本久和1980「瓦器椀の地域色と分布」『上牧遺跡発掘調査報告書』　高槻市教育委員会

原口正三ほか1958『河内船橋遺跡の遺物の研究（Ⅰ）』　大阪府教育委員会

原口正三ほか1962『河内船橋遺跡の遺物の研究（Ⅱ）』　大阪府教育委員会

藤井　整2001「近畿地方の弥生土器棺墓」『古代文化』第53巻第２号　（財）古代学協会

藤永正明ほか編1981『林遺跡発掘調査概要・Ⅲ』　大阪府教育委員会

別所秀高2002「八尾市志紀遺跡における縄文時代～中世の堆積環境の変化過程とそれらに対応した耕作地の開発」『志紀遺跡（その２・３・５・６）　大阪府八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第73集　（財）大阪府文化財調査研究センター

松尾洋平1994「船橋遺跡の研究史」『船橋遺跡』柏原市文化財概報1993-Ⅵ　柏原市教育委員会

宮野淳一・酒井泰子編1993『寝屋川南部流域下水道事業に伴う　池島条里遺構他発掘調査概要』　大阪府教育委員会

村津弘明1960「玉手山古墳調査概報」『史線』第20・21合併号　関西大学史学会

森島康雄1987「西ノ辻遺跡周辺における中世土器の編年」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅳ　－東大阪市東石切町・西石切町所在－』　大阪府教育委員会

森島康雄1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　日本中世土器研究会

森島康雄1992「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器』Ⅱ　大和古中近研究会

森島康雄2004「大和型瓦器椀の分布」『中世西日本の流通と交通　行き交うヒトとモノ』　高志書院

森本　徹ほか1998『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ＸⅨ　－95-３調査区の概要－』　（財）大阪府文化財調査研究センター

安村俊史編1994『船橋遺跡』柏原市文化財概報1993-Ⅵ　柏原市教育委員会

安村俊史編2001『玉手山古墳群の研究Ⅰ－埴輪編－』　柏原市教育委員会

山本　昭1973「古代の柏原」『柏原市史　第２巻　本編（Ⅰ）』　柏原市史編纂委員会

なお、本文中では明示していないが、出土遺物の記述に当たっては、以上のほかに下記の文献を参考とした。

一瀬和夫1989「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」『大阪文化財論集　－財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集－』（財）大阪文化財センター

大野　薫1992「大阪府萱振遺跡出土の古墳時代前期土器」『庄内式土器研究』Ⅰ　庄内式土器研究会

（財）大阪府文化財センター編2003『古墳出現期の土師器と実年代　シンポジウム資料集』　（財）大阪府文化財センター

佐藤　隆1992「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告Ⅴ　市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書』（財）大阪市文化財協会

鋤柄俊夫1988「畿内における古代末から中世の土器　－模倣系土器生産の展開－」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ　日本中世土器研究会

杉本厚典2001「河内における弥生時代中期末から古墳時代初頭にかけての土器の型式編年と様式」『大阪市文化財協会　研究紀要』第４号　（財）大阪市文化財協会

杉本厚典2003「河内における布留式期の細分と各地との併行関係」『古墳出現期の土師器と実年代　シンポジウム資料集』（財）大阪府文化財センター

中世土器研究会編1995『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

寺沢　薫1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所

寺沢　薫・森井貞雄1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』　木耳社

西村　歩1996「和泉北部の古式土師器と地域社会」『下田遺跡　－都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書－』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第18集　（財）大阪府文化財調査研究センター

野々口陽子1996「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第３集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

濱野延充1993「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第２集　大阪府立弥生文化博物館

広瀬和雄1986「弥生土器の編年と二、三の問題」『亀井（その２）　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』　大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

三好孝一1993「河内における弥生中期土器様相　－亀井遺跡を中心にして－」『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』　（財）大阪文化財センター

横田賢次郎・森田　勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について　－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館

米田敏幸1991「２土師器の編年　１近畿」『古墳時代の研究　第６巻　土師器と須恵器』　雄山閣出版

若林邦彦1999「河内平野南遺跡群における弥生後期～古墳前期の土器の変遷」『河内平野遺跡群の動態Ⅶ　近畿自動車道天理吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－南遺跡群　弥生時代後期～古墳時代前期－』　大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター